

7 昆虫類

1. 昆虫類相概観

昆虫はこれまで知られている全生物種のおよそ半数を占めており約 110 万種と言われている。地球上でもっとも多様化したグループと言える。日本からは約 32,000 種の昆虫が記録されているが、実際には 10 万種以上が生息していると推定されている。

昆虫の調査が進んだ県では約 1 万種が記録されており、三重県では三重県の昆虫相の解明を目的として 1957 年に創立された三重昆虫談話会の会誌『ひらくら』や、国立公園、国定公園の自然環境調査、市町村史の編纂に伴う調査、博物館が行った調査、開発に伴う調査などで多数の報告書が発刊されている。また 2018 年には三重自然誌の会からこれまでの三重県の記録をすべてまとめた昆虫のリストが『みえ生物誌、昆虫 I (甲虫)・昆虫 II (トンボ・チョウ)・昆虫 III (バッタ・カメムシ他)』として発刊された。これによりこれまでの三重県の膨大な記録がまとめられている。

2. 調査内容

今回『三重県レッドデータブック 2025』の編纂にあたっては『三重県レッドデータブック 2015』に掲載された種をもとに、その後に三重県で新たに記録された種、環境省のレッドリスト 2020 に掲載された種や、新たに昆虫部会で検討を要するとした種を対象として、現地調査、文献調査、博物館や個人の所蔵している標本調査を行い、データ収集のうえ新たなカテゴリー付けやカテゴリーの変更を検討した。

3. 絶滅危惧種の概要

今回、絶滅 (EX) と判断された種は 21 種で、前回からアマミマルケシゲンゴロウ、ルイスツブゲンゴロウ、シャープツブゲンゴロウ、マダラシマゲンゴロウ、オオマグソコガネ、スジマグソコガネ、ヨツボシマグソコガネ、カツラネクイハムシ、スジボソヤマキチョウの 9 種が追加された。前回絶滅とされたベッコウトンボは 2004 年の伊勢市の記録から絶滅危惧 I A (CR) に変更された。絶滅危惧 I A (CR) から I B (EN)、II (VU) までの種数は 337 種と前回の 2015 年と比較して大幅に増えた。カテゴリーアップした種の多くは水辺環境に生息する種が多く、これは前回と同様の傾向であるが、より深刻な状況となっている。河川工事、ブラックバスやアメリカザリガニなどの侵略的外来種の影響さらに農業形態の変化により水田の収穫期以外の乾田化と近年使用されるようになったネオニコチノイド系の農薬の影響も考えられる。森林性の昆虫については自然再生エネルギーとしての風力発電やメガソーラー設置による森林伐採と、さらにニホンジカ増加によって下層植物が食害され林床が乾燥化し、土壌性や倒木などから発生する昆虫は激減した。2015 年の調査時と比較して、この 10 年の昆虫類の減少はきわめて深刻な印象を受けた。

文 献

- 生川展行・横関秀行・官能健次・田中晃詞・尾崎美香. 2018. 三重県の甲虫. みえ生物誌 昆虫 I pp.1-832. 三重自然誌の会, 松阪.
- 山口和洋・浅名正昌・石田昇三. 2018. 三重県のトンボ. みえ生物誌 昆虫 II pp.1-142. 三重自然誌の会, 松阪.
- 河本実・中西元男・長谷川好昭. 2018. 三重県のチョウ. みえ生物誌 昆虫 II pp.151-216. 三重自然誌の会, 松阪.
- 河北均・富田靖男・篠木善重・森田久幸・西田悦造. 2018. 三重県のカマアシムシ目ほか. みえ生物誌 昆虫 III pp.1-403. 三重自然誌の会, 松阪.
- 三重県農林水産部みどり共生推進課 (編). 2015. 三重県レッドデータブック 2015～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津, 757pp.

(稲垣政志)

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

除外種

「三重県レッドデータブック 2015」掲載種のうち、今回の改訂により低懸念 (LC) と判定された種、及び評価対象から除外した種とその理由は以下のとおりである。

新レッドリストで低懸念 (LC) となった種

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	判定理由
				新	旧		
トンボ目	トンボ科	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i> (Selys)	LC	NT	—	減少傾向にあるが、県内に普遍的に生息しており、絶滅の恐れがないため。

新レッドリストで評価対象から除外した種

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	除外理由
				新	旧		
カゲロウ目	マダラカゲロウ科	キマダラカゲロウ	<i>Ephemerella notata</i> Eaton	除外	DD	—	過去の記録はあるが、生育状況が定かではないため、該当する評価区分なしとした。
コウチュウ目	コガネムシ科	コツヤマグソコガネ	<i>Aphodius (Paulianellus) maderi</i> Balthasar	除外	EN	—	ニホンジカの個体数増加に伴って本種も個体数、生息域ともに増加している。
コウチュウ目	コブスジコガネ科	アイヌコブスジコガネ	<i>Trox (Trox) setifer setifer</i> C. O. Waterhouse	除外	NT	NT	ニホンジカの個体数増加に伴って本種も個体数、生息域ともに増加している。
コウチュウ目	コガネムシ科	マツシタチャイロコガネ	<i>Sericania matusitai</i> Sawada	除外	DD	—	三重県唯一の記録が誤同定であった。
コウチュウ目	タマムシ科	カラカネキバカボリタマムシ	<i>Protaetia (Licolia) lugubris insperata</i> (Lewis)	除外	VU	—	調査がすすみオニグルミがあれば広く分布することが判明したため。
ハエ目	ムシヒキアブ科	トラフムシヒキ	<i>Astochia virgatipes</i> (Coquillett)	除外	NT	—	県内の生息地環境が多様であると判明した。
チョウ目	シジミチョウ科	ウラナミアカシジミ (紀南亜種)	<i>Japonica saepestriata gotohi</i> Saigusa	除外	NT	—	新産地の追加あり、個体数も多い。

昆虫類レッドリスト

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	掲載頁
				新	旧		
コウチュウ目	オサムシ科	キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria (Paranebria) livida angulata</i> Bänninger	EX	EX	EN	135
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	アマミマルケシゲンゴロウ	<i>Hydrovatus seminarius</i> Sharp	EX	—	—	135
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	シマケシゲンゴロウ	<i>Hygrotus (Coelambus) chinensis</i> (Sharp)	EX	EX	—	135
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ルイスツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus lewisius</i> Sharp	EX	EN	VU	136
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	シャープツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus sharpi</i> Régimbart	EX	CR	NT	136
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	マダラシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus (Guignotites) thermonectoides</i> Sharp	EX	CR	CR	136
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	スジゲンゴロウ	<i>Hydaticus (Guignotites) bipunctatus</i> Wehneke	EX	EX	EX	137
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	マルコガタノゲンゴロウ	<i>Cybister (Cybister) lewisianus</i> Sharp	EX	EX	CR	137
コウチュウ目	コガネムシ科	オオマグソコガネ	<i>Aphodius (Colobopterus) quadratus</i> Reiche	EX	—	—	137
コウチュウ目	コガネムシ科	スジマグソコガネ	<i>Aphodius (Pharaphodius) rugosostriatus</i> Waterhouse	EX	—	—	138
コウチュウ目	コガネムシ科	クロモンマグソコガネ	<i>Aphodius variabilis</i> Waterhouse	EX	EX	NT	138
コウチュウ目	コガネムシ科	ヨツボシマグソコガネ	<i>Aphodius (Bodilus) sordidus</i> (Fabricius)	EX	—	—	138

コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメキイロマグソコガネ	<i>Aphodius strumi</i> Harold	EX	EX	NT	139	哺乳類
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒメヒロウドカミキリ	<i>Acalolepta degener degener</i> (Bates)	EX	EX	NT	139	鳥類
コウチュウ目	カミキリムシ科	アサカミキリ	<i>Thyestilla gebleri</i> (Faldermann)	EX	EX	VU	139	爬虫類
コウチュウ目	ハムシ科	カツラネクイハムシ	<i>Donacia (Donaciomina) katurai</i> Kimoto	EX	CR	—	140	両生類
コウチュウ目	ハムシ科	オオルリハムシ	<i>Chrysolina (Erythrochrysa) virgata</i> (Sharp)	EX	EX	NT	140	汽水・淡水魚類
チョウ目	シロチョウ科	スジボソヤマキチョウ	<i>Gonepteryx aspasia</i> Ménétrières	EX	CR	—	140	昆虫類
チョウ目	タテハチョウ科	オオウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana nerippe</i> (C.Felder et R.Felder)	EX	EX	CR	141	クモ類
チョウ目	タテハチョウ科	キマダラモドキ	<i>Kirina fentoni</i> (Butler)	EX	EX	NT	141	貝類
チョウ目	タテハチョウ科	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus</i> (Fabricius)	EX	EX	CR	141	甲殻類
トンボ目	トンボ科	ベッコウトンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	CR	EX	CR	142	その他動物
トンボ目	アオイトトンボ科	コバネアオイトトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	CR	CR	EN	142	維管束植物
トンボ目	イトトンボ科	ヒヌマイトトンボ	<i>Mortonagrion Hirosei</i> Asahina	CR	EN	EN	142	蕨苔類
トンボ目	ヤンマ科	アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	CR	EN	NT	143	藻類
トンボ目	サナエトンボ科	オオサカサナエ	<i>Stylurus annulatus</i> (Djakonov)	CR	CR	VU	143	キノコ
トンボ目	エゾトンボ科	ハネヒロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	CR	CR	VU	143	EX
トンボ目	トンボ科	ナニワトンボ	<i>Sympetrum gracile</i> Oguma	CR	CR	VU	144	EW
トンボ目	トンボ科	マダラナニワトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	CR	CR	EN	144	CR
トンボ目	トンボ科	オオキトンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	CR	CR	EN	144	EN
バッタ目	コオロギ科	オオオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus magnatus</i> Matsuura	CR	CR	—	145	VU
カメムシ目	タイコウチ科	ヒメタイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki	CR	CR	—	145	NT
カメムシ目	コバンムシ科	コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamationis</i> (Scott)	CR	CR	EN	145	DD
カメムシ目	ナベブタムシ科	トゲナベブタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	CR	CR	VU	146	
アミメカゲロウ目	ウスバカゲロウ科	オオウスバカゲロウ	<i>Heoclisia japonica</i> (McLachlan)	CR	CR	—	146	
コウチュウ目	ガムシ科	ユーラシアシジミガムシ	<i>Laccobius (Laccobius) minutus</i> (Linnaeus)	CR	—	—	146	
コウチュウ目	ミズスマシ科	ミズスマシ	<i>Gyrinus (Gyrinus) japonicus</i> Sharp	CR	EN	VU	147	
コウチュウ目	ミズスマシ科	オオミズスマシ	<i>Dineutus (Ciclouds) orientalis</i> (Modeer)	CR	EN	NT	147	
コウチュウ目	ミズスマシ科	ヒメミズスマシ	<i>Gyrinus (Gyrinus) gestroi</i> Régimbart	CR	EN	EN	147	
コウチュウ目	ハンミョウ科	ホソハンミョウ	<i>Cylindera (Cylindera) gracilis</i> Pallas	CR	EN	VU	148	
コウチュウ目	ハンミョウ科	カワラハンミョウ	<i>Chaetodera laetescripta laetescripta</i> (Sharp)	CR	CR	EN	148	
コウチュウ目	オサムシ科	ミハマオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) arrowianus kirimurai</i> Kubota & Yahiro	CR	CR	CR	149	
コウチュウ目	オサムシ科	ウガタオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) maiyasanus ohkawai</i> Nakane	CR	CR	VU	149	
コウチュウ目	オサムシ科	オオヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites (Scarites) sulcatus sulcatus</i> Olivier	CR	VU	NT	149	
コウチュウ目	オサムシ科	ズカオオズナガゴミムシ	<i>Pterostichus akitai</i> Morita	CR	NT	—	150	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ムナコブハナカミキリ	<i>Xenophyrama purpureum</i> Bates	CR	CR	—	150	
コウチュウ目	カミキリムシ科	モモグロハナカミキリ	<i>Toxotinus reinii</i> (Heyden)	CR	CR	—	150	
コウチュウ目	オサムシ科	エチゴトックリゴミムシ	<i>Oodes echigonus</i> Habu & Baba	CR	CR	NT	151	
コウチュウ目	オサムシ科	ダイミョウアトキリゴミムシ	<i>Cymindis daimio</i> Bates	CR	EN	—	151	
コウチュウ目	オサムシ科	アリスアトキリゴミムシ	<i>Lachnoderma asperum</i> Bates	CR	EN	DD	151	
コウチュウ目	コガシラミズムシ科	クビボソコガシラミズムシ	<i>Haliplus (Haliplus) japonicus</i> Sharp	CR	—	DD	152	

哺乳類	コウチュウ目	コツブゲンゴロウ科	キボシチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Sharp)	CR	CR	EN	152
	コウチュウ目	コツブゲンゴロウ科	ムモンチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus</i> sp.	CR	CR	VU	152
鳥類	コウチュウ目	コツブゲンゴロウ科	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	<i>Canthydrus politus</i> (Sharp)	CR	CR	VU	153
爬虫類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	チビマルケシゲンゴロウ	<i>Hydrovatus pumilus</i> Sharp	CR	—	—	153
	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ケシゲンゴロウ	<i>Hyphydrus japonicus japonicus</i> Sharp	CR	EN	NT	153
両生類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ヒメケシゲンゴロウ	<i>Hyphydrus laeiventris laeiventris</i> Sharp	CR	EN	VU	154
汽水・淡水魚類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	オオマルケシゲンゴロウ	<i>Hydrovatus bonvouloiri</i> Sharp	CR	EN	NT	154
昆虫類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ヤギマルケシゲンゴロウ	<i>Hydrovatus yagii</i> Kitayama Mori & Matsui	CR	CR	NT	154
	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ヒメシマチビゲンゴロウ	<i>Nebrioporus (Nebrioporus) nipponicus</i> (Takizawa)	CR	VU	—	155
クモ類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ゴマダラチビゲンゴロウ	<i>Oreodytes natrix</i> (Sharp)	CR	VU	—	155
貝類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	コウバツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus kobensis</i> Sharp	CR	VU	NT	155
甲殻類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	イガツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus shinobi</i> Yanagi & Akita	CR	—	—	156
	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ニセコウバツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus yoshitomi</i> Watanabe & Kamite	CR	—	—	156
その他動物	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	チンメルマンセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus zimmermanni</i> Gschwendtner	CR	—	—	156
維管束植物	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	カンムリセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus kammuriensis</i> Tamu & Tsukamoto	CR	—	—	157
蘚苔類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	キバリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	CR	EN	NT	157
	コウチュウ目	マルドロムシ科	セスジマルドロムシ	<i>Georissus (Nipponogeorissus) granulosus</i> M. Satô	CR	CR	VU	157
藻類	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	コガタノゲンゴロウ	<i>Cybister (Cybister) tripunctatus lateralis</i> (Fabricius)	CR	CR	VU	158
キノコ	コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ゲンゴロウ	<i>Cybister (Scaphinectes) chinensis</i> Motschulsky	CR	CR	VU	158
	コウチュウ目	ホソガムシ科	チュウブホソガムシ	<i>Hydrochus chubu</i> Balfour-Browne & M. Satô	CR	CR	VU	158
EX	コウチュウ目	ホソガムシ科	ヤマトホソガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	CR	VU	NT	159
EW	コウチュウ目	ガムシ科	ニセコクロヒラタガムシ	<i>Chasmogenus orbis</i> (Watanabe)	CR	—	—	159
CR	コウチュウ目	ガムシ科	ガムシ	<i>Hydrophilus (Hydrophilus) acuminatus</i> Motschulsky	CR	NT	NT	159
	コウチュウ目	ガムシ科	オオトゲバゴマフガムシ	<i>Berosus (Enoplurus) incretus</i> d'Orchymont	CR	DD	—	160
EN	コウチュウ目	クワガタムシ科	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	CR	CR	VU	160
VU	コウチュウ目	クワガタムシ科	ヒメオオクワガタ	<i>Dorcus montivagus montivagus</i> (Lewis)	CR	VU	—	160
NT	コウチュウ目	クワガタムシ科	キイニセコルリクワガタ	<i>Platycerus akitaorum</i> Imura	CR	VU	—	161
	コウチュウ目	クワガタムシ科	マメクワガタ	<i>Figulus punctatus</i> Waterhouse	CR	EN	—	161
DD	コウチュウ目	クワガタムシ科	マグソクワガタ	<i>Nicagus japonicus</i> Nagel	CR	CR	—	161
	コウチュウ目	クワガタムシ科	ツヤハダクワガタ	<i>Ceruchus lignarius lignarius</i> Lewis	CR	EN	—	162
	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメコエンマコガネ	<i>Caccobius brevis</i> Waterhouse	CR	CR	—	162
	コウチュウ目	コガネムシ科	ヤマトエンマコガネ	<i>Onthophagus (Strandius) japonicus</i> Harold	CR	CR	NT	162
	コウチュウ目	コガネムシ科	マルエンマコガネ	<i>Onthophagus (Gibbonthophdagus) viduus</i> Harold	CR	CR	—	163
	コウチュウ目	コガネムシ科	オオフタホシマグソコガネ	<i>Aphodius (Aphodius) elegans elegans</i> Allibert	CR	EN	—	163
	コウチュウ目	コガネムシ科	ニセセマルケシマグソコガネ	<i>Psanmodius mariyamai</i> Ochi, Kawahara et Inagaki	CR	CR	—	163
	コウチュウ目	コガネムシ科	オオサカスジコガネ	<i>Anomala osakana</i> Sawada	CR	DD	—	164
	コウチュウ目	コガネムシ科	オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i> Lewis	CR	VU	NT	164
	コウチュウ目	コガネムシ科	トラハナムグリ	<i>Trichius japonicus</i> Janson	CR	CR	—	164
	コウチュウ目	タマムシ科	キンモンナガタマムシ	<i>Chalcophora yunnanensis satsumae</i> Lewis	CR	CR	—	165

コウチュウ目	タマムシ科	ホソクロナガタマムシ	<i>Agriilus kawarai</i> Y. Kurosawa	CR	—	—	165	哺乳類
コウチュウ目	タマムシ科	クロチビタマムシ	<i>Trachys pseudoscrobiculata</i> Obenberger	CR	—	—	165	鳥類
コウチュウ目	コメツキムシ科	ホソヒメクロコメツキ	<i>Ampedus otobei</i> Kishii	CR	DD	—	166	爬虫類
コウチュウ目	コメツキムシ科	ツヤチャイロヒラアシコメツキ	<i>Suzukielater babai</i> (Kishii & Ôhira)	CR	—	—	166	両生類
コウチュウ目	ホタル科	ウスグロボタル	<i>Cyphonocerus inelegans</i> Nakane	CR	—	—	166	汽水・淡水魚類
コウチュウ目	ホタル科	コクロオバボタル	<i>Lucidina okadai</i> Nakane et Ohbayashi	CR	CR	EN	167	昆虫類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	ノノボリクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Japanopodabrus) nonoboriensis</i> Takahashi	CR	DD	—	167	クモ類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	コウモリクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) komoriensis</i> Takahashi	CR	—	—	167	貝類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	ヒラクラクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) hirakura</i> Takahashi	CR	DD	—	168	甲殻類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	アキタクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) akitaï</i> Takahashi	CR	DD	—	168	その他動物
コウチュウ目	ジョウカイボン科	アキタキイロシリプトジョウカイ	<i>Yukikoa akitaï</i> Takahashi	CR	DD	—	168	維管束植物
コウチュウ目	ジョウカイボン科	カタキンイロジョウカイ	<i>Themus (Haplothemus) ohkawai</i> M. Satô	CR	CR	—	169	苔苔類
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	ニセマグソコガネダマシ	<i>Trachyscelis sabuleti</i> Lewis	CR	CR	—	169	藻類
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	クロソソマグソコガネダマシ	<i>Bolitotrogus kurosonis</i> Miyatake	CR	—	—	169	キノコ
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	ホソハマベゴミムシダマシ	<i>Micropedinus pullulus</i> (Boheman)	CR	VU	—	170	EX
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	クローズハマベゴミムシダマシ	<i>Phaleria (Epiphaleria) atriceps</i> (Lewis)	CR	EN	—	170	EW
コウチュウ目	カミキリムシ科	フタズジカタピロハナカミキリ	<i>Brachyta bifasciata japonica</i> (Matsushita)	CR	CR	—	170	CR
コウチュウ目	カミキリムシ科	クビアカハナカミキリ	<i>Gaurotes atripennis</i> Matsushita	CR	VU	—	171	EN
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヤノヒメハナカミキリ	<i>Pseudopidonia chairo</i> (Tamanuki)	CR	—	—	171	VU
コウチュウ目	カミキリムシ科	ツマグロヒメハナカミキリ	<i>Pseudopidonia maculithorax</i> (Pic)	CR	—	—	171	NT
コウチュウ目	カミキリムシ科	ミセンヒメハナカミキリ	<i>Pseudopidonia misenia</i> (S. Saito & A. Saito)	CR	—	—	172	DD
コウチュウ目	カミキリムシ科	オオミネヒメハナカミキリ	<i>Pseudopidonia ohminesana</i> (Mizuno)	CR	CR	—	172	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ムナミゾハナカミキリ	<i>Munamizoa maculata</i> (Matsushita & Tamanuki)	CR	CR	—	172	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒメアカハナカミキリ	<i>Stictoleptura (Stictoleptura) pyrrha</i> (Bates)	CR	—	—	173	
コウチュウ目	カミキリムシ科	イガブチヒゲハナカミキリ	<i>Stictoleptura (Stictoleptura) igai</i> (Tamanuki)	CR	EN	—	173	
コウチュウ目	カミキリムシ科	オオハナカミキリ	<i>Konoa granulata</i> (Bates)	CR	EN	—	173	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒメヨツスジハナカミキリ	<i>Leptura kusamai kusamai</i> Ohbayashi & Nakane	CR	VU	—	174	
コウチュウ目	カミキリムシ科	コヨツスジハナカミキリ	<i>Leptura subtilis</i> Bates	CR	—	—	174	
コウチュウ目	カミキリムシ科	カタキハナカミキリ	<i>Pedostrangalia (Neosphenalia) femoralis</i> (Motschulsky)	CR	—	—	174	
コウチュウ目	カミキリムシ科	タケウチホソハナカミキリ	<i>Strangalia takeuchii</i> Matsushita & Tamanuki	CR	VU	—	175	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒゲジロホソコバネカミキリ	<i>Necydalis (Necydalisca) odai</i> Hayashi	CR	DD	—	175	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヨツボシカミキリ	<i>Stenygrammus quadrinotatum</i> Bates	CR	CR	EN	175	
コウチュウ目	カミキリムシ科	タケウチヒゲナガコバネカミキリ	<i>Molorchus takeuchii takeuchii</i> Ohbayashi	CR	NT	—	176	
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヨツボシシロオビゴマフカミキリ	<i>Mesosa (Mesosa) mediofasciata</i> Breuning	CR	DD	—	176	
コウチュウ目	カミキリムシ科	マヤサンコブヤズカミキリ	<i>Parechthistatus (Mesechthistatus) furcifer furcifer</i> (Bates)	CR	VU	—	176	
コウチュウ目	ハムシ科	キンイロネクイハムシ	<i>Donacia (Donaciomima) japana</i> Chûjô & Goecke	CR	CR	NT	177	
コウチュウ目	ハムシ科	セラネクイハムシ	<i>Donacia (Donacia) akiyamai</i> Y. Komiya	CR	CR	DD	177	
コウチュウ目	ハムシ科	イネネクイハムシ	<i>Donacia (Cyphogaster) provostii</i> Fairmaire	CR	CR	—	177	
コウチュウ目	ハムシ科	ツヤネクイハムシ	<i>Donacia (Donaciomima) nitidior</i> (Nakane)	CR	EN	—	178	

哺乳類	コウチュウ目	ハムシ科	オオサルハムシ	<i>Chrysochus chinensis</i> Baly	CR	DD	—	178
	コウチュウ目	ゾウムシ科	ババスケヒメゾウムシ	<i>Limnobaris babai</i> Chûjô & Morimoto	CR	CR	—	178
鳥類	コウチュウ目	ゾウムシ科	ハマベゾウムシ	<i>Isonycholips gotoi</i> Chûjô & Voss	CR	EX	—	179
爬虫類	ハエ目	ニセヒメガガンボ科	アルプスニセヒメガガンボ	<i>Protanyderus alexanderi</i> Kariya	CR	—	DD	179
	ハエ目	シギアブ科	シギアブの一種	<i>Chrysopilus shibuyai</i> Nagatomi	CR	NT	—	179
両生類	ハエ目	アブ科	ハマアブ	<i>Hybomitra litoralis</i> Yonetsu, Shinogi et Watanabe	CR	—	—	180
汽水・淡水魚類	ハエ目	アブ科	スズキキイロアブ	<i>Atylotus suzukii</i> Hayakawa	CR	—	—	180
昆虫類	ハエ目	ツリアブモドキ科	アカツリアブモドキ	<i>Nycterimyia fenestroinornata</i> Lichtwardt	CR	DD	—	180
	ハエ目	ツリアブ科	シバカワツリアブ	<i>Bombylius shibakawae</i> Matsumura	CR	—	—	181
クモ類	ハエ目	ハナアブ科	ヤマトヒメナガヒラタハナアブ	<i>Chamaesyphus japonicus</i> Shiraki	CR	CR	—	181
貝類	チョウ目	シロチョウ科	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta</i> (Boisduva)	CR	CR	EN	181
甲殻類	チョウ目	シジミチョウ科	キマダラルリツバメ	<i>Spindasis takanonis</i> (Matsumura)	CR	CR	NT	182
	チョウ目	シジミチョウ科	シルビアシジミ	<i>Zizina emelina</i> (de l'Orza)	CR	CR	EN	182
その他動物	チョウ目	タテハチョウ科	ウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome laodice</i> (Pallas)	CR	EN	VU	182
維管束植物	チョウ目	タテハチョウ科	クロヒカゲモドキ	<i>Lethe marginalis</i> (Motschulsky)	CR	VU	EN	183
蘚苔類	トビケラ目	シンテイトビケラ科	シンテイトビケラ	<i>Dipseudopsis collaris</i> McLachlan	CR	CR	—	183
	トビケラ目	エグリトビケラ科	スジトビケラ	<i>Nemotaulius brevilinea</i> (McLachlan)	CR	CR	—	183
藻類	ハチ目	コンボウハバチ科	ナシモモプトハバチ	<i>Cimbex carinulatus</i> Konow	CR	CR	—	184
キノコ	トンボ目	イトトンボ科	ベニイトトンボ	<i>Ceriatrion nipponicum</i> Asahina	EN	VU	NT	184
	トンボ目	ヤンマ科	ルリボシヤンマ	<i>Aeshna juncea</i> (Linnaeus)	EN	EN	—	184
EX	トンボ目	サナエトンボ科	コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i> (Selys)	EN	EN	—	185
EW	トンボ目	サナエトンボ科	オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i> (Asahina)	EN	VU	NT	185
CR	トンボ目	トンボ科	タイリクアカネ	<i>Sympetrum striolatum</i> (Charpentier)	EN	EN	—	185
	トンボ目	トンボ科	キトンボ	<i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)	EN	EN	—	186
EN	バッタ目	ヒバリモドキ科	ハマスズ	<i>Dianemobius csikii</i> (Bolivar)	EN	EN	—	186
VU	カメムシ目	セミ科	アカエゾゼミ	<i>Auritibicen flammatus</i> (Distant)	EN	VU	—	186
	カメムシ目	セミ科	コエゾゼミ	<i>Auritibicen bihamatus</i> (Motschulsky)	EN	NT	—	187
NT	カメムシ目	イトアメンボ科	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> Scott	EN	EN	VU	187
DD	アミメカゲロウ目	ツノトンボ科	キバネツノトンボ	<i>Ascalaphus ramburi</i> (McLachlan)	EN	VU	—	187
	コウチュウ目	ハンミョウ科	シロヘリハンミョウ	<i>Callytron yuasai yuasai</i> (Nakane)	EN	EN	NT	188
	コウチュウ目	カワラゴミムシ科	カワラゴミムシ	<i>Omophron aequale aequale</i> Morawitz	EN	EN	—	188
	コウチュウ目	オサムシ科	セアカオサムシ	<i>Hemicarabus tuberculatus</i> (Dejean et Boisduval)	EN	EN	NT	188
	コウチュウ目	オサムシ科	ムロウオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) iwawakianus muro</i> Ishikawa et Kubota	EN	EN	—	189
	コウチュウ目	オサムシ科	アヤムネスジタマムシ	<i>Chrysodema (Chrysodema) lewisii</i> E. Saunders	EN	—	—	189
	コウチュウ目	オサムシ科	タキハラオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) maiyasanus takiharensis</i> (Katsura et Tominaga)	EN	EN	—	189
	コウチュウ目	オサムシ科	ウミホソチビゴミムシ	<i>Perileptus morimotoi</i> S. Uéno	EN	VU	NT	190
	コウチュウ目	オサムシ科	ジャクダイジンメクラチビゴミムシ	<i>Kurasawatrechus katoi</i> S. Uéno	EN	CR	—	190
	コウチュウ目	オサムシ科	キバネキバナガミズギワゴミムシ	<i>Bembidion (Desarmatocillemus) aestuarii</i> (S. Uéno & Habu)	EN	VU	VU	190
	コウチュウ目	オサムシ科	スズカヌレチゴミムシ	<i>Apatrobus narukawai</i> Morita	EN	EN	—	191

コウチュウ目	オサムシ科	クロテングホラアナヒラタゴミムシ	<i>Jujiroa yorikoeae</i> Morita et Inagaki	EN	—	—	191	哺乳類
コウチュウ目	オサムシ科	オオヨツボシゴミムシ	<i>Dischissus mirandus</i> Bates	EN	VU	—	191	鳥類
コウチュウ目	オサムシ科	ヨツボシゴミムシ	<i>Panagaesus (Panagaesus) japonicus</i> Chaudoir	EN	—	—	192	爬虫類
コウチュウ目	オサムシ科	ヒトツメアオゴミムシ	<i>Callistoides deliciolus</i> (Bates)	EN	VU	NT	192	両生類
コウチュウ目	オサムシ科	アオヘリアオゴミムシ	<i>Chlaenius (Amblygenius) praefectus</i> Bates	EN	CR	CR	192	汽水・淡水魚類
コウチュウ目	オサムシ科	コアトワアオゴミムシ	<i>Chlaenius (Pachydinodes) hamifer</i> Chaudoir	EN	—	—	193	昆虫類
コウチュウ目	オサムシ科	イグチケブカゴミムシ	<i>Peronomerus auripilis</i> Bates	EN	NT	NT	193	クモ類
コウチュウ目	コガシラミズムシ科	マダラコガシラミズムシ	<i>Halipilus (Liaphlus) sharpi</i> Wehncke	EN	VU	VU	193	貝類
コウチュウ目	コガシラミズムシ科	クロホシコガシラミズムシ	<i>Halipilus (Liaphlus) basinotatus laticusculus</i> Nakane	EN	EN	VU	194	甲殻類
コウチュウ目	コガシラミズムシ科	キイロコガシラミズムシ	<i>Halipilus (Liaphlus) eximius</i> Clark	EN	EN	VU	194	その他動物
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	オニギリマルケシゲンゴロウ	<i>Hydrovatus onigiri</i> Watanabe & Biström	EN	EN	NT	194	維管束植物
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	マルチビゲンゴロウ	<i>Leiodytes frontalis</i> (Sharp)	EN	EN	NT	195	苔苔類
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus difficilis</i> Sharp	EN	—	—	195	藻類
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	オオヒメゲンゴロウ	<i>Rhantus (Rhantus) erraticus</i> Sharp	EN	—	—	195	キノコ
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus (Guignotites) bowringii</i> Clark	EN	NT	NT	196	EX
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ウスイロシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus (Guignotites) rhantoides</i> Sharp	EN	—	—	196	EW
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	EN	EN	VU	196	CR
コウチュウ目	ガムシ科	クロシオガムシ	<i>Agraphydrus hanseni</i> (M. Satô & Yoshitomi)	EN	EN	NT	197	EN
コウチュウ目	ガムシ科	エゾコガムシ	<i>Hydrochara libera</i> (Sharp)	EN	EN	NT	197	VU
コウチュウ目	エンマムシ科	ルリエンマムシ	<i>Saprimus (Saprimus) splendens</i> (Paykull)	EN	—	—	197	NT
コウチュウ目	エンマムシ科	ツヤハマベエンマムシ	<i>Eopachylopus ripae</i> (Lewis)	EN	—	—	198	DD
コウチュウ目	エンマムシ科	アラメエンマムシ	<i>Hister salebrosus subsolanus</i> (Newton)	EN	EN	—	198	
コウチュウ目	シテムシ科	ヤマトモンシテムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	EN	VU	NT	198	
コウチュウ目	シテムシ科	オニヒラタシテムシ	<i>Thanatophilus rugosus</i> (Linnaeus)	EN	—	—	199	
コウチュウ目	シテムシ科	ホソヒラタシテムシ	<i>Silpha longicornis</i> Portevin	EN	VU	—	199	
コウチュウ目	クワガタムシ科	オニクワガタ	<i>Prismognathus angularis angularis</i> Waterhouse	EN	NT	—	199	
コウチュウ目	クワガタムシ科	ルリクワガタ	<i>Platycerus delicatulus delicatulus</i> Lewis	EN	VU	—	200	
コウチュウ目	コブスジコガネ科	ムツコブスジコガネ	<i>Trox mutsuensis</i> Nomura	EN	EN	—	200	
コウチュウ目	コブスジコガネ科	コブナシコブスジコガネ	<i>Trox nohirai</i> Nakane	EN	EN	—	200	
コウチュウ目	コガネムシ科	コマグソコガネ	<i>Aphodius pusillus</i> (Herbst)	EN	—	—	201	
コウチュウ目	コガネムシ科	キマダラマグソコガネ	<i>Aphodius punctatus</i> Waterhouse	EN	EN	—	201	
コウチュウ目	コガネムシ科	オビマグソコガネ	<i>Aphodius uniplagiatus</i> Waterhouse	EN	—	—	201	
コウチュウ目	コガネムシ科	キソガワアイヌケシマグソコガネ	<i>Rakovicius takashii</i> Ochi, Kawahara et Inagaki	EN	EN	—	202	
コウチュウ目	タマムシ科	オオムツボシタマムシ	<i>Chrysobothris (Chrysobothris) ohbayashii</i> Y. Kurosawa	EN	VU	—	202	
コウチュウ目	タマムシ科	クヌギナガタマムシ	<i>Agrilus friebi</i> Obenberger	EN	—	—	202	
コウチュウ目	タマムシ科	シロウズヒラタチビタマムシ	<i>Habroloma (Parahabroloma) marginicolle</i> (Fairmaire)	EN	—	—	203	
コウチュウ目	コメツキムシ科	ムネアカツヤケシコメツキ	<i>Megapenthes opacus</i> Candèze	EN	VU	—	203	
コウチュウ目	ジョウカイボン科	オカダクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) okadai</i> (Nakane & Makino)	EN	—	—	203	
コウチュウ目	ジョウカイボン科	ホタルジョウカイ	<i>Cantharis (Cantharis) heleocharis</i> M. Satô Okushima & Ishida	EN	—	—	204	

哺乳類	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ヤマトセスジジョウカイ	<i>Lycocerus yamatensis</i> Okushima	EN	—	—	204
	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ニセキベリコバネジョウカイ	<i>Tryptherus (Tryptherus) mutilatus</i> (Kiesenwetter)	EN	—	—	204
鳥類	コウチュウ目	ジョウカイボン科	ミエクビアカジョウカイ	<i>Lycocerus watanabei</i> (Ishida & M. Satô)	EN	—	—	205
爬虫類	コウチュウ目	ムシガサカタムシ科	イチハシホソカタムシ	<i>Antibothrus ichihashii</i> Narukawa	EN	EN	—	205
	コウチュウ目	テントウムシ科	イセテントウ	<i>Chujochilus isensis</i> (H.Kamiya)	EN	EN	—	205
両生類	コウチュウ目	コバゴミシダマシ科	オオダイヨコモソコバゴミシダマシ	<i>Usechus ohdaiensis</i> Sasaji	EN	EN	—	206
汽水・淡水魚類	コウチュウ目	コバゴミシダマシ科	アバタツヤナガヒラタホソカタムシ	<i>Pycnomerus sculpturatus</i> Sharp	EN	EN	—	206
昆虫類	コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	ヒサゴゴミムシダマシ	<i>Misolampidius rugipennis</i> Lewis	EN	EN	—	206
	コウチュウ目	クビナガムシ科	キイカクズクビナガムシ	<i>Nematoplus yamato</i> Nakane	EN	EN	—	207
クモ類	コウチュウ目	ツチハンミョウ科	マルクビツチハンミョウ	<i>Eurymeloe corvinus</i> Marseul	EN	EN	—	207
貝類	コウチュウ目	アリモドキ科	タナカホソアリモドキ	<i>Stricticollis tobias</i> (Marseul)	EN	EN	—	207
甲殻類	コウチュウ目	カミキリムシ科	オオクロカミキリ	<i>Megasemum quadricostulatum</i> Kraatz	EN	—	—	208
	コウチュウ目	カミキリムシ科	フタコブルリハナカミキリ	<i>Japanocorus caeruleipennis</i> (Bates)	EN	VU	—	208
その他動物	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヨコモヒメハナカミキリ	<i>Cryptopidonia insuturata</i> Pic	EN	—	—	208
維管束植物	コウチュウ目	カミキリムシ科	イヨヒメハナカミキリ	<i>Cryptopidonia hylophila hylophila</i> (Kuboki)	EN	VU	—	209
蘚苔類	コウチュウ目	カミキリムシ科	ミワヒメハナカミキリ	<i>Cryptopidonia miwai</i> (Matsushita)	EN	—	—	209
	コウチュウ目	カミキリムシ科	トサヒメハナカミキリ	<i>Cryptopidonia approximata</i> (Kuboki)	EN	—	—	209
藻類	コウチュウ目	カミキリムシ科	チビハナカミキリ	<i>Alosterna chalybeella</i> (Bates)	EN	—	—	210
キノコ	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヒゲブトハナカミキリ	<i>Pachypidonia bodemeyeri</i> (Pic)	EN	EN	—	210
	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヤマトキモンハナカミキリ	<i>Judolia japonica</i> (Tamanuki)	EN	—	—	210
EX	コウチュウ目	カミキリムシ科	オオホソコバネカミキリ	<i>Necydalis (Necydalisca) solida</i> Bates	EN	DD	—	211
EW	コウチュウ目	カミキリムシ科	ルリボシカミキリ	<i>Rosalia (Rosalia) batesi</i> Harold	EN	VU	—	211
CR	コウチュウ目	カミキリムシ科	クロサワヒメコバネカミキリ	<i>Epania septemtrionalis</i> Hayashi	EN	EN	—	211
	コウチュウ目	カミキリムシ科	サツマヒメコバネカミキリ	<i>Epania dilaticornis dilaticornis</i> Hayashi	EN	EN	—	212
EN	コウチュウ目	カミキリムシ科	エソトラカミキリ	<i>Oligoenophus rosti iwatai</i> Ikeda	EN	EN	—	212
VU	コウチュウ目	カミキリムシ科	フタスジゴマフカミキリ	<i>Mesosa (Lissomesosa) cribrata</i> Bates	EN	EN	—	212
NT	コウチュウ目	カミキリムシ科	ヨコヤマヒゲナガカミキリ	<i>Dolichoprosopus yokoyamai</i> (Gressitt)	EN	EN	—	213
	コウチュウ目	カミキリムシ科	キイロアラゲカミキリ	<i>Penthides rufoflavus</i> (Hayashi)	EN	EN	—	213
DD	コウチュウ目	カミキリムシ科	カスリチビカミキリ	<i>Mimectatina variegata</i> Kusama & Takakuwa	EN	EN	—	213
	コウチュウ目	カミキリムシ科	ソボリンゴカミキリ	<i>Oberea (Oberea) sobosana</i> Ohbayashi	EN	—	—	214
	コウチュウ目	ハムシ科	ガガブタネクイハムシ	<i>Donacia (Cyphogaster) lenzi</i> Schönfeldt	EN	VU	—	214
	ハエ目	ミズアブ科	ミズアブ	<i>Stratiomys japonica</i> van der Wulp	EN	VU	—	214
	ハエ目	ツルギアブ科	ナギサツルギアブ	<i>Acrosathe stylata</i> Lyneborg	EN	VU	—	215
	ハエ目	ムシヒキアブ科	ヒラタムシヒキ	<i>Clinopogon nicobarensis</i> (Schiner)	EN	EN	—	215
	ハエ目	ハナアブ科	ケンランアリノスアブ	<i>Microdon katsurui</i> Maruyama et Hironaga	EN	VU	VU	215
	チョウ目	セセリチョウ科	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis jansonis</i> (Butler)	EN	VU	—	216
	チョウ目	アゲハチョウ科	ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	EN	EN	VU	216
	チョウ目	シジミチョウ科	ベニモンカラスシジミ	<i>Fixenia iyonis</i> (Ota et Kusunoki)	EN	EN	NT	216
	チョウ目	シジミチョウ科	ミヤマカラスシジミ	<i>Fixenia mera</i> Janson	EN	—	—	217

チョウ目	タテハチョウ科	ホシミスジ (紀伊半島亜種)	<i>Neptis pryri kiiensis</i> Fukúda, Minotani et Shinkawa	EN	EN	—	217	哺乳類
チョウ目	タテハチョウ科	ウラナミジャノメ	<i>Ypthima motschulskyi</i> Butler	EN	EN	VU	217	
チョウ目	タテハチョウ科	ツマジロウラジャノメ	<i>Lasiommata deidamia</i> (Eversmann)	EN	VU	—	218	鳥類
チョウ目	タテハチョウ科	ヒメキマダラヒカゲ	<i>Zophoessa callipteris</i> (Butler)	EN	—	—	218	爬虫類
トビケラ目	ヒゲナガトビケラ科	ミサキツノトビケラ	<i>Triplectides misakianus</i> (Matsumura)	EN	EN	—	218	両生類
ハチ目	ハバチ科	バイケイソウハバチ	<i>Aglaostigma amoorensis</i> (Cameron)	EN	EN	—	219	汽水・淡水魚類
ハチ目	コマユバチ科	ウmanoオバチ	<i>Euurobracon yokohamae</i> Dala Torre	EN	EN	NT	219	
ハチ目	アナバチ科	キゴシジガバチ	<i>Sceliphron madraspatanum</i> (Fabricius)	EN	—	—	219	昆虫類
ハチ目	ギングチバエ科	ニッポンハナダカバチ	<i>Bembix niponica</i> F.Smith	EN	EN	VU	220	クモ類
ハチ目	ギングチバエ科	キアシハナダカバチモドキ	<i>Stizus perrisi</i> Dufour	EN	DD	VU	220	
ハチ目	ハキリバチ科	マイマイツツハナバチ	<i>Osmia orientalis</i> Benoist	EN	EN	DD	220	貝類
ハチ目	ハキリバチ科	キバラハキリバチ	<i>Megachile xanthothrix</i> Yasumatsu et Hirashima	EN	—	NT	221	甲殻類
トンボ目	モノサシトンボ科	グンバイトンボ	<i>Platynemis foliacea</i> Selys	VU	NT	NT	221	その他動物
トンボ目	イトトンボ科	モートンイトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	VU	VU	NT	221	
トンボ目	ヤンマ科	ネアカヨシヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	VU	VU	NT	222	維管束植物
トンボ目	サナエトンボ科	ナゴヤサナエ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	VU	VU	VU	222	蘚苔類
トンボ目	サナエトンボ科	キイロサナエ	<i>Asiagonphus pryri</i> (Selys)	VU	VU	NT	222	
トンボ目	エゾトンボ科	キイロヤマトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	VU	VU	NT	223	藻類
バッタ目	コオロギ科	タンボオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus aomoriensis</i> Shiraki	VU	VU	—	223	キノコ
バッタ目	コオロギ科	クチナガコオロギ	<i>Velarifictorus aspersus</i> (Walker)	VU	NT	—	223	EX
バッタ目	バッタ科	ダイリフキバッタ	<i>Callopodisma dairisama</i> (Scudder)	VU	EN	—	224	
バッタ目	バッタ科	カワラバッタ	<i>Eusphingonotus japonicus</i> (Saussure)	VU	VU	—	224	EW
カメムシ目	セミ科	ハルゼミ	<i>Yezoterpnosia vacua</i> (Olivier)	VU	—	—	224	CR
カメムシ目	セミ科	エゾゼミ	<i>Auribicen japonicus</i> (Kato)	VU	NT	—	225	
カメムシ目	タイコウチ科	ヒメミズカマキリ	<i>Ranatra unicolor</i> Scott	VU	VU	—	225	EN
カメムシ目	コオイムシ科	オオコオイムシ	<i>Appasus major</i> (Esaki)	VU	VU	—	225	VU
カメムシ目	コオイムシ科	タガメ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	VU	VU	VU	226	NT
カメムシ目	アメンボ科	エサキアメンボ	<i>Limnoporus esakii</i> (Miyamoto)	VU	VU	NT	226	
カメムシ目	キンカメムシ科	ニシキキンカメムシ	<i>Poecilocoris splendidulus</i> Esaki	VU	VU	—	226	DD
コウチュウ目	ミズスマシ科	オナガミズスマシ	<i>Orectochilus regimbarti</i> Sharp	VU	VU	—	227	
コウチュウ目	オサムシ科	タカノオオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) maiyasanus otobei</i> Makita, Zhang et Kubota	VU	—	—	227	
コウチュウ目	オサムシ科	ヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites (Parallelomorphus) aterrimus</i> Morawitz	VU	NT	—	227	
コウチュウ目	オサムシ科	ミエチャマルチビョウタンゴミムシ	<i>Reicheiodes (Reichonippodes) yokozekii</i> Morita	VU	DD	—	228	
コウチュウ目	オサムシ科	オオトックリゴミムシ	<i>Pseudoodes vicarius</i> (Bates)	VU	VU	NT	228	
コウチュウ目	コガシラミズムシ科	コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i> (Sharp)	VU	—	—	228	
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	キボシケシゲンゴロウ	<i>Allopachria flavomaculatus</i> (Kamiya)	VU	VU	DD	229	
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	キボシツブゲンゴロウ	<i>Japanolaccophilus niponensis</i> (Kamiya)	VU	VU	NT	229	
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	テラニシセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus teranishii</i> Kamiya	VU	VU	—	229	
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	クロゲンゴロウ	<i>Cybister (Melanectes) brevis</i> Aubé	VU	VU	NT	230	

哺乳類	コウチュウ目	ガムシ科	コガタガムシ	<i>Hydrophilus (Hydrophilus) bilineatus caschmirensis</i> Kollar & Redtenbacher	VU	NT	VU	230
	コウチュウ目	ガムシ科	ミヤタケダルマガムシ	<i>Hydraena (Hydraenopsis) miyatakei</i> M. Satô	VU	—	—	230
鳥類	コウチュウ目	シデムシ科	コクロシデムシ	<i>Ptomascoepus morio</i> Kraatz	VU	—	—	231
爬虫類	コウチュウ目	クワガタムシ科	キンキコルリクワガタ	<i>Platycerus takakuwai akitai</i> Fujita	VU	NT	—	231
両生類	コウチュウ目	コブスジコガネ科	ヘリトゲコブスジコガネ	<i>Trox mandli</i> Balthasar	VU	VU	—	231
	コウチュウ目	コガネムシ科	ミヤマダイコクコガネ	<i>Copris pecuarius</i> Lewis	VU	VU	—	232
汽水・淡水魚類	コウチュウ目	コガネムシ科	コスジマグソコガネ	<i>Aphodius lewisi</i> C. O. Waterhouse	VU	VU	—	232
昆虫類	コウチュウ目	コガネムシ科	ヌバタママグソコガネ	<i>Aphodius brevisculus</i> (Motschulsky)	VU	EN	—	232
	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメスジマグソコガネ	<i>Aphodius hasegawai</i> Nomura et Nakane	VU	VU	—	233
クモ類	コウチュウ目	コガネムシ科	ニセマキバマグソコガネ	<i>Aphodius morii</i> Nakane	VU	VU	—	233
貝類	コウチュウ目	コガネムシ科	ヤマトケシマグソコガネ	<i>Leioptammodius japonicus</i> (Harold)	VU	VU	—	233
甲殻類	コウチュウ目	コガネムシ科	シコクチャイロコガネ	<i>Sericania shikokuana</i> Nakamura	VU	—	—	234
	コウチュウ目	コガネムシ科	コバヤシチャイロコガネ	<i>Sericania kobayashii</i> Nomura	VU	—	—	234
その他動物	コウチュウ目	コガネムシ科	ホソチャイロコガネ	<i>Sericania elongata</i> Nomura	VU	—	—	234
維管束植物	コウチュウ目	コガネムシ科	アカマダラハナムグリ	<i>Anthracophora rusticola</i> Burmeister	VU	NT	DD	235
蘚苔類	コウチュウ目	コガネムシ科	ミヤマオオハナムグリ	<i>Protaetia (Liocola) lugubris insperata</i> (Lewis)	VU	NT	—	235
	コウチュウ目	コガネムシ科	キョウトアオハナムグリ	<i>Protaetia (Niponoprotaetia) lenzi</i> (Harold)	VU	VU	—	235
藻類	コウチュウ目	コガネムシ科	オオヒラタハナムグリ	<i>Neovalgus fumosus</i> (Lewis)	VU	—	—	236
キノコ	コウチュウ目	タマムシ科	クロマダラタマムシ	<i>Nipponobuprestis (Nipponobuprestisia) querceti</i> (E. Saunders)	VU	VU	—	236
	コウチュウ目	タマムシ科	クロコモンタマムシ	<i>Poecilota variolosa chinensis</i> Théry	VU	VU	—	236
EX	コウチュウ目	タマムシ科	トゲフタオタマムシ	<i>Dicerca tabialis</i> Lewis	VU	VU	—	237
EW	コウチュウ目	タマムシ科	アオタマムシ	<i>Eurythyrea tenuistriata</i> Lewis	VU	VU	—	237
CR	コウチュウ目	タマムシ科	ホソクリタマムシ	<i>Toxoscelus matobai</i> Tôyama	VU	VU	—	237
	コウチュウ目	タマムシ科	アカガネエグリタマムシ	<i>Endelus (Endelus) pyrrosiae aokii</i> Y. Kurosawa	VU	VU	—	238
EN	コウチュウ目	コメツキムシ科	スナサビキコリ	<i>Meristhus niponensis</i> Lewis	VU	VU	—	238
VU	コウチュウ目	コメツキムシ科	ハマバヒメサビキコリ	<i>Agrypnus miyamotoi miyamotoi</i> (Nakane & Kishii)	VU	—	—	238
NT	コウチュウ目	コメツキムシ科	オオダイリヒラタコメツキ	<i>Actenicerus odaisanus</i> (Miwa)	VU	VU	—	239
	コウチュウ目	ホタル科	オオマドボタル	<i>Pyrocoelia discicollis</i> (Kiesenwetter)	VU	—	—	239
DD	コウチュウ目	ジョウカイボン科	キタヤマクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) kitayamaensis</i> Takahashi	VU	DD	—	239
	コウチュウ目	ジョウカイボン科	オワセクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) owasensis</i> Takahashi	VU	DD	—	240
	コウチュウ目	ジョウカイモドキ科	ルリキオビジョウカイモドキ	<i>Intybia takaraensis</i> (Nakane)	VU	VU	—	240
	コウチュウ目	ジョウカイモドキ科	イソジョウカイモドキ	<i>Laius asahinai</i> (Nakane)	VU	VU	DD	240
	コウチュウ目	オオキノコムシ科	オオキノコムシ	<i>Encaustes cruenta praenobilis</i> Lewis	VU	VU	—	241
	コウチュウ目	ヒラタムシ科	ルリヒラタムシ	<i>Cucujus mniszehi</i> Grouvelle	VU	VU	—	241
	コウチュウ目	ゴブミシダマシ科	アトコブゴミシダマシ	<i>Phellopsis suberea</i> Lewis	VU	VU	—	241
	コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	クロホシクチキムシ	<i>Microcistela haagi</i> (Harold)	VU	VU	—	242
	コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	テントウゴミムシダマシ	<i>Leiochrinus satzuma</i> Lewis	VU	VU	—	242
	コウチュウ目	アカハネムシ科	オカモトツヤアナハネムシ	<i>Pedilus okamotoi</i> (Kôno)	VU	VU	—	242
	コウチュウ目	カミキリムシ科	オオクボカミキリ	<i>Tengius ohkuboi ohkuboi</i> Matsushita	VU	VU	—	243

コウチュウ目	カミキリムシ科	ホンドニセハイイロハナカミキリ	<i>Rhagium femorale</i> N.Ohbayashi	VU	—	—	243	哺乳類
コウチュウ目	カミキリムシ科	テツイロハナカミキリ	<i>Encyclops olivacea</i> Bates	VU	VU	—	243	鳥類
コウチュウ目	カミキリムシ科	クロソンホソハナカミキリ	<i>Pygostrangalia kurosonensis</i> (Ohbayashi)	VU	VU	—	244	爬虫類
コウチュウ目	カミキリムシ科	オオトラカミキリ	<i>Xyloclytus (Ootora) villioni</i> (Villard)	VU	VU	—	244	両生類
コウチュウ目	カミキリムシ科	ヤマトシロオビトラカミキリ	<i>Kazuoclytus lautoides</i> (Hayashi)	VU	VU	—	244	汽水・淡水魚類
コウチュウ目	カミキリムシ科	セダカコブヤハズカミキリ	<i>Parechthistatus (Parechthistatus) gibber shibatai</i> Miyake	VU	—	—	245	昆虫類
コウチュウ目	ゾウムシ科	シロスジタコゾウムシ	<i>Hypera (Eririnomorphus) connaculata</i> (Herbst)	VU	VU	—	245	クモ類
ハエ目	ハネカ科	カスミハネカ	<i>Nymphomyia alba</i> Tokunaga	VU	—	DD	245	貝類
ハエ目	ケバエ科	メスアカケバエ	<i>Bibio japonica</i> (Motschlsky)	VU	VU	—	246	甲殻類
ハエ目	カ科	トワダオオカ	<i>Toxorhynchites towadensis</i> Matsumura	VU	DD	—	246	その他動物
ハエ目	クサアブ科	ネグロクサアブ	<i>Coenomomyia basalis</i> Matsumura	VU	DD	DD	246	維管束植物
ハエ目	ミズアブ科	コガタノミズアブ	<i>Odontomyia garatas</i> Walker	VU	NT	—	247	苔苔類
ハエ目	ミズアブ科	ミドロミズアブ	<i>Odontomyia filipjewi</i> (Pleske)	VU	DD	—	247	藻類
ハエ目	シギアブ科	ツノヒゲシギアブ	<i>Arthroceras japonicum</i> Nagatomi	VU	NT	—	247	キノコ
ハエ目	ツリアブ科	ハリオスキバツリアブ	<i>Villa</i> sp.7	VU	—	—	248	EX
ハエ目	ツルギアブ科	ヨシコツルギアブ	<i>Acrosathe yoshikoeae</i> Nagatomi et Lyneborg	VU	VU	—	248	EW
ハエ目	ツルギアブ科	シオサイツルギアブ	<i>Acrosathe</i> sp.	VU	VU	—	248	CR
ハエ目	ムシヒキアブ科	アシナガムシヒキ	<i>Molobratria japonica</i> (Bigot)	VU	DD	—	249	EN
ハエ目	ムシヒキアブ科	アメイロホソムシヒキ	<i>Leptogaster trimucronata</i> Hermann	VU	DD	—	249	VU
ハエ目	ハナアブ科	コマバムツホシヒラタアブ	<i>Scaeva komabensis</i> (Matsumura)	VU	DD	—	249	NT
ハエ目	ハナアブ科	ルリハナアブ	<i>Kertesziomyia viridis</i> (Coquillett)	VU	NT	—	250	DD
ハエ目	ハナアブ科	コブアリノスアブ	<i>Microdon shirakii</i> Reemer et Stahls	VU	DD	—	250	
チョウ目	ツトガ科	ヒメコミズメイガ	<i>Parapoynx rectilinealis</i> Yoshiyasu	VU	VU	—	250	
チョウ目	シャクガ科	クワトゲエダシャク	<i>Apochima excavata</i> (Dyar)	VU	VU	NT	251	
チョウ目	ヤガ科	カバフキシタバ	<i>Catocala mirifica</i> Butler	VU	VU	—	251	
チョウ目	シジミチョウ科	ウラナミアカシジミ (名義タイプ亜種)	<i>Japonica saepestriata saepestriata</i> (Hewitson)	VU	VU	—	251	
チョウ目	シジミチョウ科	ウラジロミドリシジミ	<i>Favonius saphirinus</i> (Staudinge)	VU	NT	—	252	
チョウ目	シジミチョウ科	オオミドリシジミ	<i>Favonius orientalis</i> (Murry)	VU	VU	—	252	
チョウ目	シジミチョウ科	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i> (Bremer et Grey)	VU	VU	EN	252	
チョウ目	タテハチョウ科	クモガタヒョウモン	<i>Nephargynnis anadyomene</i> (C.Felder et R.Felder)	VU	—	—	253	
チョウ目	タテハチョウ科	ヤマキマダラヒカゲ	<i>Neope nipponica</i> Butler	VU	—	—	253	
トビケラ目	フトヒゲトビケラ科	ヒトスジキソトビケラ	<i>Psilotreta japonica</i> (Banks)	VU	VU	—	253	
ハチ目	コンボウハチ科	ホシアシブトハバチ	<i>Agenocimbex maculatus</i> (Marlatt)	VU	NT	DD	254	
ハチ目	ミツバチ科	クマルハナバチ	<i>Bombus ignitus</i> Smith	VU	NT	NT	254	
トンボ目	カワトンボ科	アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i> Selys	NT	VU	NT	254	
トンボ目	イトトンボ科	オオイトトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i> (Selys)	NT	—	—	255	
トンボ目	イトトンボ科	セスジイトトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i> (Brauer)	NT	—	—	255	
トンボ目	ムカシトンボ科	ムカシトンボ	<i>Epiophlebia superstes</i> (Selys)	NT	NT	—	255	
トンボ目	ムカシヤンマ科	ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i> (Selys)	NT	NT	—	256	

哺乳類	トンボ目	サナエトンボ科	ホンサナエ	<i>Shaogomphus postocularis</i> (Selys)	NT	—	—	256
	トンボ目	サナエトンボ科	ヒメクロサナエ	<i>Lanthus fujiacus</i> (Fraser)	NT	NT	—	256
鳥類	トンボ目	サナエトンボ科	タベサナエ	<i>Trigomphus citimus</i> Needham	NT	NT	NT	257
爬虫類	トンボ目	サナエトンボ科	フタスジサナエ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	NT	NT	NT	257
両生類	トンボ目	トンボ科	ミヤマアカネ	<i>Sympetrum pedemontanum</i> (Allion)	NT	NT	—	257
汽水・淡水魚類	バッタ目	コロギス科	コバネコロギス	<i>Metriogryllacris magna</i> (Matsumura et Shiraki)	NT	NT	—	258
	バッタ目	カマドウマ科	イセカマドウマ	<i>Paratachycines (Paratachycines) isensis</i> Sugimoto et Ichikawa	NT	NT	—	258
昆虫類	バッタ目	キリギリス科	スズカササキリモドキ	<i>Kinkiconocephalopsis matsuurai</i> Kawakita	NT	NT	—	258
	バッタ目	コオロギ科	カヤコオロギ	<i>Euscirtus japonicus</i> Shiraki	NT	—	—	259
クモ類	バッタ目	ヒシバッタ科	ノセヒシバッタ	<i>Alulatettix fornicatus</i> (Ichikawa)	NT	NT	—	259
貝類	バッタ目	バッタ科	キイフキバッタ	<i>Parapodisma nihamensis hiurai</i> Tominaga et Kanô	NT	—	—	259
甲殻類	バッタ目	バッタ科	キンキフキバッタ	<i>Parapodisma subastris</i> Huang	NT	—	—	260
	バッタ目	バッタ科	ヒメフキバッタ	<i>Parapodisma etsukoana</i> Kobayashi	NT	NT	—	260
その他動物	バッタ目	バッタ科	イナゴモドキ	<i>Mecostethus parapleurus</i> (Hagenbach)	NT	NT	—	260
維管束植物	バッタ目	バッタ科	ヤマトマダラバッタ	<i>Epacromius japonicus</i> (Shiraki)	NT	NT	—	261
蘚苔類	ゴキブリ目	ゴキブリ科	ウルシゴキブリ	<i>Periplaneta japonica</i> Asahina	NT	—	—	261
	カメムシ目	セミ科	ヒメハルゼミ	<i>Euterpnosia chibensis chibensis</i> Matsumura	NT	—	—	261
藻類	カメムシ目	セミ科	エゾハルゼミ	<i>Yezoterpnosia nigricosta</i> (Motschulsky)	NT	NT	—	262
キノコ	カメムシ目	セミ科	チツチゼミ	<i>Kosemia radiator</i> (Uhler)	NT	NT	—	262
	カメムシ目	コオイムシ科	コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i> Vuillefroy	NT	NT	NT	262
EX	カメムシ目	ミズムシ科	ミゾナシミズムシ	<i>Cymatia apparens</i> (Distant)	NT	NT	NT	263
EW	カメムシ目	ミズムシ科	ホツケミズムシ	<i>Hesperocorixa distanti hokkensis</i> (Matsumura)	NT	NT	NT	263
CR	カメムシ目	ミズムシ科	ナガミズムシ	<i>Hesperocorixa mandshurica</i> (Jaczewski)	NT	NT	NT	263
	カメムシ目	ミズムシ科	ミヤケミズムシ	<i>Xenocorixa vittipennis</i> (Horváth)	NT	NT	NT	264
EN	カメムシ目	アメンボ科	オオアメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	NT	NT	—	264
VU	カメムシ目	アメンボ科	シロウミアメンボ	<i>Halobates matsumurai</i> Esaki	NT	NT	VU	264
NT	カメムシ目	ツチカメムシ科	ハマベツチカメムシ	<i>Byrsius varians</i> (Fabricius)	NT	NT	—	265
	カメムシ目	ツチカメムシ科	シロヘリツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	NT	NT	NT	265
DD	カメムシ目	ツノカメムシ科	ツノアカツノカメムシ	<i>Acanthosoma haemorrhoidale</i> (Linnaeus)	NT	NT	—	265
	アミメカゲロウ目	ウスバカゲロウ科	コマダラウスバカゲロウ	<i>Dedroleon jesoensis</i> Okamoto	NT	NT	—	266
	アミメカゲロウ目	ツノトンボ科	オオツノトンボ	<i>Protidricerus japonica</i> (McLachlan)	NT	NT	—	266
	コウチュウ目	ミズスマシ科	コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus (Orectochilus) punctipennis</i> (Sharp)	NT	NT	VU	266
	コウチュウ目	ハンミョウ科	アイヌハンミョウ	<i>Cicindela (Cicindela) gemmata aino</i> Lewis	NT	NT	NT	267
	コウチュウ目	オサムシ科	クロカタビロオサムシ	<i>Calosoma maximowiczi</i> (Morawitz)	NT	VU	—	267
	コウチュウ目	オサムシ科	クマノヤマトオサムシ	<i>Carabus (Ohomopterus) yamato kitai</i> Imura	NT	NT	—	267
	コウチュウ目	オサムシ科	スズカメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana suzukaensis</i> S. Uéno	NT	NT	—	268
	コウチュウ目	オサムシ科	シュウレイメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana imadatei iwatai</i> (S. Uéno)	NT	—	—	268
	コウチュウ目	オサムシ科	イマダテメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana imadatei imadatei</i> (S. Uéno)	NT	NT	—	268
	コウチュウ目	オサムシ科	コヤメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana apicedentatus</i> S. Uéno	NT	NT	—	269

コウチュウ目	オサムシ科	シノダチメクラチビゴミムシ	<i>Kurasawatrechus ichihashii</i> S. Uéno	NT	NT	—	269	哺乳類
コウチュウ目	オサムシ科	ヒラケメクラチビゴミムシ	<i>Kurasawatrechus hirakei hirakei</i> S. Uéno	NT	NT	—	269	鳥類
コウチュウ目	オサムシ科	イワサキメクラチビゴミムシ	<i>Kurasawatrechus hirakei iwasakii</i> S. Uéno	NT	—	—	270	爬虫類
コウチュウ目	オサムシ科	クニメクラチビゴミムシ	<i>Kusumia septentrionalis</i> S. Uéno et Okuda	NT	—	—	270	両生類
コウチュウ目	オサムシ科	ナガホラアナヒラタゴミムシ	<i>Jujiroa elongata</i> S. Uéno	NT	NT	—	270	汽水・淡水魚類
コウチュウ目	ゲンゴロウ科	キベリマメゲンゴロウ	<i>Platambus fimbriatus</i> (Sharp)	NT	NT	NT	271	昆虫類
コウチュウ目	ガムシ科	コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	NT	NT	DD	271	クモ類
コウチュウ目	コガネムシ科	マルツヤマグソコガネ	<i>Aphodius (Sinodiapterna) troitzkyi</i> Jacobson	NT	NT	—	271	貝類
コウチュウ目	コガネムシ科	ネグロマグソコガネ	<i>Aphodius (Aparammoecis) pallidiligonis</i> Waterhouse	NT	—	—	272	甲殻類
コウチュウ目	コガネムシ科	ハバビロコケシマグソコガネ	<i>Myrnessus yorikoae</i> Ochi, Kawahara et Inagaki	NT	—	—	272	その他動物
コウチュウ目	コガネムシ科	ワタリビロウドコガネ	<i>Nipponoserica peregrina</i> (Chapin)	NT	—	—	272	維管束植物
コウチュウ目	コガネムシ科	オオヒラチャイロコガネ	<i>Sericania ohirai</i> Sawada	NT	NT	—	273	苔苔類
コウチュウ目	コガネムシ科	キラチャイロコガネ	<i>Sericania kirai</i> Sawada	NT	—	—	273	藻類
コウチュウ目	コガネムシ科	ヒラタチャイロコガネ	<i>Sericania alternata</i> Sawada	NT	—	—	273	キノコ
コウチュウ目	コガネムシ科	クロスジチャイロコガネ	<i>Sericania fuscolineata fulgida</i> Niijima et Kinoshita	NT	—	—	274	EX
コウチュウ目	コガネムシ科	オオダイセマダラコガネ	<i>Blitopertha ohdaiensis</i> (Sawada)	NT	NT	—	274	EW
コウチュウ目	コガネムシ科	ジウシチホシハナムグリ	<i>Paratrichiis septemdecimguttatus</i> (Snellen van Vollenhoven)	NT	NT	—	274	CR
コウチュウ目	ホタル科	ヘイケボタル	<i>Aquatica lateralis</i> (Motschulsky)	NT	—	—	275	EN
コウチュウ目	テントウムシ科	セダカテントウダマシ	<i>Bolbomorphus gibbosus</i> Gorham	NT	NT	—	275	VU
コウチュウ目	テントウムシ科	ジウウクホシテントウ	<i>Anisosticta kobensis</i> Lewis	NT	NT	—	275	NT
コウチュウ目	ゴミムシ科	オオマルチビゴミムシ	<i>Caedius maderi</i> Kaszab	NT	NT	—	276	DD
コウチュウ目	ゴミムシ科	ハネナシセスジキマワリ	<i>Strongylium marseuli</i> Lewis	NT	NT	—	276	
コウチュウ目	アリモドキ科	クロスジイッカク	<i>Notoxus haagi haagi</i> Marseul	NT	NT	—	276	
コウチュウ目	アリモドキ科	クロオビホソアリモドキ	<i>Anthicus protensus</i> Marseul	NT	NT	—	277	
コウチュウ目	ハリハネムシ科	ハリハネムシ	<i>Ischalia patagiata</i> Lewis	NT	NT	—	277	
コウチュウ目	カミキリムシ科	クビアカモボトホリハナカミキリ	<i>Kuraria rhopalophoroides</i> Hayashi	NT	NT	—	277	
コウチュウ目	ゾウムシ科	イチハシシギゾウムシ	<i>Curculio (Curculio) ichihashii</i> Morimoto	NT	NT	—	278	
コウチュウ目	ゾウムシ科	クマノヒゲボソゾウムシ	<i>Phyllobius (Otophyllobius) kumanoensis</i> Morimoto & Miyakawa	NT	NT	—	278	
コウチュウ目	ゾウムシ科	リュイスヒゲボソゾウムシ	<i>Phyllobius (Chauliophyllobius) lewisi</i> (Sharp)	NT	NT	—	278	
コウチュウ目	ゾウムシ科	タマサルゾウムシ	<i>Orobites cyanea</i> (Linnaeus)	NT	NT	—	279	
ハエ目	ハルカ科	ハマダラハルカ	<i>Haruka elegans</i> Okada	NT	DD	DD	279	
ハエ目	キアブ科	ケジロキアブ	<i>Xylophagus albopilosus</i> Miyatake	NT	DD	—	279	
ハエ目	クサアブ科	イワタシギクサアブ	<i>Dialysis iwatai</i> Nagatomi	NT	NT	—	280	
ハエ目	ミズアブ科	ヒラヤマミズアブ	<i>Odontomyia hirayamae</i> Matsumura	NT	DD	—	280	
ハエ目	キアブモドキ科	フトヒゲナガキアブモドキ	<i>Solva procera</i> (Frey)	NT	NT	—	280	
ハエ目	ムシヒキアブ科	ハマベコムシヒキ	<i>Stichopogon infuscatus</i> Bezzi	NT	NT	—	281	
ハエ目	ハナアブ科	ハチモドキハナアブ	<i>Monoceromyia pleuralis</i> (Coquillett)	NT	DD	—	281	
ハエ目	ハナアブ科	カクモンハラブトハナアブ	<i>Mallota abdominalis</i> (Sack)	NT	NT	—	281	
ハエ目	ハナアブ科	コシアキオオモボトハナアブ	<i>Matsumyia japonica</i> (Shiraki)	NT	NT	—	282	

哺乳類	ハエ目	デガシラバエ科	オオハチモドキバエ	<i>Eupyrgota luteola</i> (Coquillett)	NT	DD	—	282
	ハエ目	ミギワバエ科	ハイイロニセミギワバエ	<i>Procanace aestuaricola</i> Miyagi	NT	NT	—	282
鳥類	ハエ目	ミギワバエ科	ラカンミギワバエ	<i>Dryxo nudicorpus</i> Miyagi	NT	DD	—	283
爬虫類	ハエ目	ミギワバエ科	ニノミヤトビクチミギワバエ	<i>Brachydeutera ibari</i> Ninomiya	NT	NT	—	283
両生類	ハエ目	ニクバエ科	ハマベニクバエ	<i>Leucomyia alba</i> (Schiner)	NT	DD	—	283
汽水・淡水魚類	チョウ目	ツトガ科	ゴマフツトガ	<i>Chilo pulveratus</i> (Wileman et South)	NT	NT	NT	284
	チョウ目	シャクガ科	クシヒゲハイイロヒメシャク	<i>Antilycauges pinguis</i> (Swinhoe)	NT	—	—	284
昆虫類	チョウ目	トリバガ科	モウセンゴケトリバ	<i>Buckleria paludum</i> (Zeller)	NT	NT	—	284
	チョウ目	アゲハモドキガ科	フジキオビ	<i>Schistemitra funeralis</i> Butler	NT	NT	—	285
クモ類	チョウ目	シャチホコガ科	ゴマダラシャチホコ	<i>Palaeostauropus obliterated</i> (Wileman et South)	NT	NT	—	285
貝類	チョウ目	シャチホコガ科	ナチアオシャチホコ	<i>Syntypistis nachiensis</i> (Marumo)	NT	NT	—	285
甲殻類	チョウ目	ヤガ科	シラユキコヤガ	<i>Euloastra sasaki</i> Sugi	NT	NT	VU	286
	チョウ目	ヤガ科	オオキイロアツバ	<i>Pseudalelimma miwai</i> Inoue	NT	NT	—	286
その他動物	チョウ目	ヤガ科	ヤクシマヒメキシタバ	<i>Catocala tokui</i> Sugi	NT	NT	—	286
維管束植物	チョウ目	ヤガ科	ヌマバウスキヨトウ	<i>Chilodes pacifica</i> Sugi	NT	NT	VU	287
蘚苔類	チョウ目	ヤガ科	ガマヨトウ	<i>Archanara aerata</i> (Butler)	NT	NT	VU	287
	チョウ目	ヤガ科	エチゴハガタヨトウ	<i>Asidemia inexpecta</i> (Sugi)	NT	NT	—	287
藻類	チョウ目	ヤガ科	エソスジヨトウ	<i>Doerrisa striata</i> (Staudinger)	NT	NT	VU	288
キノコ	チョウ目	ヤガ科	イセキリガ	<i>Agrochola sakabei</i> (Sugi)	NT	NT	—	288
	チョウ目	ヤガ科	ヤマトハガタヨトウ	<i>Nyctycia stenoptear</i> (Sugi)	NT	NT	—	288
EX	チョウ目	セセリチョウ科	ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i> (Bremer et Grey)	NT	VU	NT	289
EW	チョウ目	アゲハチョウ科	ウスバシロチョウ	<i>Parnassius citrinarius</i> Mostschulsky	NT	—	—	289
CR	チョウ目	シジミチョウ科	ルーミスジジミ	<i>Arhopala ganesa</i> (Moore)	NT	VU	VU	289
	チョウ目	シジミチョウ科	ウラムスジジミ	<i>Wagimo signatus</i> (Butler)	NT	NT	—	290
EN	チョウ目	シジミチョウ科	オナガシジミ	<i>Araragi enthea</i> (Janson)	NT	NT	—	290
VU	チョウ目	シジミチョウ科	フジミドリシジミ	<i>Sibatanozephyrus fujisanus</i> (Matsumura)	NT	NT	—	290
NT	チョウ目	タテハチョウ科	オオムラサキ	<i>Sasakia charonda</i> (Hewitson)	NT	NT	NT	291
DD	ハチ目	ドロバチモドキ科	ヤマトスナハキバチ	<i>Bembecinus hungaricus japonicus</i> (Sosan)	NT	DD	DD	291
	ハチ目	スズメバチ科	モンズズメバチ	<i>Vespa crabro flavofasciata</i> Cameron	NT	NT	DD	291
	ハチ目	アナバチ科	キンモウアナバチ	<i>Sphex diabolicus</i> Smith	NT	NT	—	292
	トンボ目	エゾトンボ科	エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)	DD	—	—	292
	トンボ目	トンボ科	ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata</i> Linnaeus	DD	—	—	292
	トンボ目	トンボ科	マイコアカネ	<i>Sympetrum kunckeli</i> (Selys)	DD	—	—	292
	バッタ目	ツユムシ科	エゾツユムシ	<i>Kuwayamaea sapporensis</i> Matsumura et Shiraki	DD	—	—	292
	バッタ目	ノミバッタ科	マジジロノミバッタ	<i>Xya leucophrys</i> Sato et Ichikawa	DD	—	—	292
	ハサミムシ目	クロハサミムシ科	クロハサミムシ	<i>Nesogaster lewisi</i> (Bormans)	DD	DD	—	293
	カメムシ目	ハネナガウンカ科	マエグロハネナガウンカ	<i>Zoraida pterophoroides</i> (Westwood)	DD	DD	—	293
	カメムシ目	グンバイウンカ科	ハウチワウンカ	<i>Trypetimorpha japonica</i> Ishihara	DD	DD	VU	293
	カメムシ目	カタビロアメンボ科	オヨギカタビロアメンボ	<i>Xiphovelvia japonica</i> Esaki et Miyamoto	DD	DD	NT	293

カメシ目	アメンボ科	ババアメンボ	<i>Gerris (Gerris) babai</i> Miyamoto	DD	DD	NT	293	哺乳類
カメシ目	アメンボ科	ウミアメンボ	<i>Halobates japonicus</i> Esaki	DD	DD	—	293	
ヘビトンボ目	センブリ科	ヤマトセンブリ	<i>Sialis yamatoensis</i> Hayashi et Suda	DD	DD	DD	293	鳥類
コウチュウ目	オサムシ科	タナカツヤハネゴミムシ	<i>Harpalomimetes fukiensis</i> (Jedlčka)	DD	DD	DD	293	爬虫類
コウチュウ目	オサムシ科	チョウセンゴモクムシ	<i>Harpalus (Harpalus) crates</i> Bates	DD	—	VU	293	両生類
コウチュウ目	オサムシ科	スナハラゴミムシ	<i>Diplocheila elongata</i> (Bates)	DD	DD	VU	294	
コウチュウ目	オサムシ科	クビナガキベリアオゴミムシ	<i>Chlaenius prostenus</i> Bates	DD	DD	DD	294	汽水・淡水魚類
コウチュウ目	ガムシ科	スジヒラタガムシ	<i>Helochares nipponicus</i> Hebauer	DD	DD	NT	294	昆虫類
コウチュウ目	ヒメドロムシ科	ケスジドロムシ	<i>Pseudamophilus japonicus</i> Nomura	DD	DD	VU	294	クモ類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	シライサワクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Imasakapodabrus) shiraisawanus</i> (Takahashi & Kiriyama)	DD	—	—	294	
コウチュウ目	ジョウカイボン科	キイクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) kiiensis kiiensis</i> (Nakane et Makino, 1989)	DD	—	—	294	貝類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	シマシマクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) shimashimanus</i> (Nakane & Makino)	DD	—	—	294	甲殻類
コウチュウ目	ジョウカイボン科	イクリダニクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) ikuridaniensis</i> Takahashi	DD	—	—	294	その他動物
コウチュウ目	ジョウカイボン科	ヒョウゴクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus (Asiopodabrus) hyogoensis</i> (Nakane & Makino)	DD	—	—	294	
コウチュウ目	ジョウカイボン科	ホソチビジョウカイ	<i>Malthodes (Sohayakimalthodes) furcatopygus</i> Wittmer	DD	—	—	295	維管束植物
コウチュウ目	ジョウカイボン科	オオメコバナネジョウカイ	<i>Microichthyurus pennatus</i> (Lewis)	DD	—	—	295	蘚苔類
コウチュウ目	ムギヒガホリガタムシ科	イノウエホソカタムシ	<i>Antibothrus morimotoi</i> Sasaji	DD	DD	—	295	藻類
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	ヤマトオサムシダマシ	<i>Blaps japonensis japonensis</i> Marseul	DD	DD	NT	295	
コウチュウ目	ゴミムシダマシ科	コモンキノゴミムシダマシ	<i>Spiloscapa ichihashii</i> (Nakae)	DD	DD	—	295	キノコ
コウチュウ目	ヒゲナガゾウムシ科	オオマダラヒゲナガゾウムシ	<i>Sympaector rugirostris</i> (Sharp)	DD	DD	—	295	EX
コウチュウ目	ヒゲナガゾウムシ科	ホシモンマダラヒゲナガゾウムシ	<i>Litocerus kimurai</i> Shibata	DD	DD	—	295	
コウチュウ目	ミツギリゾウムシ科	アカツツホソミツギリゾウムシ	<i>Callipareius (Callipareius) japonicus</i> (Nakane)	DD	DD	—	295	EW
コウチュウ目	ミツギリゾウムシ科	クロツツホソミツギリゾウムシ	<i>Callipareius (Metacidotes) kojimai</i> Morimoto	DD	DD	—	295	CR
コウチュウ目	ミツギリゾウムシ科	ヒメマルミツギリゾウムシ	<i>Higonius (Higonius) cilo</i> Lewis	DD	DD	—	296	
コウチュウ目	イネゾウムシ科	オオクニイネゾウモドキ	<i>Procas biguttatus</i> Faust	DD	DD	—	296	EN
コウチュウ目	イネゾウムシ科	クロイネゾウモドキ	<i>Notaris oryzae</i> (Ishida)	DD	DD	—	296	VU
コウチュウ目	ゾウムシ科	カワセタマノミゾウムシ	<i>Sphaerorchestes kawasei</i> Morimoto & Miyawaki	DD	DD	—	296	NT
コウチュウ目	ゾウムシ科	カギアシゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kôno)	DD	DD	—	296	
コウチュウ目	ゾウムシ科	ツルギトゲカタビロサルゾウムシ	<i>Augustinus similis</i> (Chûjô)	DD	DD	—	296	DD
コウチュウ目	ゾウムシ科	ミヤマカレキゾウムシ	<i>Trachodes (Atrachodes) monticola</i> Morimoto & Miyakawa	DD	DD	—	296	
ハエ目	アミカ科	アシボソヒメフタマタアミカ	<i>Philorus longirostris</i> Kitakami	DD	DD	—	296	
ハエ目	ニセヒメガガンボ科	エサキニセヒメガガンボ	<i>Protanyderus esakii</i> Alexander	DD	—	DD	296	
ハエ目	ミズアブ科	アシグルルリミズアブ	<i>Sargus meracus</i> Nagatomi	DD	DD	—	297	
ハエ目	ハナアブ科	マツムラハラブトハナアブ	<i>Mallota rubripes</i> Matsumura	DD	DD	—	297	
チョウ目	ツトガ科	ウスマダラミズメイガ	<i>Elophila orientalis</i> Filipjev	DD	DD	—	297	
チョウ目	ツトガ科	エンスイミズメイガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu	DD	DD	—	297	
チョウ目	スズメガ科	イブキスズメ	<i>Hyles gallii</i> (Rottemburg)	DD	DD	—	297	
チョウ目	シャクガ科	オオツバメエダシャク	<i>Amblychia angeronaria</i> Guenée	DD	DD	—	297	
チョウ目	シャクガ科	キイロトゲエダシャク	<i>Apochima praeacutaria</i> (Inoue)	DD	DD	—	297	

哺乳類	チョウ目	ツバメガ科	ヤクシマギンツバメ	<i>Pseudomicronia advocataria</i> (Walker)	DD	DD	—	297
	チョウ目	シャチホコガ科	トリゲキシャチホコ	<i>Trigea plumosa</i> (Leech)	DD	DD	—	297
鳥類	チョウ目	コブガ科	クロモンオビリンガ	<i>Gelastocera rubicundula</i> (Wileman)	DD	DD	—	298
爬虫類	チョウ目	ヤガ科	シーモンアツバ	<i>Sinarella c-album</i> Owada	DD	DD	—	298
両生類	チョウ目	ヤガ科	キュウシュウスジヨトウ	<i>Doerriesa coenosa</i> Sugi	DD	DD	VU	298
汽水・淡水魚類	チョウ目	セセリチョウ科	キバネセセリ	<i>Burara aquilina</i> (Speyer)	DD	DD	—	298
	トビケラ目	ホソバトビケラ科	イトウホソバトビケラ	<i>Molannodes itoae</i> Fuller et Wiggins	DD	DD	—	298
昆虫類	トビケラ目	アシエダトビケラ科	クチキトビケラ	<i>Ganonema uchidai</i> Iwata	DD	DD	NT	298
	トビケラ目	カクツツトビケラ科	ツノカクツツトビケラ	<i>Lepidostoma cornigera</i> (Ulmer)	DD	DD	—	298
クモ類	ハチ目	セイボウ科	オオセイボウ	<i>Stilbum cyanurum</i> (Förster)	DD	DD	DD	298
貝類	ハチ目	アリ科	ケブカツヤオオアリ	<i>Camponotus (Myrmentoma) nipponensis</i> Santachi	DD	DD	DD	298
甲殻類	ハチ目	アリ科	ヤマトムカシアリ	<i>Leptanilla japonica</i> Baroni Urbani	DD	DD	—	299
その他動物	ハチ目	アリ科	モリシタカギバラアリ	<i>Proceratium morisitai</i> Onoyama et Yoshimura	DD	DD	—	299
維管束植物	ハチ目	クモバチ科	フタモンクモバチ	<i>Parabatozonus hakodadi</i> (Dolla Torre)	DD	DD	NT	299
	ハチ目	アナバチ科	フクイアナバチ	<i>Sphex inusitatus fukuianus</i> Tsuneki	DD	DD	NT	299
蘚苔類	ハチ目	ハキリバチ科	クズハキリバチ	<i>Megachile pseudomonticola</i> Hedicke	DD	DD	DD	299

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

キベリマルクビゴミムシ
Nebria livida angulata Banninger

コウチュウ目 オサムシ科



【選定理由】 既知の生息点数は5地点以下。かつては広く生息していたと思われるが、50年以上記録が途絶えている。全国的にも同様の傾向である。

【種概要】 体長13~16.5 mm。頭部は黒く、上翅の周りは黄色く縁取られる。広い河川の中下流域の河川敷および周辺に生息し灯火にも集まる。

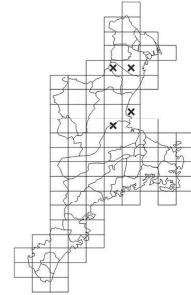
【分布】 北海道、本州、四国、九州。県内では鈴鹿市、亀山市、津市で記録されている。

【現況・減少要因】 具体的な減少要因は不明であるが、河川改修、および水質の悪化、低湿地の開発や周辺の農薬散布などが、絶滅した要因と考えられる。

【文献】 27, 390.

(乙部 宏)

(写真：津市，1953年，大川親雄採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

EN

アマミマルケシゲンゴロウ
Hydrovatus seminarius Motschulsky

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 1958年に採集されているのみで、その後60年以上にわたり再発見されていない。国内絶滅も強く憂慮される。

【種概要】 体長2.3~2.4 mm。植物が豊富な浅い湿地や溜池に生息する。灯火に飛来することがある。

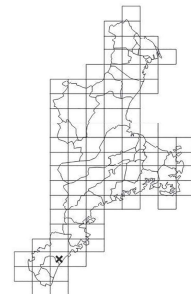
【分布】 本州（三重県、和歌山県、兵庫県）、南西諸島。中国南部、台湾、東南アジア、南アジア。三重県では熊野市で記録がある。

【現況・減少要因】 1958年に得られた1頭が知られるのみである。木本高校の電灯に溜まった多数の昆虫死骸中から抽出されたもので、電灯に飛来した個体であると考えられる。記録地周辺に本種の生息に適した環境は残されていない。また、県内各地の調査でも本種は発見されず、県内からはすでに絶滅しているものと考えられる。

【特記事項】 兵庫県の既知産地は、すでに絶滅している。また、南西諸島（奄美大島、石垣島、西表島）でも近年は発見されないようである。和歌山県串本町が、国内では現在でも確実に生息している産地であるが、すでにアメリカザリガニの侵入が確認されており、危機的な状況にある。三重県産標本は愛媛大学ミュージアムに保管されている。

【文献】 127, 473, 474.

(秋田勝己)



三重県 2025

EX

三重県 2015

—

環境省 2020

—

シマケシゲンゴロウ
Coelambus chinensis (Sharp)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 1949年に採集されているのみで、その後60年以上にわたり再発見されていない。

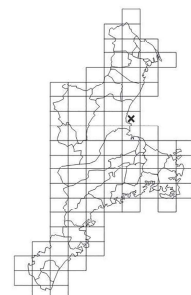
【種概要】 体長4.3~5.0 mm。池沼や湿地の植物の多いところに生息する。灯火に飛来することがある。

【分布】 北海道、本州、九州。朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。本州西部では愛知県と三重県から記録されるのみである。県内では、津市中央における1例が知られる。

【現況・減少要因】 電灯に飛来した1949年の1例が知られるのみである。記録された地点は、現在市街地となっており、本種が生息しえる環境は全く残されていない。県内各地における調査によっても全く発見することが出来ず、県内からはすでに絶滅してしまった可能性が高い。

【文献】 202, 304.

(秋田勝己)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ

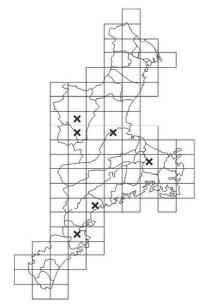
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蕨類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

ルイスツブゲンゴロウ (タテナミツブゲンゴロウ) コウチュウ目 ゲンゴロウ科
Laccophilus lewisius Sharp

【選定理由】近年の記録がない。
 【種概要】体長3.9~4.7 mm. 低地の池沼, 湿地, 放棄水田などに生息する。
 【分布】本州, 四国, 九州. 中国. 県内では鈴鹿市, 津市, 松阪市, 伊勢市, 名張市, 紀北町, 尾鷲市で確認されている。
 【現況・減少要因】かつては県内の平野部に普通に生息していたものと思われる。しかし, 2000年代以降は, 鈴鹿市, 松阪市で確認されたのみ。2020年以降は県内から確認されない。津市では雲出川河川堰のよどみに多かったが, 近年は見られない。河川改修などが進んだこと, 開発などにより低地の池沼が少なくなったこと, 農薬の影響。また, アメリカザリガニの侵入増加も本種の絶滅に関係がある。
 【特記事項】伊賀市の個体群は, 別種イガツブゲンゴロウ *L. shinobi* Yanagi et Akitaとして扱われる。
 【文献】93, 257, 258, 260, 305, 344, 357, 372, 392.

(秋田勝己)

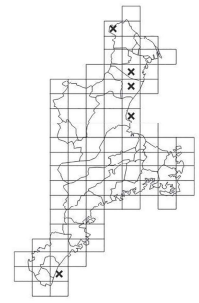


三重県 2025
EX
三重県 2015
EX
環境省 2020
VU

シャープツブゲンゴロウ (アヤナミツブゲンゴロウ) コウチュウ目 ゲンゴロウ科
Laccophilus sharpi Régimbart

【選定理由】既知の生息地点10未満。いずれも1960年代以前の記録で, 近年の生息情報がない。
 【種概要】体長3.5~4.2 mm. 湿地, 放棄水田, 池沼などの浅い止水域に生息し, 灯火などにも飛来する。かつては全国的に普通に見られる種であったらしい。
 【分布】本州, 四国, 九州, 南西諸島. 国外では東南アジア一帯からイラン, サウジアラビア, さらにオーストラリアにおよぶ非常に広い分布域をもつ。三重県ではいなべ市, 四日市市, 鈴鹿市, 津市, 伊勢市, 御浜町から記録される。
 【現況・減少要因】記録自体は多くないが, 1960年代までは, 県下各地の水田や浅い池沼にごく普通に見られたものと考えられ, 四日市市や津市の市街地からも記録される。しかし, 1970年代以降の記録や標本を確認することができない。おそらくその主要な生息地が水田であったために, 農薬散布や耕地整理などが大きく影響したものと思われる。県下からは, すでに絶滅してしまっているものと考えられる。
 【保護対策】まず, 生息地の発見に努めることであろう。
 【文献】21, 27, 260, 281, 304, 361, 390.

(秋田勝己)



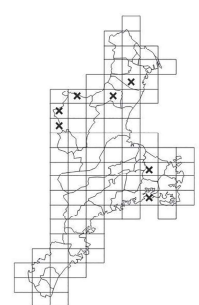
三重県 2025
EX
三重県 2015
CR
環境省 2020
NT

マダラシマゲンゴロウ コウチュウ目 ゲンゴロウ科
Hydaticus therrnionectoides Sharp

【選定理由】三重県における近年の確認例はない。全国的にも安定した生息地は知られておらず, 日本国内からの絶滅が最も危惧される種の一つである。
 【種概要】体長9.0~10.0 mm. 丘陵地にある小規模な池や, 棚田の最上部など浅くて貧栄養な止水域に生息する。
 【分布】本州, 九州. 朝鮮半島, 中国. 大半の記録は1970年代以前のものである。県内では四日市市, 鈴鹿市, 伊賀市, 伊勢市, 南伊勢町で確認されている。他府県に比べ, 三重県の記録は群を抜いて多い。
 【現況・減少要因】宅地, 工業団地, ゴルフ場などの開発, 産業廃棄物などの埋め立て, 耕地整理による水田の乾田化, 水田耕作放棄による植物遷移の進行, 農薬散布などにより, ほとんどの産地が消滅した。1990年代初頭に多産していた伊賀市の産地のいくつかはアメリカザリガニの侵入によって絶滅したものと考えられる。
 【文献】12, 90, 164, 202, 279, 301, 361, 390.

(秋田勝己)

(写真: 伊賀市, 1993年, 乙部宏撮影)



三重県 2025
EX
三重県 2015
CR
環境省 2020
CR

スジゲンゴロウ

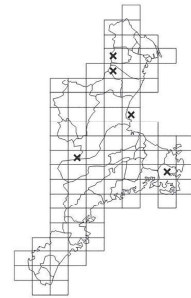
コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hydaticus satoi Wewalka

- 【選定理由】1973年以降の記録が無く国内においても同様である。
- 【種概要】体長12~14.5 mm. 止水性であり、かつては平地、丘陵地の水草豊富な水田、池沼に普通に見られ灯火でも得られていた。
- 【分布】本州（中部以西）、四国、九州、屋久島、トカラ中之島。県内では、菰野町、鈴鹿市、津市、松阪市、志摩市で記録がある。
- 【現況・減少要因】開発、農薬、生活污水の流入、侵略的外来種のウシガエルとアメリカザリガニなどの侵入が考えられる。
- 【文献】201, 255, 300, 304, 361, 390.

(乙部 宏)

(写真：津市，1955年，大川親雄採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

EX

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

マルコガタノゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

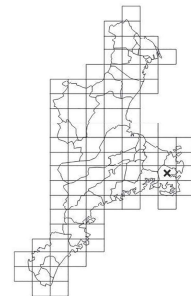
Cybister lewisianus Sharp

- 【選定理由】既知生息点数は1地点のみ、1992年での生息していた溜池は2016年時点では森に取り込まれ消失、1993年以降の記録は途絶えた。
- 【種概要】体長21~26 mm. 体形は卵形、背面は光沢のある暗緑色から褐色。前胸と上翅側縁は黄色部で縁取られる。比較的大きな開放的な池を好む。
- 【分布】本州、四国、九州。県内では、志摩市磯部町のみで記録がある。
- 【現況・減少要因】外来種であるウシガエルとアメリカザリガニの捕食圧と水質悪化、水草類の消失などが考えられる。
- 【特記事項】平成23年に種の保存法の「国内希少野生動植物種」に指定されている。

【文献】201, 316.

(乙部 宏)

(写真：志摩市，1992年，乙部宏採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

CR

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

オオマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

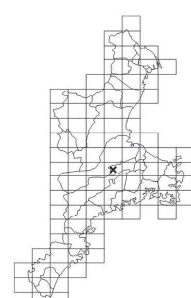
Aphodius quadratus Reiche

- 【選定理由】既知の生息地点は1地点であるが1960年以後の記録がない。
- 【種概要】体長8.5~12.5 mm. 頭部、前胸は黒色で上翅は黒色~褐色。光沢は強い。放牧地の牛糞から見つかる。
- 【分布】県内では津市美杉町平倉演習林のみで記録されている。国内では本州、佐渡島、四国、九州、五島列島に分布し海外では済州島、朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布する。
- 【現況・減少要因】平地での牛の放牧がなくなり放牧形態が変化し、さらに抗菌薬などの使用により牛糞の質が変化した。1960年以来64年間生息の記録がない。

【文献】62, 306.

(稲垣政志)

(写真：長野県，2014年，稲垣政志採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

—

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

スジマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

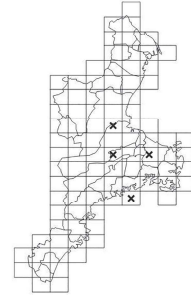
Aphodius rugosostriatus Waterhouse

【選定理由】既知の生息地点は4地点であるが1974年以後の記録がない。
 【種概要】体長4.5~6.5 mm. 頭部は暗褐色で上翅は明褐色で条溝は強く明瞭. 平地~低山地の放牧地の牛糞から見つかる.
 【分布】県内では鈴鹿市石薬師町, 津市美杉町, 松阪市嬉野中川, 伊勢市伊勢神宮林で記録がある. 国内では北海道, 本州, 四国, 九州, 佐渡島, 隠岐, 五島列島に分布し海外では済州島, 朝鮮半島, 中国, シベリアに分布する.
 【現況・減少要因】平地での牛の放牧がなくなり放牧形態が変化し, さらに抗菌薬などの使用により牛糞の質が変化した. 1974年以来50年間生息の記録がない.

【文献】62, 410, 411, 412.

(稲垣政志)

(写真: 鈴鹿市, 1955年, 市橋甫採集)



三重県 2025	EX
三重県 2015	—
環境省 2020	—

クロモンマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

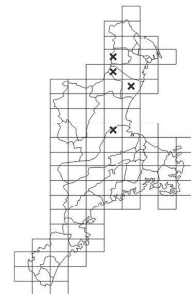
Aphodius variabilis Waterhouse

【選定理由】既知の生息地点は5以下であり, 県内では過去58年間記録が途絶えている. 現在では全国的にも数か所しか生息していない.
 【種概要】体長4.9~7.3 mm. 放牧によって形成された平地のススキ・シバ草地環境を好み, 晩秋から早春にかけて, 日当たりの良い場所の牛糞などに集まる. 現在, 他県で生息している場所は河川敷で, 犬糞から採集されている.
 【分布】北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬. 国外では済州島, 朝鮮半島, 中国, 中央アジア, シベリア. 県内では菰野町, 鈴鹿市, 亀山市, 松阪市嬉野.
 【現況・減少要因】平地の放牧地の消滅, 採草地の消滅, 放牧形態の変化と抗生剤などの使用による牛糞の質の変化.

【文献】62, 136, 147, 378, 379, 390.

(稲垣政志)

(写真: 鈴鹿市, 1955年, 市橋甫採集)



三重県 2025	EX
三重県 2015	EX
環境省 2020	NT

ヨツボシマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

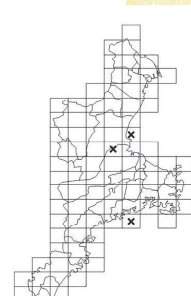
Aphodius sordidus (Fabricius)

【選定理由】既知の生息地点は3地点であるが1955年以後の記録がない。
 【種概要】体長5.0~7.8 mm. 黄褐色で上翅に4個の黒斑があるが黒斑は消失することもある. 平地~低山地の放牧地の新鮮な牛糞や馬糞から見つかる.
 【分布】県内では鈴鹿市石薬師町, 津市中央, 松阪市嬉野中川, 松阪市嬉野中川牧場で記録がある. 日本全土, ヨーロッパ, 中央アジア, 中国, 朝鮮半島に分布する.
 【現況・減少要因】平地での牛の放牧がなくなり放牧形態が変化し, さらに抗菌薬などの使用により牛糞の質が変化した. 69年間生息の記録がない.

【文献】62, 304, 410, 411.

(稲垣政志)

(写真: 鈴鹿市, 1954年, 市橋甫採集)



三重県 2025	EX
三重県 2015	—
環境省 2020	—

ヒメキイロマグソコガネ
Aphodius sturmi Harold

コウチュウ目 コガネムシ科

【選定理由】既知の生息地点は6か所である。県内では過去58年間記録が途絶えている。全国的にも最近の記録は関東と北海道の2か所程度であるが、現時点ではこれらの地域においても、ほとんど採集出来なくなっている。

【種概要】体長3~4.3 mm。平地の牛放牧地、河川敷の放牧地などの草原環境に生息し、比較的古い牛糞に集まる。7~8月の採集例が多く、灯火にもよく飛来する。

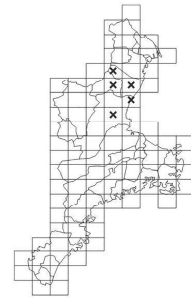
【分布】北海道、本州、隠岐、壱岐、沖縄、国外では済州島、朝鮮半島、中国、ネパール、中央アジア、モンゴル、ヨーロッパ、北アフリカ、県内では四日市市、菰野町、鈴鹿市、津市。

【現況・減少要因】平地の放牧地の消滅、放牧形態の変化と抗生剤などの使用による牛糞の質の変化。

【文献】62, 113, 147, 378.

(稲垣政志)

(写真：鈴鹿市，1956年，市橋甫採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

NT

ヒメビロウドカミキリ
Acalolepta degener (Bates)

コウチュウ目 カミキリムシ科

【選定理由】1941年の記録が1例知られるのみである。生息環境が悪化しており、その後70年以上にわたり生息情報がない。

【種概要】体長8.5~12 mm。草原性の種である。成虫は6~8月に出現し、オトコヨモギの茎や葉を後食する。幼虫はこれの茎に食入する。

【分布】本州、四国、対馬、朝鮮半島、中国。紀伊半島では奈良県曾爾村と三重県のみから記録される。県内では名張市香落溪の記録があるのみである。

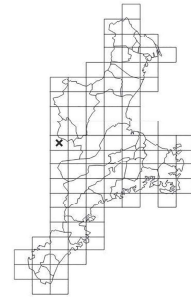
【現況・減少要因】三重県と境を接する奈良県曾爾高原ではススキ草原中のオトコヨモギ群落にみられるが、三重県側は樹林に覆われており、草原が存在しない。かつては、火入れや採草が行われることで草原が維持され、本種が生息することができる環境は少なくなかったものと推察される。しかし、現在そのような草原は記録地周辺には存在せず、本種も絶滅してしまった可能性が高い。

【特記事項】三重県産の標本は、林(1955)に図示されている。

【文献】25, 38, 140, 146, 178, 291.

(秋田勝己)

(写真：奈良県，2020年，乙部宏撮影)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

NT

アサカミキリ
Thyestilla gebleri (Faldermann)

コウチュウ目 カミキリムシ科

【選定理由】1959年に記録されて以来、50年以上再確認されていない。

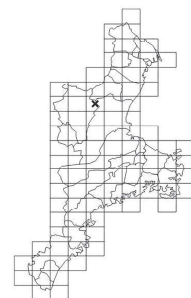
【種概要】体長10~15 mm。草原性の種で、6~7月に出現し、アザミ類、アサを食べる。

【分布】本州、隠岐、四国、九州。朝鮮半島、中国北部、ロシア極東、サハリン。三重県の記録は、津市芸濃町のみである。

【現況・減少要因】かつては日本各地に分布し、栽培アサの害虫とされていた。アサの栽培が禁止されて以来、現在の生息地は全国でも数か所にとどまる。それらはいずれも自然草原で、アザミ類をホストとしている。三重県には、そのような草原環境は、すでに残されていない。

【文献】218, 291.

(秋田勝己)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

VU

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 苔苔類
- 藻類
- キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蕨類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

カツラネクイハムシ

Donacia katurai Kimoto

コウチュウ目 ハムシ科

【選定理由】2004年に発見された唯一の湿地は、風力発電の開発時の土砂によって埋め立てられ絶滅した。

【種概要】体長は6～8mm。成虫は暗い金銅色で5～6月頃の明るいスゲ類の繁茂する湿地で見られる。

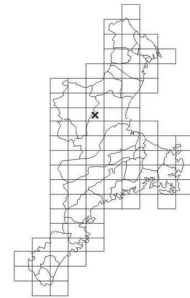
【分布】本州（愛知県以西）、九州。県内では津市青山高原の1地点のみ。

【現況・減少要因】風力発電工事は本種以外にも多くの希少野生動物を絶滅の脅威にさらしている。

【文献】41, 289, 332.

(乙部 宏)

(写真：津市，2004年，乙部宏採集)



三重県 2025

EX

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

オオルリハムシ

Chrysolina virgata (Motschulsky)

コウチュウ目 ハムシ科

【選定理由】生息環境が悪化しており、50年以上にわたり生息情報がない。

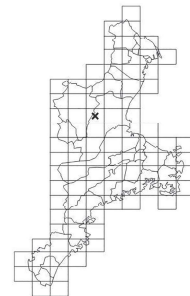
【種概要】体長11～15mm。湿地に生息し、シロネ、ヒメシロネなどを食する。

【分布】本州、九州。シベリア東部、朝鮮半島、中国北部。県内では青山高原で記録されている。

【現況・減少要因】1960年に1例記録されるのみである。当時、青山高原一帯はススキ草原の中に湿地が点在する高原であった。しかし、その後自動車道が開通し、別荘地としての開発がすすんだ。また、近年は、たくさんの風力発電施設やそれに伴う作業用の道路が建設された。そのため、湿地の多くは直接消滅したり、乾燥化がすすみ湿地でなくなってしまうたりした。現在も池畔などにわずかに残された湿地にヒメシロネの小規模な群落はみることができ、度重なる調査にもかかわらず、本種を再発見することはできなかった。大型美麗で生存期間も長く、生息地では非常によく目につく種であるだけに、その生息には否定的にならざるを得ない。

【文献】39.

(秋田勝己)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

NT

スジボソヤマキチョウ

Gonepteryx aspasia Ménétries

チョウ目 シロチョウ科

【選定理由】既知の生息地点は10以下、県下では50年以上確認されず、近隣地域での衰退状況も著しい。2015年版以降も確認記録がなく、CRから移行。

【種概要】前翅長30～35mm程度、雄は黄色、雌白色で前後翅に1個ずつ赤い小斑がある。年一化、6～7月羽化、夏季に休眠、秋一時活動後成虫で越冬、翌春産卵する。

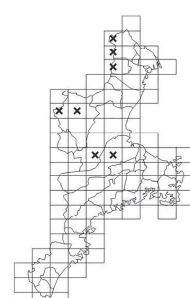
【分布】本州、四国。九州ではごく一部に分布。県内では鈴鹿山脈北部に生息、伊賀市、津市美杉町、松阪市の記録は飛散個体か一時的発生の可能性が高い。

【現況・減少原因】いずれの産地も50年以上記録途絶。鈴鹿山脈北部山地の森林うっ閉進行、山上草本草原のササ原化による蜜源植物の消失が絶滅の主原因と考えられる。近年はシカの過食害による下草消失、裸地化の進行も著しく、生息回復のみこみは極めて低い。

【文献】11, 28.

(中西元男)

(写真：いなべ市，1953年，市橋甫採集，河本実撮影・所蔵)



三重県 2025

EX

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

オオウラギンヒョウモン

Fabriciana nerippe (C.Felder et R.Felder)

チョウ目 タテハチョウ科

【選定理由】既知の生息地点は10以下、県下では50年以上確認されず。全国的にも衰退状況が著しい。

【種概要】前翅長35~45 mm程度、雌は大型。橙色に黒点のある豹紋模様のタテハチョウ。5月下旬から羽化の年一化、夏季休眠を経て秋に産卵する。

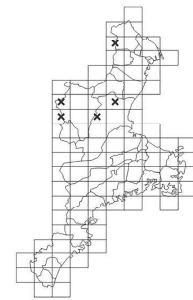
【分布】本州、四国、九州に分布、現在は九州の一部を除き絶滅状態。県内ではいなべ市藤原岳、津市安濃町経ヶ峰、津市白山町青山高原から記録がある。

【現況・減少原因】いずれの産地でも50年以上記録途絶。生息条件として広範囲の草原環境を必要とし、自然草原に乏しい本県では人為的に広域な草地が維持される大河川堤防、採草地としての山地草原に棲息していたが、河川管理形態、山地草原利用状況の変化で生息適地消失、絶滅したと考えられる。全国的な衰退状況から生息回復のみこみは極めて低い。

【文献】11, 28.

(中西元男)

(写真：いなべ市、三重県総合博物館提供)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

CR

キマダラモドキ

Kirina fentoni (Butler)

チョウ目 タテハチョウ科

【選定理由】既知の生息地点は2地点。県下では50年以上確認されず。

【種概要】前翅長30 mm程度、翅表裏に淡黄色の斑模様がある。6~7月年一化、一部地域では2化の可能性もある。幼虫で越冬。

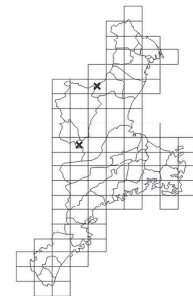
【分布】北海道、本州、四国、九州に分布、生息地は断続的。県内では亀山市関町、津市美杉町大洞山から記録がある。

【現況・減少原因】いずれの産地でも50年以上記録途絶。比較的明るい疎林を好み、不断の手入れがないと林内のうっ閉化が速やかに進行する本県の気候化では、安定的な生息が困難。里山、雑木林の経済的価値低下による生息環境悪化進行が衰退原因と考えられる。農山村生活近代化の現状から生息回復のみこみは極めて低い。

【文献】11, 28.

(中西元男)

(写真：亀山市、三重県総合博物館提供)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

NT

ヒメヒカゲ

Coenonympha oedippus (Fabricius)

チョウ目 タテハチョウ科

【選定理由】既知の産地は3地点。県下の最も新しい記録から30年が経過、記録地からも追加の報告がない。

【種概要】前翅長20 mm程度、褐色の翅裏にいくつかの眼状紋をもつ。6月発生年一化、幼虫越冬。

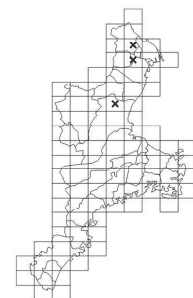
【分布】本州中部以西。県内ではいなべ市大安町、菰野町、津市芸濃町から記録がある。

【現況・減少要因】いずれの産地でも長期間記録途絶。本県を含む西南日本では湿性草原との結びつきが強いため、生息地は池畔の整備、周辺地開発による乾燥化、耕作状況変化でほぼ消滅。棲息環境基盤の消失で絶滅、生息回復の見込みは極めて低い。

【文献】11, 18, 28.

(中西元男)

(写真：いなべ市、1959年、石塚三郎採集、河本実撮影)



三重県 2025

EX

三重県 2015

EX

環境省 2020

CR

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ベッコウトンボ

Libellula angelina Selys

トンボ目 トンボ科

【選定理由】既知の生息地点数は10程度であるが、現在確実な生息データはなく、絶滅している可能性が高い。

【種概要】成虫は、体長39~45 mm、翅の基部と結節、緑紋部に顕著な黒褐色斑がある。平地や丘陵地の抽水植物が密生する腐植栄養型の泥深い池沼などに生息。

【分布】国外では朝鮮半島、中国北中部に分布する。国内では、宮城県・新潟県から鹿児島県までの本州、四国、九州及び一部の離島に分布する。県内では、菟野町、四日市市、伊賀市、志摩市、伊勢市、紀北町で記録されている。

【現況・減少要因】2000年以降で生息記録があるのは、五十鈴川派川（伊勢市）のみであり、生息地が著しく減少している。減少要因としては、宅地造成や圃場整備、ソーラーパネル設置等による池沼や湿地の消失が考えられる。また、農薬が影響している可能性もある。

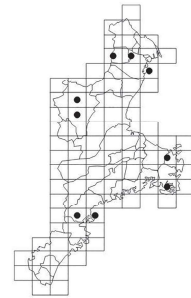
【保護対策】五十鈴川派川を調査し、生息現状を明らかにする必要がある。五十鈴川派川沿いの湿地はソーラーパネルの設置が進んでいることから、生息環境が消失しないよう保護対策が必要。

【特記事項】国内希少野生動物植物種。

【文献】15, 42, 59, 69, 156, 173, 178, 200, 231, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：山口県，2019年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EX

環境省 2020

CR

コバナアオイトトンボ

Lestes japonicus Selys

トンボ目 アオイトトンボ科

【選定理由】既知の生息地点数は10程度であるが、現在確実な生息データはなく、絶滅している可能性がある。

【種概要】成虫は、体長38~44 mm、雌雄とも成熟しても胸部に白粉をおびない。同属の他種とは、翅胸斑紋、雄尾部下付属器、雌産卵管の形状で区別する。主に平地や丘陵地の抽水植物が繁茂する池沼や湿地に生息する。

【分布】国外では朝鮮半島、中国の一部に分布する。国内では、青森県から鹿児島県まで広範囲に分布するが、著しく局所的である。県内では四日市市、津市、伊賀市、志摩市から記録。

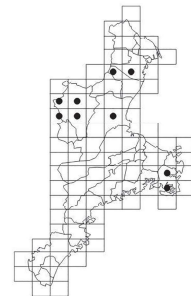
【現況・減少要因】2000年以降では志摩市での記録のみであり、生息地が著しく減少している。減少の要因として、灌漑利水の変化によって本種の生息に適したため池が少なくなったこと、乾田化により湿地が乾燥したことが考えられる。また、農薬が影響している可能性もある。

【保護対策】県内での生息状況が不明のため、記録のある生息地、生息可能性のあるため池等の現状を明らかにすることが必要である。特に、1999年以前に生息記録の多い伊賀地域の湿地での生息状況を明らかにする必要がある。

【文献】14, 56, 67, 82, 196, 229, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：静岡県，2024年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

ヒヌマイトトンボ

Mortonagrion hirosei Asahina

トンボ目 イトトンボ科

【選定理由】既知の生息地点数は10程度であるが、現在確実な生息データはなく、絶滅している可能性がある。

【種概要】成虫は、体長29~34 mm。雄は黄緑色の地に黒い条斑があり、翅胸前面に4個の緑色斑紋がある。生息域は河口付近や海水の流入する汽水沼沢等に成立するヨシ帯など限られた環境である。

【分布】国外では台湾と香港から記録されている。国内では、宮城県以南の本州、九州、対馬に局所的に分布する。県内では、川越町、四日市市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、紀北町などから記録されている。

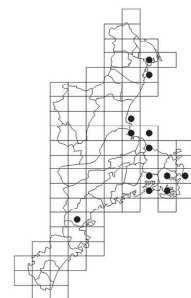
【現況・減少要因】2000年以降に記録されたのは雲出川河口と志摩市海岸部のみであり、生息地が著しく減少している。生息地が汽水域に成立するヨシ帯に限られているため、海岸近くまで市街地が広がる伊勢湾沿岸中北部の生息地は、都市再開発や道路拡張工事などで多くの生息地が消滅した。

【保護対策】宮川浄化センターでは2003年より保全事業を実施しており個体群が維持されてきたが、2016年以降個体数が激減している。そのため、宮川浄化センターの個体群を維持・回復させるとともに、生息地である河川汽水域ヨシ帯の保全・育成が必要である。

【文献】22, 69, 119, 152, 153, 177, 196, 236.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：伊勢市，2013年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

EN

アオヤンマ

トンボ目 ヤンマ科

Brachytron longistigma (Selys)

【選定理由】 個体数の減少が著しく、既知生息地のうち安定的な生息地は10以下と思われる。

【種概要】 成虫は、体長67~78 mm、若草色で腹部にくびれがない。平地から丘陵地の抽水植物が生育する休耕田や湿地、池沼に生息。

【分布】 国外では朝鮮半島、中国、ロシアに分布。国内では北海道の一部、本州、四国、九州に分布する。県内では、四日市市、伊賀市、津市、松阪市、明和町、伊勢市、鳥羽市、志摩市、南伊勢町などで記録。

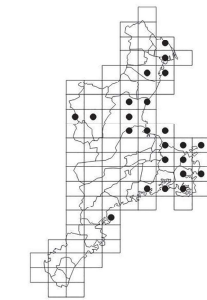
【現況・減少要因】 桑名市、四日市市、鈴鹿市からは最近の報告はなく絶滅した可能性が高く、他の地域も著しく減少している。現在の安定生息地は、鳥羽市答志島と伊勢市五十鈴川派川の2ヶ所程度と思われる。減少要因としては、圃場整備やソーラーパネル設置による抽水植物が生育する休耕田湿地の消失、農薬の影響などが考えられる。

【保護対策】 県内での生息現状を明らかにする必要がある。ヨシ等が繁茂する湿地を保護し、抽水植物が繁茂する環境を維持していくことが必要。

【文献】 1, 6, 25, 26, 28, 59, 70, 77, 78, 101, 110, 119, 120, 124, 134, 160, 172, 173, 177, 178, 191, 198, 202, 223, 231, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：鳥羽市，2023年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

オオサカサナエ

トンボ目 トンボ科

Stylurus annulatus (Djakonov)

【選定理由】 木曾川、雲出川、木津川など生息地は局所的であり、実質的な既知生息地は5以下と思われる。

【種概要】 成虫は、体長58~61 mm、黒地に黄色の反復模様がある中型サナエトンボ。日本に生息するメガネサナエ属の中では一番小さい。湖や周囲に樹林がある砂泥底の河川中流域などに生息する。

【分布】 国外では朝鮮半島、中国東北部、ウスリーなどに分布。国内では琵琶湖と淀川水系の滋賀、京都、大阪から記録されている。県内では、木曾川、雲出川、櫛田川、木津川の各水系で生息が確認されている。

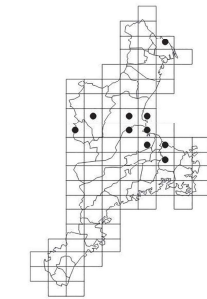
【現況・減少要因】 県内の生息河川はいずれも比較的大きな河川で、個体数が激減するような極端な河川改修はされていないが、出水や河川改修による生息水域の減少や環境悪化により個体数は激減しており、絶滅に近い状況にある。木津川での減少は、2011年の局地的集中豪雨による河川の荒廃が原因であると考えられる。

【保護対策】 出水による河川の荒廃を低減し河床の安定を図る必要がある。本種の生息環境に配慮した保護対策が必要である。

【文献】 3, 5, 6, 23, 120, 154, 164, 165, 177, 182, 188, 192, 198, 225, 233, 234, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：愛知県，2022年，鶴殿清文撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

ハネヒロエゾトンボ

トンボ目 トンボ科

Somatochlora clavata Oguma

【選定理由】 既知の生息地は5程度。現在確実な生息データはなく、既知生息地のほとんどで絶滅している可能性がある。

【種概要】 成虫は、体長58~66 mm、金属光沢のある緑色のトンボ。同属の他種とは、雄の尾部付属器の形状や雌の腹部に黄色斑がないことで区別される。平地から丘陵地の周囲に樹林がある緩やかな流れに生息。

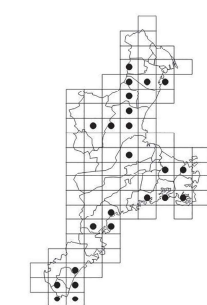
【分布】 北海道、本州、四国、九州に分布。佐渡島、淡路島、隠岐、対馬などの離島にも生息する。県内では四日市市、伊賀市、津市、志摩市、南伊勢町、紀北町などから記録がある。

【現況・減少要因】 紀北町では1990年頃、南伊勢町や四日市市では2000年頃からはほとんど見られなくなったが、2024年に四日市市で確認情報(水谷洋稀氏私信)があったことから、新たな生息地が見つかる可能性もある。減少要因は理立てなどによる湿地の消滅、河川改修や道路設置等に伴う湿地の水位低下と考えられる。

【保護対策】 県内での2000年以降の記録がほとんどないことから、既知生息地や生息可能性のある林内の緩流での生息現状を明らかにすることが必要。

【文献】 2, 59, 115, 119, 127, 163, 175, 178, 200, 214, 215, 219, 223, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ナニワトンボ

トンボ目 トンボ科

Sympetrum gracile Oguma

【選定理由】既知の生息地は伊賀盆地に限定され、生息地点数は5～10程度と思われる。伊賀盆地以外に新産地は発見されておらず、個体数も極めて少ない。

【種概要】成虫は、体長32～39 mmで、成熟しても赤くならず、雄は成熟すると黒化して全身に蒼白色の粉をまとう。成虫は、6月下旬～11月下旬に出現する。森林に囲まれた、秋の減水により水際に土の露呈した部分がある抽水植物が繁茂する浅い池沼に生息する。

【分布】日本固有種で、近畿地方の各府県と中国、四国の瀬戸内海側および鳥取県から記録されている。県内では伊賀市、名張市から記録されている。

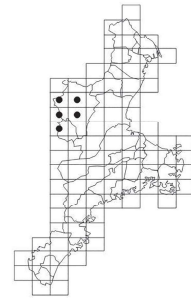
【現況・減少要因】伊賀盆地の特定の池沼で生息が確認されているが、いつ絶滅してもおかしくない状態である。1960年代の半ばからため池で養鯉が盛んになり、急激に生息地が減少した。また、農業形態の変化により水を抜く灌漑用ため池が減少したのも減少要因の一つと考えられる。

【保護対策】現在では養鯉もほとんど行われていないと考えられるが、ため池の荒廃が顕著であり早急な保護対策が必要である。

【文献】5, 6, 12, 13, 14, 48, 82, 133, 174, 181, 203, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：奈良県，2022年，片谷直治撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

マダラナニワトンボ

トンボ目 トンボ科

Sympetrum maculatum Oguma

【選定理由】現在の生息地は伊賀盆地に限定され、生息地点数は5以下と思われる。現在確実な生息データはなく、絶滅している可能性がある。

【種概要】成虫は、体長34～40 mmで、成熟しても成熟雄が赤くならない。体色・斑紋とも雌雄でほとんど差がなく、橙黄色の地に黒条がある。丘陵地や低山地の松林に囲まれた水際になだらかな土の露呈した部分があり、抽水植物が繁茂する水質が良好な浅い池沼に生息。

【分布】日本固有種で、本州において極めて局所的に分布する。県内では菰野町、伊賀市から記録。

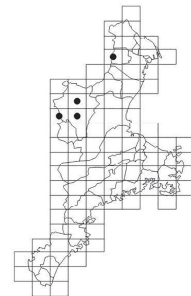
【現況・減少要因】2000年以降で記録があるのは伊賀市法花のみで、2003年の記録を最後に県内での記録はない。1960年代の半ばからため池で養鯉が盛んになり、急激に生息地が減少した。池沼の埋立てや水質汚濁、植生遷移など減少要因は多岐に及ぶ。また、農薬が影響している可能性もある。

【保護対策】最近の確認情報がないため、伊賀地域の貧栄養湿地やため池を中心に、生息可能性のある場所での生息状況を明らかにすることが必要である。生息が確認された場合は、早急な保護対策が必要。

【文献】5, 6, 13, 14, 82, 203, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：滋賀県，2020年，牛島積広撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

オオキトンボ

トンボ目 トンボ科

Sympetrum uniforme (Selys)

【選定理由】既知の生育地点数が5以下で、その後の新産地は発見されず、生息情報もないので絶滅した可能性も考えられる。

【種概要】成虫は、体長44～52 mm、全身が橙黄色をしたほぼ無斑のアカトンボ。成熟してもほとんど体色に変化せず、翅全体が淡い橙黄色をしている。低地や丘陵地の背丈が高い抽水植物が繁茂する腐植栄養型の開けた池沼に生息する。

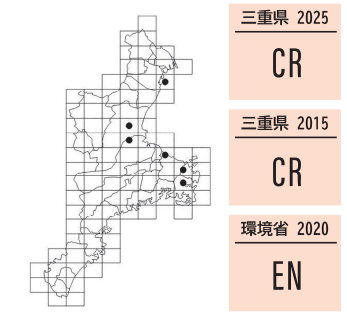
【分布】国外ではロシア沿海州、中国東北部、朝鮮半島に分布。国内では本州、四国、九州（福岡県、大分県）に分布する。県内では、四日市市、津市、松阪市、明和町、鳥羽市、志摩市で記録されている。

【現況・減少要因】県内では、1990年代以降記録がなく、生息状況も不明で絶滅した可能性もある。平地の湿地開発等により一挙に生息地が減少し、希少化が進行したと思われる。

【保護対策】最近の確認情報がないため、既知生息地を含め、生息可能性のある場所での生息状況を明らかにすることが必要である。生息が確認された場合は、早急な保護対策が必要である。

【文献】11, 67, 69, 176, 202, 222, 236.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

オオオカメコオロギ

バッタ目 コオロギ科

Loxoblemmus magnatus Matsuura

【選定理由】既知の生息地は紀北町往古川中流域の1地点だけである。

【種概要】体長約16~23 mm. 暗灰褐色. 雄頭部顔面は扁平であり, ミツカドコオロギとは, 頭の突起のないことで識別できる. 「リリリ…」と丸みを帯びた声で鳴く. 年1化, 成虫は9~10月に出現する.

【分布】日本固有種で本州, 四国, 九州に局所的に分布. 県内では紀北町中里からのみ記録されている.

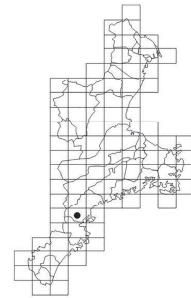
【現況・減少要因】1980年9月に記録されて以降, 採集されていない. 本種は生息密度が低かったうえに, 往古川の河川改修と改修後の植生の変化により, さらに減少したものと考えられる.

【保護対策】往古川周辺の生息の確認が急務である. 本種の生態を把握したうえで, 生息について調査を行い, 保護対策を講じることが必要と考えられる.

【特記事項】橋本太郎氏によって, 1950年10月に紀北町往古川中流域から採集されたのが, 日本で最初の記録である.

【文献】4, 46, 50, 54.

(村井俊郎・河北 均)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

ヒメタイコウチ

カメムシ目 タイコウチ科

Nepa hoffmanni Esaki, 1925

【選定理由】既知生息地が10以下で, いずれの湿地も生息基盤が脆弱であり, 将来的に減少の恐れが高い.

【種概要】体長20 mm内外で, 尾端に3 mmほどの短い呼吸管をもつ. 前腿節前縁には棘状の突起が無い. 小動物を捕食する. 産卵期は4~6月で5齢を経て8~9月頃に成虫になる. 陸上で成虫越冬し, 寿命は約2年.

【分布】本州の静岡県から兵庫県, 四国香川県, 国外では朝鮮半島, 中国北部, ロシア極東部に分布. 県内ではいなべ市, 桑名市, 東員町, 四日市市など北勢地域で記録がある.

【現況・減少要因】北勢地域で記録されているだけで, 生息面積は極めて局所的. 四日市市の垂坂町では1970年以降の記録を見ない. 生息地は人為的影響を受けやすい脆弱な環境下にあり, 土地改変および丘陵地の荒廃とそれともなう湧水の枯渇などが減少要因となる.

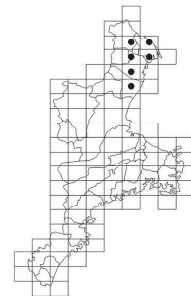
【保護対策】生息地と周辺の土地改変を極力回避し, 湧水確保のために生息地および後背丘陵地の森林を保全するとともに, 新たに生息環境の創出を計る.

【特記事項】三重県指定希少野生動物種および桑名市では市の天然記念物に指定.

【文献】22, 24, 34, 42, 73, 94.

(富田靖男・矢崎充彦)

(写真: 四日市市, 三重県総合博物館提供)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

コバンムシ

カメムシ目 コバンムシ科

Ilyocoris cimicoides exclamationis (Scott, 1874)

【選定理由】既知生息地が5以下で, 御池沼沢では50年以上も記録がなく, 全国的にも確実な産地がごくわずかな状況である.

【種概要】体長12 mm内外. 小判形で光沢強く, 生時は緑色で, 死後黄変する.

【分布】本州, 九州. 県内では四日市市の御池沼沢, いなべ市大安町丹生川上および志摩市大王町における記録があり, ごく最近, 伊賀市からも発見された.

【現況・減少要因】本種はヒシやヒルムシロなどの浮葉植物が豊富に生育するやや深い池沼に生息する. いなべ市や志摩市の産地は浮葉植物の消滅とともに確認されなくなり, 御池沼沢では1958年以降の記録を見ない. また, プラストロン呼吸により, 水中の溶存酸素を取り入れているので, 全国的な減少には池沼の埋め立て改変や植生環境の変化等と併せ, 水質の悪化が顕著にかかわっていると考えられる.

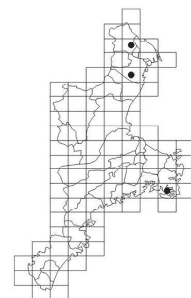
【保護対策】浮葉植物等の見られる池沼ならびに水辺環境の保全管理. アメリカザリガニやウシガエル等外来種の駆除と侵入防止.

【特記事項】特定第二種国内希少野生動物種に指定され, 商業目的の採取等は禁止.

【文献】17, 35, 68, 73, 77.

(富田靖男・石田和男・矢崎充彦)

(写真: いなべ市, 2000年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

トゲナベブタムシ カメムシ目 ナベブタムシ科
Aphelocheirus nawae Nawa, 1905

【選定理由】 県内既知生息地の3か所からも近年の記録はなく、種の存続が極めて危惧される。

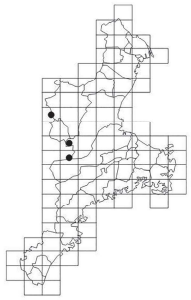
【種概要】 体長9mm内外で、体は円形に近く扁平で、ナベブタムシに似ているがやや大型で、前胸背と腹部各節の側縁が後方に鋭く突出している。一生を水中で過ごす。

【分布】 三重県を東限とする本州、九州に分布する。県内では1950年代以前の名張市赤目、伊賀市長田川および津市美杉町三重大学演習林での記録がある。近縁のナベブタムシは県内に広く分布するが、本種は極めて局所的に記録されているのみである。

【現況・減少要因】 全国的にも生息範囲は極めて局所的である。既知の生息地では、河川中流域から上流域で、淡水二枚貝が多く生息するような砂礫質の河床で、早瀬に生息している。河川改修、水質悪化が主な減少要因である。

【保護対策】 既知生息地を含めた本種が生息可能な河川環境の保全。人知れず絶滅した産地も多いと推察され、河川工事の際は、事前の水生物調査が望まれる。

【文献】 27, 35, 43, 53, 73. (鈴木 賢・大川親雄・矢崎充彦)
(写真：兵庫県, 2005年)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
VU

オオウスバカゲロウ アミメカゲロウ目 ウスバカゲロウ科
Heoclisis japonica (Hagen)

【選定理由】 既知生息地は、5地点以下。本種は、粒度の細かい砂地を好み自然純度の高い大河川の砂州部や砂浜海岸の砂丘地のような環境でしか生息できない。55年以上記録が途絶えていたが近年、鈴鹿市と御浜町で再発見された。

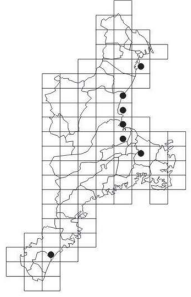
【種概要】 ウスバカゲロウ科最大種であり成虫は、体長40mm程度、前翅長56mm程度で灯火などにも集まる。幼虫(アリジゴク)はクリーム色の体色をもち終齢幼虫になると大顎を除いて20mmほどになる。巣を作らず砂地に浅く潜り移動と待ち伏せを繰り返しながら地表にいる昆虫や小動物を捕食する。

【分布】 北海道、本州、四国、九州。三重県では四日市市、鈴鹿市、津市、伊勢市、御浜町。

【現況・減少要因】 砂浜に車両や大多数の人などが入ると幼虫は轢死してしまう。また砂浜には外来植物や路傍植物が侵入し草原化すると幼虫が生息できなくなる。

【保護対策】 現在の生息地である鈴鹿市鼓ヶ浦の海浜への車両侵入を認めているが即刻禁止にするか、部分規制して生息適応地に入り入れさせない。また特別な理由で重機を乗り入れる時は、みどり共生推進課と共に慎重に検討して対応する。

【文献】 2, 6, 16, 19. (乙部 宏)
(写真：成虫：津市, 1978年, 間野隆裕採集・撮影。幼虫(アリジゴク)：御浜町, 2024年)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

ユーラシアシジミガムシ コウチュウ目 ガムシ科
Laccobius minutus (Linnaeus)

【選定理由】 既知生息地が1。生息環境が悪化している。

【種概要】 体長2.4~3.0mm。ミュキシジミガムシに酷似するが、背面の点刻や♂交尾器形態で区別される。植物が多い浅い湿地で見られる。

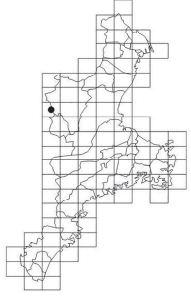
【分布】 本州(三重県、兵庫県)。ロシア極東からヨーロッパ。三重県では伊賀市で記録されている。

【現況・減少要因】 伊賀市の溜池とそれに隣接する休耕田で確認されている。周辺で耕作を行っておらず、アメリカザリガニの侵入も見られない場所である。しかし、どちらも植物遷移が進行しており、2020年以降は確認されていない。

【保護対策】 除草や溜池に堆積した土砂の除去を行い、湿地環境の再生を行うことである。

【特記事項】 日本においては、伊賀市と兵庫県加古川市、加西市から記録されるのみである。伊賀市ではミュキシジミガムシと混生していた。

【文献】 466. (秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

ミズスマシ
Gyrinus japonicus Sharp

コウチュウ目 ミズスマシ科

【選定理由】かつてはごく普通に見られたものの、近年激減し、現在の生息確認地点は5以下。

【種概要】体長6.0~7.5 mm。池沼や水田、流れが緩やかな水路に生息する。同属のヒメミズスマシに比べ、小規模な水域を好む傾向が強い。成虫は開放水面を好んで旋回し、驚くと水中に潜る。落下昆虫などを捕食する。

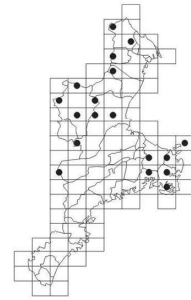
【分布】本州、四国、九州。朝鮮半島、中国北部、ロシア沿海州。三重県では、熊野灘沿岸と山岳地を除くほぼ全域で記録されている。

【現況・減少要因】近年は激減し、2000年以降に確認されているのは、菰野町、鈴鹿市、津市、志摩市、伊賀市の数地点だけで、そのほとんどの地域でも現在は見る事ができない。従来の農薬散布や圃場整理などの影響は非常に大きかったものと考えられるが、それだけでは近年の急激な減少は説明できない。近年の急激な減少は本種の感受性が高い農薬が使用されるようになったなどの要因があるのだろう。また、ミズスマシ類は界面活性剤に極端に弱いことから、これを含む農薬などの流入は致命的である。

【保護対策】生息地周辺での農薬使用には十分な配慮が必要。

【文献】32, 89, 260, 268, 356, 357, 360, 380, 386, 387, 390, 392, 442, 443, 483.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

オオミズスマシ
Dineutus orientalis (Modeer)

コウチュウ目 ミズスマシ科

【選定理由】既知の生息点数は100以下。かつては水田、池沼、緩やかな水路などに普通に見ることができた。しかし近年著しく減少している。

【種概要】体長10 mm前後。ミズスマシ類は全身黒色だが本種は側縁部が黄色で縁取られている。成虫は水面を旋回しながら泳いでおり時には多くが群れ泳ぐこともある。

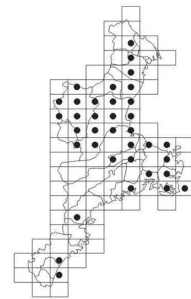
【分布】日本全土。三重県ではいなべ市から御浜町まで記録されている。

【現況・減少要因】近年は水環境および周辺の環境悪化により全国的に激減している。侵略的外来種の捕食圧や界面活性剤（洗剤）、浸透移行性殺虫剤などの流入も影響が大きい。

【保護対策】汚水の流入を防ぎ自然度の豊かな水質および水辺の移行帯の周辺環境を復元する。生息地へは外来種（オオクチバス、ブルーギル、コイ、アカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニなど）の侵入を阻止する、侵入して来たら駆除する。

【文献】21, 77, 89, 125, 258, 260, 268, 300, 305, 357, 359, 374, 386, 389, 393.

(乙部 宏)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

ヒメミズスマシ
Gyrinus gestroi Régimbart

コウチュウ目 ミズスマシ科

【選定理由】現存生息地が5未満。

【種概要】4.6~5.2 mm。抽水性植物が多い池沼に生息する。

【分布】日本固有種。本州、四国、九州。三重県では伊賀市、伊勢市、志摩市、尾鷲市、御浜町で記録されるほか、紀北町、南伊勢町で確認。

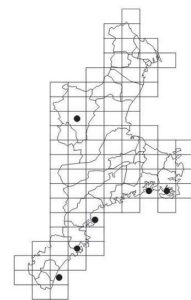
【現況・減少要因】もともと生息地が局限される種である。志摩市、南伊勢町、紀北町では2020年以降も生息を確認している。ただし、いくつかの生息地についてはアメリカザリガニの侵入が確認されており、直接的な捕食圧のほか抽水植物の減少や水質悪化などによる生息地の荒廃が心配される。また、ミズスマシ類は界面活性剤には極端に弱く、これが含まれる農薬の流入は致命的なものになるはずである。

【保護対策】アメリカザリガニの駆除などより積極的な保全策がのぞまれる。また、近年の農薬（除草剤などに含まれる界面活性剤なども）には、非常に弱いものと考えられる。生息地に農薬が流入しないようにすることが重要である。

【特記事項】生息が確認されている池沼はいずれも他に希少な水生甲虫が生息している。交尾器を検しない限り、確実な同定は難しく、過去の記録については、再確認が必要である。

【文献】13, 21, 125, 369, 463.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

EN

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ホソハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科

Cylindera gracilis (Pallas)

【選定理由】 既知の生息地点数は5以下であり、現存する標本の調査では2カ所の記録しか確認できていない。最も新しい記録は1996年の報告であり絶滅している可能性がある。

【種概要】 体長10~12 mm. 粘土質の裸地がある草原、疎林、畑の周辺などに生息し、小動物を捕食する肉食昆虫である。県外での観察によれば、クロオオアリに混じって地表を歩き回っていることが多い。またハンミョウ類は飛翔する種が多いが本種は歩行するだけで飛ぶことはない。

【分布】 北海道、本州、四国、九州。県下では四日市市、鈴鹿市、伊賀市、津市の記録がある。

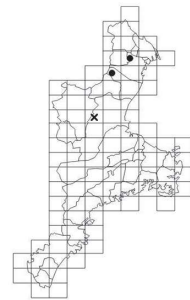
【現況・減少要因】 既知産地は環境の大きな変化がそれほど無いにも関わらず、その後の調査では再発見されていない。全国的にも減少の傾向があり、畑の周辺の生息地での減少は除草剤、農薬の影響が考えられるが、草原、疎林における減少要因は侵略的外来植物への遷移により生息地の裸地が消滅したためである。

【保護対策】 生息地の詳細な調査と減少要因の探索が必要である。

【文献】 56, 82, 169.

(乙部 宏)

(写真：鈴鹿市，1991年，久保田耕平採集・撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

カワラハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科

Chaetodera laetescripta (Motchulsky)

【選定理由】 既知の生息地点5以下。減少傾向が著しく、現在生息が確認されているのは1地点のみである。愛知県、岐阜県の個体群はすでに絶滅しており、伊勢湾沿岸域で現在生息するのは三重県のみである。国内での比較的健全な生息地は5か所未満。近年の減少傾向は著しく、国内絶滅が強く危惧されている。

【種概要】 体長14~17 mm. 海岸、河原などの砂浜に生息する。成虫は7月下旬~10月上旬にかけて出現し、他の節足動物を捕食する。幼虫は草本がごまばらに生えた砂地にほぼ垂直の穴を掘り、穴入り口付近で餌となる昆虫などが近づくのを待ち伏せる。振動には非常に敏感である。幼虫で2冬を越す。

【分布】 北海道、本州、四国(絶滅)、九州。シベリア南東部、サハリン、朝鮮半島、済州島、中国、モンゴル。三重県では、鈴鹿市、津市、明和町、伊勢市から記録されているが、現在生息しているのは津市の白塚海岸周辺のみである。

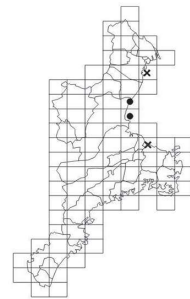
【現況・減少要因】 海岸砂浜を生息場所としているが、護岸工事や侵食による砂浜の狭小化が進行しており、現在は生息に十分な奥行きを持つ砂浜そのものが殆ど存在しない。クロマツなどの植栽も生息地をさらに狭める要因となっている。生息地への車両の乗り入れ、過度の人の立ち入りによる踏みつけは本種の生息にとって大きな脅威となる。生息地周辺での堤防の嵩上げ、背の高い構造物の建築は風の通りを悪くし、砂浜の草原化を招く。土木工事や大型車両の通行による振動も幼虫の採餌行動に大きな影響を与える。明るい照明は成虫を誘殺する。近年、生息地にはオオフタバムグラ、ヒメスイバをはじめとした外来植物や路傍植物の侵入が著しく、なかでもチガヤ群落が急速に拡大した。それに伴って、幼虫の生息に適した裸地の面積が縮小し、個体数は減少を続けている。砂浜の急速な草原化は、下水処理場(志登茂川浄化センター)建設によって、風通しが悪くなったことに起因する。さらに、2023年に完成した堤防嵩上げにより、草原化はさらに進行している。三重県による2007年の調査では280個体の成虫が確認されていたが、同様の方法での2023年の調査ではわずか25個体にとどまっている。現在の個体数は、個体群維持にはぎりぎりの状態になっているものと考えられる。2007年に発見された大淀海岸(伊勢市から明和町)の生息地は、堤防建設工事の進行によって、絶滅してしまった。事前の環境アセスメントで言及されていたにも関わらず、県が有効な保全策をとらなかったのは由々しき問題である。

【保護対策】 津市の生息地では、地元保全団体(白塚の浜を愛する会)によって外来植物の除去作業が2005年からほぼ毎月継続されており、この活動によってかろうじて生息地が維持されているような状況である。県中勢流域下水道事務所によって、本種についての現況調査が継続的に実施されており、2014年には、生息地内にあったグラウンドを砂浜に復元する工事が行われたことは大いに評価したい。翌年には個体数が大きく回復したが、現在は草原化の進行に伴い、殆ど発生していない。大淀海岸の失敗を生かし2024年みどり共生課が白塚海岸の除草作業に乗り出したのは評価に値する。単発に終わらず維持継続できるようにすべきである。毎年区域を決めて冬季に耕運機で開墾除草することによって、生息環境の保全と個体数の回復は確実に図ることができる。この方法は10年ほどにわたって実験的に行い、大きな成果があることを確認している。下水処理場建設と堤防嵩上げは、どちらも三重県によって行われたものである。三重県が責任をもって条例を遵守し、生息環境の保全に当たるべきである。早急に有効かつ継続的な保全策をとらない限り、数年のうちに確実に絶滅する。

【特記事項】 三重県指定希少野生動植物種に指定されており、捕殺などに関しては事前の届出が必要。三重県産カワラハンミョウの保全については、中西・乙部, 2023に詳しい。

【文献】 196, 197, 303, 317, 318, 330, 450, 451, 452, 453, 454, 455.

(写真：津市，2024年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

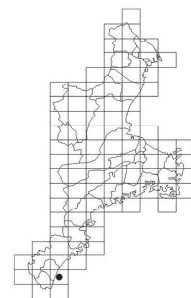
(秋田勝己・乙部 宏)

ミハマオサムシ (ミカワオサムシ御浜亜種) コウチュウ目 オサムシ科
Carabus (Ohomopterus) arrowianus kirimurai Kubota & Yahiro

【**選定理由**】本県特産で分布域が極めて限られる上に個体密度も低い。
 【**種概要**】体長23~27 mm. 2003年に発見, 記載された. 背面はすべて光沢のある銅色. 近縁グループの調査から主食はフトミミズ類と推定される. 樹林内や林縁に生息する. 東海地方に分布するミカワオサムシ*C.(O.)arrowianus* (Breuning)の亜種であるが, ミカワオサムシの分布域から著しく隔離されており, 分布範囲が極めて狭い. また, 形態的にも遺伝的にも独自に分化している.
 【**分布**】日本(三重県)固有亜種で, 御浜町の非常に限られた狭い範囲に分布.
 【**現況・減少要因**】丘陵地の樹林に生息し, 個体密度は非常に低く, 周辺部では特に低い. 近年特に減少傾向が著しく, 過去に見られた地点でも確認が難しい. シカの食害による林床の乾燥化も進み, 亜種の存続にとって危機的な状況にある.
 【**保護対策**】生息範囲が狭いため, その範囲や周辺地域の自然環境を維持することが非常に重要である. また, シカの個体数管理を適切に行う必要がある.
 【**特記事項**】タイプ産地は御浜町上市木.
 【**文献**】172, 209.

(写真: 御浜町, 2006年)

(久保田耕平)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

CR

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

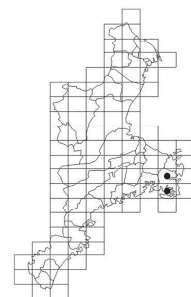
キノコ

ウガタオサムシ (マヤサンオサムシ鶺鴒方亜種) コウチュウ目 オサムシ科
Carabus (Ohomopterus) maiyasanus ohkawai (Nakane)

【**選定理由**】本県特産で分布域が非常に限られる上に生息環境も悪化している。
 【**種概要**】体長24~30mm. 背面は光沢のある銅色. 主食はフトミミズ類と推定される. 樹林周辺や草地に生息. 北陸地方, 近畿地方北部に分布するマヤサンオサムシ*C.(O.)maiyasanus* Batesの亜種である. マヤサンオサムシの主たる分布域から著しく隔離されている.
 【**分布**】日本(三重県)固有亜種で, 志摩市の限られた範囲に分布.
 【**現況・減少要因**】生息地域が限られている上に, 住宅地や農地などで生息環境の分断化が著しい. 1980~90年代に多数の個体が認められた地点でも, 現在では全く発見できないところや, 開発されたところもある. 太陽光発電設備設置の影響も懸念される. また, 本亜種は比較的開放的で地表の植生被度の豊かな環境を好むため, 人工林の林床や草地の鬱閉化も悪影響を及ぼしている可能性がある. 亜種の存続にとって危機的な状況にある.
 【**保護対策**】分布域内の環境変化をできるだけ避ける必要がある. また過度の鬱閉化を避けるため, 人為的介入が望ましい場合もあるだろう.
 【**特記事項**】タイプ産地は阿児町(旧)鶺鴒方. 生息範囲は全域伊勢志摩国立公園に含まれる.
 【**文献**】130, 161.

(写真: 志摩市, 2022年)

(久保田耕平)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

EX

EW

CR

EN

VU

NT

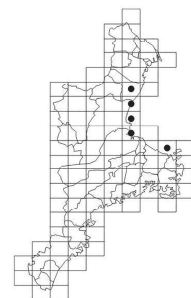
DD

オオヒョウタンゴミムシ コウチュウ目 オサムシ科
Scarites sulcatus Olivier

【**選定理由**】既知の生息地点が10以下. 生息環境が急速に悪化しており, 近年の減少が著しい。
 【**種概要**】体長28~38 mm. 海浜の砂浜およびその後背林に生息する. また, 大河川の砂地にも生息地が知られている. 夜行性で, 他の昆虫などを捕食する. 昼間は砂中に深いトンネルを掘り, その中に潜んでいる.
 【**分布**】本州, 四国, 九州. 朝鮮半島, 中国, 台湾, 東南アジア. 県内では鈴鹿市, 津市, 名張市, 伊勢市で確認.
 【**現況・減少要因**】海岸堤防の建設により, その生息地の多くが消失した. 過去に生息が確認されている地点の多くは堤防内陸側に残されたクロマツ林だが, 駐車場や宅地, 港湾施設になることによりそのほとんどはすでに消失した. 近年は砂浜に漂着した流木などが撤去されることが多くなった. 重機や砂浜に侵入した一般車両による踏み付け, 住処や餌である他の節足動物の発生源となる流木などの漂着物が除去されることが, 最大の脅威となっている.
 【**保護対策**】砂浜に漂着した自然漂着物の撤去は行わないことが強く求められる. また砂浜への車両侵入ができないようにすること, 薬剤散布の禁止などが考えられる.
 【**文献**】1, 12, 66, 179, 185, 260, 275, 362.

(写真: 津市, 2011年, 乙部宏撮影)

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

スズカオオズナガゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Pterostichus akitai Morita

【選定理由】 既知の生息地点 1. 地中性の種で、生息範囲は局限される。
 【種概要】 体長17~19 mm. 扁平で、感覚毛が発達、体色が薄く複眼が退化するなど、地中生活に適応した形態を持つ。著しく発達した左右不対称の大顎をもつことから、ガロアムシのようにかなり大型の動物を捕食しているものと推察される。晩秋に新成虫が出現し、成虫ではほぼ1年間生存する。
 【分布】 日本固有種。本州。三重県いなべ市御池岳が唯一の既知生息地。鈴鹿山脈中部の花崗岩地帯がそれ以南への分布障壁となっているものと考えられる。

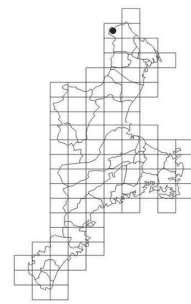
【現況・減少要因】 標高600~900 mにかけての落葉広葉樹林。風化した石灰岩が厚く堆積した地下浅層中に生息。生息地の鈴鹿山脈北部は、現在も石灰岩の採掘が盛んにおこなわれており、その生息地の破壊が進行しているが、調査自体も行われていないのが現状である。

【保護対策】 生息地そのものを消失させる石灰岩の採掘をしない。生息地の乾燥化を招く樹林の伐採をしないことである。

【特記事項】 鈴鹿山脈北部の固有種でなおかつ、ニッコウオオズナガゴミムシ種群の分布西南限である。鈴鹿山脈の生物相の成り立ちを考える上で重要な種である。

【文献】 207.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
NT
環境省 2020
—

ムナコブハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Xenophyrama purpureum Bates

【選定理由】 既知の生息地点は 5 地点以下。20年以上記録が途絶えており絶滅が懸念されている。

【種概要】 体長15~21 mm. 成虫は艶消しの暗い赤色の鞘翅で他部は黒色。6~7月頃に温帯性落葉広葉樹林帯で見られ小雨、曇天時、夕刻などに活動することが多い。

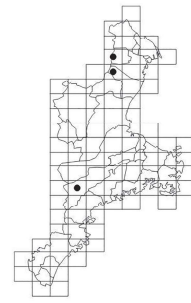
【分布】 本州（静岡県以西）、九州、対馬。県内では菰野町、亀山市、大台町で記録されている。

【現況・減少要因】 本種の幼虫はノリウツギの大木を好むため個体密度も低い。また近年のニホンジカの激増により太径のノリウツギの樹皮は好まれ、食害による枯死が目立つため相当危うい状況である。

【保護対策】 ニホンジカの駆除、また生息地のノリウツギの樹木をニホンジカから守る手立てが必要である。

【文献】 45, 102, 181, 391, 447.

(乙部 宏)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

モモグロハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Toxotinus reini (Heyden)

【選定理由】 既知の生息地点は 5 地点以下。25年以上記録が途絶えており絶滅が懸念されている。

【種概要】 体長15 mm. 成虫は5~7月頃に山間部の湿潤な草地に出現する。

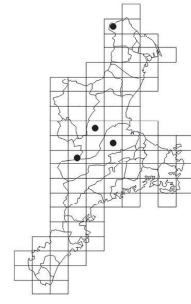
【分布】 北海道、本州、佐渡、四国、九州、対馬。県内ではいなべ市、伊賀市、津市、松阪市で記録されている。

【現況・減少要因】 既知産地では激増しているニホンジカによる食害で草本類の消失とそれに伴う林床の乾燥化。また食草であるショウマ類の減少も著しく本種が絶滅している可能性が高い。

【保護対策】 ニホンジカの駆除、またはショウマ類の残る地域のシカ防御ネット、フェンスなども設置なども有効な手段である。

【文献】 146, 303, 373, 447.

(乙部 宏)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

(写真：津市，1991年，乙部宏採集)

エチゴトクリゴミムシ
Oodes echigonus Habu et Baba

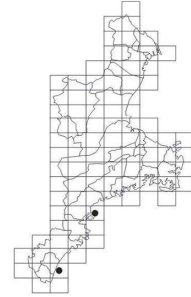
コウチュウ目 オサムシ科



【選定理由】 既知生息地点が2. 生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長14.0~15.2 mm. 草丈の高い湿地に生息する. 成虫は濡れた地表を歩行し, しばしば水中に潜る.
 【分布】 日本固有種. 本州. 県内では, 紀北町, 御浜町で確認されている.
 【現況・減少要因】 紀北町は大きな池の周辺湿地, 御浜町では河川氾濫原の湿地で得られた. 紀北町の生息地は, 埋め立てがすすんでおり, 危機的な状況である. 御浜町の湿地も小規模なもので, その生息基盤はきわめて脆弱である. 同様の環境はすでにほとんど残されていない. 紀北町の生息地は, 2015年以降の調査では発見できなかった. 御浜町の生息地は, その後の調査を行うことができなかった.
 【保護対策】 湿地や池の埋め立て, 河川改修を行わないことである.

(秋田勝己)

(写真: 御浜町, 2012年, 石田昇三撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

NT

ダイミョウアトキリゴミムシ
Cymindis daimio Bates

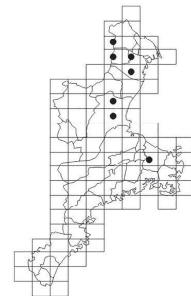
コウチュウ目 オサムシ科



【選定理由】 既知の生息点数は5以下. 25年以上記録が途絶えている。
 【種概要】 体長8~9 mm. 全体に藍色を帯びた黒色で上翅には橙赤色で会合部沿いにやや後方まで延びる。
 【分布】 北海道, 本州, 四国, 九州に全国的に分布しているが近畿地方では個体数がすくない. 三重県でいなべ市, 四日市市, 津市, 伊勢市。
 【現況・減少要因】 比較的乾燥している草原や粘土質の荒地, 耕作地周辺で発見されている. そのような環境は外来植物への遷移や除草剤散布, 開発などが影響している。
 【保護対策】 生息地の状況調査を行い確認されたら生息地域の保全を行う。
 【文献】 86, 336.

(乙部 宏)

(写真: 津市, 1994年, 乙部宏採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

アリスアトキリゴミムシ
Lachnoderma asperum Bates

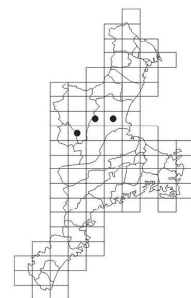
コウチュウ目 オサムシ科



【選定理由】 既知の生息点数は5以下. 25年以上記録が途絶えている。
 【種概要】 体長7.5~8 mm. 全体に軟立長毛で覆われ全体は黒色だが上翅は暗褐色である. 河川敷のカワラケアリなどの巣に寄生する好蟻性種であることが知られている. 三重県では河川敷での草地や高原のススキ・シバ草原での記録されている。
 【分布】 本州, 九州. 非常に局地的な分布である. 東海地方では個体数が少ない. 三重県では名張市, 津市。
 【現況・減少要因】 高原や河川敷の草地に生息する特定のケアリ類の巣中で生息しているので極めて不安定な状態である. またそのような環境は開発の影響を受けやすい。
 【保護対策】 河川敷や高原の開発工事があれば事前に調査して生息地の環境保全を行う。
 【文献】 257, 336, 503.

(乙部 宏)

(写真: 津市, 1997年, 乙部宏採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

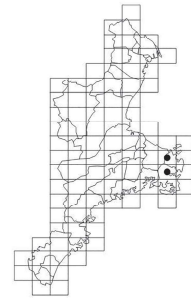
クビボソコガシラミズムシ

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

Haliphus japonicus Sharp

【選定理由】既知の生息地点は2。
 【種概要】体長2.6~3.1 mm。水草の豊富な池沼や水路などに生息。幼虫はアオミドロを食べる。
 【分布】北海道，本州，四国，九州，中国，ロシア沿海州。県内では鳥羽市，志摩市で記録。
 【現況・減少要因】志摩市の記録は1965年のもの。記録地周辺にはアメリカザリガニが多く本種が生息できそうな環境は残されていない。鳥羽市の生息地はアメリカザリガニ未侵入。ミズオオバコやヒルムシロなどが繁茂する水田脇の水路とごく小さな池で，アオミドロとシャジクモの1種が多い。アメリカザリガニの侵入，さらに近年の農薬（昆虫に直接作用するものだけでなく，除草剤使用は，本種の餌であるアオミドロを枯死させる）使用は，本種の生息にとって大きな脅威となる。
 【保護対策】生息地周辺での農薬不使用が強く求められる。また，アメリカザリガニの侵入を防ぐ手立ても必要であろう。生息地周辺での水田耕作がなされなくなると，植物遷移は進行して生息地自体が消失するはずである。
 【特記事項】志摩市からは，チビコガシラミズムシ，*H. minutus* として記録されているが，これは現在の知見では本種であると考えられる。
 【文献】457。

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
DD

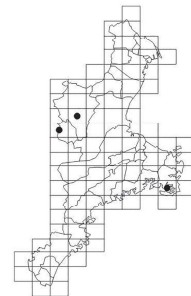
キボシチビコツブゲンゴロウ

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科

Neohydrocoptus bivittis (Motschulky)

【選定理由】全国的にも産地は極限され，県下における既知の生息地点は4である。
 【種概要】体長3.0~3.4 mm。池沼の浅瀬の水生植物の多い水域に見られる。成虫，幼虫とも水生植物の根の間で生活している。成虫は水中の植物の茎に穴をあけ，そこに腹端を差し込んで空気を取り込んで呼吸をしていることが知られている。
 【分布】本州，四国，九州。国外では台湾から中国，インドにかけて広く分布。国内における産地は極めて局地的。三重県では志摩市の海跡湖と伊賀市，名張市の溜池に生息地がある。
 【現況・減少要因】いずれの産地も，もともと個体数が少ないうえにすでにアメリカザリガニが侵入している。多くの水域では，アメリカザリガニの侵入とともに水草の激減，水質の悪化などをもたらした。それらは，本種の生息に大きな影響を与えるものと考えられる。近年の調査では，志摩市では発見されない。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除することである。志摩市の海跡湖では2007年に駆除作業を行ったが，池の規模が大きいこともあって，根絶は不可能であると思われた。生息地周辺での農薬散布には十分な配慮が求められる。
 【文献】12，13，125，173，201，361，456。

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
EN

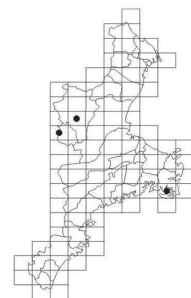
ムモンチビコツブゲンゴロウ

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科

Neohydrocoptus sp.

【選定理由】全国的にも産地は極限される。県下における既知の生息地点は3である。
 【種概要】体長2.2~2.3 mm。池沼の浅瀬の水生植物の多い水域に見られる。
 【分布】本州，四国，九州，屋久島。国内における産地は極めて局地的で個体数もごく少ないようである。三重県では志摩市の海跡湖と伊賀市，名張市の溜池や湿地に生息地がある。
 【現況・減少要因】もともと個体数が少ない。伊賀市の溜池は，遷移が進んでおり，近い将来消失するものと思われる。志摩市の産地にはアメリカザリガニが侵入しており，近年はほとんど見られない。直接捕食されるという影響以上に，アメリカザリガニの侵入による水草の激減，水質の悪化などが生息に大きな影響を与えるものと考えられる。名張市の生息地もアメリカザリガニの侵入が確認されている。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除することである。また，生息地周辺での農薬散布にも配慮が求められる。伊賀市の生息地は，池に堆積した土砂を取り除くなど復元作業が必要である。

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
VU

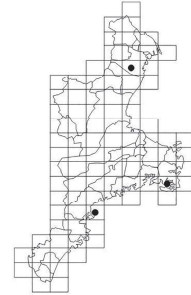
ムツボシツヤコツブゲンゴロウ
Canthydrus politus (Sharp)

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科

【選定理由】現存産地5未満。生息環境が脆弱である。
 【種概要】体長2.4~2.6 mm。日当たりがよく水生植物の多い池沼に見られる。
 【分布】本州、四国、九州、トカラ列島。朝鮮半島、中国。三重県では四日市市、志摩市、紀北町で確認されている。
 【現況・減少要因】四日市市では2024年に灯火に飛来した1例があるが、周辺の湿地はすでに埋め立てられることが決まっているらしい。志摩市の海跡湖では2005年までは非常に個体数が多かったが、アメリカザリガニの侵入後に急速に減少し、近年は確認できない。紀北町の生息地は現在も生息するが、すでにアメリカザリガニが侵入しており、個体数は少ない。アメリカザリガニは、直接本種を捕食するだけでなく、水草の減少や、水質の悪化を招く。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除することである。生息地周辺での農薬散布には配慮が求められる。
 【文献】11, 12, 125, 268.

(秋田勝己)

(写真：四日市市，2024年，稲垣政志採集・撮影)



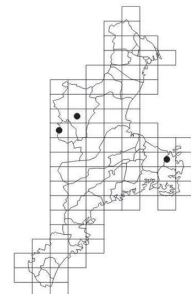
三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	VU

チビマルケシゲンゴロウ
Hydrovatus pumilus Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】現存産地5未満。生息環境が脆弱である。
 【種概要】体長1.6~1.8 mm。日当たりがよく水生植物の多い池沼や浅い湿地に見られる。イネ科、カヤツリグサ科植物根際のデトリタス内から発見される。
 【分布】本州、九州、南西諸島。東南アジア、南アジア。三重県では伊賀市、名張市、鳥羽市で記録されている。
 【現況・減少要因】2008年に得られたのが最初であるから、過去の分布状況は不明である。しかし、本種の生息に適した環境は現在ほとんど残されておらず、その多くの産地はすでに消失しているものと思われる。いずれの生息地も樹林に接しており、集水域には民家や農地がなく、農薬などの影響を受けない。しかし、浅い溜池や湿地はそのままでは近い将来に植物遷移が進行し、陸地化してしまうことが予想される。また、すでにアメリカザリガニが侵入している産地もある。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除するとともに、産地の植物遷移が進行しないように除草するなどの管理が必要であろう。生息地周辺での農薬散布には十分な配慮が必要である。
 【文献】460.

(秋田勝己)



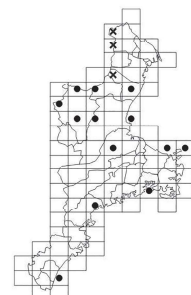
三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

ケシゲンゴロウ
Hyphydrus japonicus Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】山地を除く県下全域にかつては普通に見られたものの、近年はほとんど見られない。
 【種概要】体長3.8~5.0 mm。池沼、水田など浅い止水域に生息。幼虫はカイミジンコ類を専食する。灯火に飛来する。
 【分布】北海道、本州、四国、九州、南西諸島。朝鮮半島、中国。県内ではいなべ市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市、津市、伊勢市、鳥羽市などで記録。
 【現況・減少要因】少なくとも1980年代までは、県内各地の水田、休耕田、浅い池沼などで普通に見られた。近年、急速に減少し、2000年以降は鈴鹿市、津市、伊賀市、鳥羽市などでわずかに確認されているのみ。2020年以降、確認できたのは、伊賀市の溜池1か所のみで個体数も少なく、近い将来の絶滅が強く危惧される。農薬散布、アメリカザリガニなど捕食性外来生物の侵入などがその要因として考えられるが、近年の急激な減少は本種の感受性が高い農薬が使用されるようになったことが強く疑われる。
 【保護対策】現在残されている生息地周辺での農薬使用には十分な配慮が求められる。また、溜池周辺の立木伐採など溜池の適切な管理が求められる。
 【文献】89, 90, 258, 260, 304, 359, 361, 370, 372, 386, 387, 390, 391.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	EN
環境省 2020	NT

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 苔苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 藓苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

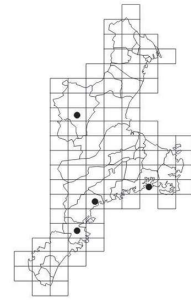
ヒメケシゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hyphydrus laevis Sharp

【選定理由】現存する生息地点が1。生息環境が悪化している。
 【種概要】体長4.3~5.0 mm。池沼、放棄水田、湿地などの止水域に生息する。カイミジンコ類を専食する。
 【分布】日本固有種。本州、四国、九州。県内では鈴鹿市、津市、伊賀市、志摩市、南伊勢町、紀北町、尾鷲市で確認されている。
 【現況・減少要因】2020年以降に生息が確認できたのは紀北町の手跡湖1か所のみである。池の埋め立て（伊賀市）、湿地の消失（南伊勢町）などにより、生息地自体がなくなったものがあるが、アメリカザリガニが侵入、繁殖によって絶滅したと考えられる生息地（津市、伊賀市など）もある。また、同属のケシゲンゴロウ同様に、近年の農薬に対する感受性が非常に高い可能性がある。残された生息地も今後、アメリカザリガニの侵入、農薬や生活排水の流入、埋め立て、護岸工事などによる生息環境の悪化が心配される。
 【保護対策】生息地周辺での農薬散布はしないこと。アメリカザリガニの侵入は大きな脅威となりえるので、侵入した場合は駆除するなどの対応が求められる。
 【文献】90, 202, 361.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	EN
環境省 2020	VU

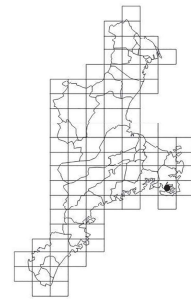
オオマルケシゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hydrovatus bonvouloiri Sharp

【選定理由】現存産地1。生息環境の悪化により個体数が激減した。
 【種概要】体長3.0~3.8 mm。池沼の水生植物の多い水域に見られる。
 【分布】本州、四国、九州、南西諸島。国外では東南アジアに広く分布する。国内の産地は極めて局地的で個体数も少ない。三重県では志摩市の手跡湖に唯一の生息地がある。
 【現況・減少要因】志摩市の産地では2005年までは、比較的個体数が多かった。しかし、その後、アメリカザリガニの侵入、繁殖により、個体数は激減した。アメリカザリガニの直接の捕食のほか、アメリカザリガニの摂食などによる水生植物の減少も大きく影響しているものと考えられる。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除することである。2007年に駆除作業を行ったが、池の規模が大きいこともあって、根絶は非常に困難であると思われる。また、周辺の耕作地での農薬散布には配慮が求められる。
 【文献】13, 125, 268.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	EN
環境省 2020	NT

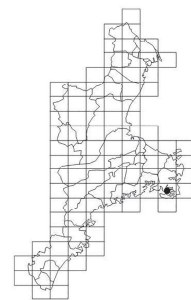
ヤギマルケシゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hydrovatus yagii Kitayama, Mori et Matsui

【選定理由】現存産地1。生息環境の悪化により個体数が激減した。全国的にも既知産地は10地点程度である。
 【種概要】体長1.7~1.8 mm。池沼の浅瀬の水生植物の多い水域に見られる。
 【分布】日本固有種。本州、奄美大島、石垣島、西表島で記録があるが、産地は極めて局地的。三重県では志摩市の手跡湖に唯一の生息地がある。
 【現況・減少要因】志摩市の産地では2005年までは、比較的個体数が多かった。しかし、その後、アメリカザリガニの侵入、繁殖により、個体数は激減した。アメリカザリガニの直接の捕食のほか、水生植物の減少も大きく影響しているものと考えられる。現在は、ほとんど見ることができない。
 【保護対策】アメリカザリガニを駆除することである。2007年に駆除作業を行ったが、池の規模が大きいこともあって、根絶は不可能であると思われる。周辺の耕作地での農薬使用にも配慮が必要である。
 【文献】13, 125, 202, 460.

(秋田勝己)



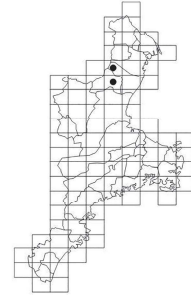
三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	NT

ヒメシマチビゲンゴロウ
Nebrioporus nipponicus (Takizawa)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 既知生息地点が5未満。近年激減した。
 【種概要】 体長4.4~5.2 mm。河川中流の水質がよく、緩やかな細流に生息する。灯火にも飛来する。
 【分布】 日本固有種。本州、四国。三重県では、四日市市、亀山市、鈴鹿市で記録される。いずれも鈴鹿山脈を源流にもつ河川中流域で、三重県中部から南部の河川では発見できない。
 【現況・減少要因】 2000年代の記録は四日市市、鈴鹿市のみである。内部川は1990年代に多産したが、2005年には生息地点のすぐ上流で河川改修工事を行っており、生息地周辺の水がなくなっていた。鈴鹿川の生息地では2021年までは確認されていたが、それ以降は発見されない。河川の改修や農薬流入などの汚染は直接本種の絶滅に結びつくものと思われる。
 【保護対策】 生息地周辺では河川の改修などをおこなわない、生息地周辺での農薬使用を行わないことである。
 【特記事項】 かつては、コシマチビゲンゴロウ *N. hostilis* (Sharp) と混同されていた。この種は、九州の固有種である。近年の記録でもコシマチビゲンゴロウとして記録されているものは、本種の誤同定であると思われる。
 【文献】 12, 71, 260, 442.

(秋田勝己)



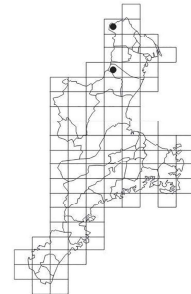
三重県 2025	CR
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

ゴマダラチビゲンゴロウ
Neonecte natrix (Sharp)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 既知生息地点が5以下。激減している。
 【種概要】 体長2.9~3.7 mm。水質がよい河川中流に生息する。灯火にも飛来する。
 【分布】 北海道、本州、四国、朝鮮半島、中国北部、ロシア沿海州。三重県では、いなべ市（員弁川）、四日市市（内部川）、鈴鹿市（御幣川）で記録される。いずれも鈴鹿山脈を源流にもつ河川で、三重県中部から南部の河川では発見できない。
 【現況・減少要因】 員弁川は1950年代の記録である。内部川は1990年代に多産したが、2005年には生息地点のすぐ上流で河川改修工事を行っており、生息地周辺の水がなくなっていた。現在も生息しているが、個体数は少ない。御幣川も1990年代には多産していたが、現在は殆ど見られない。河川改修や耕作地からの農薬を含んだ排水などによる汚染は直接本種の絶滅に結びつくものと思われる。
 【保護対策】 生息地の上流での農薬散布には配慮が必要。生息地周辺では河川の改修などをおこなわないことである。
 【特記事項】 内部川、御幣川ではヒメシマチビゲンゴロウと混生していた。
 【文献】 12, 277, 390.

(秋田勝己)



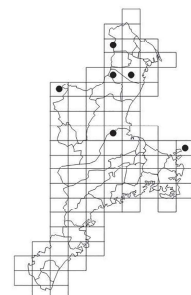
三重県 2025	CR
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

コウバツブゲンゴロウ
Laccophilus kobensis Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 現存する既知生息が5未満。近年激減している。
 【種概要】 体長3.4~3.8 mm。水深の浅い池沼、放棄水田などに生息。
 【分布】 本州、四国、九州、石垣島、西表島。中国。県内では菰野町、鈴鹿市、津市、鳥羽市で記録があるほか、伊賀市、鳥羽市（答志島）で確認。
 【現況・減少要因】 津市では河川敷の湿地にみられたが、周辺環境が大きく変わり見られなくなった。1990年代には伊賀市の山間にある水田や休耕田で比較的良好に見られる種であったが、休耕田の植物遷移が進んだこと、水田にはアメリカザリガニが侵入したこと、近年の農薬などによって、現在ではほとんど見られなくなった。答志島でも生息地周辺の水田耕作がなされなくなっており、いずれ植物遷移の進行によってその生息地も消失してしまう可能性が高い。2020年以降に確認できたのは、伊賀市と津市の2か所だけである。
 【保護対策】 生息地周辺では農薬散布をしないことである。生息地の池や水田にアメリカザリガニが侵入しないように対策を講じる。生息地周辺の水田のザリガニを駆除し、無農薬で水田耕作をすることによって個体数の回復は図られるものと思われる。
 【文献】 260, 268, 361, 396, 398.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	VU
環境省 2020	NT

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 苔苔類
- 藻類
- キノコ

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

イガツブゲンゴロウ

Laccophilus shinobi Yanagi et Akita

コウチュウ目 ゲンゴロウ科



【選定理由】 既知生息地が5以下。生息地が局限される。
【種概要】 体長4.1~4.3 mm。ルイスツブゲンゴロウに酷似するが、♂交尾器形態や斑紋が異なる。後翅が退化傾向にある。水質が良い溜池に生息する。新成虫は初夏から夏にかけて出現する。

【分布】 日本固有種。本州。三重県の伊賀盆地に固有の種で、他県からの記録はない。

【現況・減少要因】 伊賀市の数か所の溜池で発見されている。しかし、確認されている池の多くは、すでにアメリカザリガニが侵入している、いずれの池も集水域に耕作地や民家はないが、周辺水田への農薬散布は脅威である。また、溜池が管理されなくなると、池畔が日陰になって、水草がなくなったり、植物遷移が進行してしまったりする。さらに、最近では、防災上の理由から、「池じまい」をして、溜池そのものをなくしてしまうことも増えた。

【保護対策】 生息地周辺での農薬および除草剤の不使用が強く求められる。行政が地元地権者と連携して保全を行うことが求められる。

【特記事項】 2021年に新種記載された種である。それまでは、ルイスツブゲンゴロウとして扱われていた。和名は「伊賀」、学名は「忍び=忍者」に因む。

【文献】 444.

(秋田勝己)

ニセコウベツブゲンゴロウ

Laccophilus yoshitomii Watanabe et Kamite

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 既知生息地が1。生息地が局限され、今後の環境変化によって、絶滅する可能性がある。

【種概要】 体長3.4~3.8 mm。コウベツブゲンゴロウに酷似する。水深の浅い止水で見られる。

【分布】 日本固有種。本州、四国、九州。三重県では津市美杉町の湿地で発見された。

【現況・減少要因】 樹林に囲まれた湿地内のごく小さな池で発見された。周囲に耕作地はなく、農薬流入の恐れは小さい。また、アメリカザリガニは未侵入である。しかし、湿地自体は、植物遷移が進行しており、今後の環境悪化が強く懸念される。

【保護対策】 湿地の部分的な除草をするとともに、一部を掘り下げて、小さな池を作ることで保全は図られる。

【特記事項】 2018年に新種記載された種である。それまでは、コウベツブゲンゴロウと混同されていた。

【文献】 461.

(秋田勝己)

チンメルマンセスジゲンゴロウ

Copelatus zimmermanni Gschwendtner

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

【選定理由】 既知生息地が1。生息基盤が脆弱で、近年の記録がない。

【種概要】 体長5.3~5.5 mm。植物が豊富な池沼に生息する。分布域は広いものの、生息地はわずかである。

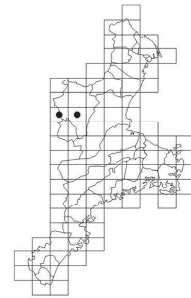
【分布】 本州、九州、南西諸島。中国。県内では紀北町海山区で1例の記録があるのみである。

【現況・減少要因】 1998年に1頭が得られているのみで、その後の数度にわたる調査では発見することができなかった。記録地の池は、アメリカザリガニやオオクチバスが侵入しており、この産地ではすでに絶滅している可能性がある。

【保護対策】 まずは生息地の発見に努めることである。

【文献】 258.

(秋田勝己)



三重県 2025

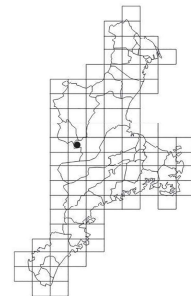
CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—



三重県 2025

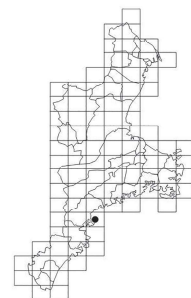
CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

カンムリセスジゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Copelatus kammuriensis Tamu et Tsukamoto

【選定理由】 既知生息地が1. 生息地が局限され、今後の環境変化によって、絶滅する可能性がある。

【種概要】 体長4.6~5.6 mm. 水深の浅い不安定な止水域で発見されることが多い。

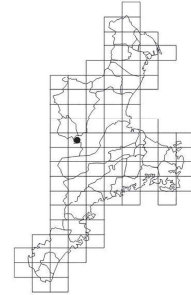
【分布】 日本固有種. 本州, 四国, 九州. 三重県では津市美杉町の湿地で発見された。

【現況・減少要因】 樹林に囲まれた湿地内のごく小さな池で発見された。周囲に耕作地はなく、農薬流入の恐れは小さい。また、アメリカザリガニは未侵入である。しかし、湿地自体は、植物遷移が進行しており、今後の環境悪化が強く懸念される。

【保護対策】 湿地の部分的な除草をするとともに、一部を掘り下げて、小さな池を作ることで保全は図られる。

【文献】 446.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

キバリクロヒメゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Ilybius apicalis Sharp

【選定理由】 近年の減少傾向が著しい。

【種概要】 体長8.0~10.0 mm. 泥深く、ヨシやガマなどが生えた池沼に生息。

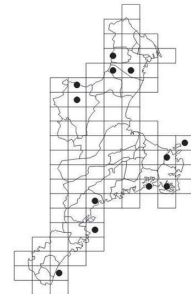
【分布】 北海道, 本州, 四国, 九州, トカラ列島. 朝鮮半島, 中国. 県内では平地から丘陵地にかけて広く分布していたものと思われ、菰野町, 四日市市, 鈴鹿市, 伊賀市, 伊勢市, 南伊勢町, 鳥羽市, 志摩市, 紀北町, 尾鷲市, 御浜町で記録。

【現況・減少要因】 県内各地の池沼に普通に見られた種である。2000年以降の生息情報があるのは、鈴鹿市, 志摩市, 鳥羽市(答志島), 尾鷲市であるが2015年以降に確認できたのは、鳥羽市(答志島)のみ。生息地の多くは埋め立てや護岸改修がされた。また、農薬や生活排水などの流入による汚染も進んだ。志摩市の海跡湖や伊賀市の溜池では、アメリカザリガニの侵入後に生息が確認できなくなった。アメリカザリガニが侵入すると、真っ先に消えてしまう種の一つである。

【保護対策】 生息地周辺での農薬使用を控える。また、答志島の生息地は繁茂しすぎた植物の除去なども求められる。残された生息地にはアメリカザリガニが新たに侵入しないような方策が必要であろう。

【文献】 13, 21, 69, 86, 90, 99, 259, 260, 370, 372.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

セスジマルドロムシ

コウチュウ目 マルドロムシ科

Georissus (Nipponogeorissus) granulatus M. Satô

【選定理由】 既知生息地が2だが、現存産地は1. 他府県からの記録もない。

【種概要】 体長1.6 mm. 河川下流の感潮域に生息。干潮時に湿った礫混じりの砂上で活動する。灯火に飛来することがある。

【分布】 日本固有種. 本州. 津市安濃川, 伊勢市宮川の下流で記録されている。他県からの記録はない。

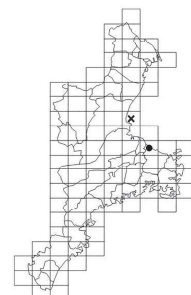
【現況・減少要因】 津市の記録は1958年のもので、2008年に宮川で再発見されるまでは、これが本種の唯一の記録であった。安濃川には記録地点より下流に潮止堰が作られていることから本種は生息しえない。宮川の生息地は中洲周辺の河口干潟で、幅数m, 長さ20 mほどの間でのみ確認することができた。しかし、2020年以降は確認されていない。今後の河川改修などによって簡単に絶滅してしまう恐れがある。

【保護対策】 生息地周辺での河川改修などを行わないことである。農薬を含んだ農業廃水の河川への流入も心配される。また、灯火に誘引されてしまうことから、生息地周辺における照明にも配慮するべきである。

【特記事項】 津市が本種のタイプロカリティ。宮川河口干潟が現在のところ世界唯一の現存既知生息地。クロシオガムシと混生する。

【文献】 14, 86, 348, 351.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

コガタノゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Cybister tripunctatus lateralis (Fabricius)

【選定理由】既知の生息地点は10以下。九州、四国、中国地方西部では本種が増加傾向ではあるが県下では2011年に記録されたがその後は途絶えている。

【種概要】体長24~29 mm. 長円形でやや扁平で背面は緑から褐色を帯びた黒色で光沢がある。裏面は暗赤褐色。平地や丘陵地の水生植物の多い池沼、湿地や水田およびその脇の水路などで生息する。

【分布】本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。県内では鈴鹿市、伊賀市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、鳥羽市、御浜町で記録されている。

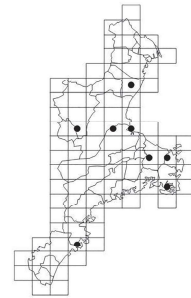
【現況・減少要因】池沼、湿地の開発、圃場整備、ため池や水路の近代的護岸整備、水質汚染、侵略的外来種の侵入などが影響している。

【保護対策】侵略的外来種であるアカミミガメ、オオクチバス、ブルーギル、コイ、ウシガエル、アメリカザリガニなどの駆除、新たに侵入させない等の積極的な保全策が望まれる。水辺のエコトーンを重視する環境保全を行う。

【文献】11, 21, 32, 257, 260, 300, 361, 371, 388.

(乙部 宏)

(写真：志摩市，1956年，大川親雄採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

ゲンゴロウ (オオゲンゴロウ)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Cybister japonicus Sharp

【選定理由】既知の生息地点は10以上あるがほとんど消滅し2014年の津市での報告以降から記録が途絶えており絶滅している可能性が高い。

【種概要】国内に生息するゲンゴロウ類最大種で体長34~42 mm. 産卵対象となる水生植物が多い池沼や休耕地などに生息。灯火にも集まる。

【分布】北海道、本州、四国、九州。三重県では桑名市から熊野市まで記録されている。

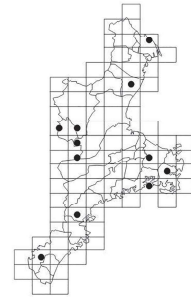
【現況・減少要因】圃場整備、開発、農薬や生活排水などの汚染、侵略的外来種（アカミミガメ、オオクチバス、ブルーギル、コイ、ウシガエル、アメリカザリガニなど）の捕食圧と水生植物などへの食害による消失、またアメリカザリガニは水質、底泥も悪くし水生植物の再生をも阻んでいる。

【保護対策】2014年の確認された沼は、執筆時現在でもアメリカザリガニなどの外来種が奇跡的に侵入していないが近くまで開発が迫っている。少なくとも周辺環境を含めた沼を行政主導で保護すべきである。アメリカザリガニの捕食圧は周知ではあるがそれに伴い水質、底泥も著しく悪くするため、駆除しても止水域では水質、底泥が復元するには年単位の時間が要する。

【文献】11, 32, 126, 257, 260, 310, 358, 361, 368, 511.

(乙部 宏)

(写真：津市，2014年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

チュウブホソガムシ

コウチュウ目 ホソガムシ科

Hydrochus chubu Balfour-Brown et M. Satô

【選定理由】既知の生息地点が3。うち1はすでに絶滅していることが確認されている。全国的にも産地は極限される。

【種概要】体長2.4~2.5 mm. 水質がよく水草の豊富な浅い池に生息する。

【分布】日本固有種。本州、四国、九州。全国でも現存生息地点は20か所未満であると思われる。三重県では、1957年に四日市市尾平山で採集されたものが唯一の記録であったが、この産地はすでに消失している。県内からは絶滅したものと考えられていたが、2011年に伊賀市で発見された。

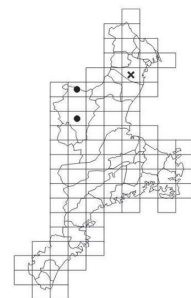
【現況・減少要因】いずれも小規模な池が唯一の生息地である。近接する休耕地では、アメリカザリガニの侵入が確認されており、危機的な状況にあるものと考えられる。他県ではアメリカザリガニの侵入後に池の植生が破壊され、本種が絶滅してしまった例が知られている。

【保護対策】池を含む里山環境の保全。アメリカザリガニやコイ、ブルーギルなどの侵入を阻止し、侵入してしまった場合はすみやかにそれらを駆除すること。

【特記事項】四日市市尾平山は、本種のタイプ産地である。

【文献】22, 350, 354.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

ヤマトホソガムシ

Hydrochus japonicus Sharpô

コウチュウ目 ホソガムシ科

【選定理由】現存生息地が5未満。生息環境の悪化し、近年激減している。
【種概要】体長2.6~3.1 mm。植物が多い浅い湿地で見られる。灯火に飛来する。

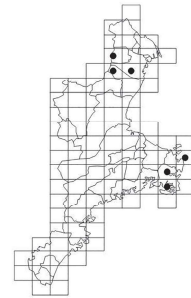
【分布】本州，四国，九州，南西諸島。台湾，中国，東南アジア。三重県では，四日市市，菰野町，鈴鹿市，鳥羽市，志摩市，御浜町で記録されている。

【現況・減少要因】1990年代までは，平野部の水田地帯では比較的普通に見られた種であったと思われる。しかし，水田の耕地整理，乾田化，農薬使用，アメリカザリガニの侵入などによって，生息地は激減したものと考えられる。2010年以降の記録は殆どなく，かなり危機的な状況にあるものと考えられる。確実な現存生息地は鳥羽市で，アメリカザリガニが未侵入の休耕田である。しかし，周辺でもすでに水田耕作はしておらず，いずれ植物遷移の進行とともに消失するものと考えられる。

【保護対策】まずは，湿地環境の復元である。アメリカザリガニの駆除と生息地周辺での農薬の不使用が求められる。

【文献】21, 89, 260, 268, 390, 396, 398.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

ニセコクロヒラタガムシ

Chasmogenus orbis (Watanabe)

コウチュウ目 ガムシ科

【選定理由】既知生息地が1。生息環境が悪化している。

【種概要】体長3.3 mm。コクロヒラタガムシに酷似するが，♂交尾器形態で区別される。抽水植物が多いごく浅い湿地で見られる。

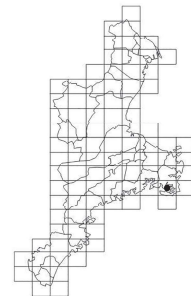
【分布】北海道，本州，九州。中国。三重県では志摩市で確認されている。

【現況・減少要因】志摩市の海跡湖で記録されるのみである。岸辺の厚く植物遺骸が堆積したごく浅い湿地に生息している。この海跡湖は，非常に多くの希少種が生息していたが，アメリカザリガニの侵入，繁殖後にその多くは激滅もしくは絶滅した。本種は，ごく浅いところの植物遺骸の中に生息するためか，現在でも生息している。しかし，周辺環境は悪化している。

【保護対策】生息地周辺の農地や住宅から，汚水や農薬が流入しないようにする。また，アメリカザリガニの駆除も必要だろう。

【文献】462.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ガムシ (オオガムシ)

Hydrophilus acuminatus Motschulsky

コウチュウ目 ガムシ科

【選定理由】緩やかな流れの水路や池沼，水田，放棄水田で見られたが近年の減少率は非常に高く深刻な状況である。

【種概要】体長33~40 mm。体形は紡錘形で体色は黒色で国内最大のガムシ類である。灯火にもよく集まり成虫は水草類を食すが幼虫はモノアライガイ（環境省：NT），サカマキガイなどを捕食する肉食である。

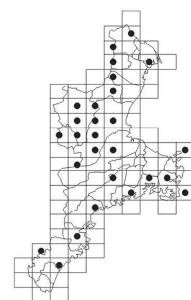
【分布】北海道，本州，四国，九州。三重県ではいなべ市，桑名市，菰野町，四日市市，鈴鹿市，亀山市，伊賀市，名張市，津市，松阪市，大台町，伊勢市，志摩市，鳥羽市，南伊勢町，紀北町，尾鷲市，御浜町で記録されている。

【現況・減少要因】圃場整備や池沼の護岸工事，農薬や生活污水などによる水質悪化。侵略的外来種の侵入などの影響が高い。

【保護対策】生息地の水辺の移行帯は破壊しない環境保全を行い，生活污水や薬剤などの流入を防ぎ，侵略的外来種は駆除する。

【文献】73, 79, 80, 89, 90, 99, 111, 126, 255, 257, 259, 260, 261, 268, 272, 304, 344, 352, 355, 357, 358, 359, 371, 372, 374, 387, 390, 463.

(乙部 宏)



三重県 2025

CR

三重県 2015

NT

環境省 2020

NT

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

(写真：いなべ市，1990年，乙部宏採集)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

オオトゲバゴマフガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

Berosus (Enoplurus) incretus d'Orchymont

【選定理由】 知生息地が1. 近年の生息情報がない。
【種概要】 体長4.2~5.8 mm. 水田などの浅く開放的な水域に生息する. 灯火に飛来する.

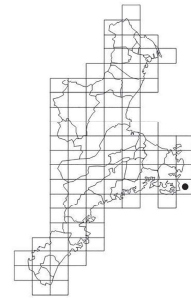
【分布】 本州, 四国, 九州, 南西諸島. 国外では中国から東南アジアにかけて広く分布する. 九州以北での記録は数例にすぎない. 三重県では志摩市大王町の記録が唯一のものである.

【現況・減少要因】 1996年に採集された記録が唯一で, その後, 発見されていない. この時代に県下のほぼ全域でごく普通に見られた同属のゴマフガムシやヤマトゴマフガムシなども近年は減少傾向が顕著なことから, 同じような環境に生息し, 生息地が極限される本種はすでに絶滅している可能性が否定できない. 近年使用されるようになった農薬, アメリカザリガニの侵入などが, その主な要因と考えられる.

【保護対策】 現在生息地が発見された場合, 周辺で農薬を使用しないことと, 休耕田の除草を進めるなど, 湿地環境の回復につとめるなど積極的な保全策が求められる.

【文献】 288, 446.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

DD

環境省 2020

オオクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科

Dorcus hopei binodulosus Waterhouse

【選定理由】 既知の生息地点数5以下. 生息環境の悪化により危機的な状況に陥っている.

【種概要】 体長♂30~75 mm, ♀30~45 mm. 5~9月にかけて夜間クヌギなどの樹液に集まる. 幼虫は白色腐朽菌によって腐朽した朽木を食する.

【分布】 北海道(渡島半島), 本州, 四国, 九州, 対馬. 朝鮮半島, 中国. 県内では“伊賀地方”, 桑名市, 松阪市, 明和町から記録される.

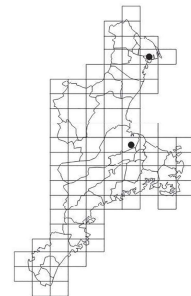
【現況・減少要因】 “伊賀地方”の記録は, 1940年のもので, 具体的なデータを伴わないものの実際に生息していた可能性は高い. 桑名市, 松阪市周辺では1990年代までは, 確実に生息していた. 近年も, 僅かながら生息情報はあり津市からも記録されたが, 飼育個体の逸出に由来するものである可能性が否定できない. 水田の畔やクリークに台木(ハサ木)として残されたクヌギやエノキ, また河畔林で見られたが水田は耕地整理が進み, 現在, 台木自体がほぼ見られない. また, 河畔林の伐採も進行した.

【保護対策】 生息の可能性が残る河畔林の伐採を行わない. ペットとして, 国外や国内他産地の個体が大量に飼育販売されており, 逸出個体による遺伝子汚染が危惧される.

【文献】 6, 11, 26, 198, 550, 551.

(乙部 宏・秋田勝己)

(写真: 松阪市, 1985年, 乙部宏採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

ヒメオオクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科

Dorcus montivagus (Lewis)

【選定理由】 既知の生息地点数は5以下であり, 台高山系の極めて限られた地域に生息する. 分布の限界産地のため, 個体数も少ない. 特に標高1,000m前後に生息する個体群はブナ帯が植林によって分断されており, 小規模な伐採でも絶滅してしまうおそれが高い. また, 紀伊半島に生息する本種は他地域から隔離された遺存個体群として極めて貴重である.

【種概要】 体長25~38 mm. 自然度の高いブナ帯で見られる. 幼虫は主にブナの太い倒木や立ち枯れなどの朽ちた部分を食し, 成虫は夏から秋にかけてヤナギ類やハンノキ類などの樹皮を噛み, その傷跡の樹液に集まる.

【分布】 北海道(南部), 本州, 四国, 九州. 県内では津市, 松阪市, 大台町.

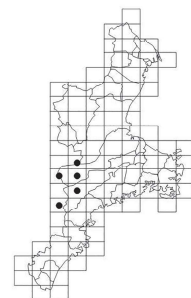
【現況・減少要因】 本種は自然純度の高い湿潤な森林環境でしか生息できない. ブナ林などの伐採による森林の減少とニホンジカの食害により林床植生が荒廃し林内の乾燥化が減少要因として考えられる.

【保護対策】 自然林の伐採は行わない. 生息地の一部は風力発電施設の計画が保留されているが開発は中止する. ニホンジカの駆除も早急におこなう.

【文献】 5, 26, 271, 312, 391.

(乙部 宏)

(写真: 大台町, 1980年, 乙部宏採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

キイニセコルリクワガタ (キイルリクワガタ) コウチュウ目 クワガタムシ科
Platycerus akitaorum Imura

【**選定理由**】既知の生息地点数は5以下。軽微な生息環境の変化で絶滅してしまう恐れがある。近年減少傾向が著しい。

【**種概要**】体長8~11 mm。標高1,200 m以上の自然度の高い落葉広葉樹林に生息。成虫は5~6月に出現し、日中トネリコ類、ミズナラ、ブナなどの新芽に集まる。幼虫は地表に落ちた広葉樹の湿潤な枯れ枝を食する。

【**分布**】日本固有種。本州（紀伊山地）。県内では松阪市、大台町、紀北町、尾鷲市で記録されており、例外的に標高1,000 m付近でも発見されている。

【**現況・減少要因**】本種の生息地はブナを主体とした良好な落葉広葉樹林に局限される。そのため伐採による自然林の消失と森林の乾燥化は本種の生息にとって大きな脅威である。安定した産地と思われがちな大台ヶ原の特別保護区内においてもニホンジカによる食害による林床の乾燥化、夏季高温化と冬季積雪量の減少、ブナ林の更新停滞等が深刻で、減少が著しい。

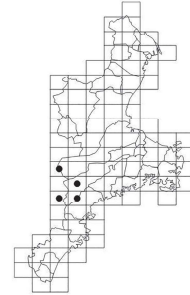
【**保護対策**】ニホンジカによる食害を防止する。自然林が多く残された地域での風力発電設備の設置等の人為的環境変化の回避、保全対策が急務。

【**特記事項**】紀伊山地の固有種。

【**文献**】5, 26, 100, 183, 552.

(乙部 宏・秋田勝己)

(写真：大台町，2000年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

マメクワガタ コウチュウ目 クワガタムシ科
Figulus punctatus Waterhouse

【**選定理由**】県内の産地は本州における分布の東限であり、既知産地は1地点のみである。

【**種概要**】体長8~12 mm。本州南岸、四国、九州、南西諸島や周辺離島の、主として海岸近くの照葉樹林に生息する。種としての分布は広いが、いずれの産地も局地的である。国外では台湾に分布する。

【**分布**】県内では熊野市楯ヶ崎周辺の極めて限られた地域のみで記録されている。周辺地域でも精力的な調査が行われているが、現時点では他の産地は発見されていない。

【**現況・減少要因**】楯ヶ崎周辺では比較的硬い広葉樹の腐朽木（白色・褐色腐朽）に穿孔している。特に樹皮が多く残存し、直径5~15 cm程度の接地材を好むようである。分布域が極めて狭いため、台風等の自然災害を含め、局地的な環境の変化でも深刻なダメージを受けることが懸念される。生息地点では近年シカによる下層植生の食害が著しく、地表の乾燥化でホスト材に適した腐朽材が減少し、個体群の存続にとって危機的状況である。

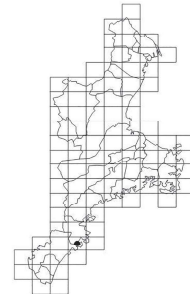
【**保護対策**】分布域周辺の環境変化をできるだけ避け、シカの個体数管理を適切に行う必要がある。

【**特記事項**】生息範囲は全域吉野熊野国立公園に含まれる。

【**文献**】170.

(久保田耕平)

(写真：熊野市，2022年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

マグソクワガタ コウチュウ目 クワガタムシ科
Nicagus japonicus Nagel

【**選定理由**】既知の生息地点が1。

【**種概要**】体長8.0~9.5 mm。河川の砂地に生息。晩春に出現し、雄は地表近くを日中活発に飛翔する。幼虫は砂中に埋没した朽木を食し、幼虫で2回、蛹室内の成虫で1回越冬する。

【**分布**】日本固有種。北海道、本州。分布は局限され、紀伊半島では奈良県の1か所と三重県のみ産する。県内では津市美杉町から記録される。

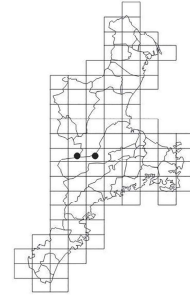
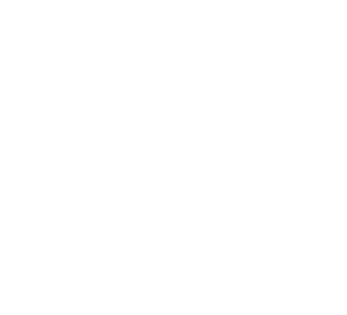
【**現況・減少要因**】雲出川では、1990年代では数地点で発生が見られ、個体数も多かったが、河川改修と道路の拡幅工事によってその多くが破壊された。また、植物遷移がすすみ、同時に砂中に朽木が新たに提供されなくなったことにより、消失した発生地もある。確認できたのは2010年が最後で、2012年以降の調査では発見できず、雲出川流域ではすでに絶滅している可能性が高い。

【**保護対策**】生息地周辺では河川改修を行わない。洪水がおこることによって、幼虫の餌となる埋没木が提供され、成虫が活動する砂地も維持されることから、生息地上流にダムや砂防ダムを建設しない。

【**特記事項**】本属はユーラシア大陸からは未発見。他に北アメリカに2種が知られるだけの特異なクワガタムシである。

【**文献**】4, 12, 132.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ツヤハダクワガタ (ミヤマツヤハダクワガタ) コウチュウ目 クワガタムシ科
Ceruchus lignarius monticola Nakane

【選定理由】既知の生息点数は5以下。自然純度の高い台高山系の限られた高標高地域に生息し、個体数も少なく生息環境の変化でも絶滅してしまう可能性がある。

【種概要】体長11~14 mmほど。艶のある黒色で筒型の体形でブナ帯のブナ、ミズナラ、カツラなどの大径の倒木、立ち枯れなどの褐色腐朽菌におかされた材内部で見つかる。

【分布】北海道、本州、四国、九州。三重県では松阪市、大台町で記録されている。

【現況・減少要因】本種は標高1,000m以上の自然度の高いブナ林の減少とニホンジカの食害による林床の乾燥化が影響を与えている。

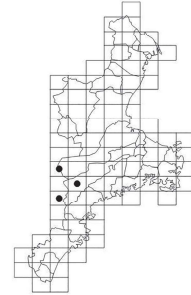
【保護対策】執筆時点では、この山系の稜線部には風力発電計画があり中止決定がまだされていないのが最大の懸案である。あとニホンジカの駆除をして自然林の保全をおこなう。

【特記事項】現在3亜種に分類されており三重県はミヤマツヤハダクワガタに分類される。

【文献】4, 26, 311.

(乙部 宏)

(写真：大台町，1985年，乙部宏採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

ヒメコエンマコガネ コウチュウ目 コガネムシ科
Caccobius brevis Waterhouse

【選定理由】既知の生息地点は2か所のみ。1980年の伊勢神宮の調査後長らく記録が途絶えていたが、2004年に尾鷲市にて1頭採集された。

【種概要】体長3.5~5.5 mm。平地のオープンランドに生息し、新鮮な鹿、牛、馬、犬糞に集まる。

【分布】本州、四国、九州、対馬、屋久島。国外では济州島、朝鮮半島、中国東北部、シベリア東部。県内では伊勢神宮と尾鷲市の2地点のみ。

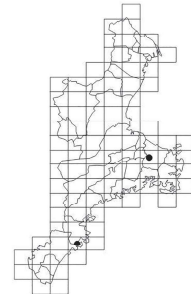
【現況・減少要因】同一産地を調査したが、追加記録は得られなかった。平地の放牧地の消滅が本種の生息を困難にしている。

【保護対策】その後の調査によっても生息状況が不明なので、緊急な調査と生息環境の保全が望まれる。

【文献】117, 357.

(稲垣政志)

(写真：尾鷲市，2004年，市橋甫採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

ヤマトエンマコガネ コウチュウ目 コガネムシ科
Onthophagus japonicus Harold

【選定理由】既知の生息地点数は5以下。以前は本州各地に分布していたが、現在では滋賀県信楽町と伊賀市の隣接する地域が全国で唯一残された生息地となっていたが後に僅かながら他県でも再発見されている。

【種概要】体長7~11 mm。食糞コガネの仲間では中型種である。春と秋の日中に飛翔し、日当たりの良い動物の糞に集まる。成虫はその糞を地中に運び産卵する。

【分布】本州、佐渡。県下では伊賀市（旧阿山町）。

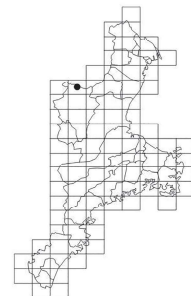
【現況・減少要因】過去には奈良県春日公園が多産地として知られていたが現在も環境は残っていると思われるものの現在では絶滅しており、その要因は不明である。滋賀県で再発見されてからその後の調査で県内でも生息しているのが確認された。犬糞にも集まることからペットの駆虫剤の影響も受けている可能性が高い。

【保護対策】現存する生息地は農山村の環境であるので開発などは配慮し、今の環境を維持する。生息地周辺はアカマツ林が多いことから松枯れ対策目的の農薬空中散布などは注意が必要である。

【文献】147, 320, 377, 378.

(乙部 宏)

(写真：伊賀市，1997年，乙部宏採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
NT

マルエンマコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Onthophagus (Gibbonthophagus) viduus Harold

【選定理由】既知の生息地点は5以下である。南西諸島を除いて、全国的に激減しており、特に最近の本州の記録は途絶えていて、唯一三重県での記録が知られているだけである。

【種概要】体長5.0~9.8 mm。河川敷や放牧地などのオープンランドで見つかる。新鮮な牛糞を好み、人、犬の糞や腐敗物にも集まる。

【分布】北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、屋久島、種子島、沖縄。海外では済州島、朝鮮半島、中国。県内では、鈴鹿市、名張市、津市、尾鷲市。

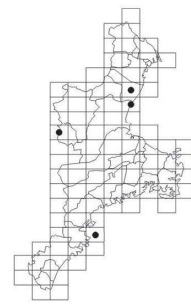
【現況・減少要因】平地の放牧地の消滅。河川敷、海岸での犬糞の持ち帰り運動などの環境美化の影響により糞資源が枯渇した。

【保護対策】生息地の保全。適度な糞資源の供給（特に犬糞）。

【文献】62, 109, 115, 147, 217, 257, 376。

(稲垣政志)

(写真：津市，2013年，稲垣政志採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

オオフタホシマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Aphodius (Aphodius) elegans elegans Allibert

【選定理由】既知の生息地点は10以下である。かつては各地で記録されていたが、現時点では激減し、ほとんど生息が確認できない。

【種概要】体長11~13.5 mm。平地から低地の放牧地に生息することが多い。新鮮な牛・馬などの糞に集まる。放牧地以外で確認できることは稀である。春・秋に個体数を増す。

【分布】北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、奄岐、沖縄に分布。国外では済州島、朝鮮半島、中国、インドシナ半島。県内では四日市市、菰野町、鈴鹿市、亀山市、津市、伊賀市、志摩市。

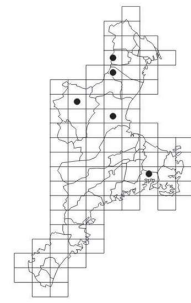
【現況・減少要因】平地の放牧地の減少、また牛に投与される駆虫剤により、糞に薬剤が残留し、この糞を食べる幼虫や成虫に害を及ぼす。

【保護対策】生息地の保全と平地の放牧地の復活、ならびに駆虫剤を使用しない放牧形態に改めることである。

【文献】62, 147, 390, 401。

(稲垣政志)

(写真：四日市市，1962年，天春明吉採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

ニセマルケシマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Psammodyius maruyamai Ochi, Kawahara et Inagaki

【選定理由】2011年に種子島の個体を基に新種記載された種で、西日本の自然海岸に分布するが、三重県が現在のこの種の東限の生息地である。唯一の生息地の国府白浜海岸の環境に依存している。

【種概要】体長2.3~2.6 mm。護岸のしていない自然海岸の砂地の植物の根際に生息する。

【分布】種子島、福岡、徳島、京都。県内では志摩市国府白浜海岸のみで確認されている。

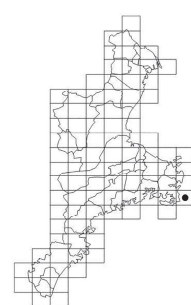
【現況・減少要因】外洋に面した砂地の自然海岸に生息するので、砂浜の狭小化などにより容易に生息状況が悪化する。

【保護対策】必要のない護岸工事などにより、砂礫の流入や補充ができなくなると砂浜が無くなり、本種は生息出来なくなる。

【文献】268, 290。

(稲垣政志)

(写真：志摩市，2008年，生川展行採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

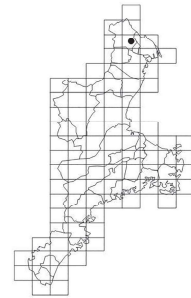
オオサカスジコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Anomala osakana Sawada

【選定理由】記録地点が1. 環境悪化による絶滅が懸念される。
 【種概要】体長11.0~16.4 mm. 分布は局限され. 6~8月に河川敷などで発生する. 成虫は灯火に飛来する.
 【分布】日本固有種. 本州(中部以西), 九州.
 【現況・減少要因】桑名市多度町で記録される. 灯火によく飛来する種であるにもかかわらず, 他に記録がない. 河川敷にあるような攪乱された草原的な環境を好む種であると考えられるが, そういう環境自体があまり残されていない.
 【保護対策】河川堤防をコンクリート化しないことである.
 【文献】15.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

オオチャイロハナムグリ

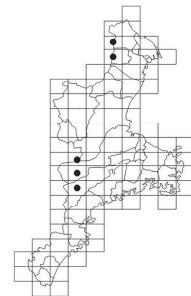
コウチュウ目 コガネムシ科

Osmoderma opicum Lewis

【選定理由】既知の生息地点数は5以下. 自然林の指標となる昆虫であり全国的にも少ない.
 【種概要】体長26~36 mm. 成虫は黒褐色で鈍い光沢がある. 温帯林のブナ, ミズナラ, コメツガなどの樹洞およびその付近で7~8月頃に見られる. 幼虫は樹洞内に堆積した腐植土や腐朽部などを食し, 2年ほどかけて成虫になる. 日本固有種で, 成虫は麝香(じゃこう)臭がする.
 【分布】本州, 四国, 九州, 屋久島. 県下では, いなべ町, 菰野町, 津市, 松阪市, 大台町.
 【現況・減少要因】自然林の開発, 大台町では伐採木より死骸が発見された. また湿潤な林内の大木の樹洞でしか生息できず極めて環境選択範囲が狭いので軽微な環境破壊でも影響がでる.
 【保護対策】生息には樹洞のある巨木が必要であるため, 大径木の伐採は行わず生息地の自然林は保全すべきである. 生息地の中心になる地域に風力発電施設の計画があるので中止させる.
 【文献】26, 149, 256, 506.

(乙部 宏)

(写真: 松阪市, 2008年, 乙部宏採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
VU
環境省 2020
NT

トラハナムグリ

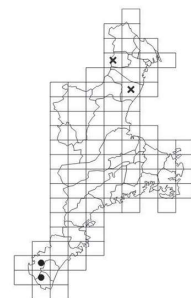
コウチュウ目 コガネムシ科

Trichius japonicus Janson

【選定理由】既知の生息地点数は5以下である. 全国的に広く分布するが特に西日本では分布が極めて限定されており, 県下でも非常に記録が少ない.
 【種概要】12~14 mm. 和名で称されるハナムグリ類の中では小型種であり, 晩春から初夏に出現し日中活発に飛翔する. 飛翔中の本種はハナバチ類によく似ており, 各種の花に集まる. 全体に毛深く明るい黄色であり上翅の黒紋は変化が多く, 一般に暖地の方が黒紋の小さくなる傾向がある. 幼虫は河川敷の砂地に漂着し朽ちている流木を食害する.
 【分布】北海道, 本州, 佐渡, 四国, 九州. 県内では菰野町, 熊野市, 紀宝町.
 【現況・減少要因】幼虫の成育に必要な砂州部にある湿潤な朽木の減少したことが要因である. 即ち河川の適度な氾濫などで形成される不安定な砂州部に漂着した広葉樹の流木が数年とどまるか砂州に長期埋もれるような環境が激減したためである.
 【保護対策】生息が確認されている地域の河川敷と周辺の蜜源となる植物生える地域を保全する.
 【文献】26, 334, 513.

(乙部 宏)

(写真: 紀宝町, 2023年, 乙部宏採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

キンモンナガタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Agrilus auropictus Kerremans

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

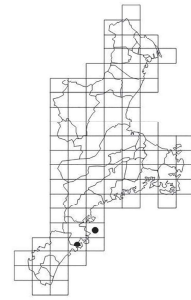
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類

その他動物
維管束植物
苔苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】 既知生息地が1. 生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長6.0~10.5 mm. 自然度の高い照葉樹林に生息し, 6~8月に出現する. タブノキなどの衰弱木に集まることが知られている。
 【分布】 本州, 四国, 九州, 屋久島, 種子島, 南西諸島. 中国, 台湾, ベトナム, インド. 本州では三重県尾鷲市, 熊野市で記録されるのみであり, 尾鷲市が本種の分布東北限である。
 【現況・減少要因】 良好な照葉樹林に生息するが, そのような樹林は過去の森林伐採によってほとんど残されていない. 樹林の伐採は, 直接本種生息地の消失に結びつく。
 【保護対策】 生息地である照葉樹林の伐採をしないことである。
 【文献】 7, 258, 480.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	—

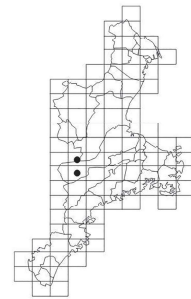
ホソクロナガタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Agrilus kawarai Y. Kurosawa

【選定理由】 既知の生息点数は5以下. 全国的にも稀な種であり, 三重県でも稀である。
 【種概要】 体長7~9.5 mm. 夏季に出現する. 前胸背板は黒色で緑色~赤色を帯びる. 上翅は褐色を帯びた黒色で2対の計4個の銀白色毛紋を配するが変化も富み裏面は唐金色. 類似種も多い。
 【分布】 本州, 四国, 九州. 三重県では津市, 松阪市。
 【現況・減少要因】 自然林の伐採。
 【保護対策】 自然林の保全. 食樹であるユクノキは急峻な斜面に生えることが多く林道や法面工事などをする場合は配慮する。
 【文献】 509, 519.

(乙部 宏)



三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

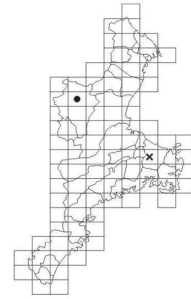
クロチビタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Trachys pseudoscrobiculata Obenberger

【選定理由】 既知の生息点数は5以下. 三重県の記録は1980年から長く途絶えていたが2020年に再発見された. 全国的にも生息地が限られている。
 【種概要】 体長2.4~2.6 mm. 体色は黒色で上翅には不鮮明な白色毛もある. シバ型草地のスミレ類を好み成虫は葉の外縁から食し, 幼虫は葉に潜りこむ潜葉虫であり潜葉状態でそのまま蛹化する。
 【分布】 本州, 九州. 三重県では伊賀市, 伊勢市で記録されている。
 【現況・減少要因】 非常に狭い地域でしか確認できていない. また外来植物への遷移へも懸念される。
 【保護対策】 生息地のアリアケスミレ, マスミレなどのスミレ類の保全. 除草剤を使用せず定期的な人為的除草で草丈が高くないようにする。
 【文献】 357, 509, 510.

(乙部 宏)



三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

(写真: 伊賀市, 2024年, 乙部宏採集)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ホソヒメクロコメツキ

コウチュウ目 コメツキムシ科

Ampedus otobei Kishii

【選定理由】 既知の生息地点数は1。三重県が模式産地として記載された。全国的にも非常に稀である。

【種概要】 体長6～7mm。夏季に出現する。やや艶のある黒色であるが類似種が多く同定は難しい。県下では自然度の高いブナ帯下部で生息している。

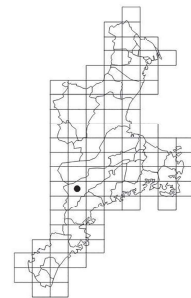
【分布】 本州，三重県では大台町。

【現況・減少要因】 ブナ帯の自然林の伐採が減少とシカ害による林床植物の壊滅による乾燥化が要因と考えられる。

【保護対策】 自然林の伐採は行わない。自然林の保全。

【文献】 270.

(乙部 宏)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

ツヤチャイロヒラアシコメツキ (ツヤチャイロコメツキ)

コウチュウ目 コメツキムシ科

Suzukielater babai (Kishii et Ohira)

【選定理由】 既知の生息地点数は1地点。自然純度の高い砂浜海岸と流木による特殊な環境しか生息できないため全国的にも稀な種である。三重県では2017年に初めて記録された。

【種概要】 体長9～10mm。夏季に出現する。全体に艶のある茶褐色で砂丘環境が残る砂浜海岸に漂着し、半ば砂に埋もれたやや太い流木の裏側に集まる。幼虫も流木を利用すると考えられている。

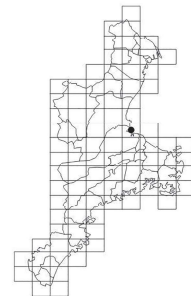
【分布】 北海道，本州，九州，種子島。三重県では松阪市。

【現況・減少要因】 奥行きのある粒度の細かい砂浜海岸の減少および近年漂着流木の過度な撤去による発生木の消失。

【保護対策】 発生地において海浜の漂着流木の全面撤去は中止する。また海浜での重機を持ち込んだ全面清掃はエコトーン破壊にもつながり多くの生物に負荷を与えている。

【文献】 512.

(乙部 宏)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

ウスグロボタル (ウスグロクシヒゲボタル)

コウチュウ目 ホタル科

Chphonocerus inelegans Nakane

【選定理由】 既知産地が1。近年の生息情報がない。生息地の環境は悪化している。

【種概要】 体長6mm。暗褐色。三重県と和歌山県で僅か数頭の♂標本が得られているのみで、生態などは全く未知。

【分布】 日本固有種。本州。紀伊山地固有種である。

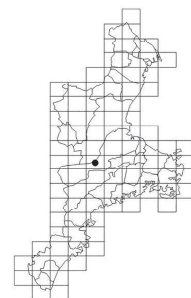
【現況・減少要因】 三重県美杉村三峰（現：津市）で採集された標本をもとに1967年に記載された種である。三峰は三重大学平倉演習林に含まれ、この地域は長年にわたって精度の高い調査が行われてきたが、その後の生息情報はなく、もともと稀な種であったと考えられる。ホタル科の甲虫は、湿潤な環境を好むが、現在記録地周辺は、ニホンジカの食害によって林床の植生がほぼ消失しており、乾燥化が著しい。すでに絶滅している可能性も高いものと思われる。

【保護対策】 ニホンジカの個体数管理が重要である。もし、生息が確認された場合、生息地周辺を防鹿柵で囲むなどの積極的な保全策が求められる。

【特記事項】 津市美杉で得られた標本をもとに記載された種である。記録地は、入林調査が三重大学によって、厳しく制限されている。

【文献】 445.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

コクロオバボタル

コウチュウ目 ホタル科

Lucidina okadai Nakane et Ohbayashi

【選定理由】既知の生息地点数は2箇所。いなべ市宇賀溪に次いで2頭目が1999年に伊勢市で記録された。

【種概要】体長6.5~7.0 mm, 前胸背板の前, 側縁は軽く上反する。体型は扁平。雌成虫は後翅が退化している。通常の動作は緩慢である。

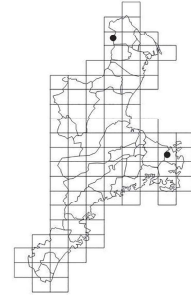
【分布】本州に分布する。県内では, いなべ市大安町宇賀溪と伊勢市朝熊町で記録されているだけである。県外では, 埼玉県と岐阜県で記録されている。

【現況・減少要因】生息地は雑草を含む湿地および周辺に広がる草地。現在, 植生の遷移および周辺での開発が行われており, 環境が悪化しつつある。

【保護対策】生息地と同じ様な環境地域は限られてきたが, 早急な再調査が必要。

【文献】84, 215.

(生川展行)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

ノノボリクビボソジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Asiopodabrus (Japanopodabrus) nonoboriensis Takahashi

【選定理由】既知の生息地が1。生息環境が著しく悪化している。

【種概要】体長7.0 mm。自然度の高い落葉広葉樹林に生息し, 6月に記録されている。ジョウカイボン科は, 幼虫, 成虫ともに捕食性で, 幼虫は落葉下に生息する。

【分布】日本固有種。本州。鈴鹿山脈固有種であると思われ, 亀山市野登山で記録されるのみである。他県からの記録はない。

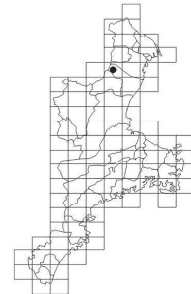
【現況・減少要因】原記載以来の記録を欠く。近年のシカ食害による林床の乾燥化, また夏季の極端な高温傾向は, 冷涼湿潤な環境を好む本種にとっては, 深刻なダメージを与えているものと考えられる。タイプシリーズが得られた2002年当時, 野登山のブナ林は, 林床がスズタケで覆われていたが, 現在はニホンジカによる食害で林床に殆ど植生がなく, 乾燥している。本種に限らず, クビボソジョウカイ類の全ての種が, 近年激減している。

【保護対策】ニホンジカの個体数調整をすることである。

【特記事項】亀山市野登山が, 本種のタイプ産地で, 同時に唯一の既知産地である。和名, 学名ともに野登山に因む。

【文献】365.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

DD

環境省 2020

—

コウモリクビボソジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Asiopodabrus (Asiopodabrus) komoriensis Takahashi

【選定理由】既知の生息地が1。生息環境が悪化している。

【種概要】体長6.6~6.9 mm。広葉樹林に生息し, 5月に記録されている。ジョウカイボン科は, 幼虫, 成虫ともに捕食性で, 幼虫は落葉下に生息する。

【分布】日本固有種。本州。亀山市関町が唯一の既知産地で。他県からの記録はない。

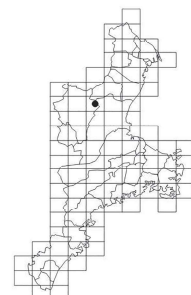
【現況・減少要因】近年のシカ食害による林床の乾燥化, また夏季の極端な高温傾向は, 冷涼湿潤な環境を好む本種にとっては, 深刻なダメージを与えているものと考えられる。本種に限らず, クビボソジョウカイ類の全ての種が, 近年激減している。

【保護対策】ニホンジカの個体数調整をすることである。

【特記事項】紀伊半島固有種。2002年に関町蝙蝠峠で採集された8頭の標本をもとに記載された種で, それ以降の記録はない。

【文献】365.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

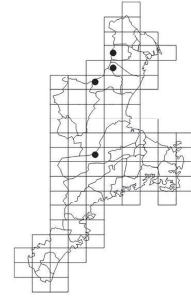
ヒラクラクビボソジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Asiopodabrus (Asiopodabrus) hirakura Takahashi

【選定理由】 既知の生息地が2。生息環境が著しく悪化している。
 【種概要】 体長5.1~6.1 mm。自然度の高い落葉広葉樹林に生息し、6月に記録されている。ジョウカイボン科は、幼虫、成虫ともに捕食性で、幼虫は落葉下に生息する。
 【分布】 日本固有種。本州。紀伊半島固有種であると思われる、三重県では津市、菟野町、亀山市で記録される。
 【現況・減少要因】 近年のニホンジカ食害による林床の乾燥化、また夏季の極端な高温傾向は、冷涼湿潤な環境を好む本種にとっては、深刻なダメージを与えているものと考えられる。本種に限らず、クビボソジョウカイ類の全ての種が、近年激減している。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整をすることである。
 【特記事項】 紀伊半島固有種。津市平倉がタイプ産地で、和名、学名共に平倉に因む。
 【文献】 365. 443.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

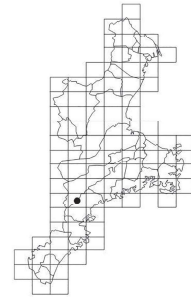
アキタクビボソジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Asiopodabrus (Asiopodabrus) akitai Takahashi

【選定理由】 既知の生息地が1。生息環境が著しく悪化している。
 【種概要】 体長4.3~4.7 mm。ブナ帯上部の自然林に生息し、5~6月に出現する。幼虫は落葉下に生息するものと考えられる。ジョウカイボン科は、幼虫、成虫ともに捕食性である。
 【分布】 日本固有種。本州。紀伊山地固有種である。三重県では大台町三津河落山で記録されるのみである。
 【現況・減少要因】 近年のシカ食害による林床の乾燥化、また夏季の極端な高温や冬季積雪量の減少は、冷涼湿潤な環境を好む本種には、深刻なダメージを与えているものと考えられる。本種に限らず、クビボソジョウカイ類の全ての種が、近年激減している。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整をすることである。
 【特記事項】 生息地は、吉野熊野国立公園特別保護区に含まれる。
 【文献】 365.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

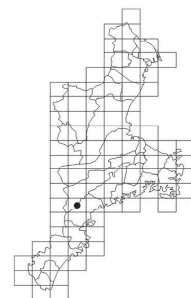
アキタキヒロシリブトジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Yukikoa akitai Takahashi

【選定理由】 既知の生息地が1。生息環境が悪化している。
 【種概要】 体長14.6 mm。4月上旬に記録されている。ジョウカイボン科は、幼虫、成虫ともに捕食性で、幼虫は落葉下に生息する。
 【分布】 日本固有種。本州。紀伊山地固有種である。大台町大杉谷が唯一の既知生息地で、他県からの記録はない。
 【現況・減少要因】 1993年に得られた標本が唯一のもので、その後の生息情報がない。近年のシカ食害による林床の乾燥化、また夏季の極端な高温傾向は、冷涼湿潤な環境を好む本種にとっては、深刻なダメージを与えているものと考えられる。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整をすることである。
 【特記事項】 紀伊山地固有種。大台町大杉谷がタイプ産地であるとともに、唯一の既知産地である。
 【文献】 364.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

カタキンイロジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Themus ohkawai M. Sato

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

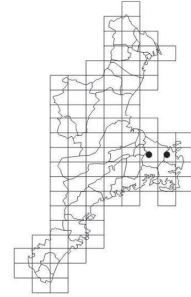
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】 既知生息地点が5以下。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長17~20 mm。湿地に生息する。成虫は5~6月に出現。昼間活動し、ほかの昆虫を捕食する。
 【分布】 日本固有種。本州。県内では伊勢市で記録されている。1997年以降の記録はなかったが、2018年に玉城町で発見された。
 【現況・減少要因】 里山の谷あいにある放棄水田や湿地で記録されている。本種の場合、湿地の周辺部やある程度植物遷移がすすんだ状態になった放棄水田が好まれるらしい。しかし、放棄水田はそのままでは乾燥化と植物遷移が進行し、いずれ本種の生息に適した環境ではなくなってしまう。また、里山にある小規模な湿地などもソーラー発電施設の設置など様々な開発によって消失しつつある。
 【保護対策】 周辺の樹林を含む湿地の保全が強く求められる。
 【特記事項】 伊勢市は本種のタイプロカリティーである。
 【文献】 162, 349, 357.

(秋田勝己)

(写真：玉城町，2018年，岡村純採集，乙部宏撮影・保管)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	—

ニセマグソコガネダマシ

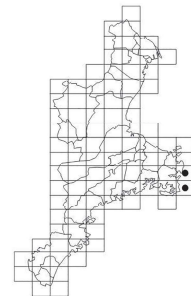
コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

Trachyscelis sabuleti Lewis, 1895

【選定理由】 海浜性の種で全国的に生息地が限定されており、三重県での既知の生息地も2か所だけで、自然環境の改変による個体数の減少が危惧される。
 【種概要】 体長3 mm前後。褐色~黒褐色で光沢がある。砂浜海岸の海浜植物の根際の砂の中や、海岸に打ち上げられた海藻の下の砂の中などに見られ、灯火にも飛来する。
 【分布】 本州，九州，五島列島，天草諸島。国外では韓国。県内では志摩市阿児町国府白浜海岸と市後浜で、記録されているだけである。
 【現況・減少要因】 現時点では、国府白浜海岸での大きな環境の変化はない。
 【保護対策】 生息地の海岸の保全が急務である。
 【文献】 268, 269, 430

(生川展行)

(写真：志摩市，2007年，生川展行採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	—

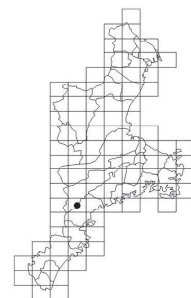
クロソンマグソコガネダマシ

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

Bolitotrogus kurosonis Miyatake

【選定理由】 既知の生息地点が1。生息環境が悪化している。
 【種概要】 体長2.5~3.4 mm。自然度が非常に高い照葉樹林に生息する。新成虫は晩夏に羽化し、翌年初夏まで生存する。タバコウロコタケ科キコブタケ属のキノコにつく。
 【分布】 日本固有種。本州（紀伊山地），四国，九州，対馬。三重県では大台町で記録されているほか、大台町で確認されている。全国的にも既知生息地は10か所未満である。
 【現況・減少要因】 自然度の高い照葉樹林に生息するが、そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失している。樹林の伐採は、直接本種生息地の消失に結びつく。また、近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いており、本種のような湿潤環境を好む種にとっては脅威となっている。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整を図るとともに、生息地である照葉樹林を伐採しないことである。
 【文献】 458.

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ホソハマベゴミムシダマシ

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

Micropedinus algae Lewis

【選定理由】 既知の生息地点5以下。生息地が局限される。生息環境が悪化し、近年著しく減少している。

【種概要】 体長4.5～5 mm。海浜の砂浜に生息する。大潮満潮線付近の漂着物の下などから見出される。同時に発見されるヒメホソハマベゴミムシダマシ *M. pallidipennis* Lewis に比べ個体数ははるかに少なく、生息地も限定される。

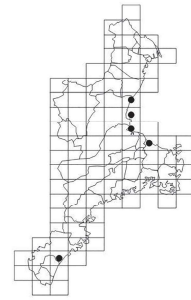
【分布】 本州、四国、九州、南西諸島。台湾。三重県では鈴鹿市、津市、松阪市、伊勢市、熊野市の海岸で確認されている。

【現況・減少要因】 護岸工事や侵食による砂浜の狭小化が進行しており、危機的な状況にある生息地が多い。また、生息地への車両の乗り入れ、人による過度の踏みつけが脅威となっている。さらに近年は海岸漂着物を重機によって除去されることが多くなった。本種のような漂着物に完全に依存している昆虫にとっては、最大の脅威となっている。

【保護対策】 海岸砂浜の漂着物を除去しないことである。生息地に車両の乗り入れが出来ないように手立てを講じることが急務である。

【文献】 231, 458, 479.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
VU
環境省 2020
—

クロズハマベゴミムシダマシ

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

Epiphaleria atriceps Lewis

【選定理由】 既知の生息地点が5以下。生息環境が悪化し、近年の減少が著しい。

【種概要】 体長4.0～6.0 mm。海岸砂浜に生息する。大潮満潮線付近の漂着物の下などから見出される。乾燥した魚の死骸などを食する。

【分布】 本州、四国、九州、南西諸島。朝鮮半島、台湾、ベトナム。県内では津市、伊勢市、志摩市、熊野市の海岸で確認されている。

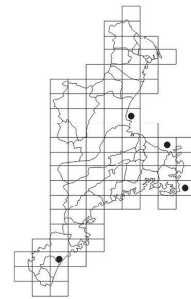
【現況・減少要因】 護岸工事や侵食による砂浜の狭小化が進行しており危機的な状況にある生息地が多い。また、生息地への車両の乗り入れ、さらに近年は砂浜の漂着物が、重機などで取り除かれることが多い。それは、その餌ごと本種を除去することと同意であり、本種の生息にとって非常に大きな脅威となっている。

【保護対策】 砂浜海岸の自然漂着物の除去を行わないことが、非常に強く求められる。また、生息地に車両の乗り入れができないように手立てを講じることが急務である。堤防のかさ上げなども砂浜環境の変化を招くことから、本種の生息にとって脅威となりえる。

【文献】 80, 231.

(秋田勝己)

(写真：津市，2016年，乙部宏撮影)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

フタズジカタビロハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Brachyta bifasciata japonica (Matsushita)

【選定理由】 生息地点は1か所のみ。食草が限定され、生息基盤が脆弱である。生息環境が悪化しており、個体数も減少している。

【種概要】 体長16～18 mm。成虫は5～6月に出現。ヤマシャクヤクの花に集まり、花粉や花弁を食べる。幼虫は、同植物の根を食する。

【分布】 本州、四国。国外では朝鮮半島、中国北東部、ロシア沿海州、シベリア、サハリン。大陸～サハリンの個体群は名義タイプ亜種とされる。三重県ではいなべ市藤原町に生息する。

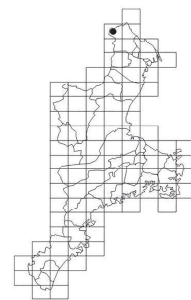
【現況・減少要因】 生活史のすべてをヤマシャクヤクに依存している。そのため、同植物の個体数の減少は本種個体数の減少に直接結びつく。本種の生息地においてもヤマシャクヤクはしばしば山野草愛好家によって持ち去られるらしく、個体数が減少した。また、近年はニホンジカによる食害も深刻である。

【保護対策】 ヤマシャクヤク群落を保全する。ニホンジカの個体数調節も重要である。

【特記事項】 ヤマシャクヤクのポリネーターとしても重要な種であると考えられる。

【文献】 137, 178, 291.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

クビアカハナカミキリ (クビアカドウガネハナカミキリ) コウチュウ目 カミキリムシ科
Gaurotes atripennis Matsushita

【選定理由】 既知の生息地点は10以下。20年以上記録が途絶えており絶滅が懸念されている。平地から低山のアカマツ林で生息するが近年のアカマツ林の衰退から最近の記録が途絶えている。

【種概要】 体長7～11 mm。成虫の色彩変異は激しく赤銅色～青緑色で前胸も前翅と色が異なる場合もある。成虫は5月ごろアカマツおよび各種の花を訪れ新しく枯れたアカマツに産卵し、幼虫はそのまま穿孔し食害する。

【分布】 本州，四国，九州。三重県内では菰野町，鈴鹿市，亀山市，津市，伊賀市，熊野市。

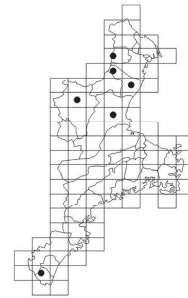
【現況・減少要因】 アカマツの枯れ死による林の衰退。およびそれに伴う農薬散布とアカマツ林の伐採，開発による。

【保護対策】 生息地のアカマツ林を伐採せず保全する。

【文献】 146，208，261，508。

(乙部 宏)

(写真：熊野市，2001年，中西元男採集)



三重県 2025	CR
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

ヤノヒメハナカミキリ コウチュウ目 カミキリムシ科
Pseudopidonia chairō (Tamanuki)

【選定理由】 既知の生息地点数が5以下。生息環境が悪化しており，個体数が激減している。

【種概要】 体長8.4～11.6 mm。成虫は6～7月に出現する。タンナサワフタギ，ゴトウヅルなどの花に集まる。

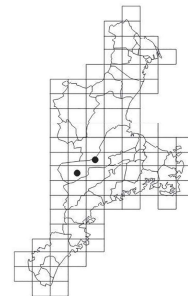
【分布】 日本固有種。本州，隠岐，四国，九州。三重県では，紀伊山地に分布する。松阪市飯高町で記録されるほか，津市，大台町で確認されている。

【現況・減少要因】 自然度の高い落葉広葉樹林が残された場所に生息する。もともと個体数は多くなかったが，近年は殆ど見られない。夏季の異常な高温や積雪量の減少，さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は，冷涼湿潤環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている。

【保護対策】 ニホンジカの個体数を調整すべきである。

【文献】 447，448。

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

ツマグロヒメハナカミキリ コウチュウ目 カミキリムシ科
Pseudopidonia maculithoprax (Pic)

【選定理由】 既知の生息地点1。近年激減している。

【種概要】 体長8.5～11.6 mm。標高1,500m以上の自然度が高い森林に生息する。成虫は，6～7月に出現し，タンナサワフタギやゴトウヅルなどに訪花する。

【分布】 日本固有種。本州（中部山岳，紀伊山地，中国山地）。三重県では大台町で記録される。

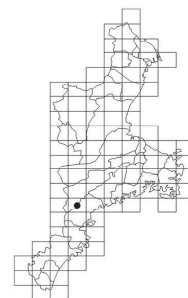
【現況・減少要因】 大台ヶ原周辺で記録があるのみである。2000年頃までは，個体数が少なくなかったが，近年は非常に少ない。夏季の異常な高温や積雪量の減少，さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は，冷涼湿潤環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている。

【保護対策】 ニホンジカの個体数調節が必要である。

【特記事項】 生息地は全域が吉野熊野国立公園特別保護地区に含まれる。

【文献】 37，168，448。

(秋田勝己)



三重県 2025	CR
三重県 2015	—
環境省 2020	—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ミセンヒメハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Pseudopidonia misenina (S. Saito & A. Saito)

【選定理由】 既知の生息地点数が2。生息環境が悪化しており、個体数が激減している。

【種概要】 体長8.4~11.6mm。成虫は6~7月に出現する。タンナサワフタギ、ゴトウヅルなどの花に集まる。幼虫の生態については不明。

【分布】 日本固有種。本州（中部山岳、紀伊山地、中国山地東部）。三重県では松阪市飯高町で記録されるほか、大台町で確認されている。

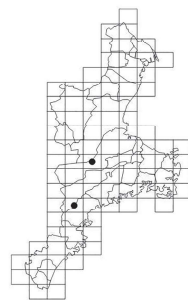
【現況・減少要因】 紀伊山地の落葉広葉樹林から針葉樹林帯にかけて自然林が残された場所に生息する。もともと個体数は多くなかったが、近年は殆ど見られない。夏季の異常な高温や積雪量の減少、さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は、冷涼湿潤環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている。

【保護対策】 ニホンジカの個体数を調整すべきである。

【特記事項】 生息地は吉野熊野国定公園の特別保護地区に指定されている。

【文献】 448, 464.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

オオミネヒメハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Pseudopidonia ohminesana (K. Mizuno)

【選定理由】 既知の生息地点数1以下である。生息範囲が局所的である。

【種概要】 体長8.5~12.5 mm。成虫は6~7月に出現する。タンナサワフタギなどの花に集まる。幼虫の生態については不明。

【分布】 日本固有種。本州。紀伊山地の固有種である。大峰山系と大台ヶ原山（大台町）の標高1,500 m以上に分布する。

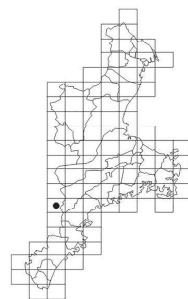
【現況・減少要因】 落葉広葉樹から針葉樹林帯にかけて自然林が残された場所に生息。唯一の生息地である大台ヶ原は、本種の生息地としては、ほぼ下限にあたり、もともと個体数は非常に少なかった。近年は、夏季に高温になることに加え、ニホンジカ個体数の増加によって、林床植生が殆どなくなり、乾燥化が進行している。近年は確認されておらず、すでに絶滅している可能性がある。

【保護対策】 ニホンジカの個体数を管理し、樹木の育成や保全に努めるべきである。また今後も詳細な調査の継続が必要である。

【特記事項】 生息地は吉野熊野国定公園の特別保護地区に指定されている。

【文献】 168, 291, 447, 448.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

ムナミゾハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Munamizoa maculata (Matsushita et Tamanuki)

【選定理由】 生息地が局限され、既知の生息地は1か所にすぎない。生息環境が悪化し、近年個体数が減少している。

【種概要】 体長13~16 mm。亜高山帯の針葉樹林に生息する。成虫は7~8月に出現し、夕方、トウヒやヒノキの古く苔むした立ち枯れに集まる。訪花性は弱い。幼虫はトウヒやヒノキの古い立ち枯れに食入する。

【分布】 本州、四国。近畿では紀伊山地にのみ分布。県内では大台町大台ヶ原の標高1,500 m以上の地点に生息する。

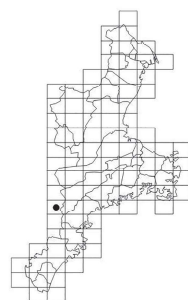
【現況・減少要因】 1990年代までは、比較的個体数が多い種であったが、近年の減少は著しい。唯一の生息地である大台ヶ原は、ニホンジカの食害による樹木の枯死がめだてであり、なかでもトウヒ林においてその被害が著しい。トウヒ林の衰退とシカ食害による下層植生の消失によって、林内の乾燥化がすすみ、本種の生息に適さなくなりつつある。さらに近年の夏季の極端な高温や冬季の積雪量の減少は、冷涼湿潤環境を好む本種にとって、大きなダメージを与えているものと考えられる。

【保護対策】 ニホンジカの個体数を調整し、トウヒ林を保全することが重要である。

【特記事項】 1属1種の日本固有種である。本種生息地の全域が、吉野熊野国立公園特別保護区に含まれる。

【文献】 37, 81, 178, 291, 447.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

ヒメアカハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Brachyleptula pyrrha (Bates)

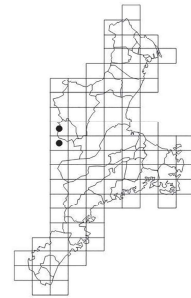
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
苔苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】既知の生息地点5以下。近年の記録がない。
 【種概要】体長9.5~12.9 mm。成虫は、6~7月に出現し、リョウブ、ノリウツギなどに訪花する。
 【分布】日本固有種。本州、四国。三重県では名張市で記録されている。
 【現況・減少要因】1963年と1979年に名張市赤目と香落谷で記録されるのみで、それ以降の確認例はない。良好な樹林に生息するが、そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失している。樹林の伐採は、直接本種生息地の消失に結びつく。また、近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、夏季の異常な高温は、冷涼湿潤な環境を好む本種の生息にとって大きな脅威となっている。日中に花に集まる比較的良好目立つ種であることから、すでに絶滅してしまっている可能性が否定できない。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調整を図るとともに、生息地である落葉広葉樹林を伐採しないことである。
 【文献】146.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

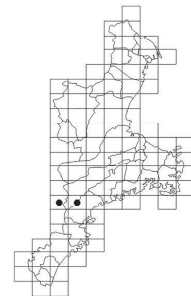
イガブチヒゲハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Stictoleptula igai (Tamanuki)

【選定理由】既知生息地が1。近年の記録がない。
 【種概要】体長17~24 mm。成虫は7~8月に出現し、リョウブやノリウツギに訪花する。幼虫は、ヒノキ属の枯死部を食べる。
 【分布】日本固有種。本州、四国、九州。三重県では大台町に分布する。
 【現況・減少要因】大台ヶ原周辺の1,000m以上の高標高地で記録される。成虫は訪花性が強く、よく目立つ種であるにもかかわらず、1996年以降は確認されていない。ヒノキ属がホストであるが、ヒノキ植林地では発見された例がなく、いずれも天然のヒノキが残る林分で発見されている。天然のヒノキは過去の伐採によってほとんど残っていない。また、近年の夏季の極端な高温やニホンジカの食害に起因する森林の乾燥化などにより、かなり深刻な状況にあるものと考えられる。
 【文献】11, 81.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

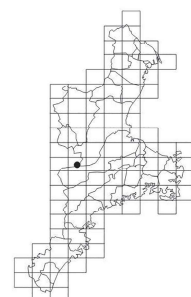
オオハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Konoa granulata (Bates)

【選定理由】既知生息地が1。近年の生息情報がない。
 【種概要】体長15~23 mm。自然度の高い森林に生息する。6~8月に出現し、ノリウツギやリョウブに訪花する。また、ブナやモミの大木の立ち枯れに飛来する。
 【分布】日本固有種。北海道、本州。県下では、津市美杉平倉（三重大学演習林）における1955年の採集例が唯一のものである。
 【現況・減少要因】1950年代から1960年代にかけて三重大学演習林では天然林の伐採を盛んに行っていた。その時代に採集された1例が知られるのみである。生息地は1960年代から1990年代にかけて、非常に精力的な昆虫の調査が行われてきたが、再発見されていない。三重大学演習林には狭いながらも原生林が保存されており、本種が好むモミやブナの大木は多いことから、本種もまだ生息している可能性が高い。
 【保護対策】生息地の森林伐採をしないことである。
 【特記事項】1属1種の日本固有種である。
 【文献】40, 291, 306, 447.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

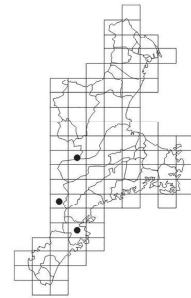
ヒメヨツスジハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Leptura kusamai kusamai Ohbayashi et Nakane

【選定理由】既知の生息地点5以下. 個体数が激減している。
 【種概要】体長12~16 mm. 成虫は、ノリウツギやリョウブ、ヤハズアジサイなどに訪花する。同時に見られ、本種に酷似するヨツスジハナカミキリ *L. ochraceofasciata* (Motschulsky)よりはるかに少ない。幼虫はブナなどの立ち枯れに食入する。
 【分布】日本固有種。本州，四国，九州。四国，九州の個体群は別亜種として、区別される。三重県では紀伊山地（津市，大台町，尾鷲市）で確認されている。
 【現況・減少要因】良好な落葉広葉樹林に生息するが，そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失している。樹林の伐採は，直接本種生息地の消失に結びつく。また，近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は，森林の乾燥化を招いているうえ，夏季の異常な高温は，冷涼湿潤な環境を好む本種の生息にとって大きな脅威となっている。近年は殆ど見られない。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調整を図ることである。
 【文献】80, 142, 178, 291, 447.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
VU
環境省 2020
—

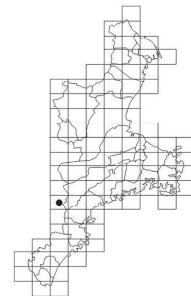
コヨツスジハナカミキリ (ヤマトヨツスジハナカミキリ)

コウチュウ目 カミキリムシ科

Leptula subtilis Bates

【選定理由】既知の生息地点数は1であるうえ，環境変化によって，個体数は減少傾向にある。
 【種概要】体長15.4~21.0 mm. ブナ帯上部から亜高山帯の針葉樹林に生息し，7~8月に出現する。ノリウツギやリョウブなどの花に来る。
 【分布】日本固有種。本州，九州。三重県では大台町大台ヶ原周辺で記録されるのみである。近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は，森林の乾燥化を招いているうえ，成虫の主な訪花植物であるノリウツギやリョウブが激減した。さらに近年の夏季の異常な高温は，本種の生息にとって非常に大きな脅威となっている。1990年代には，比較的良く見られたが，近年は見ることがなくなった。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調整が必要である。
 【特記事項】大台ヶ原の生息地一帯は吉野熊野国立公園の特別保護地区に指定されている。
 【文献】37, 38, 481.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

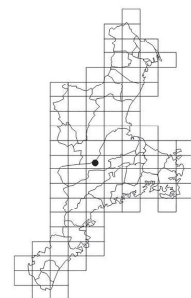
カタキハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Pedostrangalia femoralis (Motschulsky)

【選定理由】既知生息地が1. 生息環境は悪化しており，近年の確認例がない。
 【種概要】体長9.0~14.9 mm. 自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。成虫は5~7月に出現し，コゴメウツギなどを訪花する。
 【分布】北海道，利尻島，千島，本州，四国，九州，対馬，サハリン，朝鮮半島，中国北東部，ロシアアムール。三重県では津市で記録される。
 【現況・減少要因】津市美杉の三重大学平倉演習林で1990年に採集された1頭が記録されるのみで，その後の確認例がない。近年の夏季の極端な高温やニホンジカの食害に起因する森林の乾燥化などにより，かなり深刻な状況にあるものと考えられる。
 【特記事項】生息地は，三重大学演習林であるが，大学から入林許可が得られず，調査ができない。
 【文献】447, 449.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
—
環境省 2020
—

タケウチホソハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Strangalia takeuchii Matsushita et Tamanuki

【選定理由】既知の生息地点数は1であるうえ、環境変化によって、個体数は著しく減少傾向にある。

【種概要】体長13~16 mm. 成虫は亜高山帯の針葉樹林に生息し、7~8月に出現、ノリウツギやリョウブなどの花に来る。

【分布】日本固有種。北海道、本州、四国、千島列島。県内では大台町大台ヶ原周辺で記録されるのみである。

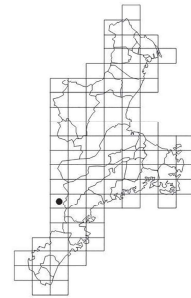
【現況・減少要因】本種の生息地は、亜高山帯の針葉樹林に限定される。近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、成虫の主な訪花植物であるノリウツギやリョウブが激減した。さらに近年の夏季の異常な高温は、本種の生息にとって非常に大きな脅威となっている。大台ヶ原周辺ではかつて非常に個体数が多かったが、近年は殆ど見られない。

【保護対策】ニホンジカの個体数調整が必要である。

【特記事項】大台ヶ原の生息地一帯は吉野熊野国立公園の特別保護地区に指定されている。

【文献】12, 37, 291, 459.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヒゲジロホソコバネカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Necydalis odai Hayashi

【選定理由】既知の生息地は5以下。良好な原生林が残されている所に限られる。

【種概要】体長14~21 mm. 上翅は名前のように短く「コバネ」となり後翅と腹部が露出している。近似種も数種いるが触覚の8~10節が黄白色~黄褐色なので区別できる。幼虫はミズナラの古い大木の立ち枯れに穿孔している。

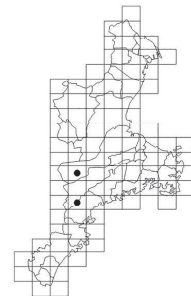
【分布】北海道、本州、四国、九州。日本特産種で県内では松阪市、大台町。

【現況・減少要因】ミズナラの大木林が必要であり、その中で立ち枯れでしか発生できないので極めて局限される。

【保護対策】ミズナラの残る自然林の再生と保全。発生地の一部は風力発電施設の計画に予定されているのが懸念される。

【文献】327, 337.

(乙部 宏)



三重県 2025

CR

三重県 2015

DD

環境省 2020

—

ヨツボシカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Stenygrium quadrinotatum Bates

【選定理由】既知の生息地点数100以下である。極めて普通にみられた種であるが、1980年代以降の採集記録が極めて少ない。

【種概要】体長8~14 mm. 成虫は5~8月に出現し、クリなどを訪花する。また灯火にもよく飛来する。幼虫はクリなど広葉樹の枯枝に食入する。

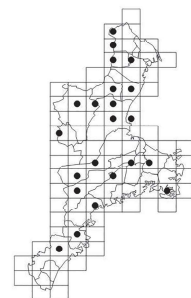
【分布】北海道(南部)、本州、伊豆諸島、佐渡、隠岐、四国、九州、対馬、壱岐、屋久島、奄美大島、徳之島。台湾、朝鮮半島からインドシナ。過去には県内全域にわたって記録されている。

【現況・減少要因】1970年代までは、里地里山で最も普通に見られるカミキリムシの一つで、住宅地の灯火にもよく飛来した。しかし、1980年代から、全国的に激減しており、現存産地は局限される。三重県では、2000年以降では大台町で得られているのみである。減少の要因は明らかではない。里山やその周辺環境の衰退が関与しているかもしれないが、それだけでは説明がつかない。

【保護対策】減少要因が全く不明であることから、まずそれを探ることが重要で継続的な調査が必要である。

【文献】12, 143, 146, 258, 278, 291, 300, 304, 306, 308, 356, 357, 372, 390, 391, 442, 447, 485.

(秋田勝己)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

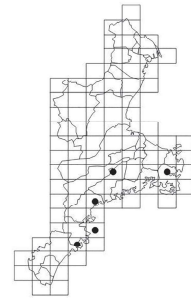
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

タケウチヒゲナガコバネカミキリ
Molorchus takeuchii takeuchii Ohbayashi

コウチュウ目 カミキリムシ科

【選定理由】 既知生息地が10未満。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長6.5~9.5 mm. よく発達した照葉樹林に生息する。成虫は4~5月に出現し、シイなどを訪花する。幼虫はミミズバイやハイノキの枯れ枝の樹皮および辺材部を食べ、秋に成虫となり、そのまま越冬、春に出現する。
 【分布】 日本固有種。本州（静岡県以西）、四国、九州、対馬、甌島列島、種子島、屋久島、口永良部島、奄美諸島、沖縄島には別亜種が分布する。本州の記録はわずかである。三重県では、志摩市、大紀町、紀北町、尾鷲市、熊野市から記録されている。
 【現況・減少要因】 自然度の高い海沿いの照葉樹林に限って生息することから、過去の森林伐採によってその生息地の多くは消失したと思われる。現在生息しているのはある程度大きな面積を持つ社寺林などである。
 【保護対策】 生息地の森林を伐採しないことである。
 【文献】 12, 225, 258, 268.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
NT
環境省 2020
—

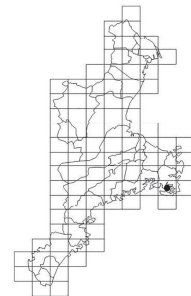
ヨツボシシロオビゴマフカミキリ
Mesosa mediofasciata Breuning

コウチュウ目 カミキリムシ科

【選定理由】 既知の生息地点は1地点。生息地の寄主植物であるアカマツ林が衰退しているため非常に危うい。ただ、今後新たな生息地が見つかる可能性もある。
 【種概要】 体長10~15 mm. 前胸部には褐色微毛で縁取られた4個の黒色斑があり上翅は白色と褐色微毛の紋があり、幅広い白色の帯が中央部にある。成虫は4~7月に出現しアカマツやモミなどの針葉樹に集まる。
 【分布】 本州、四国。県内では志摩市で記録されている。
 【現況・減少要因】 松枯れおよび松枯れ防除の薬剤散布や森林開発による発生地減少が懸念される。
 【保護対策】 生息地のアカマツ林の保全。
 【文献】 268.

(乙部 宏)

(写真：志摩市，2005年，中山惇採集・稲垣政志撮影)



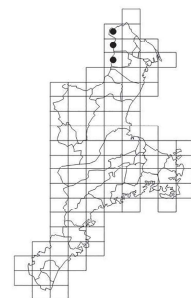
三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

マヤサンコブヤハズカミキリ
Mesochthistatus furciferus (Bates)

コウチュウ目 カミキリムシ科

【選定理由】 もともと県内での分布に限られるうえ、近年激減している。
 【種概要】 体長13~23 mm. 後翅が退化している。山地の落葉広葉樹林に生息する。秋に出現した新成虫は、ササ群落内地表近くの中空にある広葉樹枯葉を好んで摂食する。冬季は落葉下で越冬。春に再び姿を現し、初夏まで生存する。この時期には夜間広葉樹の倒木に集まる。幼虫は朽木内に穿孔する。
 【分布】 日本固有種。本州（新潟県西部から兵庫県の主に日本海側の地域）。三重県では鈴鹿山脈北部のいなべ市から菰野町にかけて分布する。
 【現況・減少要因】 ササをはじめとした林床の植物はニホンジカの食害によって少なくなり、林床の乾燥化を招いたことから、幼虫が穿孔する倒木や落枝も幼虫の生存に適したものが少なくなった。個体数が比較的多い種であったが、近年はその姿を目にするのは稀である。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整をはかるべきである。
 【文献】 146, 246, 390, 442, 443, 482.

(秋田勝己)



三重県 2025
CR
三重県 2015
VU
環境省 2020
—

キンイロネクイハムシ

Donacia japana Chujo et Goecke

コウチュウ目 ハムシ科

【選定理由】既知の生息点数は20以下であり、本種は湿地、池沼などの食草であるミクリ類が繁茂するところに限り生息している。ミクリ類の多くもレッドリストに選定されており自生地の湿地は減少している。

【種概要】体長は7.5~9.0 mm。成虫は金銅色から金緑色、晩春から夏にかけて出現し、スゲ類の花に集まりミクリ類の表面を剥ぎそるよう食害する。日中の気温の高いときは敏感であり活発に飛翔する。幼虫は水没した土中のミクリ類の根を食す。

【分布】北海道、本州、九州。県内では鈴鹿市、亀山市、名張市、伊賀市、松阪市（移入の可能性もある）、多気町の限定された地点で記録されている。

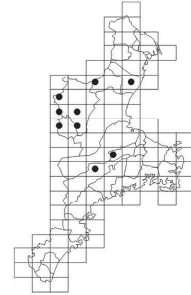
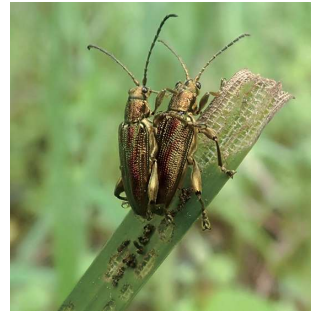
【現況・減少要因】過去に記録された地点は、湿地の乾燥化や埋め立て、池沼整備などにより多くの環境が消失してしまった。また近年、侵略的外来植物の侵入も影響している。

【保護対策】生息地の湿地およびその周辺を保全する。湿地周辺を改変してしまったため保水能力を低下させ乾燥化し消滅した産地もある。汚水の流入を防ぎ湿地内の外来植物は駆除する。

【文献】41, 289, 386, 507.

(乙部 宏)

(写真：伊賀市，2024年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

NT

セラネクイハムシ

Donacia akiyamai Komiya

コウチュウ目 ハムシ科

【選定理由】既知の生息地点数は2地点だが1ヶ所は食草が消滅し残りの地点の食草も激減し5年ほど確認できなく既に絶滅している可能性も高い。

【種概要】体長6~8 mm。成虫は7~9月頃にヒメコウホネのある水域のみに出現する。成虫は浮葉している表面を食し幼虫は水没している地中の根を食害する。

【分布】本州の静岡県、兵庫県、広島県と三重県の4県でしか記録されていない。三重県では志摩市のみで全国的に見ても貴重な産地である。

【現況・減少要因】食草であるヒメコウホネ (VU) が水質汚染や開発の影響を受けやすい。近年の侵略的外来種のアカミミガメ、アメリカザリガニによってヒメコウホネが壊滅的に消失している。

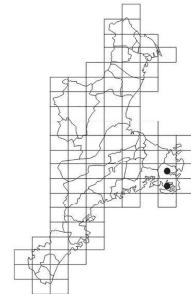
【保護対策】生息が確認されている水域でのアカミミガメ、アメリカザリガニを徹底的に駆除し利水者の理解を得て保全に取り組むのが急務である。

【特記事項】ヒメコウホネは志摩市の天然記念物に指定されている。

【文献】268, 335.

(乙部 宏)

(写真：志摩市，2016年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

DD

イネネクイハムシ

Donacia provostii Fairmaire

コウチュウ目 ハムシ科

【選定理由】既知の生息点数は5以下。低地の水生植物の生育する池沼でしか生息できない。近年そのような池沼は激減している。

【種概要】体長6.0~7.5 mm。成虫は晩春から初秋まで見られ、各種（ガガブタ、ヒルムシロ類、ヒツジグサ、ハス類など）の水生植物の浮葉を食害する。幼虫は水中のそれらの根を食す。また灯火にも集まる。

【分布】北海道、本州、四国、九州。三重県では桑名市（絶滅の可能性あり）、菰野町（移入の可能性が高い）、津市（絶滅の可能性あり）、伊勢市。

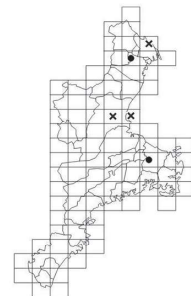
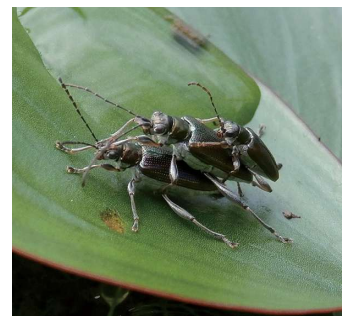
【現況・減少要因】池沼の護岸工事、開発による池沼の埋めて立て。生息への侵略的外来種アカミミガメ、アメリカザリガニなどの侵入による水生植物への消失も重大な影響を及ぼしている。

【保護対策】本種が生息する地の沼およびその周辺部の保全し、汚水などの流入をさせないようにして水生植物を守る。アカミミガメ、アメリカザリガニの駆除。伊勢市の生息地は農業用地のため地権者の理解を得るのも必要である。

【文献】41, 289, 304, 322, 504.

(乙部 宏)

(写真：伊勢市，2017年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

ツヤネクイハムシ コウチュウ目 ハムシ科
Donacia nitidior (Nakane)

【選定理由】 既知の生息点数は10以下。本種は湿地に依存した生活史をもち、全国的にも分布が限られ、生息地は極めて狭い範囲に限られている。いくつかの地点は開発によって消滅した。

【種概要】 体長5～6.5 mm。成虫は光沢のある銅色で稀に青色個体も出現する。4～5月頃にかけて日当たりの良い湿地内のスゲ類の花に集まり花粉を好んで食し刺激を与えると落下する。幼虫はスゲ類の根を食す。

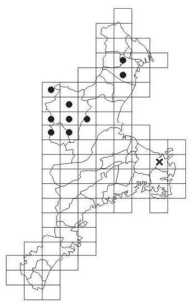
【分布】 本州（宮城県以西）、佐渡。三重県では四日市市、伊賀市、名張市、津市、伊勢市。

【現況・減少要因】 伊勢市の産地は開発によって消滅。他の既知産地も湿地の消失に伴い、生息地が激減している。青山高原は最も安定した生息地とされていたが近年の風力発電設置工事によって生息していた湿地が開発され危機的状況である。

【保護対策】 本種が生息する湿地とその周辺の環境保全を行う。特に青山高原は風力発電設備の関係で多くの場所が立ち入り規制されている。事業者は現存している湿地の調査を早急に行い確認されたら保護するのが事業者の責任である。

【文献】 41, 85, 89, 289, 322. (乙部 宏)

(写真：津市，1999年，乙部宏採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

オオサルハムシ コウチュウ目 ハムシ科
Chrysochus chinensis Baly

【選定理由】 既知の生息地は1地点。全国的にも少なく減少傾向であり本種の食草と思われるコバノカモメヅル、イヨカズラ（キョウチクトウ科）なども少ない。県内では古い記録しかなく絶滅している可能性もある。

【種概要】 体長11～13 mm。濃紺色であるが類似種もあり同定には注意を要する。

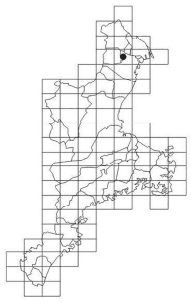
【分布】 本州，九州。三重県では四日市市で確認されている。

【現況・減少要因】 堤防工事，護岸工事，湿地の乾燥化による遷移の進行や埋め立てによる環境悪化。他県ではニホンジカによる食草の食害が確認されている。

【保護対策】 食草の保全が重要。原野性の植物は、遷移によって衰えていくので、除伐や除草などが必要である。

【文献】 505. (乙部 宏)

(写真：四日市市，1984年，斉藤昌弘採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
DD
環境省 2020
—

ババスケヒメゾウムシ コウチュウ目 ゾウムシ科
Limnobaris babai Chujo et Morimoto

【選定理由】 湿地のスゲ類に依存するゾウムシで、既知の生息地は伊賀市の3か所である。

【種概要】 体長3.8～4.2 mm。艶のある黒色で、縦長楕円形をした種類である。

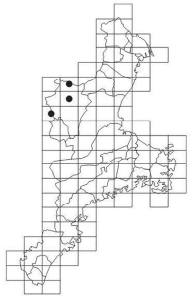
【分布】 本州・九州に分布するが、西日本地域では産地が少ない。県内では、伊賀盆地の伊賀市榎山・荒木・法花から記録されている。

【現況・減少要因】 1993年に伊賀市榎山の湿地で生息が確認された。伊賀盆地の里山・丘陵地の雑木林に接した湿地や湿地化した放棄田のスゲ類より採集されている。伊賀市法花は環境が維持されており、現在まで生息が確認されている。県内他地域では生息が確認されていない。

【保護対策】 生息地域の雑木林に接した湿地環境の保全が必要である。

【文献】 23, 155, 402. (官能健次)

(写真：伊賀市榎山，2015年，官能健次採集)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

ハマベゾウムシ

コウチュウ目 ゾウムシ科

Isonycholips gotoi (Chûjô et Voss)

【選定理由】日本固有種。津市の海岸などの個体で1960年に新属新種として記載。1960年後半ごろから確認できずRDB2005, 2015では絶滅に選定。しかし、2016年に再発見されその後の調査で生息地点が数か所追加された。既知生息地点5以下。

【種概要】体長3.8~4.2mm。粒度の細かい砂浜海岸の汀線に打ち上げられたアマモ類のみを食す。後翅が退化しているため飛べないが耐水性が強くアマモ類ともに漂流しながら分布を拡大。

【分布】北海道, 本州, 四国, 九州。県内では津市, 松阪市。

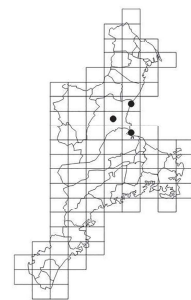
【現況・減少要因】1960年後半ごろから伊勢湾内のアマモ場の衰退で一時期絶滅となったが2000年ごろから三重県の農水商工部, 水産研究所などの伊勢湾沿岸でアマモ類の藻場育成が始まり再発見に至った。海の環境は砂浜生物と密接な関係を示した好例である。

【保護対策】アマモ場育成事業は, 二酸化炭素を多く吸収することも含め生物多様性の観点からでも極めて重要であり継続して行う。また海浜部の漂着物をすべてゴミだと考えるのは危険である。人工ゴミと自然漂着物とは区別し, 砂浜には重機を持ち込んだ漂着物の全面撤去などは行わない。

【文献】24, 54, 55, 514, 515, 516, 517, 518。

(乙部 宏)

(写真: 津市, 2019年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EX

環境省 2020

—

アルプスニセヒメガガンボ

ハエ目 ニセヒメガガンボ科

Protanyderus alexanderi Kariya

【選定理由】生息地点数は3地点で局地的な上, 灯火採集でも各地点で1個体が飛来したに過ぎない。幼虫が棲んでいるであろう, 砂礫底のある溪流の谷筋は土砂崩れの災害が発生しやすい。

【種概要】北アルプス登山道の島々谷をタイプ産地とする日本固有種で, 体長は7~9mm。翅に顕著な黄褐色の斑紋(個体差がある)を有し, m3室の先端は狭まり, M1~M3脈は翅の後縁に向かって顕著に広がる。灯火に飛来する。ニセヒメガガンボ属の幼虫は水生とされるが, 本種の幼虫と蛹は未発見。日本産ニセヒメガガンボ科は3種のみで, 翅の臀葉がよく発達し, 翅縁に達する5本のR脈と4本のM脈を有することが特徴。

【分布】本州の東北地方から中部地方の山岳部(標高500~2,000m)に生息するとされていたが, 近年, 本県では藤原岳東麓の標高205~246m付近で, いなべ市藤原町と北勢町から記録された。

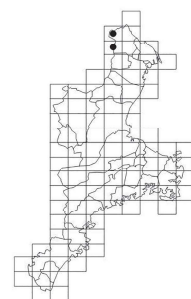
【現況・減少要因】藤原岳は石灰岩の採掘も進んでおり, 大雨による谷筋の崩落など自然災害も発生しやすい生息環境である。

【保護対策】幼虫が生息していると思われる流れの緩やかな砂礫底を有する溪流のある森林環境を保全すること。

【文献】69。

(篠木善重)

(写真: いなべ市, 2018年, 矢崎充彦採集, 藤原岳自然科学館所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

DD

シギアブの一種

ハエ目 シギアブ科

Chrysopilus shibuyai Nagatomi

【選定理由】既知の生息地点は1か所である。自然度の高い環境にのみ生息している。

【種概要】体長4~6mmの小形種。体形はやや細長く, 後方に向かって狭まる。体は黒色で灰色の微粉に覆われ, 金色の毛を装う。翅は全体に淡い黒褐色。河岸の草地に見られるキョウトシギアブに酷似するが, この種は森林性。幼虫は水性と思われる。なお, 屋久島の個体群と三重の個体群ではやや差異が認められ, 分類は再検討が必要である。年1化, 4~5月にかけて出現する。

【分布】日本固有種で, 沖縄, 屋久島, 本州(三重県)に分布。いなべ市北勢町の記録は取り消されたので, 県内では伊勢市外宮の記録(2♀)のみ。

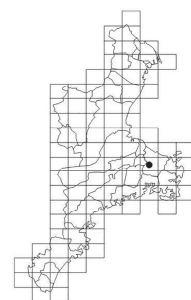
【現況・減少要因】生息地が1カ所しか確認できておらず, 分布域が低標高地に位置するところから, 開発によって姿を消し, 自然度の高い環境にわずかに残存していると考えられる。

【保護対策】生態等不明な点が多いので, 詳細な調査が必要。特に幼虫の生態の調査によって生息域が明らかにされなければならない。

【文献】38, 47, 72。

(篠木善重)

(写真: 鹿児島県, 1965年, 永富昭採集, 大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ハマアブ

Hybomitra littoralis Yonetsu, Shinogi et Watanabe

ハエ目 アブ科

【選定理由】生息地点数は4地点で、いずれも海浜植物の繁茂する自然度の高い砂浜海岸に限定される。個体数も極めて少ない。

【種概要】キボシアブ属の一種で、愛知県表浜海岸がタイプ産地。雌の体長は12.5~15.0mm。雄の体長は10.5~13.0mm。雌の複眼は、生時、緑色又は紫色をおびた4本の帯（横条紋）を持ち、雄では2本の帯となる。幅広い額とその両端に達する顕著な下・中額瘤によって、日本産キボシアブ属の他種から識別される。海浜性のアブで、学名と和名もそれに由来する。年1化で、砂浜のハマボウフウ *Glehnia littoralis* が開花する5月中旬頃~6月中旬にかけて砂浜に出現する。おそらく非吸血性と思われる。幼虫や蛹は未発見で、本種の生活史は未解明である。

【分布】静岡県、愛知県、三重県、和歌山県、兵庫県の砂浜に分布。県内では津市の田中川干潟、豊津海岸と白塚海岸および松阪市の吹井ノ浦から記録されている。

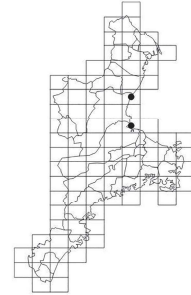
【現況・減少要因】砂浜への車両の侵入、松の植樹、園芸植物の栽培、重機を使用する流木の撤去作業などが本種の生息に大きな影響を与える可能性が高い。

【保護対策】自然度の高い砂浜環境を保全することが最も重要。

【文献】6, 22, 89.

(篠木善重)

(写真：津市，2010年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

スズキキロアブ

Atylotus suzukii Hayakawa

ハエ目 アブ科

【選定理由】潟湖タイプの干潟2ヶ所にのみ生息が確認されている局地性と個体数の少なさ。本州では唯一の生息地。

【種概要】頭幅が胸幅より著しく大きいキロアブ属の一種で、雌の体長は11~17mm、本種は海浜性。胸背は、雌では黄褐色、雄では黄金色。汽水域の干潟で産卵し、幼虫も干潟に生息する干潟固有のアブである。成虫は、県内では6~7月に出現する。長崎県では6月に産卵行動が観察されている。額の幅は広く、額瘤がなく、腹背の中央縦斑は明瞭で黄金色。腹背第2~5節に黒褐色の4斜条紋を持つ。

【分布】本州（三重県）、四国（高知県）、九州（長崎市）、対馬に分布。県内では津市河芸町田中川干潟と松阪市の松名瀬干潟から記録されている。津市は最北、松阪市は最東の記録地。

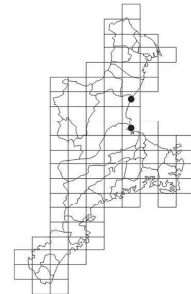
【現況・減少要因】生息域が自然度の高い潟湖タイプの干潟に限定される。

【保護対策】生息環境である潟湖干潟の保全。

【文献】64, 71, 75, 88.

(篠木善重)

(写真：津市，2011年)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

アカツリアブモドキ

Nycterimya fenestroinornata Lichtwardt

ハエ目 ツリアブモドキ科

【選定理由】生息地点数は2で、全国的にも極めて稀な種。

【種概要】体長12mm前後。体は翅と共に赤錆色。頭は扁平で、赤褐色の複眼に覆われ、単眼瘤も黄褐色。口吻は微小。赤褐色の胸背は頭部と同幅で、黄褐色の軟毛を密生する。平均棍は黄褐色、脚は淡い黄褐色。触角は短く淡褐色。ツリアブモドキ科の他種では幼虫が、種によってコガネムシの幼虫やバッタ類の若虫などに寄生することが知られているものの、本種については生態的知見が少なく、寄主も解明されていない。三重県や和歌山県では10月初旬に採集されている。

【分布】本州（静岡県、伊豆半島、三重県、和歌山県）、四国、九州。県内では大台町大杉から数例の記録のみ。

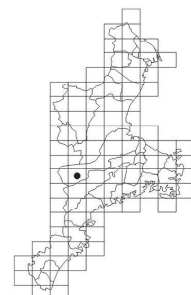
【現況・減少要因】県内では40年間記録がなく、減少要因も不明である。

【保護対策】早急調査が必要である。

【文献】1, 13, 24, 86.

(篠木善重)

(写真：大台町，1984年，今村功採集，ふるさと多度文学館所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

DD

環境省 2020

—

シバカワツリアブ

ハエ目 ツリアブ科

Bombylius shibakawae Matsumura

【選定理由】 生息地点数は2で局地的、かつ個体数も極めて少ない。全国的にも希少種。

【種概要】 普通種であるピロウドツリアブに酷似する種で、ホバリング中の2種を区別するのは至難である。県立博物館収蔵標本の中に誤同定標本も見つがっている。5月、モチツツジに訪花する。ピロウドツリアブよりも口吻が長く、翅の前縁にある暗褐色紋の後縁部が、透明な部分との境で不明瞭となり、特にR1室の斑紋の色は極めて薄くなる。幼虫はハチに寄生すると考えられている。

【分布】 本州（福島から山口）のみ。県内では名張市と伊賀市から記録されている。

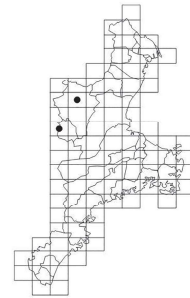
【現況・減少要因】 里山的環境が減少していることが大きな減少要因と思われる。

【保護対策】 里山的環境の維持、および残されている里山での広範囲な調査が必要と思われる。

【文献】 67.

(篠木善重)

(写真：名張市，2017年，篠木善重採集)



三重県 2025

CR

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ヤマトヒメナガヒラタハナアブ

ハエ目 ハナアブ科

Chamaesyrfus japonicus Shiraki

【選定理由】 1953年、大川親雄氏が鳥羽市菅島で採集した1雌をもとに新種記載された。以降40年間以上再発見されなかったが、近年になって本州や四国の各地から生息が確認された。本県でも、2017年に津市北部の海岸にて再発見された。

【種概要】 体長5～8mmの小形種。体形は細長く、胸部・腹部は黒色。腹部背板の第2～4節にかけては一對の四角形をした黄褐色の斑紋を装う。翅は透明。脚は黄褐色で一部黒褐色となる。各地に普通なホソヒメヒラタアブに類似するが、肩瘤に毛を装い、かつ触角刺毛が太く短いことで区別できる。成虫は10～4月にかけて見られる。発生のピークは11月と思われる。ショウロとホンショウロの2種のショウロ属菌から幼虫が発見されている。自然度の高い海浜の草原および松林に限って見られる。

【分布】 日本固有種で本州(茨城県、静岡県、三重県、兵庫県)、四国(高知県、愛媛県)の海岸に局所的に分布。県内では菅島と津市北部の海岸で記録されている。

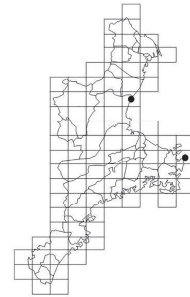
【現況・減少要因】 本種の減少ないし絶滅は、堤防・道路の建設や改修などが大きな要因であろう。

【保護対策】 ショウロ科のキノコが育つ松林のある海岸の環境保全が急務である。

【文献】 2, 8, 9, 18, 21, 23, 41, 42, 49, 53, 74.

(篠木善重)

(写真：津市，2016年，大石久志採集，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

ツマグロキチョウ

チョウ目 シロチョウ科

Eurema laeta (Boisduva)

【選定理由】 既知の生息地点は多いが、全域で衰退傾向。2011年の記録以降、2024年の目撃1例まで記録途絶。

【種概要】 前翅長20mm程度、黄色に黒の縁取りがある。近似のキタキチョウに比べ前翅先端が尖る。夏から秋に発生、成虫越冬で春にも活動。

【分布】 本州関東以西南、四国、九州。かつては県域ほぼ全域から記録された。

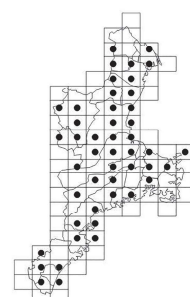
【現況・減少原因】 1980年代から急速に減少、複数頭記録されたのは1998年まで。全国的な衰退原因は不明。本県では近隣愛知、静岡県との比較で融雪期増水のための広い河川敷を有する大河がなく、河原に自生するホスト植物のカワラケツメイ群落を欠き、そのため生息状況悪化の際の逃避場所がなく生息基盤が脆弱と考えられる。

【保護対策】 河川敷、用水池堤防法面などの草地の適度な手入れ、在来植生の保全。近県では宅地造成地に侵入し繁茂する外来種、アレチケツメイをホスト植物として生息拡大する事例も知られ、動向に注意が必要。

【文献】 11, 28, 30, 35, 39.

(中西元男)

(写真：尾鷲市，1993年，河本実採集，撮影・所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

キマダラルリツバメ

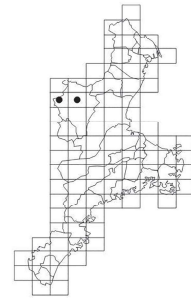
チョウ目 シジミチョウ科

Spindasis takanonis (Matsumura)

【選定理由】 既知の生息地点は3地点。1989年を最後に記録が途絶。
【種概要】 前翅長15 mm程度、褐色の翅表に雄では藍色斑を表す。裏面は黄色地に太い虎斑模様がある。シジミチョウの一群にみられる糸状尾状突起が左右2本ずつあるのが特徴。幼虫はアリに巣中で餌を与えられ成長する。6月発生年一化、幼虫越冬。
【分布】 本州。東北北関東中部では飛び石的、京都府から中国地方山陰側にやや広く分布する。県内では伊賀市の3地点から記録される。
【現況・減少原因】 1989年から以降記録がない。生息地は安定せず短期間で発生が絶える。本種の生活史の一部は枯死しかけた樹木に営巣するハリブトシリアゲアリに依存するため、樹が完全に枯死しアリの営巣に適さなくなるといなくなる。発生状況の追跡が困難で、減少要因特定減少率把握は難しい。
【保護対策】 古木の多い寺社林や古街道並木など歴史的景観を含む山村環境の保全維持。
【文献】 11, 28.

(中西元男)

(写真：伊賀市，1985年，中西元男採集，河本実撮影)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
NT

シルビアシジミ

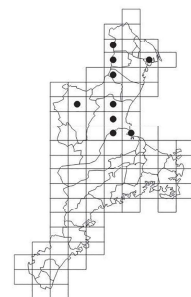
チョウ目 シジミチョウ科

Zizina emelina (de l'Orza)

【選定理由】 既知の生息地点は10地点前後。30年以上記録が途絶。
【種概要】 前翅長13 mm程度、雄翅表は黒い縁取りのある青灰色、雌は黒褐色の小型のシジミチョウ。春～晩秋に発生する年多化性、幼虫越冬。
【分布】 北関東が北限の本州、四国、九州。県内では桑名市、いなべ市、菰野町、亀山市、伊賀市、津市から記録がある。
【現況・減少原因】 いずれの産地も長期間確認例がない。草丈の低いシバ型草原に生息し、本州内では比較的高温多雨で植生遷移が速やかな本県気候下では生息基盤が脆弱。河川堤防、灌漑池法面などの、特に人為干渉の強い植生下で発生していたが、生息環境が不連続で個体群間の孤立化が進行しやすく衰退、個体集団崩壊の原因ともなり得る。
【保護対策】 生息可能な環境の継続的な観察と維持。地方空港滑走路周辺など特殊な管理形態のシバ型草原に生息がみられる地域もあり、類似の環境に注意を払う必要がある。
【文献】 11, 28.

(中西元男)

(写真：桑名市，1954年，今村功採集，河本実撮影)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
EN

ウラギンスジヒョウモン

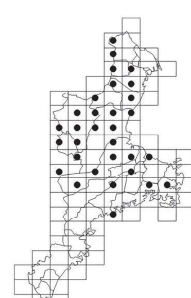
チョウ目 タテハチョウ科

Argyronome laodice (Pallas)

【選定理由】 既知の生息地点は多いが、減少傾向が著しい。継続的な生息地は恐らく1地点のみ。生息条件の悪化が顕著に認められENから移行。
【種概要】 前翅長30～40 mm内外、雄雌間で大きさの差が大きく雌は大型。橙色に黒紋のあるヒョウモン模様のタテハチョウ。他のヒョウモン類とは後翅裏面中央の銀白色縦筋紋で区別できる。初夏の年一化、卵又は初齢幼虫越冬。
【分布】 北海道、本州、四国、九州。県内では熊野灘沿岸を除く北勢から中南勢から記録がある。
【現況・減少原因】 本県では主として湿地草原に結びついた記録が多い。地域の開発、都市化に伴い一帯の乾燥化が進み、市街地近郊の産地が消滅した。郊外里山でも用水路整備など利水形態変化で湿地環境は消失傾向、生息状況が県内全域で悪化している。
【保護対策】 湿地環境には特異な植生、希少植物種の生息も知られ、多様性の観点からも積極的に保全する必要がある。また、分断化しつつある生息地間を回廊的に繋げて個体群間の孤立化を防ぐことも必要と思われる。
【文献】 11, 28, 33.

(中西元男)

(写真：菰野町，1993年，河本実採集・撮影・所蔵)



三重県 2025
CR
三重県 2015
EN
環境省 2020
VU

クロヒカゲモドキ

チョウ目 タテハチョウ科

Lethe marginalis (Motschulsky)

【選定理由】既知の生息地は10を超えるが、近年の減少傾向が著しい。生息要件の悪化が顕著で近年の記録がないことによりVUから移行。

【種概要】前翅長30~35 mm程度、雌がやや大型。褐色で前翅裏と後翅表裏に眼状紋がある。近似のクロヒカゲ、ヒカゲチョウとは翅形が丸みを帯び、前翅裏の三連紋の一番下が大きいことで区別される。6~9月に成虫が活動する年一化、幼虫越冬。

【分布】本州の東北に局地的、中部近畿中国地方、四国、九州の一部に分布。県内では伊賀、中勢の里山と紀伊山地の溪谷地で断続的に記録される。

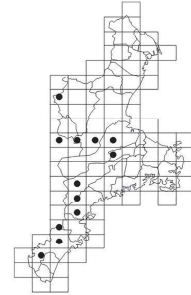
【現況・減少原因】いずれの生息地でも近年記録途絶、里山では雑木林の経済的価値低下による手入れ不足、荒廃が進行し生息環境の悪化が著しい。

【保護対策】里山の維持管理、下草の繁茂を抑えある程度明るい疎林状態を維持する。

【文献】11, 28, 41.

(中西元男)

(写真：松阪市，2007年，河本実採集・撮影・所蔵)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

EN

シンテイトビケラ

トビケラ目 シンテイトビケラ科

Dipseudopsis collaris McLachlan

【選定理由】既知の生息地点は1か所であり、その生息環境の悪化が進んでいる。

【種概要】成虫の体長は約14~16 mm、前翅長15~17 mm、雄は全体に褐色で雌はやや大きく翅の色は薄い褐色。幼虫は体長約30 mm、頭部は黄色で明瞭な斑紋はなく腹部は白色、中胸、後胸と腹部の第一節の腹側に指状の鰓がある。泥中にy字型の細長い筒状の巣を作る。

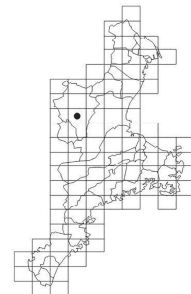
【分布】近年の記録は滋賀県（琵琶湖）と三重県のみである。

【現況・減少要因】生息地である伊賀市の溜池は、最近になりオオクチバスやコイの捕食圧により個体数が減少しており絶滅の可能性が極めて高い。この生息地周辺に溜池は多く見られるが、自然度が高く、水質が良好で本種の幼虫が好む底質の溜池は見当たらないのが現状である。

【保護対策】オオクチバスの駆除を行うなど積極的な保護対策が求められる。

【文献】6, 10.

(森田久幸)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

スジトビケラ

トビケラ目 エグリトビケラ科

Nemotaulius brevilinea (McLachlan)

【選定理由】既知の生息地点数は10以下である。1950年代の記録を最後にその後50年以上再発見されていない。

【種概要】成虫の体長は15~20 mm、前翅長20~25 mm。トビケラの中では大型で特徴的な翅の形と斑紋が見られる。幼虫は不明。

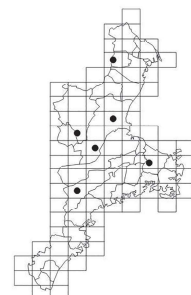
【分布】近年の記録は、北海道、青森、秋田県でのみ確認されている。県内では、菰野町、津市、名張市、多気町、大台町から記録がある。

【現状・減少要因】幼虫は未発見であり生態は不明であるが、おそらく幼虫は湖沼や湿地などの止水域に生息すると考えられ、その生息地である止水環境の悪化が要因と考えられる。

【保護対策】50年前、本種は山地から平地まで広く分布しており、県内の山地の止水域から再発見される可能性が考えられるため、現状把握のための生息調査と止水域環境の保全、保護が必要である。

【文献】1, 9.

(森田久幸)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蕨類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蕨苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ナシモモフトハバチ

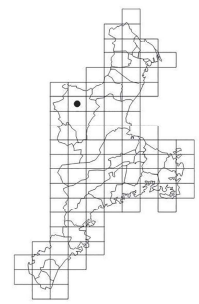
ハチ目 コンボウハバチ科

Cimbex carinulatus Konow

【選定理由】県内での記録が1ヶ所しか無く、60年以上記録が途絶えている。
 【種概要】成虫の体長20 mmほどの黄色地に黒縞の斑紋がある。脚は大半が黄褐色、翅は黄色を帯び、前胸前縁は幅広く褐色～暗褐色。成虫は4～6月に出現。幼虫は4～5月に出現し、ナシ、ソメイヨシノ、ボケ、オウトウなどの葉を食べる。
 【分布】国外では朝鮮半島、極東ロシア、国内では本州、四国、淡路島に分布する。県内では伊賀市から記録されるのみ。
 【現況・減少要因】1961年、旧上野市で採集されて以降、記録されていない。もともと県内では、生息地が限られ、数も少なく、開発による生息環境の消滅により、減少したと考えられる。
 【保護対策】幼虫の餌となるサクラなどが生える環境を保全する。
 【文献】41。

(篠木善重)

(写真：兵庫県，1994年，矢代学採集，松本吏樹郎撮影，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025
CR
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

ベニイトトンボ

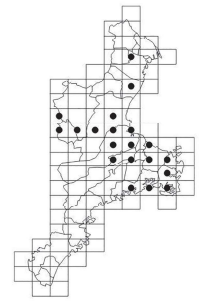
トンボ目 イトトンボ科

Ceragrion nipponicum Asahina

【選定理由】現在の確実な生息地は志摩半島に限られ、生息地点数は5以下と思われる。生息地の多くで個体数の減少が著しい。
 【種概要】成虫は、体長36～43 mm、雄は全身が朱赤色で無斑。雌は地色がややくすんだ橙褐色をしている。平地から丘陵地の抽水植物や沈水植物、浮葉植物が繁茂する池沼に生息する。
 【分布】国外では中国中部。国内では関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。県内では四日市市、名張市、津市、松阪市、伊勢市、南伊勢町などで記録されている。
 【現況・減少要因】2000年以降は北勢地域では記録されていない。2010年以降の記録は伊勢市と志摩市の2ヶ所のみであり、局所的で個体数は少ない。生息地である丘陵地や平野部のため池は、開発や環境汚染により消滅もしくは悪化している。また、個体数の減少には農薬が影響している可能性もある。
 【保護対策】伊勢市や志摩市から新産地の報告があることから、県内での生息現状を明らかにする必要がある。本種の生息条件である抽水植物や浮葉植物、沈水植物の繁茂する水域の保全が必要。
 【文献】2, 5, 6, 36, 69, 92, 102, 104, 120, 153, 154, 161, 172, 177, 179, 196, 228, 230, 236。

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：志摩市，2023年)



三重県 2025
EN
三重県 2015
VU
環境省 2020
NT

ルリボシヤンマ

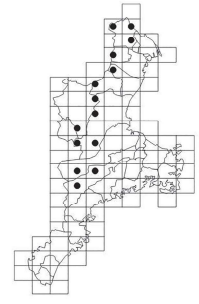
トンボ目 ヤンマ科

Aeshna juncea juncea (Linnaeus)

【選定理由】生息地は北勢地域・伊賀地域・中勢地域の標高500 m以上にある池沼に限定的に生息することから、県内での分布は局所的である。
 【種概要】成虫は、体長72～88 mm、黒褐色の地に黄緑色とルリ色の小紋を散りばめた大型ヤンマ。高標高地や山麓の抽水植物が繁茂する小規模な池沼に生息する。
 【分布】国外では朝鮮半島、中国、ヨーロッパからシベリアなど寒冷地に広く分布する。国内では北海道、本州、四国（徳島県）に分布する。県内では鈴鹿山脈や青山高原などの高標高地を中心に生息するが、いなべ市藤原町などでは山麓の池沼や湿原でもしばしば観察されている。
 【現況・減少要因】生息地は局所的だが、2000年以降の記録は比較的多く、御在所岳山頂付近の池沼などは安定した生息地となっている。生息域の渇水や環境悪化に伴い減少傾向にあり、生息環境がしばしば脅かされる状況が多発する傾向にある。
 【保護対策】本種が生息する標高500 m以上に分布する池沼の状況を把握し、開発による消失や乾燥・枯渇がないよう注意する必要がある。
 【文献】4, 5, 6, 55, 76, 105, 106, 118, 120, 170, 171, 184, 193, 198, 202, 228, 237。

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：菰野町，2024年)



三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

コサナエ

トンボ目 サナエトンボ科

Trigomphus melampus (Selys)

【選定理由】 確実な生息地は、伊賀地域と東紀州地域に限定される。湿地の埋め立てや環境悪化により生息地が消滅している。

【種概要】 成虫は、体長39～47 mm、黒地に黄色の反復模様をもつ小型サナエ。平地から山地の水田用水、ため池、湿地、池沼などに生息する。

【分布】 日本固有種で、北海道および本州に分布。北海道と東北地域では普遍的に生息するが、西南日本では特殊な地域に限られる。県内では伊賀盆地と東紀州地域を中心に生息地が点在している。

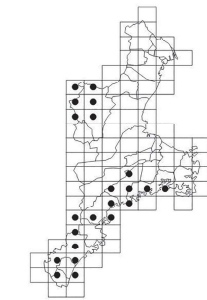
【現況・減少要因】 伊賀市と御浜町では2010年以降も比較的安定して生息が記録されているが、伊勢志摩地域では2000年以降の記録がほとんどない。伊賀地域では、2010年以降も新しい産地がいくつか発見されている。一方、県内最大の生息地であった南伊勢町の押淵では、湿原下流部の埋め立てや河川改修により絶滅した可能性が高い。

【保護対策】 ため池や湿地の調査を行い、生息状況を明らかにする。土地開発事業等により生息地への影響がある場合は、適切な保全対策を講じ、生息環境消失を防止する必要がある。

【文献】 2, 6, 111, 123, 133, 140, 150, 172, 178, 183, 199, 204, 205, 211, 212, 214, 224, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：伊賀市，2024年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

オグマサナエ

トンボ目 サナエトンボ科

Trigomphus ogumai (Asahina)

【選定理由】 北勢地域や伊賀地域で既知生息地はいくつかあるが、2000年以降の記録は菰野町の1件のみで、三重県内での生息状況が不明である。

【種概要】 成虫は、43～50 mm、黒地に黄色の反復模様をもつ小型サナエ。コサナエ属の中では一番大きい。平地から山地の抽水植物が繁茂する泥底の池沼に生息する。

【分布】 日本固有種で、石川県、長野県、愛知県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では北勢地域、伊賀市、南伊勢町で記録されている。

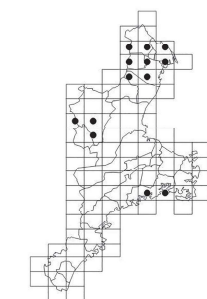
【現況・減少要因】 2014年の菰野町での記録以外はすべて1999年以前の記録であり、生息の現状は不明である。ため池の荒廃、埋立等による生息域の消滅により個体数が激減していると思われる。

【保護対策】 県内での生息状況が不明のため、生息可能性のあるため池等の現状と生息状況を明らかにすることが必要である。生息する場合は、湿生環境の保全に努め、環境を維持するための対策が必要である。

【文献】 16, 42, 43, 61, 76, 83, 121, 122, 199, 224, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：滋賀県，2020年，牛島積広撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

タイリクアカネ

トンボ目 ヤンマ科

Sympetrum striolatum imitoides Bartenev

【選定理由】 生息地は海岸断崖の大時化の時にのみ海水を被るようなタイドプールという特殊な環境であり、既知生息地点数は3以下である。

【種概要】 成虫は、体長40～48 mm、アキアカネに酷似するが、脚の脛節の外側に細い黄色条があること、下唇中片が濃褐色をしていること、翅の基半部に橙黄色斑が広くあることなどで区別できる。平地の海岸近くにある開放的な池沼、水溜まり、プールなどに生息する。

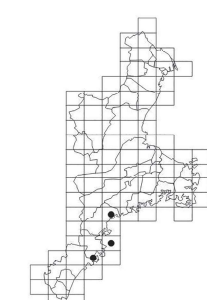
【分布】 国外では朝鮮半島、中国東北部からウスリーにいたる極東アジアに分布する。国内では北海道、青森、岩手、宮城、福島、石川、富山、三重、和歌山、及び兵庫県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では熊野市楯ヶ崎と紀北町の海跡湖で記録されている。

【現況・減少要因】 熊野市の楯ヶ崎ではタイドプールの縮小並びに水位低下により年々減少傾向にある。紀北町の海跡湖ではほぼ毎年確認されていたようだが、最近の状況は不明である。

【保護対策】 本種の未熟個体は水域から離れ広範囲に移動するので、現状で対策は難しい。生息域の環境変化の推移を記録していくことが必要である。

【文献】 140, 162, 168, 178, 203, 214, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

キトンボ

トンボ目 トンボ科

Sympetrum croceolum (Selys)

【選定理由】 県内各地の丘陵地を中心に生息地が点在するが、一生息地での個体数は少なく、記録も途切れがちである。

【種概要】 成虫は、体長36~45 mm、翅の基半部と翅端までの前縁が鮮やかなオレンジ色をしたやや太身のずんぐりした体形である。主に丘陵地や低山地の森林に囲まれた抽水植物の繁茂するやや深めの池沼やため池などに生息する。

【分布】 国外では朝鮮半島、中国東北部から中部に分布。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内ではかなり広範に見られるが、生息地は局所的である。

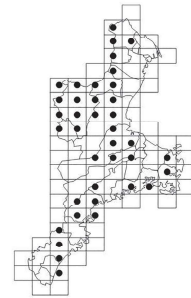
【現況・減少要因】 かつて四日市市や松阪市に多産地したが、2000年以降になると個体数が著しく減少した。伊賀地域では現在でも数カ所で発生が見られるが、個体数は多くない。減少要因としては、池沼など生息地の消滅のほか、農薬が影響している可能性もある。

【保護対策】 本種の好む湿地または湿原において、ヨシなどの抽水植物や浮葉植物が繁茂する状態を維持し、既知生息域の保全が必要である。

【文献】 5, 6, 13, 14, 67, 76, 82, 133, 140, 154, 157, 161, 163, 172, 176, 177, 178, 188, 203, 213, 214, 223, 226, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：岐阜県，2022年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

ハマスズ

バッタ目 ヒバリモドキ科

Dianemobius csikii (Bolivar)

【選定理由】 既知の生息地点は5以下であり、生息地は分断されている。

【種概要】 体長約6~9 mm。体色は白っぽい褐色、後肢は白黒斑で、砂地に対する保護色。海浜、河原の砂地に生息し、ジー、ジーと鳴き、チョン、チョンと合いの手を入れる。年2化、成虫は6~10月に出現する。

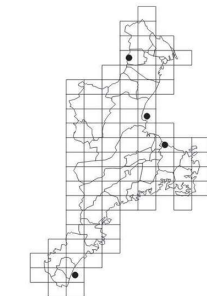
【分布】 ウスリー、中国、モンゴル、インド、スリランカ、ビルマ。国内では、北海道、本州、四国、九州、淡路島、奄美大島に局所的に分布し、県内では古い記録がほとんどであり、菰野町(朝明川)、津市、松阪市、伊勢市、紀宝町から記録されている。

【現況・減少要因】 1959年の伊勢湾台風以降に生息環境が大きく変化し、再確認できない地点が多い。自然災害、護岸工事などにより生息地が狭められ、個体数が減少している。

【保護対策】 自然海岸の消失に伴い、生息範囲が狭められているため、安定した生息地環境の保全が求められる。

【文献】 2, 4, 15, 32, 54, 56, 57, 58, 59.

(村井俊郎・河北 均)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

アカエゾゼミ

カメムシ目 セミ科

Auritibicen flammatus (Distant)

【選定理由】 2015年以降新たな生息地が見つかったが、既知の生息点数は10以下であり、生息範囲が狭く局所的である。

【種概要】 体長(翅端まで)59~68 mm。前胸背と中胸背のW字状紋は赤味が強く、翅は透明で基部に近い所の翅脈は橙色~緑色を呈する。雄の腹弁は第3腹板に達しない。成虫は7月中旬~9月中旬に出現する。

【分布】 北海道、本州、四国、九州、国外では中国に分布。県内ではこれまでに津市、松阪市および大台町での記録がある。

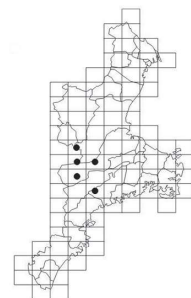
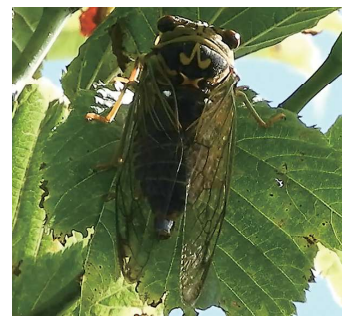
【現況・減少要因】 県内では、ブナ帯下部を中心に自然林に生息する。過去から行われてきた自然林の造林地化や開発が局所的な本種の生息基盤に影響を与えている。

【保護対策】 自然林の保全を行う。また一部の生息地では風力発電施設の計画が立っており、本種の生息状況への影響が危惧される。

【文献】 2, 19, 26, 44, 49, 78, 79, 80, 81, 82.

(北村 颯・乙部 宏)

(写真：松阪市，2019年，北村颯撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

コエゾゼミ

カメムシ目 セミ科

Auribicen bihamatus (Motschulsky)

【選定理由】 既知の生息点数は10以下。生息地は極めて狭く限られている。

【種概要】 エゾゼミ類の中では小型で、体長（翅端まで）48～56 mm。前胸背後縁付近の太い黄褐色帯は、通常黒紋で外縁の帯と切断される。雄の腹弁は長くて左右が離れ、第4腹板をこえる。成虫は7月中旬～8月下旬に出現する。

【分布】 北海道、本州、四国、国外では樺太、千島。県内では、津市、松阪市、大台町。

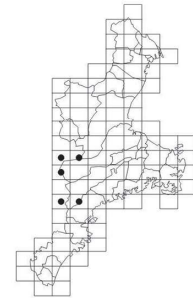
【現況・減少要因】 標高1,000m以上のブナ帯の限られた地域に生息している。ニホンジカによる鹿害によって自然林の荒廃と乾燥化によって衰退している。近年の高温化もブナ林の再生の脅威にもなっていることが危惧される。

【保護対策】 ブナ帯自然林を保全するとともに、長期的に自然林の再生、復元を図る。

【文献】 1, 19, 21, 27, 44, 53, 54, 69, 79, 82.

(北村 颯・乙部 宏)

(写真：松阪市，2019年，北村颯撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

イトアメンボ

カメムシ目 イトアメンボ科

Hydrometra albolineata (Scott, 1874)

【選定理由】 既知生息地が10以下で、かつ生息範囲は極めて局所的である。

【種概要】 体長12～14 mmの大型種で、体色は黒色を呈する。触角第2節が長く、第4節とほぼ等長で、雄の腹部腹面には長毛が密生する。

【分布】 本州、四国、九州、対馬、奄美大島に分布する。県内では鈴鹿市、津市、伊勢市、鳥羽市、伊賀市、尾鷲市での記録があるが、過去の記録は再検討が必要である。

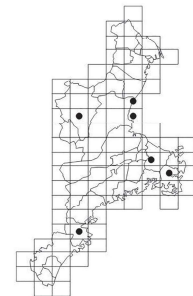
【現況・減少要因】 過去には県内全域に広く生息していたと考えられるが、近年の記録はない。かなり以前から全国的に生息範囲が局所的になったとされる。既知の生息地状況から、特に低地の開放的な湿性環境を好むと考えられる。土地改良に伴う水田や湿性休耕田の消失、湧水の枯渇などが主な減少要因と考えられる。

【保護対策】 特に水田周辺の低湿地帯の開発抑止。湧水を確保するための生息地および後背丘陵地の森林保全。

【文献】 32, 35, 40, 43, 73.

(鈴木 賢・矢崎充彦)

(写真：神奈川県，2002年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

キバナツノトンボ

アミメカゲロウ目 ツノトンボ科

Ascalaphus ramburi MacLachlan

【選定理由】 既知生息地は10以下であるが現在生息している地域は伊賀盆地の限られた地点だけである。

【種概要】 成虫の体長は約23 mm、翅長は30 mm弱で後翅は暗灰褐色に黄色の筋が網目状に広がり5～6月頃に発生し、日中草原上を活発にトンボのように飛び回りススキなどのイネ科に好んで止まる。幼虫は巣をつくらないアリジゴクでススキなどの葉上や地表の落葉下などで小昆虫などを捕食する。

【分布】 本州、九州に分布する日本固有種。県内では北勢、中勢、伊賀地域で記録がある。

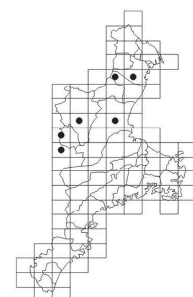
【現況・減少要因】 低山地、丘陵地などのやや乾燥したススキ群落を中心とした草地を好む。このような草原は一定の人為的介入（草刈り）が必要であり開発の影響も受けやすい。また小規模な草原は外来植物などの侵入を受けやすい。

【保護対策】 ススキ群落を中心とした草原環境の保全が必要である。また数少ない生息地である上野森林公園では、発生地環境保全保護を実施しておりモデルケースとすべきである。

【文献】 2, 7, 13, 15, 17, 18, 20.

(乙部 宏)

(写真：伊賀市，2024年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

シロヘリハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科

Cicindela yuasai yuasai Nakane

【選定理由】 既知生息地点は5以下。海岸部を好むが環境選択範囲が狭く生息地が局限される。

【種概要】 体長9～12 mm。海岸部の岩礁地帯に生息し、成虫、幼虫共に無脊椎動物を捕食する肉食である。盛夏に出現し、成虫は通常歩き廻って捕食活動を行うが人の動きなどに敏感に反応し、すぐに飛ぶ。幼虫は崖や岩礁の僅かな隙間の粘土質の表面に穴をあけて潜み、近寄る生物を待ち伏せて捕食する。

【分布】 本州（関東以南の太平洋沿岸部）、四国、九州、沖縄。県下では鳥羽市（離島含む）、志摩市。

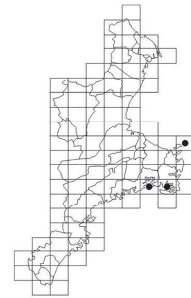
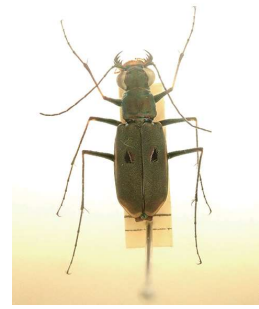
【現況・減少要因】 県下には岩礁地帯が広く存在するにもかかわらず、生息地は少ないのは幼虫が生息できる岩礁部の隙間に粘土質が溜る環境が少ないためである。

【保護対策】 現生息地の保全と局所的分布の要因を探索する詳細な調査が必要である。

【文献】 30, 82, 323, 432.

(乙部 宏)

(写真：志摩市，1990年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

カワラゴミムシ

コウチュウ目 カワラゴミムシ科

Omopron aequalis Morawitz

【選定理由】 既知生息地点が10以下。生息地の環境が悪化しており、近年見られなくなった産地が多い。

【種概要】 体長5.5～6.5 mm。主に河川中流域の水辺の砂地に生息する。日中は水際の砂中に潜み、夜間活動する。灯火によく飛来する。

【分布】 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国。三重県では、いなべ市、菰野町、四日市市、鈴鹿市、亀山市、津市、松阪市、大台町などで確認されている。

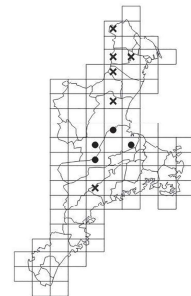
【現況・減少要因】 記録の多くは1970年代以前のものである。聴き取りによると、1970年代には員弁川や安濃川沿いの灯火に普通に見られたというが、最近では全く見られない。近年は、雲出川、櫛田川で確認されているのみである。直接的な河川改修のほか、生息地上流にダムなどが建設されると、本種の生息に適した砂地が維持されにくくなる。灯火に誘殺される個体も多い。

【保護対策】 生息地周辺では河川改修や照明の設置などに配慮するべきである。

【文献】 12, 65, 81, 349, 255, 302, 390, 493, 494.

(秋田勝己)

(写真：多気町，2020年，乙部宏撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

セアカオサムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Carabus (Hemicarabus) tuberculatus (Dejean & Boisduval)

【選定理由】 既知の生息地点数は10以下。安定した生息地は知られていない。

【種概要】 体長16～22 mm。肉食性。野外での主食などは不明な点も多い。草原、疎林などの開放的な環境を好む。他県では河川敷等での採集例もある。

【分布】 全国的に記録はあるが、西南日本では少ない。県内ではいなべ市、菰野町、四日市市、津市美杉町、名張市で記録されている。国外では東アジア地域に分布する。

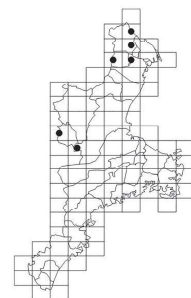
【現況・減少要因】 自然草原の少ない県内での記録は局地的で、山間の牧場、疎林、平地の畑の脇などで採集されている。しかし多産した地点でも長期間にわたって連続的に発生した例は知られていない。本種は洪水などの自然攪乱や人為的な攪乱を受けた環境に適しているようで、そのような不安定な環境を好むことが、本種の発生状況にも影響している可能性がある。2000年代以降の記録は特に少なく、減少傾向が著しい。

【保護対策】 本種の保護には、植物遷移を妨げる人為の介入も必要となる場合もあり得る。生態的に不明な点が多く、今後の調査研究が望まれる。

【文献】 148, 183, 190, 216, 274, 367.

(久保田耕平)

(写真：四日市市，1983年，久保田耕平採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

ムロウオサムシ (イワキオサムシ室生亜種) コウチュウ目 オサムシ科
Carabus (Ohomopterus) iwawakianus muro Ishikawa & Kubota

【選定理由】分布が局限され、域内でも局地的にしかみられない。採集地点は数地点程度と思われる。

【種概要】体長20~24 mm. 主食はフトミミズ類と推定され、主として樹林内に生息する。イワキオサムシ*C. (O.) iwawakianus* (Nakane)の亜種で、他の地域個体群とは交尾器や外部形態に差が認められる。

【分布】日本固有亜種で、名張市南部から津市(旧美杉村)にかけての室生山地の限られた地域に分布する。同じ山域でも生息地は点在している。隣接する奈良県でも本県との境界付近では分布する可能性が高い。他の国内外の地域には分布しない。

【現況・減少要因】近縁各種より自然度の高い森林を好み、森林内で生息密度が高い。攪乱を受けた環境下では近縁のヤコンオサムシに置き換わっているような地点もある。近年シカによる下層植生の被害が著しく、生息環境の悪化が懸念される。

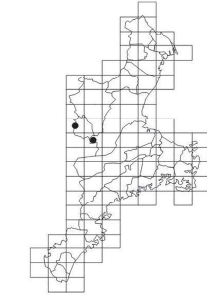
【保護対策】人為的攪乱によって生息環境の悪化や近縁競争種の侵入を招く可能性が考えられるため、分布域内の環境改変をできるだけ避け、シカの個体数管理を適切に行う必要がある。

【特記事項】タイプ産地は名張市青蓮寺。

【文献】131.

(久保田耕平)

(写真：名張市，2023年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

アヤムネスジタマムシ コウチュウ目 タマムシ科
Chrysodema lewisii E.Saunders

【選定理由】既知の生息点数は5以下。南西諸島では普通種であるが本州では局限されており本州では三重県が分布の北限地となる。

【種概要】体長14~26 mm. 全体に金緑色で新鮮な個体は容易に剥離する淡黄色粉に覆われている。海岸型照葉樹林に生息しホルトノキ、タブなどの葉を食す。寄主植物はスダジイ、ウバメガシなど。

【分布】本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、南西諸島。三重県では尾鷲市、熊野市で記録されている。

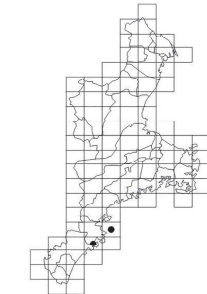
【現況・減少要因】海岸部の照葉樹林で形成される自然林の減少。

【保護対策】生息地である海岸部の照葉樹林の保全を行い森林伐採は行わない。

【文献】520.

(乙部 宏)

(写真：熊野市，2023年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	—

タキハラオサムシ (マヤサンオサムシ滝原亜種) コウチュウ目 オサムシ科
Carabus (Ohomopterus) maiyasanus takiharensis (Katsura & Tominaga)

【選定理由】県内特産で分布域が局限される。採集地点は連続的だが、既知生息地点数は10以下と考えられる。

【種概要】体長21~26 mm. 主食はフトミミズ類と推定され、樹林内や林縁に生息する。北陸地方を中心に分布するマヤサンオサムシ*C. (O.) maiyasanus* Batesの亜種で、主たる分布域から著しく隔離されている。交尾器形態はウガタオサムシに比較的似ているが、特化が認められる。小型の亜種で、周囲に分布するシマオサムシ(イワキオサムシ志摩亜種)*C. (O.) iwawakianus shima* Ishikawa & Kubotaによく似ており、交尾器によらない外見からの区別はむずかしい。

【分布】日本(三重県)固有亜種で、大台町、大紀町の限られた地域に分布する。

【現況・減少要因】分布域には樹林帯も多く、差し迫って絶滅の恐れは小さい。しかし1980~90年代と比較すると生息環境が破壊された地点も多く、個体密度も減少傾向にある。近年シカによる下層植生の被害が著しく、生息環境の悪化が懸念される。

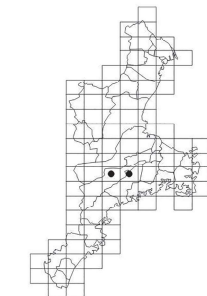
【保護対策】分布域内の環境改変をできるだけ避け、シカの個体数管理を適切に行う必要がある。

【特記事項】タイプ産地は大台町上菅。

【文献】130, 161.

(久保田耕平)

(写真：大紀町，2023年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 苔苔類
- 藻類
- キノコ

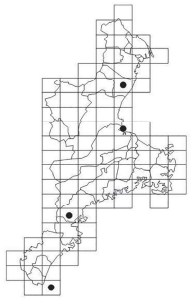
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ウミホソチビゴミムシ コウチュウ目 オサムシ科
Perileptus morimotoi S. Uéno

【選定理由】 既知の生息地点が5以下。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 1.8~2.3 mm. 河川下流の感潮域で、満潮時には完全に水没する岩石や礫が堆積した間隙や石下に生息する。
 【分布】 本州（静岡以西）、四国、九州、奄美大島に分布する。鈴鹿市、津市、松阪市、紀北町、紀宝町で確認されている。
 【現況・減少要因】 洪水後の漂着ゴミの下から採集された鈴鹿市の例を除くと、いずれも良好な河口干潟で得られている。河口付近の河川改修などがおこなわれると、本種の生息に大きな影響を与えるものと思われる。
 【保護対策】 生息地周辺での河川改修を行わないことである。
 【文献】 46, 205, 258, 260.

(秋田勝己)

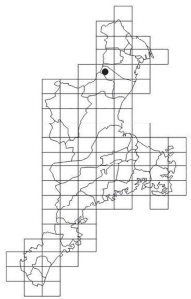


三重県 2025
EN
三重県 2015
VU
環境省 2020
NT

シャクダイジンメクラチビゴミムシ コウチュウ目 オサムシ科
Kurasawatrechus katoi S. Uéno

【選定理由】 鈴鹿市小岐須町の「石大神の風穴」にのみ生息する固有種であるが、この洞窟そのものは採掘のためにほとんど消失している。
 【種概要】 体長3 mm. 複眼も後翅も退化し、体色はアメ色に退色する。洞窟の外では生息できないが、同地域の石灰岩地下浅層から確認された。
 【分布】 日本固有種で、本州の鈴鹿市小岐須町の石灰岩地域にのみ生息する。
 【現況・減少要因】 この石灰洞は石灰岩の採石のために破壊され消滅したが、近くの石灰岩の地下浅層から2頭目が採集された（未発表）。さらにその後の調査により付近の地下浅層から生息が確認された。現在も石灰岩の採石は継続され、生息環境は良くない。
 【保護対策】 採石会社への行政の適切な指導が必要である。
 【特記事項】 生息地一帯は鈴鹿国定公園に指定されている。
 【文献】 383, 413.

(稲垣政志・稲垣順子)

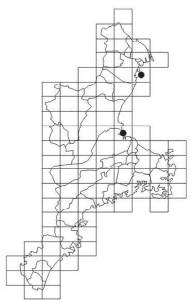


三重県 2025
EN
三重県 2015
CR
環境省 2020
—

キバネキバナガミズギワゴミムシ コウチュウ目 オサムシ科
Armatocillenus aestuarii S. Uéno

【選定理由】 既知生息地点が5以下。生息基盤がきわめて脆弱である。
 【種概要】 体長約4.5 mm. 生息環境は水質良好な河川下流の感潮域干潟で、満潮時には完全に水没する。表層が砂泥で、その下が厚い砂礫層、常に高密度のチゴガニのコロニーを伴う。干潮時に砂泥上で活動し、チゴガニの巣穴や砂泥のひび割れをシェルターとして利用している。満潮時には主にチゴガニの巣穴中で過ごす。冬季は砂泥層の下に厚く堆積した砂礫層の中から発見される。
 【分布】 日本固有種。本州、四国、九州。三重県では四日市市（鈴鹿川派川）、鈴鹿市（千代崎海岸）、津市（雲出川、雲出古川）、松阪市（櫛田川）で記録される。鈴鹿市の記録は漂着によるものである。
 【現況・減少要因】 鈴鹿派川では生息の確認ができなかった。雲出川、雲出古川の個体密度は高いものの、生息条件が限定されることから、生息地は非常に狭い。したがって、生息地周辺におけるちょっとした河川の改修などが直接生息地の消失につながるものと考えられる。
 【保護対策】 このような環境は水質汚染や河川改修、堤防や河口堰の建設などで容易に破壊されることから、十分な配慮が必要である。
 【文献】 18, 251, 260.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
VU
環境省 2020
VU

スズカヌレチゴミムシ

Apatrobus narukawai Morita

コウチュウ目 オサムシ科

【選定理由】既知の生息地点数は5以下で、生息環境は限定されている。

【種概要】体長8.5~10 mm. 体は黒色で後翅は退化しており、驚かすと死んだ真似をする。鈴鹿山脈北部石灰岩地帯の標高約700 m以上の普段は水の流れない沢の源流部の石や落ち葉の下に生息している。

【分布】鈴鹿山脈北部石灰岩地帯の固有種で、県内ではいなべ市藤原町コグルミ谷と坂本谷で確認されている。

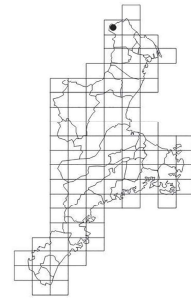
【現況・減少要因】藤原岳は以前から石灰岩の採掘が行われており、分布域が狭められている。タイプロカリティーの坂本谷や、藤原岳周辺の谷は1998年の土石流により谷の様相が一変してしまったが、隣接地域では大きな環境の変化は見られない。

【保護対策】鈴鹿山脈北部石灰岩地帯の自然環境の保全が急務である。

【文献】206.

(生川展行)

(写真：いなべ市，1992年，生川展行採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

クロテングホラアナヒラタゴミムシ

Jujiroa yorikoae Morita et Inagaki

コウチュウ目 オサムシ科

【選定理由】既知の生息地点が1地点である。今回の調査により新種として発見記載した。

【種概要】体長8.7~11.9 mm. 全体に薄い褐色。複眼は退化して小さく後翅は退化して飛べない。ナガホラアナヒラタゴミムシより小さく体色も薄い。

【分布】度会郡大紀町阿曾藤ヶ野の穴（黒天狗の穴）。

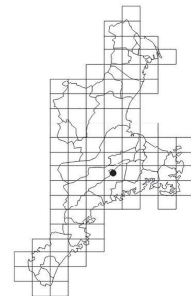
【現況・減少要因】藤ヶ野の穴のみに生息している。現時点で他の地域での生息が確認できない。

【保護対策】入洞が容易な場所にあるので、過度な入洞による人為的な環境変化が生息に影響を及ぼす可能性がある。

【文献】414.

(稲垣政志・稲垣順子)

(写真：大紀町，2023年，稲垣政志採集（ホロタイプ）)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

オオヨツボシゴミムシ

Dischissus mirandus Bates

コウチュウ目 オサムシ科

【選定理由】既知の生息地点10以下。生息環境が悪化し、近年個体数が減少している。

【種概要】体長17~19 mm. アカマツ林や明るい雑木林の林床などを夜間歩行しており、灯火にも飛来する。崖などの土中で越冬する。

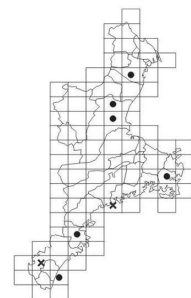
【分布】本州、四国、九州、琉球。台湾。三重県では菰野町、四日市市、鈴鹿市、津市、志摩市、大紀町、尾鷲市、熊野市、紀宝町などで確認されている。

【現況・減少要因】聞き取りによると、1970年代までは平地の灯火に普通に飛来したという。残された生息地の多くは宅地などに開発され、アカマツ林や雑木林も手入れがされなくなったことにより、遷移が進んだり、林床がネザサにおおわれてしまったりして本種の生息に適さなくなった。2000年以降確認されたのは津市と志摩市、紀宝町だけである。

【保護対策】生息地の開発をしないこと。アカマツ林や雑木林の下刈りなど維持管理が必要であろう。

【文献】12, 60, 87, 174, 260, 266, 268, 358, 442, 492.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ヨツボシゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Panagaeus japonicus Chaudoir



【選定理由】 既知の生息点数は10以下。20年以上記録が途絶えている。
【種概要】 体長12 mm程度。全身が微毛に覆われ体色は黒色で上翅に2対の黄色紋がある。疎林の林縁部や草原、河川敷など生息する中型のゴミムシである。

【分布】 北海道，本州，四国，九州。三重県では鈴鹿市，亀山市，伊賀市，津市，大台町。

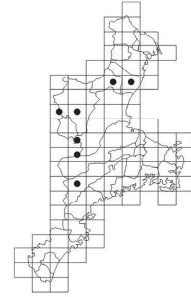
【現況・減少要因】 河川敷，湿地，草地開発による草地環境の減少。草丈の高い外来植物の遷移などが脅威を与えている。

【保護対策】 生息地の環境保全を行う。

【文献】 89, 255, 260, 261, 391.

(乙部 宏)

(写真：津市，2007年，中西元男採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ヒトツメアオゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Chlaenius deliciolus Bates

【選定理由】 既知の生息地点が5以下。生息環境が悪化し，近年の減少が著しい。

【種概要】 体長10～11 mm。水田の畦，アカマツ林や雑木林の林床などを夜間歩行しており，灯火にも飛来する。赤土の崖などの土中で越冬する。

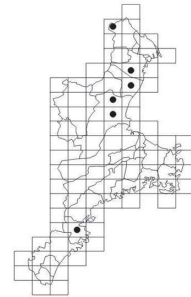
【分布】 日本固有種。本州，四国，九州，対馬。三重県ではいなべ市，四日市市，鈴鹿市，伊賀市，津市，志摩市，尾鷲市で確認されている。

【現況・減少要因】 聴き取りによると，いなべ市藤原町，鈴鹿市などの里山では1970年代までは灯火に普通に飛来したという。しかし，近年はほとんど見られない。多くの水田で耕地整理がなされ，里山の開発，荒廃が進んだ。丘陵地の明るいアカマツ疎林も本種の生息地の一つであったが，アカマツ林は衰退し，そのほとんどが暗い林やモウソウチク林に置き換わってしまった。

【保護対策】 生息の確認が急務である。生息地では，アカマツ林の下刈りなど維持管理が必要であろう。

【文献】 12, 69, 80, 174, 249, 260, 362, 442.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

アオヘリアオゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Chraenius praefectus Bates



【選定理由】 2015年の調査では，生息地は伊勢市の1か所のみで，個体数も非常に少なかったことからCR判定であった。しかし，近年個体数は回復傾向にあり，新たな生息地も複数発見された。

【種概要】 体長16～17 mm。低地の河川敷，溜池の周囲，放棄水田など湿地的な環境に生息。

【分布】 本州，四国，九州，南西諸島。中国，東南アジア，南アジア。県内では名張市，津市，松阪市，伊勢市で記録。

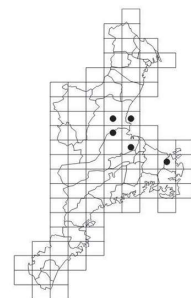
【現況・減少要因】 2015年時点で日本列島における生息地点は5未満であったと思われる。しかし，2020年頃から新たな生息地の発見が相次いでいる。三重県では，2015年時点での現存生息地は伊勢市の1か所のみで，個体数もごく少なかった。それ以前に記録されていた地点は環境の変化によって，確認されていない。しかし，2020年以降，松阪市，津市などで新たな生息地が発見された。少なくとも直近の5年間ほどは，全国的に明らかな増加傾向が見取れる。もともと熱帯起源の昆虫であることから，近年の温暖化傾向が本種の生息に有利に働いている可能性がある。

【保護対策】 生息地に隣接する水田の農薬散布などには十分な配慮が必要であろう。

【文献】 36, 192, 333, 489, 490, 491.

(秋田勝己)

(写真：玉城町，2020年，乙部宏撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

CR

環境省 2020

CR

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

コアトワアオゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Chlaenius hamifer Chaudoir

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔藓類

藻類

キノコ

EX

EW

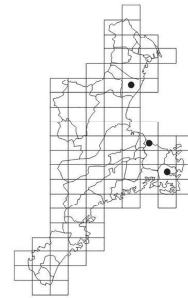
CR

EN

VU

NT

DD



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

【選定理由】 既知の生息点数は5以下。湿潤な草地の減少。

【種概要】 体長12 mm程度。頭前胸部は光沢のある青銅色，前翅は褐色色の微毛に覆われた黒色で翅端に黄褐色紋がある。類似した種も多い。平野から低山にかけての水田付近，河川敷の湿地的環境に生息する。

【分布】 本州，四国，九州，南西諸島など全国的に分布しているが本州，四国では個体数がすくない。三重県では鈴鹿市，玉城町，志摩市で記録されている。

【現況・減少要因】 池沼，河川敷氾濫原などの湿地的環境の減少。圃場整備による水辺から陸地への不安定な移行帯の消失，水田周りの湿潤な草地の減少や除草剤などの影響ある。

【保護対策】 生息地の状況調査を行い確認されたら生息地域の保全を行う。

【文献】 260，266，268，522。

(乙部 宏)

(写真：玉城町，2020年，岡村純採集，乙部宏保管)

イグチケブカゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

Peronomerus auripilis Bates

【選定理由】 近年の減少傾向が著しい。

【種概要】 9.0~9.5 mm。平地の河川敷や休耕田，水田の畔などの湿地に生息する。夜間に地表を歩行するほか，灯火に飛来する。河川敷湿地に生息することから洪水後の漂着物の中からはしばしば発見される。冬季には湿地の朽木中から成虫が発見される。

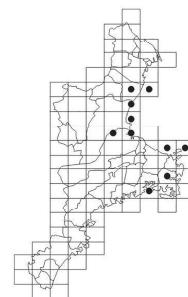
【分布】 日本固有種。北海道，本州，九州。三重県では，四日市市，鈴鹿市，津市，松阪市，伊勢市，鳥羽市，志摩市，南伊勢町で確認されている。

【現況・減少要因】 記録は多くないものの，かつては県内の平野部に普通に生息していたものと推定される。近年の記録もあるが，生息地は限定される。水田は農薬散布がなされるうえに，圃場整備によって乾田化が進行した。現在生息している休耕田もそのままでは植物遷移とともに乾燥化が進行し，いずれ本種の生息に適した環境ではなくなる。ダムの建設や河川改修によって河川敷の湿地は減少した。

【保護対策】 河川改修には十分に配慮をする。生息地周辺水田の農薬散布などにも配慮が必要であろう。

【文献】 88，90，92，260，268，304，370。

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

NT

マダラコガシラミズムシ

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

Haliphus sharpi Wehncke

【選定理由】 既知の生息地点が10以下。生息地が局地的で個体数も少ない。生息環境の悪化により，近年の減少が著しい。

【種概要】 体長3.3~3.8 mm。水草の豊富な池沼，水田や水路，放棄水田，河川敷の湿地などに生息する。幼虫はシャジクモ類を食している。

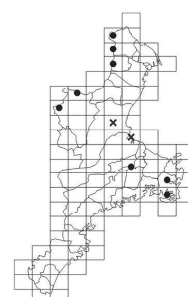
【分布】 本州，四国，九州。朝鮮半島，中国。三重県ではいなべ市，菰野町，鈴鹿市，津市，伊賀市，多気町，志摩市で記録されている。

【現況・減少要因】 1952年に津市中央で記録されていることから，かつては平地の水田などにも広く分布していたものと思われる。生息地の多くは，耕地整理，河川改修，宅地造成，産業廃棄物の埋め立てなどにより消失した。伊賀市にはまだわずかに生息地が残されているものの，その生息地にも近年アメリカザリガニが侵入している。また，近年水田に散布される農薬は，非常に大きな影響があると考えられる。除草剤の使用は，本種のホストであるシャジクモ類を枯死させる。

【保護対策】 生息地の周辺では農薬散布を行わない。アメリカザリガニの駆除など積極的な保全策も必要であろう。

【文献】 12，89，123，213，260，266，268，304，374，398，443，457，487。

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

クロホシコガシラミズムシ
Haliphus basinotatus Zimmermann

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類

【選定理由】既知の生息地点5以下。もともと全国的に記録が少ない種であったうえ、生息環境が悪化している。

【種概要】体長3.5~3.9 mm。植物の豊富な溜池や、水路脇の小さな水路に生息する。幼虫はシャジクモ類を食べる。

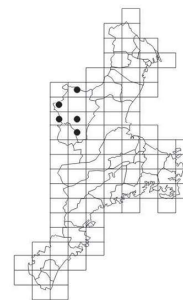
【分布】本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、ロシア極東に分布。県内では伊賀市で記録されている。

【現況・減少要因】池の埋め立て、アメリカザリガニの侵入、周辺の耕作放棄による植物遷移の進行によって、殆どの既知生息地は消失した。2020年以降に確認できたのは伊賀市の溜池2か所のみである。これらの生息地にもアメリカザリガニは侵入している。また、近年多用される農薬は、本種の生息にとって非常に大きな脅威である。除草剤の流入は、ホストであるシャジクモ類を枯死させる。

【保護対策】生息地は水田に隣接することから、周辺での農薬および除草剤の不使用が強く求められる。またアメリカザリガニの駆除が求められる。

【文献】12, 213, 268, 457.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

キイロコガシラミズムシ
Haliphus eximius Clark

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ

【選定理由】既知の生息地点が5以下。生息環境の悪化により、近年の減少が著しい。

【種概要】体長3.2~3.5 mm。水草の豊富な池沼に生息する。幼虫はシャジクモ類を食べる。

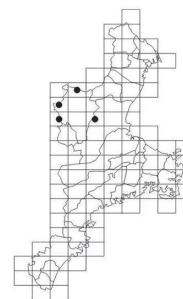
【分布】本州、四国、九州。朝鮮半島、中国。県内では伊賀市、津市で記録されている。

【現況・減少要因】もともとかなり稀な種であったと思われるが、かつては、津市の市街地でも1952年と1960年に確認されている。伊勢平野では津市白山町で記録されるが、その生息地はアメリカザリガニの侵入増殖に伴い、水草などもなくなり絶滅した。伊賀市では数か所の生息地があるが、池の埋め立て、遷移の進行、溜池管理がされなくなったこと（樹木によって池畔が日陰になると水草は衰退する）、アメリカザリガニの侵入、さらに近年の農薬（昆虫に直接作用するものだけでなく、除草剤使用は、本種の餌であるシャジクモ類を枯死させる）によって、その多くで見られなくなった。

【保護対策】生息する溜池の管理保全と生息地周辺での農薬不使用が強く求められる。また、アメリカザリガニの駆除もすすめるべきであろう。

【文献】12, 213, 457.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

オニギリマルケシゲンゴロウ
Hydrovatus onigiri Watanabe et Bistrion

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】既知生息地点が5以下である。生息環境の悪化により激減している。

【種概要】体長2.4~2.7 mm。池沼の浅瀬や湿地、放棄水田など水草の多い浅い止水域に生息する。

【分布】本州、四国、九州、南西諸島。三重県では鈴鹿市、伊賀市、名張市、志摩市で記録されている。

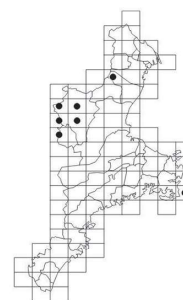
【現況・減少要因】現在確実に生息しているのは、伊賀市（3か所）と名張市（1か所）である。志摩市の海跡湖は個体数が非常に多い良好な生息地であったが、アメリカザリガニの侵入に伴って激減し、現在はほとんど見られない。

【保護対策】生息地周辺での農薬散布を控える。生息する池およびその周辺環境の適切な管理とアメリカザリガニの駆除が必要である。

【特記事項】マルケシゲンゴロウ *Hydrovatus subtilis* Sharp とされていた種に複数が含まれていたことが判明した。三重県産の本種は、2022年に新種：オニギリマルケシゲンゴロウ *H. onigiri* Watanabe et Bistrion とされた。

【文献】12, 13, 124, 202, 258, 260, 463, 467, 488.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

マルチビゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Leiodytes frontalis (Sharp)

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

【選定理由】 既知生息地5以下。減少傾向にある。
【種概要】 体長1.5~2.0 mm。池沼、放棄水田などの浅く、水生植物の豊富な止水域に生息する。

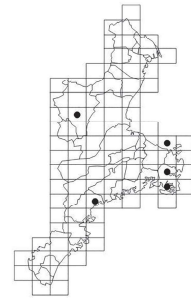
【分布】 本州、四国、九州。朝鮮半島。県内では、伊賀市、鳥羽市（答志島）、志摩市、紀北町で確認されている。

【現況・減少要因】 伊賀市の生息地は現存している。志摩市の海跡湖では2005年までは個体数が多かったが、アメリカザリガニの侵入後には激減した。答志島の放棄水田にはアメリカザリガニが侵入しておらず、今のところ生息している。しかし、周辺の水田は耕作しておらず、そのままでは植物遷移の進行、乾燥化とともに生息地はいずれ消失してしまうものと思われる。伊賀市の生息地は集水域に耕作地がなく、アメリカザリガニも未侵入で、今のところ個体数は多い。しかし、周辺にはすでにアメリカザリガニが生息しており、予断を許さない状況である。

【保護対策】 生息地周辺では農薬散布をしないことである。また、放棄水田の場合は植物遷移が進行しないように除草をする、生息地に新たにアメリカザリガニが侵入しないようにするとともに、侵入した場合は駆除を行う。

【文献】 13, 268, 305, 372, 463.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

ツブゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Laccophilus difficilis Sharp

【選定理由】 かつて普通に見られる種であったが、近年激減している。

【種概要】 体長4.0~4.9 mm。植物の豊富な溜池や、水田、湿地に生息する。

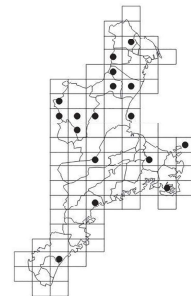
【分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島。朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。三重県では、いなべ市、菰野町、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、名張市、津市、伊勢市、鳥羽市、志摩市、紀北町、尾鷲市、熊野市、御浜町で記録されている。

【現況・減少要因】 かつては県下全域の水田地帯ではごく普通に見られた種である。しかし、水田の乾田化、農薬、除草剤の使用、アメリカザリガニの侵入繁殖によって激減しており、2020年以降に確認できたのは、伊賀市と紀北町のみである。環境の変化がなさそうに見える産地でもいなくなっており、近年多用される農薬の影響は非常に大きいものと考えられる。

【保護対策】 生息地周辺での農薬および除草剤の不使用が求められる。

【文献】 21, 32, 76, 77, 89, 90, 252, 253, 261, 268, 304, 306, 361, 370, 412.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

オオヒメゲンゴロウ

コウチュウ目 オサムシ科

Rhantus erraticus Sharp

【選定理由】 既知生息地が10未満。近年激減している。

【種概要】 体長13.0~14.0 mm。水温が低い林の中の浅い池や水たまりで見られることが多い。

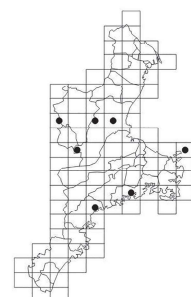
【分布】 北海道、本州。西シベリアからロシア極東。三重県では、伊賀市、南伊勢町、紀北町で記録されるほか、津市、鳥羽市（答志島）で確認している。

【現況・減少要因】 1990年代には、伊賀盆地西部では、比較的普通に見られる種であった。しかし、2015年以降には、確認することができなかった。津市の生息地も2000年以降確認されない。かつての生息地にはアメリカザリガニが侵入しており、影響が大きいものと考えられる。また、近年使用される農薬の影響も非常に大きいものと考えられる。

【保護対策】 アメリカザリガニの駆除と生息地周辺での農薬の不使用が求められる。

【文献】 90, 361, 372, 467.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

シマゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hydaticus bowringii Crark



【選定理由】既知の生息点数は50以下。以前は広く分布していたが農薬散布、圃場整備、池沼、湿地の埋め立てや護岸工事などによって減少。

【種概要】体長12.5~14 mm。体形は卵形で膨隆し光沢がある。黒色で黄色紋と2対の黄色帯があり春から秋にかけて見られる。かつては平地や丘陵地の水路や浅い池沼、水田、放棄水田などで見ることが出来た。

【分布】北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。三重県ではいなべ市、菰野町、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、名張市、津市、多気町、伊勢市、志摩市、鳥羽市、南伊勢町、大紀町、紀北町、熊野市、御浜町。

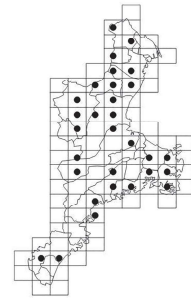
【現況・減少要因】圃場整備による乾田化、開発、農薬や生活排水などの汚染、侵略的外来種による水質汚染や水草の食害と捕食圧が脅威となる。

【保護対策】侵略的外来種を侵入させない。侵入したら排除をする。また、汚水を流入させず水生植物が豊富な状態に復元させる。玉城町のビオートープでは清し有田佐田環境保全会によるウシガエル、アメリカザリガニの定期的駆除により本種の復元に効果をあげている。

【文献】32, 73, 87, 89, 90, 255, 257, 260, 261, 268, 352, 355, 357, 358, 361, 372, 374, 387, 390, 392, 396, 398, 463.

(乙部 宏)

(写真：玉城町，2020年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

NT

ウスイロシマゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Hydaticus rhanthoides Sharp

【選定理由】息環境が悪化し、近年激減している。

【種概要】体長10.0~11.0 mm。植物が豊富な浅い池沼や湿地に生息する。

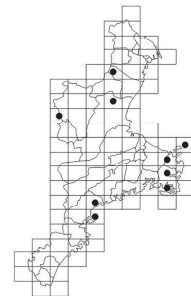
【分布】本州、四国、九州、南西諸島。中国、台湾、東南アジア。三重県では、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、伊勢市、南伊勢町、鳥羽市、志摩市、紀北町、尾鷲市で記録される。

【現況・減少要因】1990年代には、三重県南部の山間にある水田やその周辺の小さな溜池などで、比較的好く見られる種であった。近年は、山間の水田は耕作放棄されてしまうことが多く、多くは植物遷移が進んで本種も見られなくなってしまった。また、多くの生息地にはアメリカザリガニが侵入している。また、近年使用されるようになった農薬も影響が大きいものと思われる。

【保護対策】アメリカザリガニの駆除と生息地周辺での農薬の不使用が求められる。

【文献】12, 13, 89, 125, 260, 261, 369, 372, 432.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

マルガタゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

Graphoderus adamsii (Clark)

【選定理由】近年著しく減少した。現存する生息地は10以下。

【種概要】体長12~14.5 mm。池沼や水田などに生息。

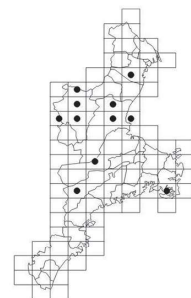
【分布】北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国。県内では四日市市、鈴鹿市、津市、松阪市、伊賀市、名張市、志摩市、大台町で確認。

【現況・減少要因】かつては県下全域に普通に生息していたと思われる。四日市市、鈴鹿市、志摩市の記録は1960年代以前のものである。現在確実に生息しているのは伊賀市の数か所のみである。伊賀市では、1990年代前半までは、多産する生息地が多かったが、現在は殆どの産地で姿を消した。耕地整理による水田の乾田化、放棄水田の植物遷移の進行による開放水面の消失、農薬散布などにより、多くの生息地が消滅。生息地周辺に照明が設置されると誘殺される。さらにアメリカザリガニが侵入すると、本種を含む多くの水生甲虫が著しく減少することが確認された。

【保護対策】農薬の散布を抑えること。また、生息地の溜池畔が樹木に覆われて日陰にならないように適切に管理すること、アメリカザリガニの除去など積極的な保護対策が求められる。

【文献】12, 81, 89, 124, 141, 202, 255, 260, 300, 304, 359, 361, 392, 442.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

クロシオガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

Horelophopsis hanseni Satô et Yoshitomi

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

【選定理由】 既知生息地点が1. 生息基盤がきわめて脆弱である。
【種概要】 1.6~1.8 mm. 河川下流の感潮域に生息する. 干潮時に湿った礫混じりの砂上で活動する. 砂が乾燥してくると砂中に潜り, そのまま満潮時を過ごす. 夏から秋にかけて成虫が出現し, 初夏まで生存する.

【分布】 本州(三重, 兵庫), 四国(愛媛, 高知), 奄美大島, 沖縄島. 全国的にも既知産地は10地点未満である. 三重県では伊勢市の宮川河口から記録される. 比較的良好な河口干潟をもつ橿田川や雲出川からは未発見. 三重県は分布の東限にあたる.

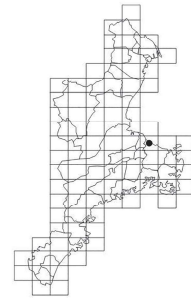
【現況・減少要因】 宮川河口中洲周辺の干潟に生息する. 生息地における個体密度は比較的高いものの, 生息が確認できた範囲は, 長さにして30 mほどと非常に狭い. したがって, 生息地周辺におけるちょっとした河川改修などが直接生息地の消失につながるものと考えられる.

【保護対策】 生息地周辺での河川改修を行わないことである.

【特記事項】 セスジマルドロムシと混生している.

【文献】 17, 353.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

エゾコガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

Hydrochara libera (Sharp)

【選定理由】 既知の生育地点が5以下で, 個体数も少ない. 近年生息環境が悪化している.

【種概要】 体長16~18 mm. 泥深い湿地や放棄水田などのごく浅い水域に生息する.

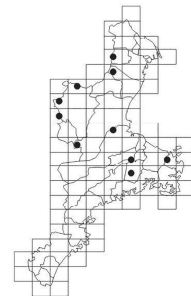
【分布】 北海道, 本州, 九州, 朝鮮半島, 中国. 北海道では広く分布するが, 本州以南の分布は局限される. 県内では菰野町, 亀山市, 津市, 伊賀市, 鳥羽市, 度会町, 多気町で確認されている.

【現況・減少要因】 生息地の多くが放棄水田であることから, 植物遷移と乾燥化が進みつつあり, 近い将来, 本種は生息できなくなるものと思われる. また, アメリカザリガニが侵入した水域では本種を発見することができなかった. アメリカザリガニは本種にとって非常に強力な天敵となっている可能性が高い.

【保護対策】 生息地周辺での農薬散布をしない. 生息地である湿地だけでなく周辺の樹林の保全が必要である. また, 放棄水田の除草やアメリカザリガニの駆除など, より積極的な保全対策が求められる.

【文献】 12, 363, 403, 443, 467, 487.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

(写真: 多気町, 2019年, 乙部宏撮影)

ルリエンマムシ

コウチュウ目 エンマムシ科

Saprinus splendens (Paykull)

【選定理由】 既知の生息点数は10以下. かつては平地で広く生息していたようだが近年では自然状態の良い大きな河川敷や砂浜海岸などの開放的な環境でしか見られない.

【種概要】 体長7 mm前後. 全体に強い光沢があり前胸部は金銅色で上翅全体は瑠璃色に輝く. 魚などの腐敗した死骸に集まりハエなどのウジを捕食する.

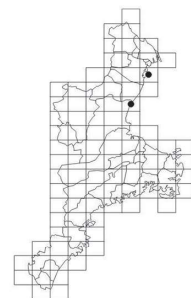
【分布】 北海道から南西諸島まで広く分布している. 三重県では鈴鹿市, 津市.

【現況・減少要因】 衛生状態の向上と都市化や沿岸の護岸化工事による環境悪化のためと思われる. また江線の自然漂着物の過度な撤去も影響を与えている.

【保護対策】 海岸部の自然漂着物の過度な撤去は行わない. 生物多様性の観点からも水辺と陸地の移行帯の保全をおこなう.

【文献】 260, 272.

(乙部 宏)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

(写真: 津市, 2024年)

ツヤハマベエンマムシ
Eopachylopus ripae (Lewis)

コウチュウ目 エンマムシ科



【選定理由】既知の生息点数は10以下。自然状態の良い砂浜海岸の汀線付近に生息するが近年そのような環境劣化が懸念される。また同様な環境にも数種エンマムシ類が生息するがすべて同様な状態である。

【種概要】体長2～3mmほど。光沢のある黒色で個体によっては上翅に赤紋がある。砂浜海岸の砂中に生息し汀線付近に漂着した動物性腐敗物に集まる。

【分布】北海道から南西諸島まで広く分布している。三重県では津市、松阪市、伊勢市、南伊勢町。

【現況・減少要因】砂浜の衰退と近年、生息環境である海浜の漂着物すべてがアカウミガメの産卵上陸を阻害するため排除する活動とともに重機を持ち込み過度な撤去が行われていることも脅威となる。

【保護対策】漂着人工ゴミと自然漂着物との違いを区別し自然漂着物の過度な撤去はしない。自然状態の良い砂浜には重機を持ち込まない。海浜はアカウミガメの産卵地だけでなく多種多様な生息地であることを理解し、エコトーンを重視した保全をする。

【文献】307, 268, 427.

(乙部 宏)

アラメエンマムシ
Zabromorphus punctulatus (Wiedemann)

コウチュウ目 エンマムシ科



【選定理由】既知の生息点数は5以下。大型エンマムシ類は全国的にも減少傾向である。

【種概要】体長8～9mmほど。黒色で前胸と上翅会合部以外は点刻されているので他種のエンマムシ類とは区別ができる。やや乾燥気味のシバ型草地を好む傾向がある。

【分布】本州、九州。三重県では津市でしか記録されていない。

【現況・減少要因】広い河川敷の草地部開発を受けやすく生息地を圧迫している。またそのような環境は背丈の高い外来植物の侵入も脅威になる。

【保護対策】本種の適した河川敷の草地の保全が必要である。

【文献】11, 326.

(乙部 宏)

ヤマトモンシデムシ
Nicrophorus japonicus Harold

コウチュウ目 シデムシ科



【選定理由】既知の生息地点数は10以下。シデムシ類の中では平地や河川敷でよく見られた大型種だが、最近の記録に乏しく、全国的にも一部の地域を除きほぼ同様の傾向である。

【種概要】体長14～25mm。黒色で上翅に二本の赤色の帯がある。動物屍体の食物連鎖の第一次清掃者であり、成虫、幼虫ともに腐肉や寄食する昆虫類の幼虫などを食す。

【分布】本州、四国、九州。県下では、菰野町、伊賀市、津市、大台町、伊勢市。

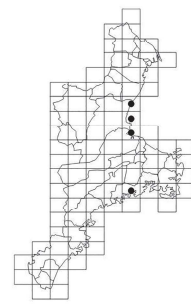
【現況・減少要因】種本来の生息地は低地、市街地周辺と考えられ、それらの生息地の多くが宅地などに開発されたため減少し、現在では河川敷で僅かに確認されているにすぎない。

【保護対策】現在生息している環境は、大きな川の中流から下流域に点在する氾濫原を含む河川敷であるが、そのような環境は公園やグラウンドなどに開発されやすい。生息状況の調査と生息地の保全が急務である。

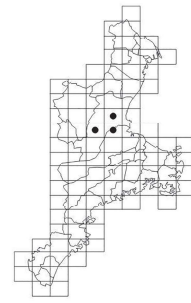
【文献】12, 65, 89, 186, 260, 285, 304, 326, 390, 391.

(乙部 宏)

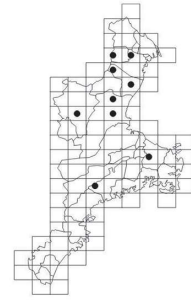
(写真：津市、2000年、乙部宏採集)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	—



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	NT

- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

オニヒラタシテムシ

コウチュウ目 シテムシ科

Thanatophilus rugosus (Linnaeus)

【選定理由】既知の生息地点数は5以下。海岸部や河川敷など開放的な環境で見られることが多いが近年の記録が途絶えている。

【種概要】体長9～12 mm。黒色のヒラタシテムシ類の一種で上翅には金銅光沢をおびるようにも見え上翅間室には格子状の横皺がある。腐敗した動物質に集まる。

【分布】北海道，本州，四国，九州。三重県下では四日市市，亀山市，津市。

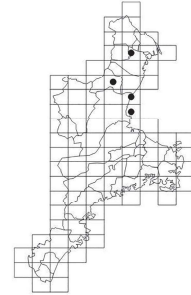
【現況・減少要因】各種の開発にともない餌資源の由来となる減少とも考えられる。

【保護対策】河川の氾濫原や海浜の開発をする場合は事前に調査し，生息地の保全に努める。

【文献】69，186，272，390。

(乙部 宏)

(写真：津市，1993年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

ホソヒラタシテムシ

コウチュウ目 シテムシ科

Silpha longicornis Portevin

【選定理由】本州北中部では分布が広いが，県内では分布域が台高山脈の高地帯に局限され，記録も極めて少ない。

【種概要】体長16～18 mm。主食はミミズ類等の無脊椎動物と推定され，樹林や林縁に生息する。飛翔できず，移動能力は乏しいと推定される。他地域では夏季に成虫・幼虫がともに観察され，春季に繁殖するものと考えられる。鈴鹿山脈には分布せず，紀伊半島の台高山脈と大峯山脈に著しく隔離された分布域がある。かつて紀伊半島の個体群は独立種とされていたが，詳細な遺伝子解析，形態解析の結果，ホソヒラタシテムシのシノニムとされた。

【分布】県内では台高山地の明神岳頂上付近で記録されるのみである。大台ヶ原山の奈良県側でも記録があるので，同地域の三重県側にも生息する可能性がある。

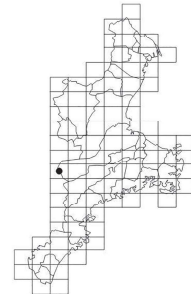
【現況・減少要因】分布域が極めて狭いため局地的な環境の変化でもダメージがあり得る。近年シカによる下層植生の食害が著しく，生息環境の悪化が懸念される。

【保護対策】分布域内の環境変化をできるだけ避け，シカの個体数管理を適切に行う必要がある。また，風力発電設備の設置等の環境改変によっても影響を受ける可能性が高い。

【文献】94，95，286。

(久保田耕平)

(写真：松阪市，2007年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

オニクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科

Prismognathus angularis angularis Waterhouse

【選定理由】既知の生息点数は10以下。鈴鹿山系と台高山系の限られた地域生息し個体数も少なく，生息環境の軽微な変化で絶滅してしまうおそれがある。

【種概要】体長15～25 mm。体色は艶のある黒褐色で標高600 m以上のブナ帯に生息し7～9月ごろに出現する。幼虫はブナなどの湿潤な朽ちた部分を食べため，生息環境条件は限られる。

【分布】北海道，本州，四国，九州（別亜種），屋久島（別亜種）。県下ではいなべ市，鈴鹿市，亀山市，津市，松阪市，大台町，尾鷲市。

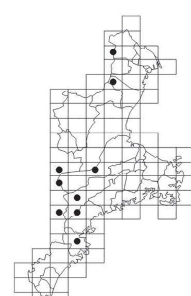
【現況・減少要因】自然純度の高いブナ帯の多湿な環境でしか生息できないため自然林の伐採によるブナ林の減少とニホンジカによる林床植物の食害よっての乾燥化が減少要因である。

【保護対策】ニホンジカの駆除と自然林の保全が急務である。また生息地の一部は風力発電建設予定候補地になっているのが懸念される。

【文献】4，26，391，521。

(乙部 宏)

(写真：津市，1991年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

ルリクワガタ (オオルリクワガタ)
Platycerus delicatulus delicatulus Lewis

コウチュウ目 クワガタムシ科

【選定理由】既知の生息地点数は10以下。全国的にも局所的に分布する種であり、県下では台高山系の限られた地域に生息している。また、個体数も少なく生息環境の軽微な変化で絶滅してしまうおそれがある。

【種概要】体長9~14 mm。♂の背面は緑~青藍色、♀は赤銅色の金属光沢を帯びるが腹面は黒色。自然度の高いブナ帯で見られ幼虫は広葉樹の立ち枯れや、倒木の朽ちた部分を食す。成虫は晩春から初夏にかけて出現する。

【分布】本州、四国、九州。県内では津市、松阪市、大台町、紀北町、熊野市で記録されている。

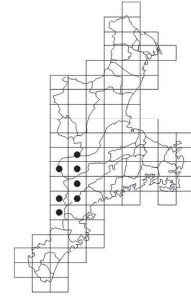
【現況・減少要因】本種は山頂部付近や一部の限られた斜面にしか発生できないことが多く、極めて限られた分布を示す。幼虫は自然度の高いブナ林の多湿の環境でしか成育出来ないため、ブナ林の伐採による森林の減少とニホンジカの食害による林床植物の壊滅によって林内の乾燥化が著しく進んでいることが減少要因である。

【保護対策】本種の生息する自然林の保全とニホンジカの駆除が急務である。また生息地の一部は、風力発電施設の開発の候補地になっているのが懸念される。

【文献】4, 26, 271, 321, 341.

(乙部 宏)

(写真：津市，1996年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ムツコブスジコガネ
Trox mutsuensis Nomura

コウチュウ目 コガネムシ科

【選定理由】既知の生息地点は5以下である。本種は標高が高く、自然度の高い森林環境に生息しており、県内では生息数が非常に少ない。

【種概要】体長6.8~8.8 mm。動物遺体の最終分解者であり、野生鳥獣の羽、毛、骨などを餌とする。

【分布】北海道、本州、四国。日本固有種。県内では台高山脈の標高1,000 m以上の自然林に生息する。

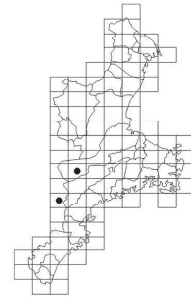
【現況・減少要因】台高山脈も、そのほとんどがスギ、ヒノキが植林されており、尾根筋にわずかに残る自然林が生息地となっている。今後も自然環境の保全がこの種の生息の鍵となる。

【保護対策】生息地の保全が必要である。

【文献】106, 338.

(稲垣政志)

(写真：大台町，2002年，稲垣政志採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

コブナシコブスジコガネ
Trox nohirai Nakane

コウチュウ目 コガネムシ科

【選定理由】既知の生息地点5以下。極めて生息数の少ないコブスジコガネの仲間である。

【種概要】体長5.5~7.2 mm。近年この種の生態が解明された。それによると、この種はフクロウの巣穴の中のフレークの中にまとまって生息し、フクロウの幼鳥の吐き出すペリットを餌にしていることが解明された。フクロウが生息し、なおかつ営巣できる大木の存在が生息条件となる。

【分布】北海道、本州、四国、九州、対馬。国外では朝鮮半島に生息する。県内ではいなべ市藤原町、三重郡菰野町、津市美杉町、松阪市飯高町で採集されている。

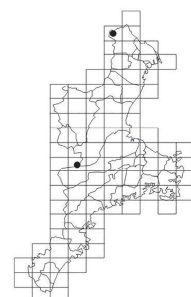
【現況・減少要因】フクロウの生息数が減少しており、このために本種の生息も非常に限られる。

【保護対策】フクロウが生息し、営巣できるような環境の保全が望まれる。特に洞のある大木が必要である。

【文献】10, 114, 118, 125, 379.

(稲垣政志)

(写真：いなべ市，2022年，稲垣政志採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

コマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Aphodius pusillus (Herbst)

【選定理由】 既知の産地が5以下。1983年以後41年間採集されていない。

【種概要】 体長は2.6~4.5 mm。黒色で上翅が褐色になるものもある。春季に平地の牛糞・犬糞に集まる。

【分布】 北海道、本州、伊豆諸島、隠岐、四国、九州、壱岐、大隅諸島に分布する。国外では済州島、朝鮮半島、中国、モンゴル、ロシア、ヨーロッパに分布する。県内では鈴鹿市石薬師町、鈴鹿市山本町、亀山市関町、津市美杉町、久居雲出に分布する。

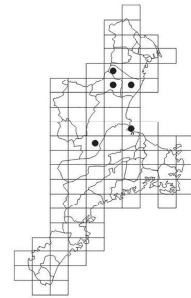
【現況・減少要因】 今回の調査で春先の平地の犬糞を精査したが見つけることは出来なかった。県下ではこの種は激減していると思われる。平地の放牧が無くなったことと、犬糞の持ち帰りにより糞資源が無くなったことが原因と思われる。

【保護対策】 適度な糞資源の供給が必要と思われる。

【文献】 62, 260, 306, 390, 410.

(田中晃詞・稲垣政志)

(写真：鈴鹿市，1995年，市橋甫採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔藓類

藻類

キノコ

キマダラマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Aphodius punctatus Waterhouse

【選定理由】 既知の生息点数は5以下。国内での分布の北東限にあたる。

【種概要】 体長4~6 mmほど。冬季に出現する。黒色で上翅は黄褐色の紋がある。近縁のセマダラマグソコガネに似ておりイノシシの糞を食する。

【分布】 本州近畿以西、四国、九州。三重県では大台町、伊勢市で記録されていたが今回の調査で新たに大紀町でも確認された。

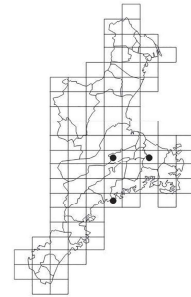
【現況・減少要因】 スダジイやツブラジイなどのある自然純度の高い照葉樹林帯に生息している。イノシシは県内に広く生息するが本種にとっては糞だけでなく生息環境も重要な要因になっている。また地域によって豚コレラ感染でイノシシが激減しているので本種に影響が出る可能性がある。

【保護対策】 生息地での照葉樹林の保全を行う。イノシシの冬季の餌になるスダジイやツブラジイのドングリが沢山実る豊かな森を維持する。

【文献】 200, 329.

(乙部 宏)

(写真：大台町，2002年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

オビマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Aphodius uniplogiatus (Waterhouse)

【選定理由】 既知の産地5カ所以下。1950年代の記録の後2002年に度会郡で再発見されたが、再発見された牧場が閉鎖され現在では産地がなくなっている。

【種概要】 体長3.5~5.0 mm。光沢のある黒色で。上翅は黒色で両側から先端部かけて赤褐色になる。

【分布】 四国除くほぼ全国に分布。国外では済州島、朝鮮半島、台湾、中国、シベリア東部。県内では三重郡菰野町、鈴鹿市石薬師町、亀山市安坂山町、津市中央、松阪市中川町、度会郡大紀町。

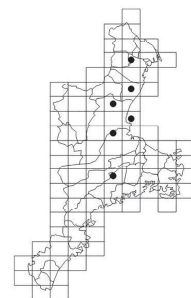
【現況・減少要因】 唯一の生息地であった多気郡の牧場が閉鎖された。

【保護対策】 野生の鹿糞により本種生息が続くことを期待したい。

【文献】 62, 390, 410, 411, 415.

(田中晃詞・稲垣政志)

(写真：大紀町，2002年，稲垣政志採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蕨類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

キソガワアイヌケシマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

Rakovicius takashii Ochi, Kawahara et Inagaki 2019

【選定理由】 既知の生息地は5以下である。1か所で1頭が採集されただけである。

【種概要】 体長2.0~3.1 mm。内陸部~海岸までの河川敷や海岸砂丘、畑地に生息し、イネ科などの植物の根際や堆積した落ち葉下などで見られる。

【分布】 愛知県の本曾川河川敷のみで記録されている。日本固有種。県内では津市美杉町の1か所のみ。

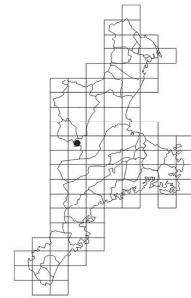
【現況・減少要因】 県内での生息密度は非常に少ないために詳しい状況は不明である。山地の溪流脇のピットホールトラップで1頭が採集されたのみである。河川敷の粒子の細かい砂地に生息するため、このような砂地の減少が本種の生息を困難にしている。

【保護対策】 生息地の保全。自然溪流、護岸のない河川敷などの環境保全。

【文献】 121, 417.

(稲垣政志)

(写真：津市，2009年，横関秀行採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

オオムツボシタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Chrysobothris ohbayashii Y. Kurosawa

【選定理由】 既知の生息点数は5以下。全国的にも産地が限られる。

【種概要】 体長14~20 mm。全体に青銅黒色で上翅に黄緑色の円形凹紋が6か所ある。また同属の中では最大種となり近似種と区別するには容易である。低山のクヌギ、コナラなどのブナ科のやや太い伐採木などで見ることができ、とても敏捷である。

【分布】 本州，四国，九州，対馬。三重県では伊勢市で記録されており，他地域でも目撃されている。

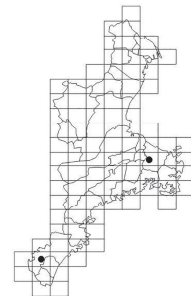
【現況・減少要因】 クヌギ，コナラなどの大木が多く繁る森林が開発などによって消滅している。

【保護対策】 生息地の林を開発しない。近年，低山の落葉広葉樹地域はソーラー発電施設の対象になりやすいのが懸念される。

【文献】 200, 329.

(乙部 宏)

(写真：奈良県，1995年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

クヌギナガタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Agrilus friebi Obenberger

【選定理由】 既知の生息点数は5以下。30年以上記録が途絶えている。

【種概要】 体長4~6 mm。体色は黒色または暗唐金色。会合線沿いに銀灰白色毛が目立つが変異に富み類似種も多く同定には注意を要する。平野から低山にかけてのクヌギなど薪炭林の里山的環境を好み晩春から夏に出現する。

【分布】 本州，四国，九州，対馬。三重県では名張市，大紀町で記録されている。

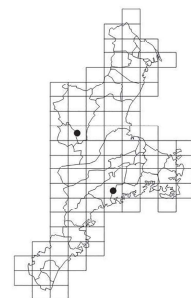
【現況・減少要因】 開発による伐採。クヌギ，コナラなどの薪炭林の減少と放置。

【保護対策】 薪炭林の維持。里山的環境の保全。

【文献】 84, 257, 509.

(乙部 宏)

(写真：長野県，2008年，乙部宏採集)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

シロウズヒラタチビタマムシ

コウチュウ目 タマムシ科

Habroloma (Parahabroloma) marginicolle (Fairmaire)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
苔苔類
藻類
キノコ

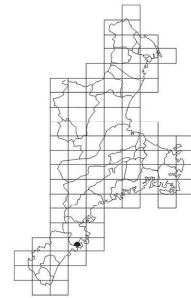
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】 既知の生息点数は1地点。三重県が分布の北限生息地となる。
 【種概要】 体長2.8~3.3 mm. 唐金色を帯びた黒色で背面には銀白色の毛紋がある。類似種が多いので同定には注意を要する。春~秋にホウロクイチゴなどに集まる。
 【分布】 本州, 四国, 九州, 屋久島, 種子島。三重県では2017年に熊野市で記録された。
 【現況・減少要因】 生息地は限られた狭い地域などで軽微な環境変化で影響を受けやすい。
 【保護対策】 生息地である海岸部の照葉樹林および林床植物の保全。
 【文献】 523.



(乙部 宏)

(写真: 熊野市, 2024年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	—

ムネアカツヤケシコメツキ

コウチュウ目 コメツキムシ科

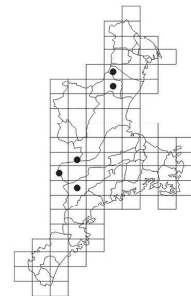
Megapenthes opacus Candéze

【選定理由】 既知生息地点が5以下。生息環境が脆弱である。
 【種概要】 体長9.8~14.5 mm. 自然林のトチノキ, イタヤカエデなどの樹洞に生息する。幼虫は朽ちた内壁に穿孔し, 他の昆虫を捕食するものと思われる。成虫はリョウブなどに訪花するほか, 灯火に飛来した例もある。
 【分布】 北海道, 本州, 四国, 九州, 屋久島。三重県では鈴鹿山脈(亀山市), 紀伊山地(津市, 松阪市, 大台町)で確認されている。
 【現況・減少要因】 他県では低地に残存する小規模な樹林にあるケヤキ大木の樹洞などからも発見されているが, 三重県ではそのような例は知られておらず, いずれも中山帯の自然度の高い樹林で発見されている。本種が生息する樹洞をもつ大木は相当限定されるうえ, 個体密度も非常に薄い。この標高にある自然林の多くは過去の森林伐採によってすでに失われている。
 【保護対策】 自然林の伐採を行わないことである。
 【特記事項】 紀伊半島の高標高地には近縁種クロサワツヤケシコメツキ *M. kurosawai* W. Suzuki が生息する。
 【文献】 12, 297, 442, 443.



(秋田勝己)

(写真: 津市, 2016年, 乙部宏撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

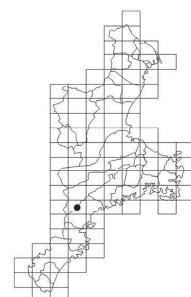
オカダクビボソジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Asiopodabrus (Asiopodabrus) okadai (Nakane et Makino)

【選定理由】 既知の生息地が1。生息環境が悪化している。
 【種概要】 体長7.4~8.1 mm. 自然度の高い落葉広葉樹林に生息し, 5~6月に出現する。ジョウカイボン科は, 幼虫, 成虫ともに捕食性で, 幼虫は落葉下に生息する。
 【分布】 本州(中部以西)に分布する。三重県では, 大台町で記録されている。
 【現況・減少要因】 近年のニホンジカの食害による林床の乾燥化, また夏季の極端な高温傾向は, 冷涼湿潤な環境を好む本種にとっては, 深刻なダメージを与えているものと考えられる。本種に限らず, クビボソジョウカイ類の全ての種が, 近年激減している。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整をすることである。
 【文献】 365, 468.

(秋田勝己)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

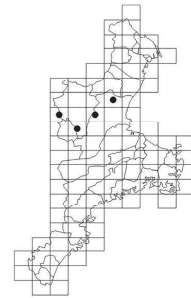
ホタルジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Cantharis heleocharis M. Sato, Okushima et Ishida

【選定理由】 既知生息地点が5以下。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長17~20 mm。湿地に生息する。成虫は5~6月に出現。昼間活動し、ほかの昆虫を捕食する。
 【分布】 日本固有種。本州。三重県では鈴鹿市、伊賀市、津市で記録されている。
 【現況・減少要因】 里山にある小規模な湿地は、様々な開発や、耕地整理などによって急速に消失しつつある。青山高原の湿地の多くは、風力発電施設やそれに伴う林道の整備などによって、失われてしまった。僅かに残された湿地環境もニホンジカの食害が著しい。津市白山町の生息地も湿地周辺の環境が大きく改変された。伊賀市の生息地は、植物遷移が進んでおり、本種の生息には適さない環境になってしまった。
 【保護対策】 周辺の樹林を含む湿地の保全が強く求められる。
 【特記事項】 津市白山町四季の里が、本種のタイプ産地である。
 【文献】 89, 260, 468, 469.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

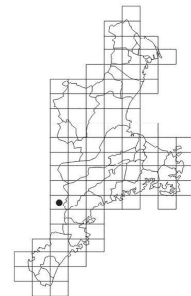
ヤマトセスジジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Lycocerus yamatensis Okushima

【選定理由】 既知生息地点が1。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長9.6~11.2 mm。成虫は6~7月に出現。昼間活動し、ほかの昆虫を捕食する。
 【分布】 日本固有種。本州。紀伊山地固有種。三重県では、大台町で記録されている。
 【現況・減少要因】 紀伊山地の落葉広葉樹林から針葉樹林帯にかけて自然林が残された場所に生息する。夏季の異常な高温や積雪量の減少、さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は、冷涼湿潤環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整が求められる。
 【特記事項】 大台ヶ原山（県名記載なし）が、本種のタイプ産地である。生息地は吉野熊野国立公園特別保護区である。
 【文献】 468, 471.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

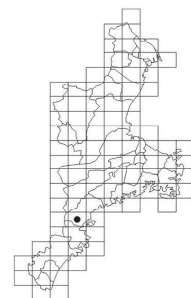
ニセキベリコバネジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Trypferus mutilatus (Kiesenwetter)

【選定理由】 既知生息地点が1。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長6.3~7.1 mm。河川敷の低木葉上でみられる。成虫は4~5月に出現。昼間活動し、ほかの昆虫を捕食する。
 【分布】 日本固有種。本州。三重県では、紀北町で記録されている。
 【現況・減少要因】 河川敷に限って見られる種のようなものである。河川上流のダム建設などによって、洪水が起こりにくくなり、河川敷の荒地は樹林化が著しい。本種の生息に適した明るく、草本や低木がまばらに生えた河川敷の環境は非常に少なくなってしまう。
 【保護対策】 河川改修時には十分な配慮が求められる。
 【文献】 162.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

ミエクビアカジョウカイ

コウチュウ目 ジョウカイボン科

Lycocerus watanabei (Ishida et M. Sato)

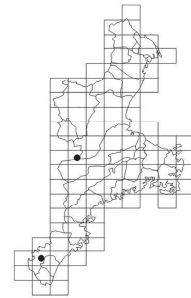
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
苔苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】 既知生息地点が2，生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長14.9～16.4 mm. 成虫は3～4月に出現し，ほかの昆虫を捕食する．灯火に飛来する．
 【分布】 本州．紀伊半島固有種．三重県では，津市と熊野市で記録されている．
 【現況・減少要因】 紀伊山地の自然林が残された場所に生息する．夏季の異常な高温さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は，湿潤環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている．
 【保護対策】 ニホンジカの個体数調整が求められる．
 【特記事項】 津市美杉町三重大学平倉演習林がタイプ産地である．演習林への入林については，調査許可が下りず，現状は不明である．
 【文献】 470，471.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

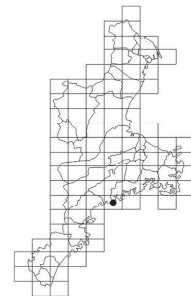
イチハシホソカタムシ

コウチュウ目 ムキヒゲホソカタムシ科

Antibothrus ichihashii Narukawa

【選定理由】 全国的に記録は非常に少なく，三重県でも既知の生息地は1か所であり，個体数も少ない．
 【種概要】 体長2.2～2.5 mm. 黄褐色～褐色で，シイ，カシなどの照葉樹林に生息している．
 【分布】 本州（三重県，奈良県），御蔵島，九州（福岡県，佐賀県，長崎県，宮崎県），志賀島，石垣島，西表島．県内では，大紀町錦で記録されているだけである．
 【現況・減少要因】 錦の照葉樹林は，特に大きな変化はみられない．
 【保護対策】 錦の生息地を保全していく必要がある．
 【特記事項】 三重県度会郡大紀町錦で得られた標本に基づき，2002年に新種記載された．錦の生息地は，三重県自然環境保全条例により錦自然環境保全地域に指定されている．
 【文献】 240，253，254.

(生川展行)



三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

(写真：大紀町，2011年，生川展行採集，稲垣政志撮影)

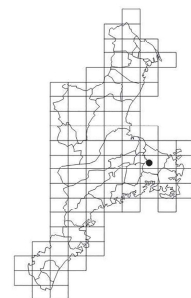
イセテントウ

コウチュウ目 テントウムシ科

Chujochilus isensis (H. Kamiya, 1966)

【選定理由】 全国的に生息地が限定されており，三重県での既知の生息地も1か所だけで，個体数も少ない．
 【種概要】 体長3.6～4.0 mm. 体全体は黄褐色で，頭頂部と後胸背板は黒褐色．半球形で背面は強く盛り上がる．イチイガシの樹冠部に生息している．
 【分布】 本州（三重県，奈良県，和歌山県），九州（熊本県，宮崎県）．国外では中国に分布．県内では伊勢市外宮で記録されているだけである．
 【現況・減少要因】 三重県の生息地は，神宮林として保全されているため，生息環境に変化はないと思われる．
 【保護対策】 生息地は神宮林として保全されている．
 【特記事項】 三重県伊勢市倉田山で採集された雌1個体に基づいて，1966年に新種として記載された．

(生川展行)



三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

(写真：奈良県，2005年，齊藤琢己採集，稲垣政志撮影)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

オオダイヨコミゾコブゴミムシダマシ コウチュウ目 コブゴミムシダマシ科
Usechus ohdaiensis Sasaji

【選定理由】紀伊半島固有種で、台高山脈や大峰山脈の約1,000 m以上のブナ原生林で記録されているだけである。既知の生息地点数は5以下である。

【種概要】体長2.2~2.5 mm。後翅は退化しており飛ぶことができない。前胸背側縁部には触角を収める溝がある。ブナの原生林内の枯木や倒木、朽木に生息している。

【分布】本州（紀伊半島）に分布。県内では松阪市飯高町明神岳、大台町大台ヶ原で記録されているだけである。

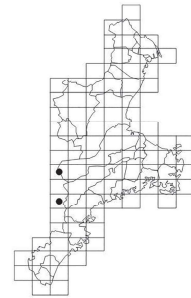
【現状・減少要因】台高山脈の中でも、特に広範囲に残されたブナの原生林にのみ生息している。

【保護対策】台高山脈のブナの原生林の保護が急務である。

【文献】239, 265.

(生川展行)

(写真：松阪市，1998年，官能健次採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

アバタツヤナガヒラタホソカタムシ コウチュウ目 コブゴミムシダマシ科
Pycnomerus sculpturatus Sharp

【選定理由】全国的に記録の少ない種で、既知の生息地点数は5以下である。

【種概要】体長2.9~4.3 mm。体は光沢のない黒褐色で、マツやシイの倒木や立枯木の樹皮下に生息している。

【分布】本州（青森県，神奈川県，福井県，岐阜県，三重県，和歌山県，広島県，島根県，山口県），四国，淡路島，九州，三宅島，御蔵島，八丈島，対馬，志賀島，奄美大島，沖縄本島，西表島。国外では台湾。県内では大紀町錦向井，尾鷲市桃頭島，九木崎，熊野市二木島で記録されている。

【現状・減少要因】大紀町錦向井では，1999年に熊野灘沿岸の照葉樹の自然林内に点在するマツの倒木より多数の個体が採集されたが，その後マツの倒木が古くなるとともに，個体数も激減した。

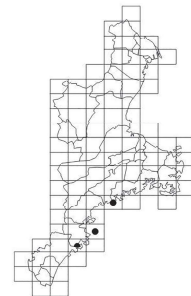
【保護対策】熊野灘沿岸の照葉樹の自然林とマツの保全が必要である。

【特記事項】近似種のツヤナガヒラタホソカタムシとは，背面に光沢がなく，前胸背の側縁が前方に向かって幅広くなる点などで区別できる。

【文献】87, 234, 236, 248, 253, 258.

(生川展行)

(写真：大紀町，2001年，生川展行採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

ヒサゴミムシダマシ (シワヒサゴミムシダマシ) コウチュウ目 ゴミムシダマシ科
Misolampidius rugipennis rugipennis Lewis

【選定理由】県内の既知の生息地点数は2地点であり，生息環境が限定され，生息密度も低い。

【種概要】体長11~16 mm。後翅が退化しており，飛ぶことはできない。倒木や立枯木の樹皮下に生息している。

【分布】本州，四国，九州，佐渡に分布。県内ではいなべ市白船峠，藤原岳で記録されている。県内では遺存的に鈴鹿山脈北部の標高1,000 m前後の広葉樹林に分布しているだけである。

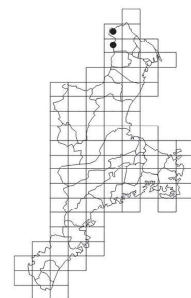
【現況・減少要因】1983年以降は記録がないが，御池岳から藤原岳一帯の標高1,000m以上の既生息地では大きな環境の変化はないため，個体数は少ないものの現在も生息しているものと思われる。

【保護対策】御池岳から藤原岳一帯の保全が必要である。

【文献】11, 222, 442.

(生川展行)

(写真：いなべ市，1979年，生川展行採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

キイカクズクビナガムシ
Nematoplus yamato Nakane, 1987

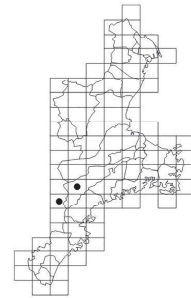
コウチュウ目 クビナガムシ科

【選定理由】本州では紀伊半島山岳地帯にのみ分布しており、三重県での生息地は大台ヶ原周辺に限定されている。自然環境の改変による個体数の減少が危惧される。

【種概要】体長10~12 mm. 前胸は橙黄色で、上翅は暗褐色~黒色。
 【分布】本州（三重県、奈良県）、四国（高知）、九州（熊本）。県内では大台町父ヶ谷、三津河落山、大台ヶ原で記録されている。
 【現況・減少要因】台高山脈のブナの自然林の減少に伴い、生息範囲が狭められている。
 【保護対策】台高山脈のブナ林の保全が必要である。
 【特記事項】大台ヶ原周辺は、吉野熊野国立公園に指定されている。
 【文献】11, 100.

(生川展行)

(写真：大台町，1961年，市橋甫採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類
貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

マルクビツチハンミョウ
Meloe corvinus Marseul

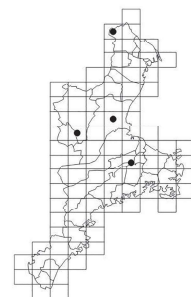
コウチュウ目 ツチハンミョウ科

【選定理由】既知の生息点数は10地点以下。かつては里山の手入れされた草地や河川堤防の法面などで見られたが、近年の記録は乏しく、全国的にも同様の傾向である。

【種概要】体長7~27 mm. 幼虫はハナバチ類に寄生し、成虫は早春から出現する。体内には有毒であるカンタリジンを含む。
 【分布】北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、対馬。県内では、いなべ市、津市、多気町などで確認されている。
 【現況・減少要因】1970年代から強力な農薬を使用することによりヒゲナガハナバチ類が減少したことや法面など草本植生が外来植物種に遷移したことが考えられる。
 【保護対策】生息地である堤防の法面や土手などの外来植物の除去とヒゲナガハナバチ類と現状使用されている農薬との影響を究明すべきである。
 【文献】89, 390.

(乙部 宏)

(写真：いなべ市，2008年，稲垣政志採集，乙部 宏保管)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

タナカホソアリモドキ
Stricticomus tobias (Marseul, 1879)

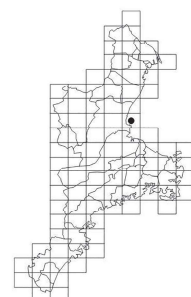
コウチュウ目 アリモドキ科

【選定理由】全国的に記録は少なく、三重県での既知の記録は1か所だけであり、自然環境の改変による影響が危惧される。

【種概要】体長2.7~3.2 mm. 体はオレンジ色で、上翅後半は黒褐色、翅端部にオレンジ色の紋が2個ある。灯火に飛来することもある。
 【分布】北海道、本州、四国、九州、沖縄本島、世界各地。三重県では津市白塚海岸で記録されているだけである。
 【現況・減少要因】津市白塚海岸では、特に大きな環境の変化はみられない。
 【保護対策】少なくとも、生息地である白塚海岸の保全が急務である。
 【文献】241.

(生川展行)

(写真：津市，2000年，富田靖男採集，稲垣政志撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

オオクロカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Megasemum quadricostulatum Kraatz

【選定理由】 既知の生息地点数は5以下。西日本では少ない。ブナ帯からブナ帯下部のモミなどの大木の針葉樹に依存するが近年の記録は少ない。

【種概要】 体長14~29 mm. 体色は黒色から暗褐色。クロカミキリよりは一回り大きい。大径のモミなどの伐採木や新鮮な立ち枯れに集まる。

【分布】 北海道，本州，四国，九州。三重県では鈴鹿市，名張市，津市，大台町，大紀町。

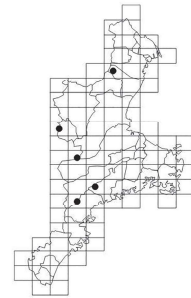
【現況・減少要因】 生息地でのモミの大木が少なく立ち枯れること自体が稀であり常時供給されることが稀であり危機的である。

【保護対策】 生息地での森林開発は行わない。モミの保全と再生をする。また生息地の一部は風力発電施設に計画されているのが懸念される。

【文献】 146, 260, 306, 367.

(乙部 宏)

(写真：大紀町，2023年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

フタコブルリハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Japanocorus coeruleipennis (Bates)

【選定理由】 既知の生息地点数は10以下である。生息範囲が局所的である。

【種概要】 体長18~24 mm. 成虫は，6~8月に出現し，ノリウツギやリョウブなどを訪花する。幼虫は土中でミズキの根を食する。

【分布】 日本固有種。北海道，本州，四国，九州。三重県ではいなべ市，菟野町，鈴鹿市，亀山市，津市，松阪市で記録されている。

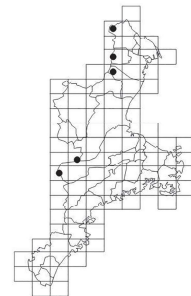
【現況・減少要因】 過去の伐採によって本種の生息に適した落葉広葉樹林はすでに多くが失われてしまっている。また，近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は，森林の乾燥化を招いているうえ，夏季の異常な高温は，本種の生息にとって大きな脅威となっている。

【保護対策】 ニホンジカの個体数調節が必要である。

【特記事項】 1属1種の日本固有種である。

【文献】 12, 44, 61, 184, 260, 291, 447, 495.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヨコモンヒメハナハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Cryptopidonia insturata (Pic)

【選定理由】 既知の生息地点1。近年の減少傾向が著しい。

【種概要】 体長6.5~8.8 mm. 自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。成虫は，6~7月に出現し，カマツカやタンナサワフタギなどを訪花する。

【分布】 日本固有種。本州。中部山岳地域と紀伊山地の高標高地に分布する。三重県では，大台町大台ヶ原周辺に生息する。

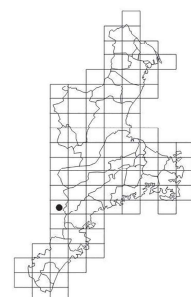
【現況・減少要因】 近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は，森林の乾燥化を招いているうえ，夏季の異常な高温や積雪量の減少は，本種の生息にとって大きな脅威となっている。大台ヶ原周辺の高標高地では1990年代は比較的普通に見ることができたが，近年は非常に少ない。

【保護対策】 生息地は，吉野熊野国立公園特別保護区である。ニホンジカの個体数調節が必要である。

【特記事項】 津市，伊勢市からも記録されるが，現在の知見では，どちらもカグヤヒメハナカミキリ *C. kaguyahime* (Kuboki) とされる種である。

【文献】 37, 38, 81, 448.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

イヨヒメハナハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Cryptopidonia hylophila hylophila (Kuboki)

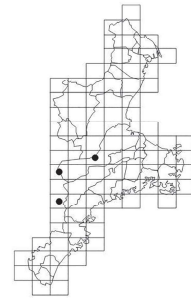
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
苔苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】既知の生息地点5以下。近年の減少傾向が著しい。
 【種概要】体長7～10 mm。自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。成虫は6～7月に出現し、カマツカやタンナサワフタギなどを訪花する。
 【分布】日本固有種。本州、九州。中国地方と九州の個体群は別亜種として区別される。本州では、中部山岳、紀伊山地、中国山地に隔離分布をする。三重県では松阪市、大台町から記録される。
 【現況・減少要因】良好な落葉広葉樹林に生息するが、そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失している。樹林の伐採は、直接本種生息地の消失に結びつく。また、近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、夏季の異常な高温や積雪量の減少は、本種の生息にとって大きな脅威となっている。大台ヶ原周辺の高標高地では1990年代は比較的普通に見ることができたが、近年は殆ど見られない。
 【保護対策】生息地である落葉広葉樹林を伐採しない。ニホンジカの個体数調節が必要である。

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
VU
環境省 2020
—

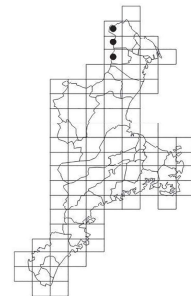
ミワヒメハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Cryptopidonia miwai (Matsushita)

【選定理由】既知の生息地点5以下。近年の減少傾向が著しい。
 【種概要】体長5.9～8.8 mm。自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。成虫は、5～6月に出現し、カマツカやタンナサワフタギなどを訪花する。
 【分布】日本固有種。本州。日本海側に分布する。三重県は本種の分布南限にあたり、鈴鹿山脈（いなべ市、菰野町）に分布する。
 【現況・減少要因】近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、夏季の異常な高温や積雪量の減少は、本種の生息にとって大きな脅威となっている。もともと個体数が多くなかったが、近年はほとんど見られない。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調節が必要である。
 【特記事項】鈴鹿山脈を特徴づける生物のひとつである。
 【文献】390, 443, 448, 465。

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

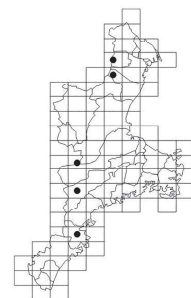
トサヒメハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Cryptopidonia approximata (Kuboki)

【選定理由】既知の生息地点数が5以下。生息環境が悪化しており、個体数が激減している。
 【種概要】体長5.5～8.5 mm。成虫は6～7月に出現する。タンナサワフタギ、コガクウツギなどの花に集まる。
 【分布】日本固有種。本州、四国、九州。三重県では、鈴鹿山脈南部と紀伊山地に分布する。菰野町、亀山市、津市、大台町、尾鷲市で記録されている。
 【現況・減少要因】自然度の高い広葉樹林が残された場所に生息する。もともと個体数は多くなかったが、近年は非常に少ない。夏季の異常な高温、さらにニホンジカの食害による森林の乾燥化は、冷涼潤湿環境に生息する本種の生息にとって大きな脅威となっている。
 【保護対策】ニホンジカの個体数を調整すべきである。
 【文献】271, 443, 447, 448, 465。

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

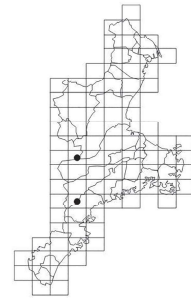
チビハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Alosterna chalybeella (Bates)

【選定理由】既知の生息地点が5以下。生息環境が悪化している。
 【種概要】体長5.1~7.7 mm. 成虫は5~6月に出現し、ゴトウヅルやタンナサワフタギなどを訪花する。サワグルミやハリギリなどの大木樹幹でしばしば観察されることから、幼虫はこういった樹皮のコルク層を食している可能性が高い。
 【分布】北海道、千島列島、本州、佐渡、四国、九州、対馬、サハリン。三重県では津市で記録されているほか、大台町で確認している。
 【現況・減少要因】少なくとも2005年頃までは、大台ヶ原周辺では、比較的良く見られたが、近年は殆ど見られない。良好な落葉樹林に生息するが、そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失。樹林の伐採は直接本種生息地の消失に結びつく。また、近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、夏季の異常な高温は、冷涼湿潤な環境を好む本種の生息にとって大きな脅威となっている。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調整を図るとともに、生息地である落葉広葉樹林を伐採しないことである。
 【特記事項】生息地は、吉野熊野国立公園特別保護区と三重大学演習林。
 【文献】96. 97. 255. 271.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

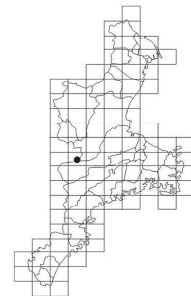
ヒゲブトハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Pachypidonia bodemeyeri (Pic)

【選定理由】既知の生息地点1。もともと個体密度の低い種である。生息基盤が脆弱なうえ、生息環境が悪化している。
 【種概要】体長13~15 mm. 落葉広葉樹林に生息する。成虫は7~8月に出現。トチノキ、イタヤカエデ、ヒメシャラなどの大木にできた樹洞内部で生活し、ほとんど洞外に出ない。幼虫は樹洞内壁の腐朽部に食入する。
 【分布】日本固有種。北海道、本州、四国、九州。三重県では紀伊山地（津市）で確認されている。
 【現況・減少要因】本種の発生が認められる樹洞をもつ木の密度はきわめて低く、県内ではわずか1本のトチノキ大木の樹洞から確認されているのみである。したがって本種の生息には、まとまった面積を持つ大木が多い落葉広葉樹林が必要不可欠である。しかし、過去の森林伐採によってそのような森林はほとんど残されていないのが現状である。生息が確認されていた三重大学平倉演習林は、立ち入り調査が厳しく制限されるようになったため、現状は不明である。
 【保護対策】生息地の森林を伐採しないことである。
 【文献】178. 291. 447.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

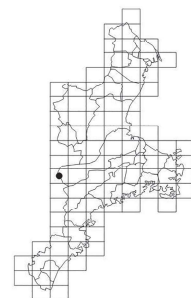
ヤマトキモンハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Judolia japonica (Tamanuki)

【選定理由】既知の生息地点が5以下。生息環境が悪化している。
 【種概要】体長7.9~11.4 mm. 成虫は、6~7月に出現し、クリなどの花に集まる。
 【分布】日本固有種。北海道、本州、九州。三重県では松阪市で記録されているほか、大台町で確認されている。
 【現況・減少要因】松阪市飯高町は1959年の記録である。大台町大杉谷では2014年に確認しているが、その後は発見されない。中山帯の良好な落葉広葉樹林に生息するが、そのような樹林は過去の森林伐採によってその多くがすでに消失している。樹林の伐採は、直接本種生息地の消失に結びつく。また、近年のニホンジカ食害による下層植生の消失は、森林の乾燥化を招いているうえ、夏季の異常な高温は、本種の生息にとって大きな脅威となっている。
 【保護対策】ニホンジカの個体数調整を図るとともに、生息地である落葉広葉樹林を伐採しないことである。
 【文献】477.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
—
環境省 2020
—

オオホソコバナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Necydalis solida Bates

【選定理由】既知の生息地は5以下。良好なブナ原生林が残されている所に限られる。

【種概要】体長11.5~30.0 mm. メスはオスよりも大型。上翅は短く、後翅と腹部が露出している。頭部、胸部は黒色、上翅は黄褐色だが♂は基半部を除き黒色なることもある。脚は黄褐色で、後腿節基半部は黒色となる。成虫は7月頃、ブナなどの広葉樹の立ち枯れに集まる。

【分布】本州、四国、九州。県内では津市、大台町。

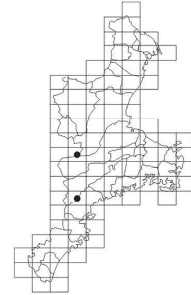
【現況・減少要因】原生林の伐採やニホンジカの激増で林内が乾燥し、森が衰退してきている。

【保護対策】ニホンジカの駆除と原生林の保全。発生地の一部は風力発電施設の計画に予定されているので懸念される。

【文献】406.

(乙部 宏)

(写真：大台町，1994年，生川展行採集，乙部 宏保管)



三重県 2025

EN

三重県 2015

DD

環境省 2020

—

ルリボシカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Rosalia batesi Harold

【選定理由】既知の生息地点数は10以下。全国的に広く分布するが西日本では少ない。三重県では中部以南のブナ帯下部から照葉樹林帯の限られた地域でしか確認されていない。また、近年の記録も見られない。

【種概要】体長16~32 mm. 成虫は鮮やかな青色で明瞭な黒紋があり触覚も青と黒に色分けされている。6~7月ごろ各種広葉樹の伐採木や比較的新しい立ち枯れなどに集まる。

【分布】北海道、本州、四国、九州。県内では、いなべ市、津市、松阪市、大台町、大紀町で記録されている。日本固有種。

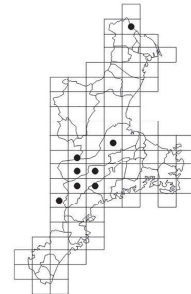
【現況・減少要因】ニホンジカによる食害で林床植物の荒廃が著しく乾燥化。また生息地での森林伐採、開発などによって生息地が減少している。

【保護対策】生息地での森林開発は行わない。

【文献】146, 356, 524, 525.

(乙部 宏)

(写真：大台町，2019年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

クロサワヒメコバナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Epania septentrionalis Hayashi

【選定理由】既知生息地点が1。生息基盤が脆弱で、近年の記録がない。

【種概要】体長8~11 mm. 成虫は6~7月に出現する。幼虫はクマノミズキの衰弱木、新しい立ち枯れの樹皮および樹皮下辺材部を食べる。

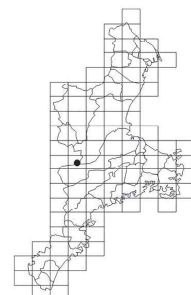
【分布】日本固有種。本州、四国、九州。三重県では津市美杉平倉（三重大学演習林）で1960年に1例記録されるのみである。

【現況・減少要因】天然林の伐採を盛んに行っていた時代に、切り出された薪材に飛来した個体が記録されるのみである。生息地では1960年代から1990年代にかけて、精力的な昆虫の調査が行われてきたが、再発見されていない。三重大学演習林には狭いながらも原生林が保存されてはいるが、クマノミズキの本数は数えられるほどである。まだ生息しているとしても、その生息基盤は非常に脆弱なものであると言わざるを得ない。本種が生息しえる自然度の高い樹林は過去の伐採によってほとんど残されていない。

【保護対策】生息地でのクマノミズキの伐採を行わないことである。

【文献】220.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

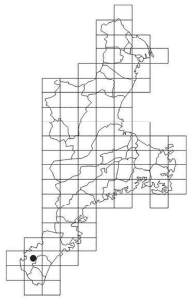
DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

サツマヒメコバナカミキリ コウチュウ目 カミキリムシ科
Epania dilaticornis Hayashi

【選定理由】既知の生息地は1か所。食樹が限定され、生息基盤が脆弱である。
 【種概要】体長5.5~9.5 mm。成虫は6月に出現し、クマノミズキに訪花した個体が採集されている。幼虫は、トキワガキの枯れ枝に食入する。
 【分布】日本固有種。本州、九州南部。琉球に別亜種が産する。県内では熊野市の1か所で記録されるのみで、現在のところ、ここが本州唯一の生息地である。九州でも鹿児島県大隅半島で生息が確認されているのみである。
 【現況・減少要因】原生林に近い常緑広葉樹林に生息する。川に面した急斜面にはえたトキワガキの枯れ枝に幼虫が確認された。しかし、過去の森林伐採によって、そのような常緑広葉樹林はほとんど残されていないのが現状である。したがって生息地は非常に狭く、トキワガキの個体数も多いものではない。樹林の伐採は、直接本種生息地の消失に結びつく。
 【保護対策】生息地およびその周辺の樹林を伐採しないことである。
 【文献】19, 178, 291.

(秋田勝己)

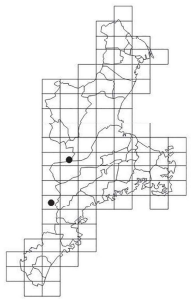


三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

エゾトラカミキリ コウチュウ目 カミキリムシ科
Oligoenoplus rosti iwatai Ikeda

【選定理由】既知の生息地点が5以下。生息環境が悪化している。
 【種概要】体長8.2~11.7 mm。成虫は5~6月に出現する。幼虫はサワグルミ、センノキなどの樹幹生木コルク層に食入する。
 【分布】日本固有種。北海道、本州、四国、九州。県内では紀伊山地（津市、大台町）で確認されている。
 【現況・減少要因】紀伊山地の本種はほぼサワグルミに依存している。幼虫は、樹皮にコルク層が発達する大木でないと成長することができないため、本種はサワグルミ大木の多い良好な落葉広葉樹林にのみ生息する。しかし、そのような森林は過去の伐採によりわずかしか残されていないのが現状である。
 【保護対策】生息地である落葉広葉樹林の伐採をしないことである。
 【特記事項】三重県産の本種は、藤田ほか、2023によって、紀伊半島固有の表記亜種に含まれるものとされた。生息地は吉野熊野国立公園特別保護区と三重大学演習林に含まれる。
 【文献】159, 178, 291, 459.

(秋田勝己)

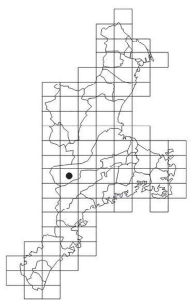


三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

フタスジゴマフカミキリ コウチュウ目 カミキリムシ科
Mesosa cribrata Bates

【選定理由】確認されている生息地は1か所のみである。食樹が限定され、生息基盤が脆弱である。個体数も非常に少ない。
 【種概要】体長7.3~10.6 mm。成虫は5~8月に出現し、オニグルミの枯れ枝に集まる。幼虫もオニグルミの細い枯れ枝に食入する。
 【分布】日本固有種。北海道、本州、四国。紀伊半島では奈良県の2か所と三重県で記録されている。県内では松阪市飯高町から記録されるのみである。
 【現況・減少要因】山地溪谷の明るい斜面に形成されるオニグルミ林に生息する。しかし、このような環境は県内にはほとんど存在しない。したがって、生息地のオニグルミ林の伐採は直接本種の絶滅に結びつく。
 【保護対策】生息地およびその周辺の樹林を伐採しないことである。
 【文献】8, 178, 291, 459.

(秋田勝己)



三重県 2025
EN
三重県 2015
EN
環境省 2020
—

ヨコヤマヒゲナガカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Dolichoprosopus yokoyamai (Gressitt)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

【選定理由】 既知の生息地点が10以下。
 【種概要】 体長25～35 mm. 落葉広葉樹林に生息。成虫は盛夏に出現。夜間にブナ、イヌブナの1年枝の樹皮を後食する。幼虫はこれらの生きた幹部に食入する。
 【分布】 日本固有種。本州、四国、九州。県内では菰野町、伊賀市、津市、松阪市、大紀町で確認。
 【現況・減少要因】 生活史の全てをブナ（一部イヌブナ）に依存しているが、鈴鹿山脈や布引山脈ではブナは山頂部にわずかに残存するのみである。しかも、近年の夏季の高温と冬季積雪量の減少に起因して、種子のほとんどが不稔で、稚樹も育っていない。現在残存するブナ群落の衰退は、本種の絶滅に直接結びつく。青山高原の生息地は、風力発電施設やそれにもなう作業用道路の建設により、大きなダメージを受けた。紀伊山地の高標高地でもブナの稚樹がほとんど見られない。また、ニホンジカの食害によって、林床のササが殆どなくなってしまい、林の乾燥化を招くとともに、ブナ根際で産卵行動をとる本種は天敵から狙われやすくなったものと思われる。
 【保護対策】 ニホンジカの個体数管理をふくめた落葉広葉樹林の保全が求められる。
 【文献】 75, 146, 178, 315, 331, 472.

(秋田勝己)

キイロアラゲカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Penthides rufoflavus (Hayashi)

【選定理由】 既知生息地が1。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長5～9 mm. 成虫は6～7月に出現し、カラスザンショウの葉を後食する。幼虫は同植物の枯れ枝に穿孔する。
 【分布】 日本固有種。本州（静岡県以西）、伊豆諸島、四国、九州、対馬、トカラ列島、奄美大島。本州の既知産地は数か所にすぎない。三重県では津市美杉町平倉（三重大学演習林）で記録されるのみである。
 【現況・減少要因】 食樹であるカラスザンショウは伐採跡地や崩落地などに普通に見られる植物であるが、本種は自然度の高い樹林林縁部の大木に限って発見される。三重大学演習林において、本種が発生しえるカラスザンショウは数本にすぎない。しかし、近年は演習林への立ち入りが厳しく制限されていることから、現状は不明である。
 【保護対策】 生息地である自然林の伐採をしないことである。
 【特記事項】 三重大学演習林が本種のタイプロカリティーである。当初、「平倉」に因み、*Hirakura rufoflavus* Hayashiとして、新属新種で記載された。
 【文献】 12, 61, 146, 152, 306.

(秋田勝己)

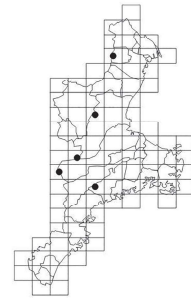
カスリチビカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

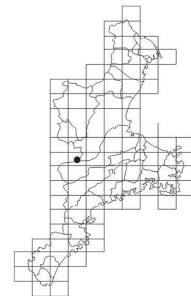
Mimectatina variegata Kusama et Takakuwa

【選定理由】 既知生息地が1。生息基盤が脆弱である。
 【種概要】 体長5.2～8.1 mm. 新成虫は9月に出現し、成虫で越冬し、初夏まで生き残る。モミの新しく細い枯れ枝に集まり、樹皮を後食する。幼虫はモミの枯れ枝の樹皮を食べる。
 【分布】 日本固有種。本州（紀伊山地）、四国。三重県では津市美杉町平倉（三重大学演習林）で記録されるのみである。
 【現況・減少要因】 本種は自然度の高い樹林のモミに依存する種である。モミを含む自然林の多くは、過去の森林伐採によってすでに消失している。県下唯一の既知産地である三重大学演習林は、狭いながらも自然林がよく保存され、モミの本数も多いことから、安定した生息地であると考えられる。しかし、近年は演習林への立ち入りが厳しく制限されていることから、現状は不明である。
 【保護対策】 生息地である自然林の伐採をしないことである。
 【文献】 29, 178, 255, 291.

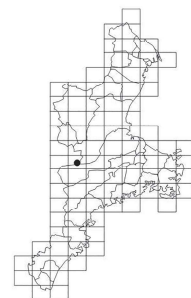
(秋田勝己)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ソボリンゴカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

Oberea sobosana Ohbayashi

【選定理由】 既知の生息地点数が10以下。環境変化によって、個体数は減少傾向にある。

【種概要】 体長17.5~19.0 mm。明るい疎林に生息する。幼虫はツツジ類、シャクナゲ類の生木幹に穿孔する。成虫は6~7月に出現し、夕方によく活動する。ツツジ類の葉脈を葉裏から食べる。

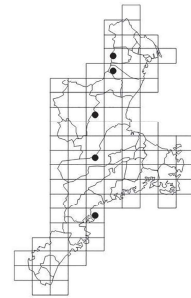
【分布】 日本固有種。本州、四国、九州。三重県では菰野町、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、津市、紀北町から記録されている。

【現況・減少要因】 鈴鹿山脈、青山高原の尾根沿いにはかつてツツジ類が多く、それをホストにする本種の個体数も少ないものではなかった。しかし、かつてのツツジ類の群落は、ニホンジカの食害により、そのほとんどがアセビ（ツツジ科であるが、本種は食わない）に置き換わってしまった。近年は殆ど見られない。

【保護対策】 ニホンジカの個体数調整が必要である。

【文献】 4, 5, 6, 11, 156, 252, 443.

(秋田勝己)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ガガブタネクイハムシ

コウチュウ目 ハムシ科

Donacia (Cyphogaster) lenzi Schonfeldt

【選定理由】 既知の生息点数は10以下であり、ジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロなどの水生植物の繁茂する湿地、池沼に生息する。近年、このような環境は「防災重点農業用ため池に係る防災工事等基本指針」により水を溜めない工事や護岸工事の対象になり幾つかが消失し残りも消失する危険性が高い。

【種概要】 体長6~7 mm。成虫は晩春から初秋にかけて出現し、上記植物の浮葉部を食し、日中の高温時は刺激を与えると敏捷に飛翔する。幼虫は水生植物の水に沈んだ土中の根を食害する。

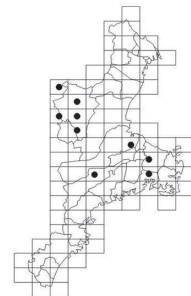
【分布】 北海道、本州、四国、九州。県下では名張市、伊賀市、松阪市、伊勢市、南伊勢町。

【現況・減少要因】 食草となる水生植物が生育できる池そのものが減少した。食草も開発や護岸工事などによって消滅傾向にある。

【保護対策】 本種の生息する池沼およびその周辺部の保全し、コイ、アカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニなどの外来種を侵入させない。

【文献】 41, 289, 314, 322, 386.

(乙部 宏)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

(写真：伊賀市，2019年)

ミズアブ

ハエ目 ミズアブ科

Stratiomys japonica van der Wulp

【選定理由】 ため池や湿地に生息し、かつては水田にも生息し、かなり広くみられた種であつたらしいが、全国的に個体数が減少している。県内で記録された生息地は5か所にとどまる。

【種概要】 体長14~17 mmの大形種。体は太く、黒色で、触角が顕著に長い。小楯板には2本の棘状突起がある。雌の複眼は離眼的で、後頭部に1対の黄色三角紋がある。腹部は胸部よりも幅広で、腹部背板の第2~3節の両側縁にそれぞれ三角形の黄色紋がある。翅は皺状で、顕著に暗色を帯びる。幼虫は肉食で水性。年1化、初夏の頃出現する。県内では6月中旬~8月下旬に採集されている。

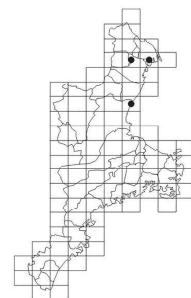
【分布】 北海道、本州、四国、九州。国外ではロシア極東部、中国に分布。県内では四日市市と津市河芸町から記録された。

【現況・減少要因】 水田での薬剤の散布、排水等による水質の変化や埋め立て等も大きな脅威となっていると考えられる。2024年7月に津市河芸町の水路のある水田地帯で生息が確認できている(写真)。

【保護対策】 幼虫の生息環境の保全が最も重要である。ため池の改修、圃場整備なども生息環境の破壊や改変につながり、本種の生存を脅かす要因となる。

【文献】 33, 70, 72, 82.

(篠木善重)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

(写真：津市，2024年)

ナギサツルギアブ

Acrosathe stylata Lyneborg

ハエ目 ツルギアブ科

【選定理由】自然度の高い河口や河岸の砂地に限って生息するため、生息域は局所的で、存続が危ぶまれる状態にある。生息地点数は4。

【種概要】小形で体形は細長く、後方に向かって狭まる。雄の腹部は美しい銀白色の毛に覆われる。雌では灰褐色に黒色の斑紋を装う。この属の種は互いに非常によく似ていて、正確な判別には雄外部生殖器を精査する必要がある。河口近くの砂浜海岸ではハマゴウ群落周辺に、また中流域の河川敷では草本上や木本上にも見られ、ヨシコツルギアブよりはより内陸に生息する。幼虫は砂中であって他の節足動物を捕食する。成虫は5～9月に出現する。

【分布】日本固有種で、北海道、本州（山形県、神奈川県、新潟県、愛知県、三重県、奈良県、京都府、兵庫県）に分布。県内では川越町高松海岸、津市一志町雲出川河川敷、大阪市の櫛田川河川敷、度会町宮リバー度会パークでの生息が確認されている。

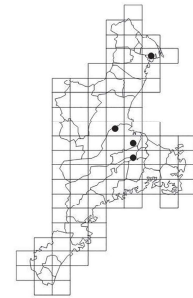
【現況・減少要因】高松海岸の生息地は道路建設工事のために2014年に大半の環境が破壊されてしまったので、2024年には本種の生息が確認できていない、今後の継続した調査が必要である。

【保護対策】現存の生息環境の保全。

【文献】36, 52, 72, 73.

(篠木善重)

(写真：川越町，2010年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヒラタムシヒキ

Clinopogon nicobarensis (Schiner)

ハエ目 ムシヒキアブ科

【選定理由】海浜性の種で、自然度の高い海岸に局所的に生息する。既知の生息地点数は3。個体数は激減している。

【種概要】体長14～17 mm程度。体は黒色で灰白色の微粉に覆われる。翅は透明、成虫は捕食性、海浜のゴミや藻類の上に見られる。幼虫の生態は不明だが、捕食性で砂地に生息すると考えられる。ムシヒキアブのうちで最も海水に近い波打ち際に生息する特徴的な生態の種。年1化、盛夏に出現。

【分布】本州、四国、九州、沖縄、国外では台湾に分布。県内では津市での記録がある。

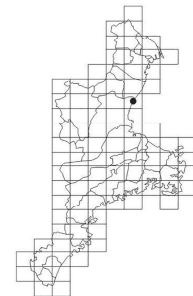
【現況・減少要因】本州には古い記録があるが、2000年に県内でも発見され、本州での生息が再確認された。未発表を含めても本州の生息地はごくわずかで、非常に自然度の高い海浜に限定されている。県内の生息地は範囲が狭く、また堤防工事や生態系を無視した松植樹が行われており、種の存続は決して楽観できない状況にある。

【保護対策】生息地を現状のまま保全すること。成虫の生息域だけではなく、より内陸の環境もこの種の存続には大きく関係していると考えられるので、広い範囲での環境の保全が重要である。

【文献】3, 5, 19, 43, 71.

(篠木善重)

(写真：津市，2010年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

ケンランアリノスアブ (オウゴンアリノスアブ)

Microdon katsurai Maruyama et Hironaga

ハエ目 ハナアブ科

【選定理由】生息地点数は1地点のみ。分布は局所的で個体数も少ない。

【種概要】幼虫はトゲアリの巣穴に生息し、成虫は5月末～7月初旬に出現して、トゲアリの巣の入り口近くで観察される。雄の体長は12.8～14.1 mm、翅長は1.9～11.5 mm。生時は黄緑色に金属光沢を放つ美麗種。

【分布】本州（栃木、茨城、長野、新潟、三重、大阪、兵庫、山口の各府県）、四国（香川県）。県内では名張市から記録がある。

【現況・減少要因】宿主であるトゲアリ自体の減少。

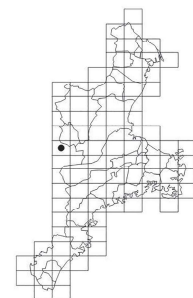
【保護対策】根際の樹洞に生息するトゲアリの生息環境を保全すること。

【特記事項】伊賀のレッドデータブック（2006）で情報不足に選定されている。写真はパラタイプ標本の♀。

【文献】12, 14, 15, 16, 17, 20, 35, 58, 59, 92.

(篠木善重)

(写真：大阪府，1996年，桂孝次郎採集，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ミヤマチャバネセセリ
Pelopidas jansonis jansonis (Butler)

チョウ目 セセリチョウ科

【選定理由】 既知の生息地点は多いが、減少傾向が著しい。生息継続が確認される地点は1地点のためVUから移行、他地点では調査不十分で実態不明。

【種概要】 前翅長15 mm程度、褐色の翅に小白斑を散らすセセリチョウで、類似のオオチャバネセセリ、チャバネセセリ、イチモンジセセリとは後翅裏面付け根付近のよく目立つ一つの白斑があることで区別できる。5月と7～8月の年二化、蛹越冬。

【分布】 本州、四国、九州。県内ではほぼ全域から記録がある。

【現況・減少原因】 県内の既知生息地の殆んどで近年の確認例がない。ススキなど普遍的なイネ科を宿主植物とし、市街地近郊河川敷草地でも発生していた本種の減少原因特定は困難。山地ではより人の暮らしと結びついた場所で見出されることが多く、農山村生活に密着して生息していた可能性が高い。減少原因としてヒトの生活の近代化による周辺環境変化の影響が大きいと考えられる。

【保護対策】 伝統的な農法、里山管理形態の復活、維持。

【文献】 11, 28.

(中西元男)

ギフチョウ
Luehdorfia japonica Leech

チョウ目 アゲハチョウ科

【選定理由】 既知の生息地点は10地点程度。減少傾向が著しく、生息地間の分断傾向も顕著で個体群間の交流がないと考えられる。

【種概要】 前翅長30 mm程度、黄色に黒の縞模様、後翅に赤、青、橙の紋がある。アゲハチョウとしてはやや小型、年一化、春に出現、蛹越冬。

【分布】 秋田県を北限とする本州。日本の特産種。県内では鈴鹿山脈、多度山系、津市経ヶ峰、伊賀～名張地域、津市美杉町山地、松阪市櫛田川流域の中流上部で記録がある。

【現況・減少原因】 既知生息地では伊賀から名張地域の一部を除き、長期間確認記録がなくほぼ絶滅と考えられる。里山の雑木林、陽当たりのよい植林幼齢林、棚田の畦などに自生するカンアオイ類を宿主植物とするため、雑木林の価値低下に伴う管理放棄荒廃、植林地の成長うっ閉化、農耕形態近代化の影響が著しい。

【保護対策】 伝統的な農法、里山管理形態の復活、維持。

【特記事項】 名張市、伊賀市で市指定天然記念物、三重県指定希少野生動植物種に指定。

【文献】 11, 28, 34.

(中西元男)

ベニモンカラスジミ
Fixenia iyonis (Ota et Kusunoki)

チョウ目 シジミチョウ科

【選定理由】 既知の生息地点は5地点以下。生息地間の分断傾向が顕著で個体群間の交流はないと考えられる。

【種概要】 前翅長15 mm程度、褐色の翅表に橙色紋がある。5～6月に出現する年一化、卵越冬。

【分布】 本州、中部地方静岡長野県、紀伊半島三重奈良県、中国地方岡山広島県、四国愛媛徳島高知県に分布、愛媛県では絶滅。県内では宮川、櫛田川上流域の溪谷地帯でのみ記録がある。新たな生息地が追加される可能性は極めて低い。

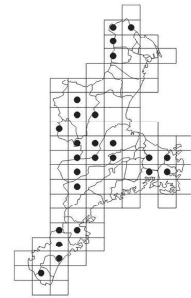
【現況・減少原因】 特殊な環境を選好するため生息環境が狭く、個体群の総数は多くないと考えられる。宿主植物のコバノクロウメモドキが自生する環境は不安定なため、風水害による打撃を受けやすく生息基盤が脆弱である。

【保護対策】 生息地の現状保全。

【文献】 11, 28, 38, 42.

(中西元男)

(写真：大台町，1995年，中西元男採集，河本実撮影)



三重県 2025

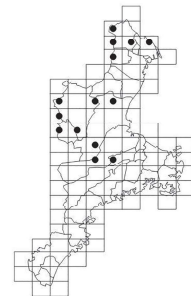
EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—



三重県 2025

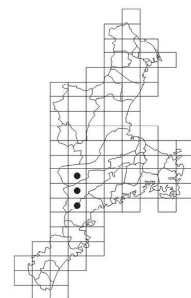
EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

ミヤマカラスシジミ

Fixsenia mera Janson

チョウ目 シジミチョウ科

【選定理由】 既知の生息地は5地点以下。局所的で生息基盤が脆弱と考えられる。
【種概要】 前翅長15 mm程度。翅色は褐色、近似のベニモンカラスシジミとは翅表の橙色紋を欠くこと、裏面の白色帯の形状で区別できる。7月に発生する年一化、卵越冬。

【分布】 北海道南部、本州の東北中部、中国地方、四国九州の山地に分布。近畿圏では三重滋賀県の一部に生息するが中部、中国地方の主産地群から分断孤立している。県下ではいなべ市鈴鹿山脈北部にのみ記録がある。新たな生息地が追加される可能性は極めて低い。

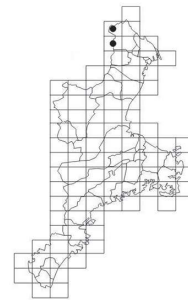
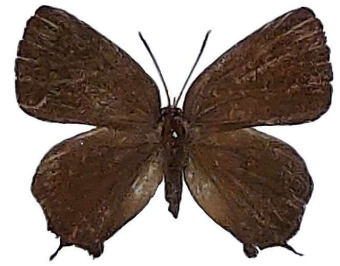
【現況・減少原因】 生息地が限られることから、個体群の総数は多くないと考えられ、なんらかの環境変化でダメージを受けた際の回復力が弱いと思われる。ホスト植物のコバノクロウメモドキが低灌木であることから、生息地森林の高木化による環境悪化が進行している。近年の調査でも生息が確認されているが、過去に多くの記録がある1950～60年代に比較して、明らかに減少傾向がみられる。

【保護対策】 生息地森林の適度な手入れ、管理。近年ではシカの過食害による荒廃にも注意が必要。

【文献】 10, 11, 28, 38.

(中西元男)

(写真：いなべ市，2000年，岩田高幸採集，河本実撮影・所蔵)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

ホシミスジ (紀伊半島亜種)

Neptis pryeri kiiensis Fukúda, Minotani et Shinkawa

チョウ目 タテハチョウ科

【選定理由】 既知の生息地は2地点。生息地間の分断傾向も顕著で、個体群交流がないと考えられる。

【種概要】 前翅長30 mm程度、黒字に白い横線模様がある。近年北勢から伊賀地方に侵入した瀬戸内亜種と比べ白色横線が細く色調が暗い。6月出現年一化、飼育では二化を生じることもある。幼虫越冬と考えられるが、本県での幼生確認例はない。

【分布】 種ホシミスジは本州、東北中部と中国地方、四国九州の瀬戸内側に分布する。紀伊半島山地三重県、奈良県のは主産地群から分断、孤立した個体群。三重県では宮川水系、櫛田川水系の上流部から記録されるが、櫛田川からは1例のみで追加の報告はない。新たな生息地が追加される可能性は極めて低い。

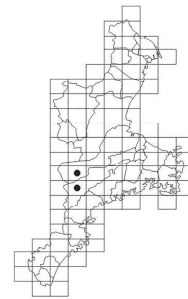
【現況・減少原因】 生息地が局限されていることから、個体群の総数は多くないと考えられる。成虫の採集例以外に自然の生活史は未知。近年採集例が途絶気味なのは、気候温暖化による乾燥が影響している可能性があるが詳細不明。

【保護対策】 生息地の現状保持。北勢、伊賀に侵入の別亜種とは生息圏の接点がなく、今のところ交雑の危険性は低い。

【文献】 9, 11, 17, 28.

(中西元男)

(写真：大台町，2017年，中西元男採集，河本実撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ウラナミジャノメ

Ypthima motschulskyi Butler

チョウ目 タテハチョウ科

【選定理由】 既知の生息地は多いが、近年の減少傾向が著しい。生息継続が確認されるのは2地点のみ。

【種概要】 前翅長20 mm程度、褐色の翅に眼状紋、翅裏面に細かい波状の模様がある。5～6月、8～9月の年二化と思われる。幼虫越冬。近似のヒメウラナミジャノメとは後翅裏面の眼状紋が3個であることで区別できる。

【分布】 神奈川県以西の本州、四国、九州。県内ではほぼ全域に記録があるが津市と鳥羽市菅島を除き、長期間確認例がない。

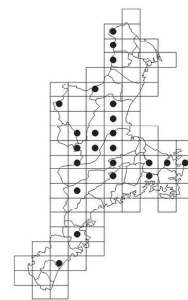
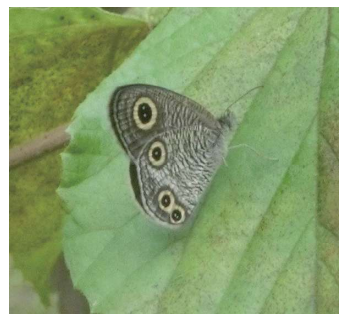
【現況・減少原因】 伝統的な農法、管理状況の里山に生息し、ヒトの暮らしの近代化による環境変化で多くの産地が減少したと思われる。減少傾向が認められない近似のヒメウラナミジャノメとの環境選択性の差異は未解明。菅島の生息地は大山山上部の灌木低木林で、ヒトの暮らしの影響は少ないと考えられる。

【保護対策】 生息地の現状保持。可能な限りの伝統的農法、里山管理の復活、維持。

【文献】 11, 28, 49.

(中西元男)

(写真：津市，2015年，河本実撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ツマジロウラジャノメ

チョウ目 タテハチョウ科

Lasiommata deidamia (Eversmann)

【選定理由】既知の生息地は10地点程度。生息地間の分断傾向が顕著、個体群の交流はないと考えられる。新しい生息地発見の可能性は極めて低い。生息個体数の減少が顕著と考えられるためVUから移行。

【種概要】前翅長30 mm程度、褐色の翅に雌では前翅先端近くに顕著な白斑がある。年3回程度の発生と考えられる。越冬態は幼虫。

【分布】北海道の一部、本州東北から中部に分布、紀伊半島と四国に限られた生息地がある。県下では櫛田川、宮川、銚子川、又口川上流の露岩地で記録される。

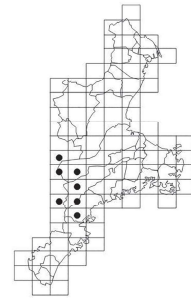
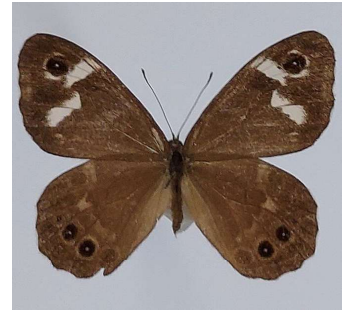
【現況・減少原因】櫛田川流域以外の生息地からは長期間記録が途絶している。宮川流域は林道崩落で調査困難、又口川は調査実績がない。銚子川では調査しても確認されないことが多い。林道周辺の乾燥化が進行しており、本県生息地は本種の分布南限に近く、近年の温暖化の影響を受け分布が縮小している可能性も考えられる。

【保護対策】生息地の現状保持と個体数動向のモニタリング。

【文献】11, 28, 29.

(中西元男)

(写真：松阪市，2005年，河本実採集・撮影・所蔵)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヒメキマダラヒカゲ

チョウ目 タテハチョウ科

Zophoessa callipteris (Butler)

【選定理由】既知の生息地は多いが、近年の減少が著しい。

【種概要】前翅長23.0~27.0 mmで、翅表裏とも淡褐色で後翅裏面に眼状紋をもつ。翅の外縁は直線的で、前翅先端はややとがっている。7~9月にみられ、年1化と考えられる。幼虫の寄主となるイネ科のクマザサ、チシマザサなどの植物周辺を緩やかに飛翔し、近隣の花や樹液にも飛来する。

【分布】北海道、本州、四国、九州。県内では県下全域の標高500 m以上に分布。下層植生としてササ類が密生する雑木林に棲息。

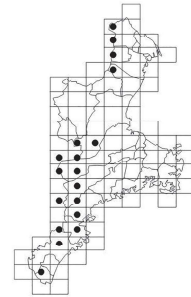
【現況・現象要因】過去記録がある多くの場所が近年まったく見られなくなった地点が多い。個体数激減の要因として食草であるササ類がシカの食害により壊滅的に減少していることがあげられる。とくに鈴鹿山脈での減少が著しく現在確実に棲息が確認できるのは御在所山山頂周辺のみである。

【保護対策】シカの個体数を適切に管理し、ササ類が回復することが望まれる。

【文献】10, 11, 15, 32.

(河本 実)

(写真：菰野町，2021年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ミサキツノトビケラ

トビケラ目 ヒゲナガトビケラ科

Triplectides misakianus (Matsumura)

【選定理由】既知の生息地点は2か所で、生息環境の悪化が進んでいる。

【種概要】成虫の前翅長は約12 mmで黄褐色、幼虫は体長約20~22 mmで葎やガマなどの茎をくり貫いた巣を作る。成虫は卵胎生で触角が長いのが特徴的で蛹はその長い触角を腹部に巻きつける様にして納めている。

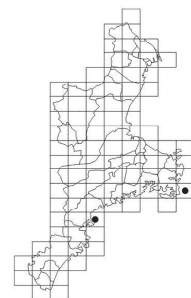
【分布】本州、九州。近年の記録は、青森、秋田、千葉、三重県（志摩市、紀北町）、島根のみである。

【現況・減少要因】かつては日本に広く分布していたと思われるが、平地の溜池など止水環境の悪化により減少したものと考えられる。県内の生息地である2か所の池の内、紀北町の池は水位が下がり幼虫が利用する抽水植物が減少している。志摩市の池においてはアメリカザリガニによる捕食圧が懸念される。

【保護対策】池沼などの水辺環境の保全管理と外来種の積極的な除去が求められる。

【文献】2, 4, 11.

(森田久幸)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

バイケイソウハバチ

ハチ目 ハバチ科

Aglaostigma amoorensis (Cameron)

【選定理由】 既知の生息地点数は3であり、生息地域が食草の分布に制限され、環境変化の影響を大きく受けやすい。

【種概要】 成虫の体長10 mmほどの黒色地に腹部中央部が黄褐色のハバチ。脚は淡褐色～乳白色で、各基節と腿節の大部分、後脚脛節の先端は黒色。年1回5月頃発生。バイケイソウ、コバイケイソウに産卵する。

【分布】 国外では朝鮮半島、中国、シベリア、極東ロシア、国内では本州に分布する。県内では、いなべ市、松阪市、大紀町から記録されている。

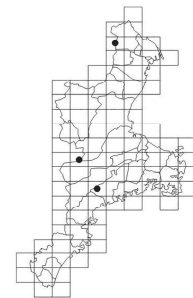
【現況・減少要因】 中部山岳地帯では普通に見られるが、紀伊半島では珍しい種類で、分布が限られる。

【保護対策】 食草のバイケイソウやコバイケイソウが生育する山地の環境を保全する。

【文献】 28, 49, 52.

(篠木善重)

(写真：いなべ市，2014年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

ウmanoオバチ

ハチ目 コマユバチ科

Euurobracon yokahamae (Dalla Torre)

【選定理由】 既知の生息地点数は5以下であり、特異な生活史のため生息環境の変化に大きく影響を受けやすい。

【種概要】 成虫の体長は20 mmほどであるが、♀は体長の数倍ある長い産卵管を持つ寄生蜂である。ミヤマカミキリの前蛹や蛹に寄生し、4～5月に産卵し、8月に羽化して、材の中で翌年まで休眠する。1930年代から提唱されてきたシロスジカミキリを寄主とする説は誤りであった。

【分布】 日本固有種。本州、四国、九州。県内では、菰野町、四日市市、名張市から記録されている。

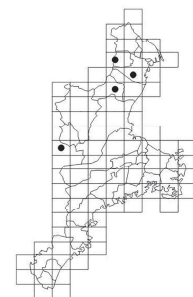
【現況・減少要因】 2010年に四日市市で60年ぶりに再確認され、鈴鹿市でも生息を確認している（筆者未発表）。県内では、もともと個体数の少ない種類。

【保護対策】 宿主のミヤマカミキリが生息できる環境を保全する。

【文献】 2, 3, 52, 62.

(篠木善重)

(写真：四日市市，2010年，石田昇三撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

キゴシジガバチ

ハチ目 アナバチ科

Sceliphron madraspatanum (Fabricius)

【選定理由】 既知の生息地点数は12であるが、近年はほとんど見かけない。

【種概要】 体長20～28 mm、体は黒色、前胸背板に1対の黄紋、腹柄は黄色（アメリカジガバチは黒色なので区別は容易）。オニグモ属、コガネグモ属、シロカネグモ属など造網性のやや小型のクモを広く狩る。人家や社寺の軒下の壁などに泥で筒状の巣を複数作る。成虫は夏季に見られ、人家の土の庭先で泥を採取する。

【分布】 国外ではベトナム、台湾、中国大陸に分布。国内では本州（北限は新潟県、福島県）、四国、九州、対馬、琉球諸島。県内ではいなべ市、四日市市、津市、伊勢市、大紀町、尾鷲市から記録されているが、津市の記録（2019年6月採集）以外はすべて1986年までの採集記録。

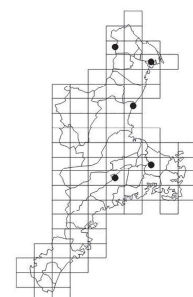
【現況・減少要因】 本県と同様に、近県の愛知、奈良、京都でも激減している。アメリカジガバチもほぼ同様の泥の巣をつくり、狩る獲物の種類もほぼ重なっている。

【保護対策】 適切な保全対策はたいへん難しく、発見した筒状巣を壊さないようにすること。

【文献】 1, 20, 22, 24, 32, 63.

(篠木善重)

(写真：愛知県，2006年，大草伸治採集・撮影，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

—

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ニッポンハナダカバチ

Bembix niponica Smith

ハチ目 ギングチバエ科

【選定理由】既知の生息地点数は5以下であり、特異な生活史のため生息環境の変化に大きく影響を受けやすい。

【種概要】成虫の体長20~23 mmほどのハチ。体は黒色で、黄白色の斑紋を有する。夏季、河川敷や海浜の砂地に穴を掘って巣を作り、ハエ目昆虫の成虫を幼虫の餌にするため、その穴に保存する。幼虫の成長に合わせて餌を追加して育てる習性がある。内陸部でも砂地のある場所で見つかる。時に、偶発的に大発生することもある。

【分布】日本固有種。北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布。県内では伊賀地域、志摩地域から記録されている。

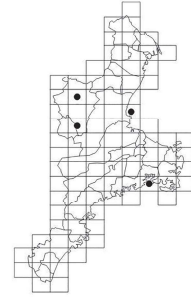
【現況・減少要因】伊賀市、名張市、志摩市、南伊勢町で確認されている。県内では、もともと個体数の少ない種類。

【保護対策】営巣場所となる砂質裸地の環境を保全する。営巣地への車両の乗り入れは、本種の生息を脅かす大きな要因となる。

【文献】6, 8, 28, 33, 48.

(篠木善重)

(写真：京都府，1992年，大石久志採集，松本吏樹郎撮影，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	VU

キアシハナダカバチモドキ

Stizus perrisi Dufour

ハチ目 ギングチバチ科

【選定理由】生息地点数は4。県内の分布は局所的で、個体数も少ない。

【種概要】体長は23 mmほど。黒色の体に黄色（生時は白色）の斑紋と赤褐色の脚をもつ美麗種。翅は透明で黄褐色。イナゴ類やバッタ類を狩り、日当たりの良い、よく固まった砂の裸地を選んで地中に営巣する。海浜のヤブガラシに訪花する。

【分布】国外では朝鮮半島、中国、モンゴル、極東ロシア。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では7~8月に津市北部の海岸地帯から記録されている。

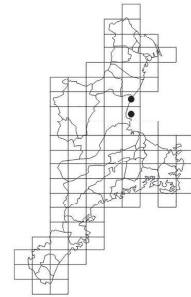
【現況・減少要因】海浜植物の除草作業や流木の撤去などに重機や車両が使用され、砂浜を走り回っている。海浜植物を撤去して松の植樹が行われている事例もある。これらは砂地性蜂類の存続を脅かすものである。

【保護対策】蜜源となる開花植物が自生し、バッタやイナゴ類が生息する草地や、巣穴を作る砂地のある海浜環境を保全すること。

【文献】30, 45, 53.

(篠木善重)

(写真：大阪府，2007年，春澤圭太郎採集，松本吏樹郎撮影，大阪市立自然史博物館所蔵)



三重県 2025	EN
三重県 2015	DD
環境省 2020	VU

マイマイツツハナバチ

Osmia orientalis Benoist

ハチ目 ハキリバチ科

【選定理由】既知の生息地点数は8であり、特異な生活史のため生息環境の変化に大きく影響を受けやすい。

【種概要】成虫の体長は♀で10~12 mm、♂は8~10 mm。体は♀♂とも暗青色で、体毛も白色~濁白色。腹部は青緑色。触角第3節が第4節と同長又はより長い。春（4~5月）にカタツムリの空殻にいろんな花の花粉を集めて巣を作る広訪花性のハナバチである。ひとつの殻にキク科・バラ科植物の葉を材料にして4~10育房を作り、レンゲソウやタンポポ、スマレなどを訪花して花粉を運び込む。育房数はカタツムリの殻の大きさに比例する。

【分布】国外では極東ロシア、国内では本州、四国、九州に分布。県内では、御池岳、藤原岳、西藤原、湯の山、鈴鹿峠、津市観音寺町、津市美杉町平倉、大紀町打見から記録。

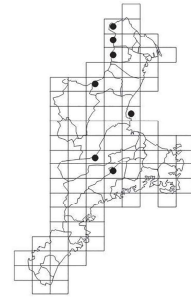
【現況・減少要因】1984年に採集されて以降、30年以上新しい記録がない。1960年代に鈴鹿山脈から5地点の産地が記録されたものの、2016年の報告書には記録が見当たらず、個体数の激減が推察される。県内では、もともと個体数の少ない種類。

【保護対策】営巣に使うカタツムリの殻と餌源の花粉が確保できるように環境を保全する。

【文献】9, 27, 32, 37, 63.

(篠木善重)

(写真：奈良県，2024年，松本吏樹郎撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	DD

キバラハキリバチ

ハチ目 ハキリバチ科

Megachile xanthothrix Yasumatsu et Hirashima

【選定理由】既知の生息地点数は5。全国的に希少で、主に海浜の砂浜や河川河口部の砂地の河川敷で見つかる。

【種概要】夏季（県内の記録では6月下旬～7月初旬）に出現する。地中に営巣して、県内での観察では本種の訪花植物のひとつとして知られるハマゴウの葉を切りとって運んでおり、営巣の材料にしている。体長は♀で15～18 mm。体は黒色で、腹部背面は黄褐色の体毛におおわれていて、植物の葉上に止まると良く目立つ。多様な植物に訪花して花粉や蜜を集めている。♀の頭頂には黒～黒褐色の毛がある。

【分布】国外では中国、朝鮮半島、国内では本州（宮城県以南）、四国、九州、屋久島、種子島。県内では鈴鹿川派川河口、岸岡山、津市の豊津海岸、白塚海岸、安濃川河口から記録されている。

【現況・減少要因】国内の分布域は北方へと拡大しているが、県内では分布の広がりは見られない。

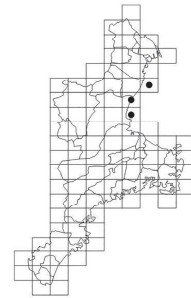
【保護対策】河川開発や海岸開発は大きな脅威となる。砂浜に自生するハマゴウを除去して松植樹を行っている事例も見られ、むやみな松植樹や海岸清掃での重機使用は慎むべきである。

【特記事項】写真の個体はハマゴウ葉上の♂。

【文献】5, 53, 55, 57, 58.

(篠木善重)

(写真：津市、2010年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

—

環境省 2020

NT

グンバイトンボ

トンボ目 モノサシトンボ科

Platycnemis sasakii Asahina

【選定理由】2000年以降の記録状況から現在の安定した生息地点は10以下と思われる。生息域が局所的であり、生息地が急激に減少している。

【種概要】成虫は、体長34～40 mm。雄は中・後脚の脛節が平らになり、白い軍配状になっておりよく目立つ。砂泥底で抽水植物や沈水植物が生育する緩やかな流水に生息する。

【分布】日本特産種。宮城県以西の本州、四国、九州に局所的に分布する。県内では、松阪市、鳥羽市、志摩市、大紀町、南伊勢町などから記録されている。

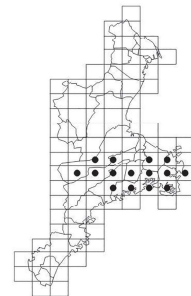
【現況・減少要因】南伊勢町押渕の水路では比較的多くの個体の発生がみられるが、その他の地域の状況は不明である。南伊勢町押渕でも1980年代と比べると個体数はかなり減少しており、他の既知生息地でも個体数が減少していると思われる。生息域の土地造成や河川工事に伴う環境悪化、湧水の枯渇等が、個体数の減少の主な要因である。

【保護対策】既知生息地での生息状況を把握した上で、丘陵部にある沈水植物が生育する緩やかな流水環境の保全と必要に応じて保護対策が必要である。

【文献】11, 100, 125, 136, 153, 172, 178, 179, 183, 194, 197, 217, 218, 227, 229, 230, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：南伊勢町、2023年)



三重県 2025

VU

三重県 2015

NT

環境省 2020

NT

モートンイトトンボ

トンボ目 イトトンボ科

Mortonagrion selenion (Ris)

【選定理由】かつては県内に比較的普遍的に生息していたが、近年減少が著しい。

【種概要】成虫は、体長23～32 mm。雄は胸部が黄緑色の地に黒斑があり、眼後紋が弧状をしている。平地や丘陵地の抽水植物が生育する湿地や池沼に生息し、湿地環境の遷移初期に見られることが多い。

【分布】国外では朝鮮半島、中国中部、ロシアに分布。国内では北海道南部、本州、四国、九州に分布する。県内全域に広く記録があり、伊賀地域での生息記録が多い。

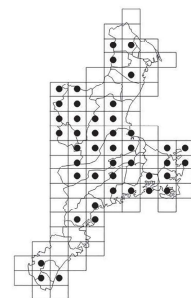
【現況・減少要因】北勢地域や中勢地域での2000年以降の記録が少なく、減少が著しい。伊賀地域の貧栄養湿地や五十鈴川派川沿いの湿地では生息が維持されている。比較的多産していた南伊勢町押渕の湿地は枯渇や埋め立てに伴い個体数が減少している。減少要因としては、池沼など生息地の消滅のほか、農薬が影響している可能性もある。

【保護対策】湿地環境の維持と枯渇を防ぐとともに、抽水植物の育成などの保全対策が必要である。

【文献】5, 6, 9, 14, 56, 59, 67, 70, 71, 77, 78, 82, 83, 98, 100, 120, 132, 134, 149, 154, 161, 163, 172, 178, 191, 193, 197, 202, 205, 206, 208, 209, 218, 222, 229, 231, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：伊賀市、2024年)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ネアカヨシヤンマ

トンボ目 ヤンマ科

Brachytron anisopterus (Selys)

【選定理由】既知の生息地点数が10程度で、生息地が局所的で個体数も少ない。

【種概要】成虫は、体長77~91 mm、腹部はくびれず、全体が円筒形をした黒色部が多い大型種。平地から丘陵地の抽水植物が生育する休耕田湿地、池沼に生息する。

【分布】国外では中国南部に分布。国内では、東北地方以西の本州、四国、九州および一部の離島に分布する。県内では、四日市市、津市、伊勢市、鳥羽市、志摩市、南伊勢町、紀北町、紀宝町などで記録されている。

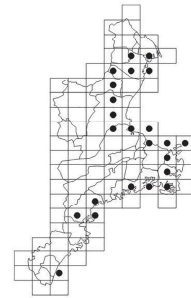
【現況・減少要因】多産地であった南伊勢町押淵は個体数が激減した。鳥羽市答志島は安定した発生数を維持している。2023年と2024年に四日市市での確認情報（水谷洋稀氏私信）があったことから、新たな生息地が見つかる可能性もある。減少要因としては、圃場整備やソーラーパネル設置による抽水植物が生育する休耕田湿地の消失、農薬の影響などが考えられる。

【保護対策】県内での生息現状を明らかにする必要がある。抽水植物が繁茂する樹林に囲まれた湿地を保護し、環境を維持していくことが必要。

【文献】24, 61, 68, 69, 72, 77, 87, 96, 101, 120, 124, 134, 172, 178, 191, 198, 210, 216, 231, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：鳥羽市、2010年)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

ナゴヤサナエ

トンボ目 サナエトンボ科

Stylurus nagoyanus (Asahina)

【選定理由】既知産地は、木曾三川の長良川下流域の伊勢大橋付近の比較的水深が深くヨシなどの背丈の高い抽水植物が生育する泥底域に限られる。幼虫、羽化殻が得られているに過ぎず、成虫の記録は無い。

【種概要】成虫は、体長62~65 mm、腹部第7~9節が広がる中型のサナエトンボ。オオサカサナエよりわずかに大きく、腹部第4~6節の黄色斑が環状であり第9節のものが小さいことで識別できる。大河川下流域に生息し、幼虫は流れが緩やかな岸部の砂泥に潜っている。

【分布】日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に局所的に分布する。県内では、桑名市から記録されている。

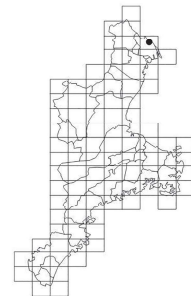
【現況・減少要因】掛斐川・木曾川の河口で記録されているが、2000年以降の記録はない。河川中流から下流域の護岸改修などによりヨシ原の減少や河川環境の変化により減少が懸念されている。

【保護対策】羽化場所の環境変化に留意し、ヨシ原保全に努める必要がある。

【文献】198, 225, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：愛知県、2022年、鶴殿清文撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

キイロサナエ

トンボ目 サナエトンボ科

Asiagomphus pryeri (Selys)

【選定理由】県内の平地、丘陵地の緩やかな流れに広範囲に生息していたが、個体数は激減した。

【種概要】成虫は、体長62~68 mm、黒地に黄色い模様がある中型のサナエトンボ。平地から丘陵地の砂泥底の河川中流域に生息する。

【分布】日本固有種で、新潟、長野、埼玉、栃木、茨城以西の本州、四国、九州と大隅諸島の種子島に分布している。県内では、いなべ市、桑名市、菰野町、四日市市、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、紀宝町など広く記録されている。

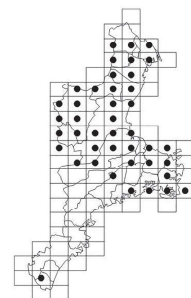
【現況・減少要因】県内に広く生息するが、東紀州地域では相野谷川（紀宝町）に生息に限られる。発生数が少ない地点が多いが、鹿化川（四日市市）や押淵（南伊勢町）では、多くの個体が確認されている。減少要因としては、灌漑水路の浚渫工事やU字溝への移行などで生息環境の多様性が低下していることが考えられる。

【保護対策】生息地の河川改修工事などを行う場合は、河床環境や水際の植生への配慮が必要。

【文献】1, 6, 9, 14, 28, 39, 41, 42, 49, 59, 78, 79, 80, 82, 98, 99, 105, 119, 120, 126, 154, 161, 171, 177, 178, 184, 186, 187, 191, 199, 220, 232, 237.

(石田昇三・刀根定良・松沢孝晋)

(写真：四日市市、2021年)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT